
戦狼記-幼帝-

マクドフライおいもさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦狼記 - 幼帝 -

【Nコード】

N0323M

【作者名】

マクドフライおいもさん

【あらすじ】

大陸西部にあるオートリア帝国。かつての栄光は既に失われているこの国で、大陸平定の野心を持った男グリード。彼の生涯の一節を題材にした、剣と魔法の世界を舞台にしたファンタジーの戦記ものです。

使用者（前書き）

実在する人物、団体とは一切関係はありません。

使者

かつては、大陸の西部に強大な帝国を築いたオートリア帝国。だが、今では相次ぐ分離独立によって領地は切り離され、力を失っていた。皇帝や多くの貴族達は享楽に溺れ、政治を投げ出し、十分な装備を用意できない軍は隣国との戦で敗戦を重ねた。

この国に滅びの影が迫っている。

帝国の英雄オイゲン将軍は苦悩していた。

「もはや、これまでか……」

オイゲンは決心すると、見張りの兵にある男を呼ばせた。

そうしてしばらくすると、オイゲンの部屋にその男が現れた。

「お呼びですか、オイゲン様」

細身の眼鏡をかけた若い男だった。

「私は腹を据えたぞ」

将軍の言葉に男は表情に幾ばくかの驚きと喜びの色を浮かべる。

「おお、では……」

「うむ、さっそく動いて欲しい」

そう言つて男に指示をだし見送つた後、オイゲンは天を仰いだ。

オートリア帝国の帝都オートリア。栄光と繁栄を享受し続けた都はこの国の顔として、滅び行こうというには不相応な華やかさで今なお飾られていた。

だが一見すれば賑やかなこの都も、よくよく見れば、人々は浮かなく疲れた顔をし、大通りの裏を少し覗けば乞食が溢れている有り様で、まさにこの国の虚栄を映すものである。

そんな都の北部にある館に一人の青年が幽閉されていた。

「グリード様、城の方から客人が参っています。オイゲン将軍からの使いだそうですが」

「通せ」

めんどくさそうに答える太った青年グリード、年は十八。彼は皇帝バステイアンの実の弟であったが、反乱を恐れた皇帝によって帝都の郊外で監視される生活を余儀なくされていた。

怠惰な日々を過ごすばかりであったグリードの部屋に使いが現れ、頭を垂れる。

「お久しぶりです、グリード様。」

「ほう、お前はマルセルとかいう名だったかな。オイゲンの使いの者がこんな場所に何用だ。今はこんな場所で遊んでる暇はないはずだろう、特にお前のようにオイゲンの手足として動いてるような人間が」

マルセルを馬鹿にするように笑うグリード。マルセルはそのような振る舞いも気にする様子なく用件を伝える。

「そのことです、將軍はこの度のロマリアとの戦は今の我が軍に勝ち目なしと考えておりまして、グリード様の力をお借りしたく参上したしいです」

「將軍が戦に負けると言うのは問題だな。オートリア帝国軍に敗北は許されない。違うか？」

グリードの問い掛けにマルセルは表情を変えずに答える。

「私も將軍と同じ考えをしています。今の帝国軍にロマリアを破るだけの力はありません」

「何が言いたい。第一、力を借りたいなどと言うが、今の俺の状況をみる。俺なんかにそんな泣き言を言ったところで何もはじまらないだろう」

苛立った様子で喋るグリード。

「いえ、グリード様の力が必要なのです。グリード様にはオートリア帝国皇帝グリードとして、我が軍をまとめていただきたいのです」
マルセルの発言に、最初は驚きの表情を浮かべたグリードだったがすぐに歪んだ笑顔に変わる。

「クック。問題発言だなマルセル。俺が皇帝になると言うが、それ

が何を意味するかわかっているんだろうな」

黙って頷くマルセルを見て、グリードは大きく息を吐いた後、言葉が続けた。

「忠臣オイゲン將軍も堕ちたものだ……。俺はお前達の企みを兄に進言するでしょう、兄の俺に対する疑いもそれで晴れ、俺は城での暮らしに戻るわけだ」

そう言いグリードは笑った。

「このままロマリアとの戦で負ければ、その暮らしも長くは続きません。將軍は私心の為ではなく、帝国のために起とうとしているのです」

マルセルは淡々と述べる。

「ロマリアとの戦の前に内乱起こす方がよっぽど馬鹿げているだろう。勝てぬというならロマリアにいくらか良い条件をつけてやって和解すればよい」

「陛下が、そのようなことを許すほど理解をもった人物ではないことはグリード様がよくご存知であると思いますか？」

マルセルの言葉にグリードは黙り、少しの間考え込む。

「……それで、どうやって俺を皇帝に即位させるつもりだ」

「この館からグリード様を救出し、帝都から南にあるラガリア城にきていただきます。あの城は今ハンスが管理するものとなっています。そこに兵を集め決起し、短期期間で決着をつけます」

「勝ち目はあるんだろうな？ どれぐらい兵は集まりそうなんだ」

「ハンス率いる第三師団、ミロスラフ率いる第四師団、メスト率いる第十六師団、マヌエル率いる第五十二師団、フィリップ率いる第二百二十旅団、ホルガー率いる三百二十旅団、その他三大隊。さらにアレクサンダル伯爵も協力を約束してくれています。計四師団、二旅団、三大隊、伯爵の私兵も併せますと二万八千ほどの兵になるかと」

マルセルの示した兵力が思いのほか多かったのでグリードは少し驚いた。

「それだけの数が集まるのはさすがは、オイゲン將軍の人望といったところか。だが、相手は貴族の私兵も併せればこちらの倍にはなるだろう。数だけ見れば勝ち目などないと思うが」

マルセルは動じずに答える。

「数だけ見ればの話です。すでに他師団の多くは相次ぐ戦で多くの熟練された兵を失い、訓練の足りない新兵が多くを占めています。特に各師団の魔術師部隊の被害は深刻なものです。貴族の私兵も質の良いものとは言えず十分に勝てる戦いかと」

「戦で兵を失ったのはこちらと同じだろう」

グリードは飽きたように言った。

「メスト、マヌエルの兵はそれなりの被害をうけていますが、ハンス、ミロ斯拉フは多くの戦果をあげ精強なモノに仕上がっています」
「なるほど。さすがは、オイゲンの三弟（さんてい）だな」

オイゲンには彼を慕い、彼から信頼される若い三人の弟子がいた。ハンス、ミロ斯拉フ、そしてマルセル。彼らはオイゲンの三弟と呼ばれ注目を集めていた。ハンス、ミロ斯拉フは戦地で数々の戦果を上げ、マルセルはオイゲンに仕え様々な国務をこなしていた。

「自国の兵を貶めるつもりはありませんが、二人がいるかぎり、今の錬度の落ちた帝国兵など二倍どころか三倍の兵も相手にできましよう。……ただ」

何か言いかけて、すこし言いよどむマルセル。

「ただ何だ。隠しことは為にならんぞマルセル」

「いえ、隠しごとをするつもりではないのですが、相手の軍の中で唯一懸念される材料が……。ジェイドという男なのですが」

ジェイド、その名はグリードも聞いたことがあった。詳しい出自は謎であり、戦場で武勲を上げ続けることによって若くして旅団長にまで成り上がった男。綺麗な白髪に端正な顔立ち、気品のある振る舞いでまるで貴族のようだが、戦場では別人のように残忍になり、部下を駒としてしか扱わないような戦い方で、敵味方から「狂乱の貴公子」として恐れられているという。

「噂ぐらいは聞いたことはあるな」

「第四二〇旅団を指揮するこの男、非情に残忍な性格で、剣術と兵法に長け油断なりません」

「ふむ。こちら側に加えたいところだが、それが出来るなら、お前達でとづくにそうしているか……。まあよい、兄の軍を破ってその後の問題はどうするつもりなんだ」

グリードの言葉にマルセルは表情を少し曇らせた。

「ロマリア王国のローラント王は賢王として民から慕われる男で、本来、戦はあまり好まない人物だと聞いています。オイゲン將軍のことも高く評価しているそうです。現帝を排し、この度の戦の非礼を詫び、それなりの誠意を示せば和解に応じてくださるでしょう」

マルセルの提案にグリードは不快感を示しながら言う。

「非礼だと？ 非礼を詫びるべきは王の方ではないのか？ 有利な条件をつけてやって講和するだけでいいだろう」

和解の重要性を理解するグリードであったが、マルセルの話は二つ返事で了承できるものではなかった。

この戦の原因はロマリアが帝国との約束を反故にした事で、現帝バステイアンが激怒したことにある。その約束とは先々帝、彼らの父であるオリバー帝の時代に交わされたもので、帝国とロマリアとの和睦の証としてローラント王の一人娘であるイリス姫を帝国に嫁がせることであった。だが、ローラントはバステイアンが統治を始め、急激に国力が弱まりはじめた帝国を見限り約束を違えた。

グリードは兄であるバステイアンの事は嫌っていたが、帝国が、オートリアの皇帝が一介の国王如きに馬鹿にされるのは気に入らなかった。何よりもそんな者に自分が頭を下げるなど考えたくもなかった。

「グリード様のお気持ちもわかりますが、先に手を出したのはこちらです。ここは相手の顔をたてておきましょう。今の我々にはそれが最良の選択肢なのです」

マルセルの言う通り、先に手を出したのは帝国側だ。激怒したバ

ステイアンはロマリアに対する懲罰行為として大規模な軍を派遣したが失敗し大きな痛手を負い、ロマリアはこれを好機とし、逆に帝国領土内に攻め込む準備をしているという危険な状態だった。

「はぁ、わかった。仕方がないな」

溜め息をついた後、グリードは渋い顔で承諾する。

「ご理解頂けて、光栄です」

そう言いマルセルはグリードに深深と頭を下げた。

「話は戻るが、ここからどうやって俺を連れ出すつもりだ」

「館を襲撃する部隊を派遣致しますので、その混乱に乗じて脱出を。すでに、この館に何人か部下を潜り込ませていますので、道は彼らが案内します」

マルセル達の手際の良さにグリードはつい笑ってしまう。

「クツクツク。本当にお前達は優秀だな。それで、いつ決行するつもりだ」

「二日後の夜、日が替わる頃に」

「えらく急だな」

「我々には時間がありませんので」

「まあ、いいだろう。俺もこんな場所にくたばる為に生まれてきた訳ではない。お前達の話に乗ってやろうじゃないか」

グリードはすこし興奮していた。大きな危険が伴うのは理解している。だが、彼がこの退屈な日々から抜け出すためにはこの機会を利用するか、兄が寿命で死ぬを待つぐらいしかないだろう。グリードには兄が自然に死ぬを黙って待つだけの忍耐力などないし、皇帝の地位に就くチャンスを見過ごせるほど無欲な人間にはなれなかった。

「では、ラガリア城でお会いしましょう」

そう言っただけでマルセルが去った後、グリードは部屋の中で若干の不安と喜びを抑えきれず、独り笑みを浮かべていた。

窓の外に見える景色は、今はまだいつもの夜と何も変わらない。だが、今日は、満月の浮かぶこの夜は彼にとって大きな変化をもたらす夜に違いなかった。グリードは静かにその時を待っていた。

突如、夜空が赤く染まる。館には鐘の音が鳴り響き、兵達の様子が慌ただしいものになった。

来たか

グリードは意外にも冷静にその時を迎えた。自分の部屋に向かってくる足音が聞こえる。

「グリード様、今がチャンスです。我々についてきてください」

五人の男達が自分の部屋に入ってくるなり急かすように言う。どうやらマルセルの用意したネズミらしい。グリードは男達に案内されるままについて行き、特に何の問題も無く館の敷地外にでることに成功した。館の方からは兵達の叫び声や、金属同士がぶつかる甲高い音が絶え間なく聞こえる。

「お待ちしていました、グリード様。急いでラガリア城に向かいましょう」

敷地の外ではさらに多くの男達が彼を待っていた。ラガリアまでの護衛を担当する部隊のようで彼らの用意した馬にグリードは跨り移動をはじめた。またが

「馬車はないのか、馬車は」

しばらくして、ぎこちなく馬を操るグリードが護衛の兵達に泣き言を言う。彼はあまり乗馬が得意ではなかったのだ。馬の揺れで彼のお腹の脂肪がぷるぷると波打つ。

「申し訳ありませんが、そんな悠長な乗り物に乗ってる暇はありません」

「わかっているわ!!」

逆ギレするグリードに、兵達は苦笑いを浮かべ顔を見合わせた。

ラガリア城に着いたのは、夜が明けようとする頃になってからだ

った。

「予定よりすこし遅れています。將軍もお待ちでしょうから急ぎましょう」

「誰に物言っているんだ？ 皇帝になる男が將軍如き待たせて何が悪い」

「ハッ！！ 失礼しました！！」

移動の疲れがグリードの機嫌を悪くしていた。

グリードがラガリア城内の会議場に案内されると、そこにはオイゲン將軍やマルセル、師団、旅団長達、アレクサンドル伯爵など今回の反乱軍の主だったメンバーが集まっていた。ただ、三弟の一人ハンスの姿だけは見当たらない。部屋の中にいる男達は席を立ち、頭を下げてグリードを迎える。

「久しぶりだな、オイゲン」

グリードは一番奥で頭を下げている老兵に挨拶をした。

「お待ちしておりました、グリード様」

「しかし、また大きくでたな。父が生きていれば今回のお前の行動、どう思うだろうな」

「オリバー様をご存命だったならば、帝国の為に私がこのような行動をとる必要もでてこなかったでしょう」

「帝国の為に……か。オイゲン、俺がその帝国の為にならない男だったらどうするつもりだ」

「グリード様の為に働く事は、帝国の為にものなることであると信じております」

淡々と答えるオイゲンにグリードは恐れのようなものを感じる。昔からオイゲンには逆らえないところがあった。オイゲンは將軍として軍を束ねる傍ら、教育係りとして長い間自分の世話をしていた男で、普段は寡黙な奴だったが、静かな口調で叱る時にはなんとも言えない凄味があった。幼少時にわがままばかりを言って城の者を困らせていたグリードが素直に言う事を聞く相手は父や兄達、そしてオイゲンぐらいのものだった。

「ふん、俺ももうガキじゃない。將軍如きの操り人形にはならんぞ」
「この老いばれめは帝国の新しい時代の礎となる為の駒にすぎません」

「ならば、せいぜいその駒に寝首を掻き切られぬように注意するでしょう。ところで、ハンスの奴の姿が見えぬが？」

「ハンスには館での救出部隊の指揮を直接執らせています。問題がおきてなければ、そろそろ戻るでしょう」

オイゲンが言った丁度その時、赤みがかった茶髪の男が会議場に入ってきた。

「將軍、只今戻りました」

「ご苦労、ハンス。無事、グリード様が御着きになっておられるぞ」

「ご無事で何よりです。多少手荒い手段となった事は申し訳ありません」

「まあ、気にするな。あんな退屈場所から脱け出せたんだ。それでよしとする。それよりも、次の戦いが本番だ。お前の働き、期待しているぞ」

「お任せ下さい。必ずご期待にお応えしましょう」

そう言ってハンスはグリードに頭を下げた。

「ハンスも戻りましたので、そろそろ出発の準備を」

マルセルがオイゲンに告げる。

「うむ。グリード様こちらに着いたばかりで申し訳ありませんが、我々には時間がありません。準備が出来次第、ラガリアを発ち、帝都へ向かいます」

「それも仕方あるまい」

グリード達、反乱軍にはとにかく時間がなかった。ロマリアが帝国に攻め込む前に決着をつける必要がある。一秒たりとも無駄には出来なかったのだ。

使者（後書き）

ヤマなしオチなしイミなし、そんな作品に僕はしたい。

他に書いてる作品と違って伝えたいテーマみたいなものはなくファンタジーな戦記もの書きたいと思ってたら、ゲーム作ろうとした時に作ったキャラやら設定やらがあったのでそれを利用して書いてます。特別、軍事的な知識があるわけではないのでそのへんは多目に見てやってください。

帝国軍

グリード達の反乱軍が帝都に向けて進軍を始めた頃、オートリア城内は騒々しくなっていた。

「館を襲ったのはハンス師団長の部隊と判明しました！！ それとオイゲン将軍がラガリアに向かったとの情報も入っております」

「オイゲンの奴め血迷ったか！！ 恩を仇で返すような真似をしようて！！」

兵の報告を聞き、憤怒の形相で叫ぶバステイアン。

「すぐに軍を編成し、ラガリアに送りましょう。ロマリアとの戦争に向けてある程度準備できていましたからすぐに整うかと思えます」
宰相はバステイアンに恐る恐る進言した。

「役立たずの貴族共にもすぐに兵を用意させる！！」
「直ちに」

バステイアンの命令で帝都近郊でロマリアとの戦争を準備していた各師団長達や貴族達が集められる。会議室にはバステイアンと宰相、第十師団長アンドレアス、第二十師団長ガエル、第二十五師団長ピオトル、第三十師団長ルーカス、第三十四師団長ベルント、第四十九師団長ファビアンそして有力な貴族数人がいた。

「ここにおらぬのが反乱に加わった愚か者という事か」
バステイアンが慥然な表情で尋ねる。

「いえ、ロベルトは既にロマリア国境近くに兵を展開させていたから、それでこちらに来るのが遅れているものと思われます」

アンドレアスが冷静な声で皇帝の疑問に答える。

「ということは、ロベルト以外でここに来てないのが馬鹿な賊共という事になりますね」

髭をいじりながら貴族気取りの男、ピオトルが甲高い声で他の男達に確認した。

「そついう事になるでしょうな。しかしオイゲンもロマリアとの戦

争前に何を考えてるんだか」

白髪の混じりの頭を掻きながらベルントが言った。

「どんな英雄も老いると言う事でしよう」

ファビアンが嘲笑するように言うと、ベルントが気色ばむ。

「何が言いたい」

「老兵は物事の判断が鈍りますからね」

「貴様！！」

「止めないか二人とも陛下の御前だぞ！！」

「そうですよ見苦しい」

アンドレアスとピオトルが二人の言い争いに割って入った。

「この時期だからこそ、かもしれませんよ」

この中で一番若いルーカスの発言に一同が表情を変える。

「ロマリアとグルか、そう考える方が自然かもしれん。ローラント王は將軍の事を高く評価していたみたいだしな」

アンドレアスもルーカスに同調し、深刻そうな表情を浮かべた。

「それはまずい事になりますね」

「ロマリアと繋がつてるとなると早急に反乱軍を鎮圧する必要がある。用意できる兵ですぐにラガリアに向かうぞ」

アンドレアスの意見に他の師団長達は頷く。

「お前達にも協力してもらおうぞ」

「も、もちろんでございます」

バステイアンの言葉に今までほとんど黙り込んでいた貴族達は恐縮しながら答えた。

「用意できる兵と言えば……」

ピオトルが悪意を持った笑みを浮かべ、ガエルの方を見る。

「な、なんだ急に」

ピオトルに見られるガエルの顔色はどこか青ざめていた。

「いえ、ただの噂だと良いのですが、第二十師団には連絡のつかない旅団長が二人もいるとか」

ピオトルの言葉にガエルの顔から血の気が引く。

「それはほんとかガエル!!」

「それはいけませんね。師団長としての責任が問われますよ」

ベルント、ファビアン達の言葉に反論できず、沈黙するガエルをバステイアンが睨みつけながら言う。

「ガエル。俺は心が広い人間だ。戦場で結果さえだせば今回の失態、不問にしてやるうじやないか」

「ありがとうございます。必ずや陛下のご期待にお応え致しますよう」

ガエルの声は震えていた。

「よし、出陣の準備をいそげ。今回は俺もでるぞ」

「何も陛下が直々にでる必要など……」

「うるさい!! 賊共の、グリードの死ぬ様をこの目で見ないと腹の虫がおさまらん!!」

バステイアンは止めようとする宰相を怒鳴りつけた。

グリード達反乱軍とバステイアンの帝国軍はオートリア近郊の平原にて相見える事となった。^{あいま}反乱軍総兵数約二万八千、帝国軍総兵数約六万一千。数の上では反乱軍を圧倒する帝国軍であったが、半数近くが貴族達の私兵であった。多くの貴族達は自分達の兵が戦で損害を受ける事を嫌い、厳しい戦いではすぐに後退し、楽な戦いでは競って兵を投入し皇帝に媚びを売った。そのような事を繰り返すばかりなので、貴族の私兵は脆弱なものに成っていた。また数々の戦で活躍した英雄オイゲンを擁し、暴君を討たんと士気高まる反乱軍に対し、数的優位はあるものの新兵の多い帝国軍は、慣れない戦と英雄と戦う事になる緊張と不安に包まれ士気が上がらず、中には部隊を脱け出し、反乱軍に加わるうか内心迷っているような者もいる始末であった。

帝国軍は平野をある程度見渡せる小高い丘に本陣を構え、そこに

師団長達を集め、最後の合議を行っていた。

「オイゲンの奴め、何を考えている」

ベルントは平野に展開する反乱軍を見ながら唸った。通常、数で劣る反乱軍が平野で展開するメリットなど無い、それどころか数の力を最大限に活かせる帝国軍にとって有利に働く地形であった。そんな場所に名将と呼ばれた男がわざわざ軍を展開させている事にベルントは不気味さを感じていた。

「焦っている、のでしょうか」

「焦っている？ ルーカスどういう事だ」

ベルントにはルーカスの言いたい事がわからない。

「案外、ロマリアとの繋がりは無いのかもしれない」

アンドレアスの言葉にベルントは驚いた表情になる。

「そんな馬鹿な。内乱を起こし、さらに疲弊した軍でロマリアと戦うつもりだと？」

「もし、反乱軍にロマリアとの繋がりが無いのならばゆっくりとロベルトの部隊が合流するのでも待ちますか。時間が経てば経つほど我々が有利となります」

ピオトルが悠然とした態度で言った。彼の言う通り、時間が経つほど帝国軍は有利な状態になる。各地の部隊との合流が可能となり兵数でさらに反乱軍と差をつけることが出来るだけでなく、反乱軍単独で軍を長期間維持するだけの資金や兵糧があるとは思えなく、戦うまでも無く決着がつく可能性すらあったのだ。

「あくまで仮定の話でしょう。もし、ロマリアとの繋がりがあったならば時間が経つほど不利になるのはこちら。それに反乱軍がロマリアとグルで有ろうと無かろうと、我々がロマリアと戦う必要があるのには変わりありません。我々は急がなければならない」

「ファビアンの言う通りだ。俺達には悠長に援軍を待っている余裕などない。それにわざわざ平野に展開してくれているのだ。一気に片をつけるチャンスだ」

ガエルが退屈そうに軍議を眺める皇帝の方を気にかけてながら、発

破をかけるように言った。

「いくら焦っているからと言って將軍が無策に部隊を展開するような愚行をおかすとは考え難いが、時間があまりないのも事実だ。基本は正攻法通り数で押し切る事にするが、不測の事態に備え予備兵力を多めにとるぞ。ガエル、お前の戦力も丸ごと予備兵力としよう。機を見て動いてくれ」

「ふざけるな！！ アンドレアス、何故俺が貴様等のお守りをしなくちゃならん！！」

ガエルには焦りがあつた、何としても戦場で戦果を上げ、自分の師団から二旅団もの部隊が反乱軍に加わるという失態を帳消しにしないでならないのだから。

「あなたの師団は兵力が半減している、そんな部隊を敵に正面からぶつけてもよい結果を生むとは思えませんね」

冷ややかな反応をするファビアン。

「いくらか兵をこつちに回せば！！」

「ガエル、あなたはすでに我々に多大な迷惑をかけているんですよ。ここは、チームプレイというものに徹してほしいですね」

ピオトルの耳障りな声を聞きながら、ガエルは歯ぎしりをする。

「安心しろ。美味しいところは残しておいてやる、ガッハッハッハ」

「尻拭いではなく、的確なタイミングで動けばより多くの戦果を上げる事も可能でしょう。ガエル殿にとっても悪い話ではないと思いますが」

「くそっ！！」

ガエルはベルントとルーカスに説得され渋々承諾したその時、一人の兵が本陣に走り込んで来る。

「敵部隊、動きだしました！！」

反乱軍がゆつくりとアンドレアス達の方へ向かってきているのが見える。

「来たか……。数を活かして若干横に長く展開し、限界までひきつけ一気に叩く。ガエルの部隊は後方に下げ予備兵力に加える。いく

ぞー！」

各師団長達は自分の部隊に合流すべく本陣を後にした。

開戦、訪れた好機

両軍、共に横一列の陣形を組んでいた。帝国側は数を活かしてさらに横に長く展開し、敵を包囲殲滅する作戦を取る事もできたが、厚みがなくなる事で反乱軍側のハンスやミロスラフなどの練度の高い騎兵部隊に突破されるのを恐れた。数で大きく劣る反乱軍は距離を取った弓や魔術部隊の戦いは望まないと考え、限界までひきつけた所で一気に数で押し切る、華麗さはなく帝国軍も無傷では済まないが、確実に勝てる作戦を取ったつもりであった。

この戦いにおける反乱軍の主な部隊の布陣は右翼側からハンス、メスト、ホーガン、アレクサンダル、フィリップ、マヌエル、ミロスラフ。後方の本陣には僅かな兵達がグリード、オイゲンを守るだけであった。

帝国側は左翼側からベルント、ピオトル、アンドレアス、ルーカス、ファビアン。皇帝直属の部隊である第一師団の一部や貴族達の私兵部隊はそれらの師団を支援する形で配備され、特にベルントとファビアンの両翼の部隊には多くの私兵部隊が投入された。それには端から敵陣形を崩す意図と、逆に端から自軍が崩されないようにする意図があったからだ。また適時投入する為の予備兵力としてガエルの部隊が後方待機し、第一師団の兵のうち前線に投入されていない兵は本来の役目であるバステイアンの護衛と予備兵力の役割として配備された。

反乱軍の足音がゆっくりと帝国軍の方へと近づいていく。遙か前方に米粒のように見えていた敵の姿が徐々に大きくなり迫ってくる。帝国の弓兵達は息を殺して自分の所属する部隊長の合図を待っていた。

「弓部隊、用意！！」

師団長が大声で叫ぶと太鼓の音が鳴り響き始めた。

「弓部隊、用意」

太鼓の音を合図に部隊長達が自分達の部隊に指令を発する。弓兵達は弓を構え、今度は矢を放つ為の合図を待った。張り詰めた空気が辺りを覆う。じわりじわりと近づいて来る反乱軍が弓矢の射程圏内入り始めてもなかなか合図が出されず、その事は若い弓兵達に焦りと緊張感を生んだ。その緊張感がピーク達した時、ついに射撃の命令が下される。

「放てえ！！」

限界まで引かれた弦をはなすと矢は空で弧を描きながら敵軍めがけて飛んでいく。帝国軍の放った無数の矢が反乱軍に降り注ぐとしたその時、空気の流れが歪み、反乱軍の頭上に様々な色の壁が作られる。火、水、石、風で作られた様々な魔術の障壁を通ろうとした矢は燃え尽き、折れ、切り裂かれた。障壁の隙間を縫うように擦り抜けた矢だけが反乱軍の元に届くのだった。多くの矢が無効化される一方で、反乱軍の左翼を担当するミロスラフ部隊の頭上に張られる魔法の壁は極端に数が少なく、他の師団より被害が大きくなっていった。

「怯むな！！前に進め行くぞ！！」

ミロスラフは矢を切り払いながら味方を鼓舞し、部隊の速度を上げる。帝国軍側の右翼、つまりミロスラフの部隊と対峙したファビアンはその弱みに気づいていた。

「敵の魔術部隊の被害は深刻なようですね。部隊を下げながら距離を取って戦いたいところですが、軍全体の陣形を崩すわけにもいきません。今のうちに出来るだけ弓矢を射ちなさい」

帝国軍の弓矢の射程圏内に入った反乱軍が間合いをさらにつめると、今度は反乱軍が帝国軍に向かって魔法による反撃をはじめると、帝国軍も対抗して障壁を張り、魔術と矢で応戦するが、過去の戦いで受けていた魔術部隊の被害は相当深刻なもので分が悪かった。

「全軍突撃！！火の玉を食らって死にたくなければ、距離をつ

めろ！！ 敵にはりつけ！！」

アンドレアスはファビアン以外の部隊の状況が良くないと判断すると、すぐに全軍に突撃の命令を発した。混戦になればあまり射程の長くない強力な魔法を撃つ事は、味方を巻き添えにする危険がある為でなくなるのだ。

帝国兵の突撃に合わせ、反乱軍も一気に前進し、両軍が激しく衝突する。

「おつ、始まったみたいだな、ジェイド」

坊主頭の巨漢の男は戦い始めた帝国軍を前方に眺めながら、呑気な声で白髪の男に話しかけた。

「ああ」

「しかし、俺達がこんな場所で待機とはねえ。暇で、暇で仕方がないぜ。敵に討たれる前に退屈すぎて死んじまいそうだ」

そう言って男は大笑いする。

「心配するな、トンボ。必ず出番はくる」

「なんだあ、戦争狂のお前にしちゃあ、えらく落ち着いてるな。てつきり殺したくて、殺したくて、我慢できずに発狂でもしだすかと思ってたんだがな」

そう言ってトンボは再び豪快に笑った。

「ああ、殺したくて仕方がない。だから我慢するんだよ」

ジェイドは冷たく言い放ちながら、不気味な笑みを浮かべる。

「何が言いたいのか、よくわからんが、難しい事を考えるのはお前に任せるぜ。それより、アレ見るよ。おっさんも相当焦ってるみたいだぜ」

ジェイドがトンボの指差す方を見てみると、苛立ちを隠せず動き回りながら戦況を見守るガエルの姿があった。

「師団長殿、そんなに焦らずとも、必ず我々の出番はきますよ」

ジェイドはガエルに近づき声をかけた。

「何を呑気な事を言ってるんだ。貴様とて、このまま戦果を上げれ

なければ、ただではすまぬぞ!!」

ジェイドはガエルの率いる第二十師団所属の第四二〇旅団の旅団長であり、フィリップやホルガー達は彼の同僚になる。フィリップやホルガーの動きを察知できなかった責任はジェイドにもあるとガエルは言いたいようだった。

「私ですか、それは困りましたね」

「冗談で言ってるわけではないぞ」

「わかっていますよ。安心してください、好機は必ずくる。そして、その時には戦況を決定付ける仕事をしてみせましょう」

「えらく自信だな」

「結果は常にだしてきました。その事は師団長殿も重々承知のはず」
ガエルはどこか生意気なこの男の事は気に入らなかったが、戦場での活躍は認めており、自身が追い込まれている今回の状況を打開するには必要な人間であると認識していた。

「ふん、口だけで終わる事のないようにな」

そう吐き捨てるように言うとガエルは視線を再び戦場の方へ向けた。

金属音と兵士達の怒声が戦場を飛び交い、鮮血が宙に舞う。

「一步も退くな!! この戦の勝敗はお前達にかかっている。逃げ出すような醜態、俺に見せてくれるなよ!!」

「オー!!!」

ミロスラフが馬上から檄を飛ばし、兵達がそれに応える。ミロスラフ自身も先頭に立って戦い、敵兵を自慢の槍で次々と薙ぎ払う。

序盤こそは帝国軍の弓矢による攻撃で損害を受け、不利な状況であったが兵達の奮戦によって次第に好転しはじめる。逆に押され始めたファビ안의兵達には焦りが生まれ、状況は余計に悪化していった。そんな中、一人の若い兵士が息を切らせながらファビ안의元に駆け寄る。

「報告!! やはり相手はミロスラフ様の部隊のようです。前線に

立って戦っている姿が確認されました」

「やはり、そうでしたか。オイゲンの三弟……、やっかいな相手にあたりましたね。しかし、相変わらず無茶をする男だ」

「どうなさいますか」

「どんなに優れた将も、所詮は人の子。優秀な部隊も将を失えば、ただの烏合の衆。ミロスラフを狙いなさい！！彼の首をあげた者には陛下から莫大な報奨が与えられるでしょう」

ファビアンはミロスラフの師団の強さは十分に理解しており、同時に彼らの弱点もわかっていた。先頭に立ち戦うというミロスラフの行動は、兵士達の結束と士気を高め、彼の部隊を強力なものにしている一つの要因であったが、一軍の将を失う危険を常にはらんでいた。そこに大きなチャンスがあると考えていたのだった。

だが、指示を受けた何人、何十人という兵士がミロスラフを討たんと飛びかかっても、馬上から引きずり落とす事すらできなかった。

「ば、化け物だ……」

若い帝国兵が仲間の兵士に声を震わせながら言った。

「俺達、新兵ごときがあんな奴に勝てるわけなかったんだ。あ、あれを見るよ」

ミロスラフの槍や鎧だけでなく馬も何人も男達の返り血で真っ赤に染まっている。

「悪魔だよ、あんな事ができるのは悪魔に決まってる！！」

「落ち着け」

恐怖のあまり精神に異常をきたす仲間を落ち着かせようするが、効果はない。瞳孔が開き、震えが止まらないでいる。

「殺される！！」

既に戦意を失った若い兵士にミロスラフが気づく。ミロスラフは馬をその兵士の方へと向け一気に突進する。

「うわああああ」

「くそっ！！」

まだ戦意の残ってる男の方はもう一人を庇うように立ち剣をかまえる。だが、ミロスラフが槍を一突きすると呆気なくその男の心臓は貫かれ、そのまま横に薙ぎ払うようにすると怯えて立ちすくむ男の頭蓋骨を粉碎した。

「っち、これじゃあいくら倒してもきりがない。ハンスの奴は何やってんだ、急いでくれないとちよつとまずいぜ」

ミロスラフは息をきらしながら呟いた。

ミロスラフとファビアンの戦いの丁度反対側ではハンスとベルントの部隊が戦っていた。

「ちよこまかと鬱陶しい奴等だ」

ベルントはハンスの騎兵部隊に手を焼いていた。帝国兵達の間を縫うように駆け抜け、戦線離脱と攻撃を繰り返すその様は芸術的なもので、なかなか捉える事ができない。

「無駄に深追いするなよ!!」

ベルントは兵達に大声で指示をだす。騎兵部隊を追いかけようとして、これ以上陣形を崩すのは自殺行為であつたし、例え深追いさせて捉えたとしても未熟な新兵や頼りにならない貴族の兵では返り討ちにされるのが関の山だと考え、敵の騎兵部隊の相手に兵を割くよりも、前方の歩兵部隊への攻撃に集中する事にした。

だが、なかなか押し切れない。数で勝っていても訓練不足の兵ではどうしてもバラバラの攻撃になつてしまい、その優位さを活かせないのだ。それはベルントの部隊だけでなく、他の帝国軍部隊も同じだった。

「こんなやつ等に何を挺子搦っている!! 貴様らそれでも栄えあるオートリア帝国軍人か!!」

ベルントが発破をかけても効果はでない。一進一退の攻防が続き、両軍の兵の屍の数だけが増えていく。

「くそ、何か手は無いものか……。ん」

考え込むベルントがハンスの部隊の異変に気づく。徐々にではあ

るが後退しはじめ、明らかに前線で戦う兵士の数が減っている。

「ついに兵が尽きたか。よしこれはいけるぞ」

ハンスの騎兵隊が正面から再び突撃してくる。

「構うな！！ 前方の敵にだけ注意しろ！！」

ハンスの騎兵隊が部隊の正面から入り側面へ抜け出た瞬間、ベルントは大声で叫ぶ。

「今だ、一気に押し上げる！！」

ベルントの叫び声があると、太鼓の音が鳴り響き、兵達が雄叫びをあげ雪崩のようにハンスの部隊へと押し寄せた。

「いける！！ 押せ、押せえ！！」

ハンスの歩兵隊の陣形は崩れ、後退をはじめた。

「勝った……」

自身も前進しながら、ベルントはこの戦いの勝利を確信していた。

異、明確なる転機

「釣れそうか？」

グリードは雪崩を打って押し寄せようとする帝国軍を見ながらオイゲンに尋ねた。

「ええ、そろそろいいでしょう」

オイゲンはそう言うのと近くにいた男に合図を送った。すると男は空に片手を掲げ、呪文を唱え始める。

ヒューー、ドン。

火球が男の手から打ちあがり、大きな音をたててはじけた。それを合図に反乱軍の右翼側、ハンスの部隊は後退を停止する。それだけではない、丁度停止した部隊の後ろに伏せていた兵達が立ち上がり前線に加わっていく。

「つな、何だと伏兵か！！」

ベルントは一瞬その出来事に動揺する。

「正面に兵を加えようと押し込む形になっているのは変わりない。焦る事はない、このまま押し潰せ！！」

勝てるという思い込みがベルントの瞬時に冷静な判断を下す力を奪っていた。明らかに反乱軍に誘い込まれているという状況なのに、何の策も打とうしない。だが、もし冷静に判断できていたとしてもすでにこの状況で打てる策などなかったのかもしれない。

帝国軍を包む空気の流れが変わる。魔術師でなくとも、魔術の資質を持つ者達はいち早くその異変に気づいた。自分達の頭上で恐ろしいものが生まれようとしている。

「ま、まずい！！」

ベルントの表情が青ざめる。

獣が唸る様な低い音、大きな爆発音、何かを切り裂くような風の音。様々な産声を上げ、それらはベルントの部隊の頭上に現れた。

「障壁を張らせる！！」

慌てて指示をだそうとするベルントであったが間に合うわけもなかった。上空から長時間魔力を練る事によって生まれた強力な魔法が降り注ぐ。それらは燃え盛る火炎の雨であり、すべてを切り裂くカマイタチであった。巨大な火の球が、魔力で作られた無数の矢が兵士達を襲う。ベルントの魔術部隊も急いで魔力の障壁を張ろうとするが、押し込もうと突出した歩兵達を力バーするには距離があきすぎ、自分達の身を守るの精一杯であった。さらに移動中であった為、十分な魔力を練られず、障壁自体も脆いものしか作れない。

あつという間の出来事であった。多くの人間が一瞬のうちに屍に変わり、混乱する新兵達は前線から離脱しようと勝手に後退しはじめる。

「馬鹿ものめが！！ 無理に下がれば余計に被害がでるだけだぞ！！ 前の敵にはりつけ！！」

ベルントの怒声も混乱する兵達の声にかき消される。後退しようと最前線をはなれた兵は次々と反乱軍の魔法攻撃の餌食になっていた。

「よし、今がチャンスだ！！ 突撃開始！！」

魔法による攻撃が終わった瞬間、ハンスが部隊に指示をだした。押し込まれていたハンスの部隊が反攻にでる。歩兵部隊が前線を押返し、騎兵部隊は再び側面から攻撃を加え敵の魔術師部隊に襲いかかる。ベルントの部隊は崩壊し、組織として動く事ができない状態に陥っていた。

「くそおお！！」

ベルントは馬上で絶叫した。彼のまわりにいた兵達のほとんどは討たれ、反乱軍の兵で溢れかえっている。突進してくる反乱軍の中に、馬に乗った一人の男の姿をベルントは捉えた。

「ハーンズ！！」

ベルントは反乱軍の兵を次々と斬り捨てながらハンスに向かって突き進む。ハンスもベルントに気づき剣を馬上で構えた。

キーン。

お互いの剣がぶつかり音をたてると、ベルントはバランスを崩し、馬から転げ落ちた。そのまま無視して先に進もうとするハンスをベルントは呼び止める。

「逃げるな小僧！！ 貴様のような若蔵、この俺が！！」

その声を聞き、ハンスは再びベルントの方へと馬を向ける。すでに勝敗は決したこの状況で、ハンス自身がベルントと戦う必要性などありはしなかった。だが、かつては師であるオイゲンと共に戦い、帝国を守ってきた男に対しての手向けとして、そして自分の騎士としての誇りをかけてベルントの勝負を受けてたつ事にしたのだった。

キーン、カキーン。

ベルントの攻撃は巧みに馬を操るハンスによってすべて流される。攻撃が当たらないのはハンスの巧さだけのせいではなかった。老い始めていた肉体が、自分の思い描くイメージについていけない。それは戦場で数々の敵を打ち倒す事でここまでのし上がってきた男にとって耐え難いほどの屈辱であった。

「こんなガキに、この俺が、この俺が！！」

いきり立った所で何の効果もない。

「冷静にだ。冷静に」

気持ちを落ち着かせハンスの馬の動きに集中する、確実に馬をし止め、ハンスを馬上から引き摺り落とす事を狙う。

「ここだ！！」

馬の足を思いっきり切りつけるベルント。手には肉を切り裂く感触が確かに伝わってくる。馬は鮮血を飛び散らしながら悲鳴を上げ倒れた。しかし、鮮血を飛び散らしたの馬だけではなかった。馬から飛び降りるハンスにベルントの背中也斬りつけられたのだ。

「く、くそお」

背後を取られ慌てて、ハンスの方のへ向きなおろうとするベルント。

「」覚悟！！」

一瞬の隙をついて襲いかかるハンスの攻撃になす術も無く、ベルントの首がはねられる。それが、オイゲンの栄光の影に甘んじ続けた男のあつけない最後であつた。

ベルントの部隊の壊滅は帝国全軍に影響した。ベルントの穴を埋める為に隣のピオトルが兵を割かねばならず、ピオトルが押されはじめると今度はその隣のアンドレアスがピオトルを支援しようとするという悪循環に陥りはじめたのだ。さらに反乱軍は全面的な反攻を開始する。特にミロ斯拉フの部隊の攻勢は非常に強いもので、ファビアン

の部隊もかなり危険な状態に追い込まれていた。

「馬鹿共が、最初から俺がでてればこんな事に成らずに済んだものを」

崩壊し始める帝国軍を見ながらガエルは吐き捨てるように言った。

「ジェイド、貴様はベルントの尻拭いをしてやれ。俺はファビアンの方へ行く」

「私がベルント殿の？」

「不服か？」

常識で考えれば、一旅団にすぎないジェイドの部隊にベルントの部隊の穴埋めなど到底できるものではない。

「いえ、そうではありません。ここでベルント殿の失態を帳消しにする活躍をすれば陛下も喜ばれるはず。てっきりガエル殿が直々に向かわれるかと思ったのですが」

「その素晴らしいチャンスの場を貴様に譲ってやろうというのだ。感謝しろ」

そう言うのとさっさとガエルは自分の部隊に指示だし始め、ファビアンの支援に向かつていった。

「おっさん、逃げやがったな」

トンボが移動していくガエルの兵達を見ながら言った。

「まあ、構わないさ」

「なんだ、えらく余裕だな。勝算でもあるのか？」

トンボの疑問にジェイドは何も答えず、にやりと笑っただけだった。

「おらあ、急げ、急げ」

トンボは戦場に向かう兵達に向かって声を荒げた。

「しかし、よお。ここは素直に撤退した方がいいんじゃないか？」

特にまわりの事を気にするわけでもなく、トンボは大声でジェイドに尋ねる。

「どうした、お前にしては弱気だな」

「オイオイ。弱気も何も、この状況じゃどんな馬鹿でもヤバイ事ぐらいわかるぜ」

「安心しろ。俺は負け戦をするつもりなんてさらさらない。……この辺りでいいか」

突然、ジェイドが兵達の進軍を止めた。

「何だ、早く行かねえと余計まずい事になるだろ」

トンボがジェイドの行動に不服そうな顔をする。

「なあ、トンボ。お前は義理だとか、忠誠心つてのをどう思う」

「何だ、急にへんな事言い出して」

戸惑うトンボを見るジェイドの目は真剣なものだった。

「まあ、食えもしねえし、何の役にもたたねえもんだ。そんなもの俺にはいらねえな。そんな事、お前がよくわかってるだろ。いざとなれば、お前をぶち殺す事だっていとわないぜ」

トンボが豪快に笑う。

「ああ、安心した。それでいい」

「ジェイド、何を考え……、お前まさか」

鈍いトンボもジェイドの真意によく気づく。

「言つたら、俺は負け戦をするつもりなんてない」と

「ハッハッハ。そうか、そうりゃあそうだよな。どうせ暴れるなら、勝って旨い思いをしないと。クック、こりゃあ傑作だ」

筋肉質な巨体を揺らしながら大男が笑う。

「で、どうするんだ」

「どうせ、殺るなら一番いい首をあげる」

「そうこなくっちゃな」

トンボは満面の笑みで頷いた後、兵達に向け大声で話しかける。

「おい、野郎共、ジェイド様からありがたいお話がある。耳の穴かっぽじって聞けよ」

ジェイドは改めて自分の兵達の顔をみた。

見慣れた顔が多く、それは敗戦を重ねてきた他の帝国軍の部隊ではまずない事だった。

ジェイドの部隊の強さの要因は単純なものである。力、ただそれだけが彼らを数々の戦場で勝利へと導いたのだ。部隊の中には出自の怪しい者や、犯罪者で逃亡の身の者など普通、兵士になれないような男達が大勢いた。ジェイドは単純に人殺しの技術だけを見込んで彼らを受け入れたのだ。だが、彼らを兵士にしても並みの人間では統率する事などできはしない。ジェイドの持つ絶対的な力が彼らに従わせた。彼らの間に信頼や友情などありはしない、ジェイドに対する本能的な恐怖と戦場で獲られる殺戮での快楽や活躍に対する見返りが彼らの間にある種奇妙な絆を生み、部隊として機能する事を可能にしたのだった。

「よく聞け、お前達、私はこの戦いに勝利するのは反乱軍だと考えている」

兵達がどよめく。

「おらあ、うるせえぞー!」

トンボが一喝し、兵達を黙らせると、ジェイドは話を続けた。

「何度でも言う、この戦いに勝つのは反乱軍だ。帝国軍は負ける」
再び騒がしくなる兵達。

「おいおい、狂乱の貴公子様もついに怖気づいたのか？」

近くの仲間とコソコソと話す男の言葉をジェイドは聞き逃さなかった。ジェイドはその男を睨みつけながら男に近づいていく。ジェイドに気づいた男は、しまったという表情した後、目を伏せながら

自分の身の安全を神に祈りはじめた。

「あーあ。あいつ、終わつたな」

「ご愁傷様」

まわりの兵達は男と露骨に距離をとり離れようとする。

「俺が、怖気づくだと？」

ジェイドは冷たい声で男を責めるように話かけた。

「い、いえ……」

震える声で精一杯に答える男の表情にはすでに生気がない。

「俺はな、お前らみたいな能無し共のためにも、勝てる戦つてのを
してやつてるんだ。現に今までお前らゴミ共にも旨い思いをさせて
きてやつただろ。ちがうか？」

「ち、ちがいません」

男は泣きそうになっている。

「その俺が、冷静に考えてこの戦いは帝国軍の負けだと判断したん
だ。それを言うに事欠いて怖気づいただ？ そんなに帝国兵として
死にたいなら、俺がこの場で殺してやる。いや、お前一人で反乱軍
に挑んでこい」

ジェイドには既にいつもの落ち着いた雰囲気などない。獲物を見
つけた獣のような、いや、それ以上の狂気が彼を覆い、駆り立てて
いる。

「お、お許しを」

「お前の代わりなんていくらでもいるんだよ」

冷たく言い放ち、ジェイドは命乞いする男の剣を抜き取ると、そ
のまま素早く心臓を一突きで貫いた。

「ゲ、ゲフオ」

男は血を吐き、倒れ絶命する。

一連のやりとりを見ていた兵達の大多数は、この光景に慣れきつ
ているのか特別慌てる様子もなかったが、配属されてきたばかりの
新兵達は噂で聞いていただけのジェイドの恐ろしさを目の当りにし
て、肝を冷やした。

顔についた男の返り血を拭くと、ジェイドはいつもの落ち着いた調子に戻り、話を続けた。

「勝つのは反乱軍だ。だが、私は負ける戦などするつもりはない。もちろん、戦わず逃げ出すような馬鹿な真似もしない。どうするか……、簡単な話だ、私達は反乱軍側につく」

このジェイドの宣言に普通の部隊なら再び騒がしくなるものだろうが、さきほどのやりとりを見ている兵達はただ黙って話を聞くしかなかった。

「頭を使え、どうすれば自分達にとってプラスになるか。……忠義、そんなものの為に私は無駄死にする気はない。第一、考えてみる、現帝であるバステイアンは実の兄であるイエンスを殺して今の地位についた屑だ。そんな男の為に命をかけるのか？ 奴の圧政を助ける為に死ぬのか？」

バステイアンが兄であり、先帝だったイエンスを殺した。もちろん、そんな証拠はありはしない。だが、イエンスの急死の原因はバステイアンが何か謀ったからだとか、多くの人々は考えていたし、それは帝国臣民の間では暗黙の了解のようなものとなっていた。

「私達は命をかけて戦場で戦っているのだ。その働きには当然の対価が支払われなければならない。だが何もそれをバステイアンから得る必要はないし、あの男はもう終わりだ。戦って負けて何も得られない、そんな馬鹿な話を良しとするほど私達は愚かではないはずだ。お前達の中には裏切り者と人々に後ろ指をさされるのを恐れる者もいるかもしれない。しかし、裏切り者と呼ばれるべき存在は誰なのか、それは私達か？ それとも反乱軍か？ 違う！！ 実の兄を殺し、のうのうと皇帝の地位につき、踏ん反り返る男こそがそう呼ばれるべきなのだ。奴は反乱軍を賊だというが、その蔑称はあの男にこそ相応しい。大義名分は反乱軍にあり。何も恥じる必要はない、私達はあの丘にいる賊を討ち、真に相応しい皇帝の即位を手助けし、大手を振って帝都に帰還する」

「オー！！」

多くの兵達はジェイドに賛同の声を上げた。誰もバステイアンを慕う者などいやしないし、もとより、ならず者の集まりのような部隊なのだ。忠誠や義などとは程遠い存在であり、反乱軍側に寝返る事に戸惑いを覚える者などほとんどいない。一部の配属されてきたばかりの新兵も完全にまわりの雰囲気吞まれている。

「全軍反転！！ 敵はあの丘にいる賊だ。賊を討った者には新皇帝から莫大な報酬が与えられるぞ！！」

ジェイドの部隊は来た道を戻りはじめる。兵の間にはもう躊躇いや不安などありはしない。必ず負ける戦から必ず勝てる戦に変わったのだ。ただ無惨に殺される為に歩を進めるのではなく、莫大な報酬を得る可能性すらある今のこの状況に兵達は興奮していた。

価値

「おい、四二〇旅団の奴等が戻ってくるぞ」

「あれっ、何か問題でもあったかな」

バステイアンの護衛軍は本陣に戻ってくるジェイドの部隊を奇妙に思いながらも、何の警戒もなしに迎え入れようとしていた。

「血が……、どうかなさいましたか」

護衛兵の一人がジェイドの服についた血に気づき尋ねた。

「少し問題が起こりましてね。陛下に至急伝えなければいけない事があつて戻りました」

ごく自然に答えるジェイドに対して、護衛兵はバステイアンとの謁見を洩る。

「それはちよつと……、いちおう師団長級の方以外は通せない決まりになっていますので」

「今は緊急事態だ、そんな事も言つてられないでしょう」

「しかしですねえ……。私達の方から陛下に伝えますので用件を伺いましょう」

ジェイドは小さく溜め息をついた後、護衛兵に用件を伝える。

「仕方がない。そうですね……。力無き皇帝は賊にも劣る、とでもお伝え下さい」

「は？」

護衛兵はジェイドが何を言い出したのか理解できなくて混乱した。

「やはり自分で伝える事にしましょう」

空気が変わる。

ジェイドは剣を抜き、手練であるはずの護衛兵を一瞬の内に斬りつけると、部隊に指示をだす。

「行け！！ バステイアンを討つて新皇帝に我々の力を示すのだ！！」

「オー！！」

武器をかがけ襲ってくる男達の姿を見て、ようやく護衛軍はジェイド達が裏切った事を理解したのだった。

その頃、帝国本陣では苛立つバステイアの姿があった。

「どいつもこいつも、使えぬ奴等ばかりだ!!」

軍才のまったくないバステイアでも、帝国軍がまずい状態にある事ぐらいはわかっていた。

「どうにかならんのか!!」

それでも負けを認め撤退などはしたくないバステイアに対して部下達も撤退の進言をするのはなかなか難しかった。

「厳しい状態です」

決して負けや撤退という事は口にできない事が、余計に部下達の焦りと破滅への予感を感じさせ空気を重くさせている。

「そんな事みればわかる!! どうにか出来ないのかと聞いているんだ」

「この状況では打つ手は限られているかと。一度戦場を離脱し、軍の立て直しの為に帝都から北へしばらく進んだ所にあります、ノードに移動しましょう」

一人の部下が重い口を開きようやく事実上の撤退の進言をした。

「ノードだと!? 帝都を捨てるというのか!! 皇帝に都から落ち延びるとでも言うのか!!」

「落ち着いて下さい、陛下!! 落ち延びるのではなく一時的に帝都を離れ、ノードで軍を立て直すだけです」

激怒するバステイアをなだめようとするが効果はない。

「馬鹿な事をいうな!! 一時だろうが何だろうが賊どもに帝都を明け渡す事などできるわけがあるか!!」

部下の首をはねかねない見幕で怒鳴るバステイアの元に一人の兵がやってくる。

「大変です!! 四二〇旅団が反乱を起こし、護衛軍と戦闘に入りました。陛下も急いで避難してください!!」

それは、バステイアンの破滅が近い事を知らせる使者であつた。

ジェイドは本陣に向けて猛烈な速度で攻め上がる。手練揃いのはずの護衛軍ですら彼にまったく歯が立たず、次々と倒されていく。

「止める！！ 奴をこれ以上先に行かせるな！！」

ジェイドの馬の進路に入り妨害しようとしても、ひょいと軽くかわされ、すれ違い様に斬られるだけでどうしようもなかった。

驚異的な強さを持つのはジェイドだけではない。彼の相棒である大男も護衛軍では止める事ができなかった。

「おら、おら！！ てめえらの相手は俺様だぜ！！」

トンボは敵陣ど真ん中で馬から飛び降りると、自慢の巨大な鈍器を振り回し始める。

「うわああ」

「うぎゃああ」

幼子が人形をなぎ払うように、簡単に大の大人が吹き飛ばされいく様は護衛軍にとっては悪夢そのものであり、逆に四二〇旅団の兵達にとっては非常に頼もしいものであり士気の向上につながった。

「バケモノめ！！」

「フン！！」

必死に襲い掛かる鎧に身をつつんだ兵士の腹をトンボは素手で殴り飛ばす。

「ぐはあ……」

数メートル先にまでその兵士は吹き飛ぶ。

「おい……、う、嘘だろ」

完全に意識のないその兵の側にかけよった護衛兵は言葉を失った。鉄で作られた鎧はぐしゃりとへこみ、無惨なものとなっている。

「ほらほら、次の奴はどうした！！ どんどんかかってこい！！」

鉄の鎧を素手で殴っても平然としている大男を見て護衛兵達は絶句した。

「こんなやつ等に勝てるわけがない……」

護衛兵達は完全に戦意を砕かれていた。

「な、何だ！？」

「奇襲か！？」

前線で戦う帝国軍は本陣で起こりはじめた異変に気づく。だが、彼らにはどうする事もできなかった。反乱軍の攻勢が強まる中、無理に前線から退く事は非常に危険であった為、護衛軍の活躍に期待するしかない状況であったのだ。

敗色濃厚の中でのこの出来事はさらに帝国兵の士気を下げた。若い兵士の中には戦場から逃亡しようとする者も出始め、帝国軍の多くの部隊はほとんど統制が効かない状態になりはじめていたのだった。

そんな帝国軍の様子に反乱軍側も異変を察知する。

「妙だな。何かあったか、それとも……」

帝国兵達の罠かもしれないとミロスラフは考えたが、帝国側がいまさら何か策を打てるとは思えなかったし、ファビアンの援軍に駆けつけたガエルという男は頭のきれる男ではない。どのみち、一気に片をつけるこのチャンス逃すわけにはいかないのだ。今後ロマリアと戦いになる事も十分に考えられる。時間をかけたくはない。罠を恐れるあまり敵を逃がし、どこか城に籠城される事は避けなければならなかった。

「帝国兵は完全に狼狽しているぞ！！ この戦、我々の勝利だ！！ 敵本陣まで一気に押し上げられ！！」

そう叫ぶミロスラフの傍らにはファビアンの死体が横たわっているのだった。

撤退を渋るバステイアンをようやく説得し、避難させようとする男達は近くで人と馬が悲鳴をあげるのを聞いた。

「もう、来たのか。陛下お急ぎを」

バステイアンは部下の言葉に頷くと、何人かの屈強そうな兵士に連れられ戦場を離れようとした。だが……。

「バステイアン――！」

声が聞こえたかと思ったその瞬間、短剣がバステイアンの乗ろうとした馬の急所に突き刺さる。

「貴様――！」

あわてて兵達が向けた視線の先には一匹の獣がいた。いったい何人の人間を斬ってきたのだろうか。全身を血で赤く染め、異臭を放つその生き物は、息を切らしながらバステイアンを睨みつけている。「ジェイド、貴様トチ狂ったか――！」

バステイアンの部下が怒声をとばすが、ジェイドは何の反応もしめさない。

「ゴミ虫が調子に乗りおつて、お前達この馬鹿をはやく殺せ――！」
バステイアンの命令に一齐に何人も男達がジェイドに襲いかかる。何本もの剣や槍がジェイドを斬り殺し、突き殺そうと迫っている。

「ぐ、くそお……」

しかし、血しぶきをあげ倒れたのはジェイドではなく帝国兵達の方だった。

「馬鹿な……」

バステイアンは自分の目の前の出来事が信じられない。彼らはみな帝国選りすぐりの戦士達なのだ、その者達が息を切らしながら転がり込んできた男に一瞬で倒されてしまった。

「貴様の命運もこれまでだな」

「ま、待て――！」

その声を無視し、ジェイドはゆっくりと怯える男ににじり寄る。

「金か、女か、お前が望むものならなんでもやろう――！」

悲痛な叫びを聞いてもジェイドは歩みを止めない。

「蜜の枯れた木には虫も寄り付かない。今のお前に何の価値があると思う」

腰をぬかし座り込むバステイアの目の前にジェイドが立つ。

「待ってくれ!!」

「力なき皇帝は賊にも劣る、いや虫けら以下だ」

「命だけは!!」

「お前が出来る事は新たな皇帝にその首を差し出す事だ」

「ま、待ってく!!? ……ガハッ」

命乞いをするバステイアの腹をジェイドは血塗れの剣で切り裂く。

「あ、ああ……」

ジェイドは次に声にならない声をあげ、のた打ち回る男の片足を切り落とした。

痛みで意識を失ったか、それとも死んでしまったか。バステイアは悲鳴すら上げず動かなくなる。

「無様だな」

そう呟きジェイドは持っている剣をバステイアの首めがけて振り下ろした。

「ジェイド様!! ご無事でしたか」

ジェイドがバステイアの首を切り落とした丁度その時、若い兵士が現れた。どうやら自分の所に配属されたばかりの新兵のうちの一人らしい。

「こ、これは!?!」

散乱する死体の中から転がる首を見つけ、兵士は驚いた表情になった。その顔を見て、ジェイドは冷静に言い放つ。

「何を驚く、目当ての獲物を狩っただけだろう」

「え、ええそうですね」

「それより、護衛軍の方はどうなってる」

「トンボ様の活躍もあって何の問題もないかと」

「そうか、ならいい。狼煙をあげる。愚かな帝国兵の為に奴等が敗北した事を教えてやるとしよう」

高々と立ち昇る煙は両軍に戦いの終わりを告げた。

新たな皇帝

反乱軍と帝国軍の戦いは反乱軍の勝利でおわった。皇帝バステイアンは死に、ベルントやファビアンと言った有力な将や貴族の多くが戦死し、まさに帝国側の大敗である。

反乱軍の勝利を多くの帝国臣民は歓迎した。人々はバステイアンの圧政から開放された事を祝い、帝都内を行進する反乱軍に対して笑顔で手を振った。

オートリア城の玉座に腰掛けるとグリードは大きく溜め息をつき、近くにいたオイゲンに話しかける。

「それで、まず何をするんだ」

グリードには新たな皇帝になる事への感慨などありはしなかった。これからしなければならぬ事が彼を憂鬱な気分させているのだ。「時間がありません、さっそくロマリアに使者をだし和平を申し込みます。書状の文面はこちらで用意しています。それと皇帝即位の簡単な式典を開きます。後は今回帝国側についた将や貴族に関する処分。それから……」

「面倒なものだな」

「面倒なものであるとやらなければならぬ事はこれから幾らでもあります」

オイゲンは新皇帝を戒める。

「幾らでもか……。お前が適当に処理してくれば楽でいいんだがな」

「グリード様。いや、陛下がそんな考えでは困ります。あなたにはなすべき事が多くあるのです」

「ふん、なすべき事か」

悪態をつくグリードは幼い頃、イエンスと交わした会話を思い出していた。

年の離れた兄は自分とは違い無口な男で、感情をあまり表に出すような人間では無かった。そんなイエンスに幼いグリードは不満をぶつける。何故、先に生まれたというだけでイエンスが次の皇帝に決まるのかと。そんなグリードにイエンスは、自分が決めた事ではない事で文句を言われても困る。皇帝など面倒なだけで、もし代わるもの代わりたいたいものだとして淡々とした様子で答えた。

当時は皇帝になれる事が決まっている男の嫌味にしかとれなかったが、今になって考えれば兄の気持ちが多少理解できた。

その後、長々とオイゲンは今後の予定を説明をし、最後に紙切れをグリードに見せた。

「こちらが、ロマリアに出す書状の文面になります」

グリードはそれを見て不満気に口を開く。

「ここまでする必要があるのか？」

書状には、バステイアの行いに対する謝罪や多額の賠償金を支払うだけではなく。ロマリア国境付近の一部領土の割譲をする事が新皇帝となるグリードの名で明記されていた。

「陛下、我々が置かれている状況はそれほどのものなのです。ご理解いただけませんか」

そう言うオイゲンには皇帝に物事を頼む卑屈な臣下というものではなく、有無を言わさぬ凄味があった。

「ああ、分かった、分かった。これでいい好きにしろ」

グリードが書状の内容を渋々承諾すると、オイゲンはすぐに部下に書状を届けさすように命令した。

書状受け取った兵を見送りながらグリードは呟く。

「屈辱だな」

オートリア帝国皇帝としての最初の仕事、それは隣国の王に対する謝罪の書状を出す事であった。今まで親兄弟以外に謝った事などない男にとってそれは簡単にできるものではない。

「オイゲン、俺はこのままでは終わらせんぞ」

グリードの言葉はあの書状が真の平和の為ではなく、仮初の平和

の為にすぎない事をオイゲンに予感させる。
帝国の新たな時代の幕開けは、新たな争いの時代の幕開けにすぎないのであった。

グリードの目の前に一人の男が連れてこられた。男は跪き、深々と頭を下げる。先の戦で帝国軍を裏切り、反乱軍に勝利をもたらしたジェイドである。

「ジェイド、お前の働きは素晴らしいものだ」

「お褒めに与かりまして光栄です」

ジェイドは形式的にお決まりの言葉を返す。

「だがな、一つ聞いておきたい事がある。お前が討ったという兄の遺体は腹が裂かれ、足が切り落とされ無惨なものだった。それは何か意図があつてのものか？」

グリードの口調はジェイドを強く責めるようなものではないが、明らかに不快感を示すものであった。

「まさか。バステイアン様に降伏する事を勧告致しましたが受け入れられず、逃亡を図ったためやむ終えず手にかかる事になっただけであります。激しく抵抗された為に、オートリア家の者のご遺体があのようなものになってしまい私も大変残念で、申し訳なく思っています」

「申し訳ないか。口だけで、お前からは全然そのようなものを感じられないがな」

「陛下は何か私の事を誤解なさっているのではないのでしょうか」

「まあいい。お前の働きが素晴らしかったのは確かだ。何か望むものがあるなら言ってみろ」

「力を。陛下の為に存分に働けるだけの力を頂きとうございます」

「力？ そんな抽象的ではなく具体的に言え」

「これからの戦に備え、二個師団級の部隊の独自運用を任せて頂きたい。それと、いい仕事をする兵を作り上げるのには金がかかります。資金面の方も充実したものにさせて頂きたく思っています」

傲慢にも思えるジェイドの要求をグリードは苦々しく思う。

「強欲にもほどがあるなジェイド。裏切り者の男を信用して人と金を湯水のごとく費やせと言うのか」

「やはり陛下は私という人間を何か勘違いしておられるようです」
ジェイドは表情一つ変えず言った。

「勘違い？」

「私は裏切り者ではなく、ただ働き者なだけです」

堂々とそう主張するジェイドを見て、グリードは大きな笑い声をあげた。

「つまらん事をよくもまあそうぬけぬけと言えるな。それでその働き者はどれだけの成果を約束してくれるんだ？」

「天下を。大陸平定を為すための駒となる事を約束しましょう」

「口だけでは何とでも言える。信用できない」

「信用できないのは私の実力がでしょうか」

「違う、お前の今までの戦場での活躍は聞いている。部下としての信用だ」

「部下としての信用……。それは何をもってそう仰られているのでしょうか。私は戦場で多くの敵を打ち倒す力をもっている。それで十分ではありませんか？ 無能な忠臣を集めたところで何の役に立ちましょう。有能な部下とは力のある者の事です。力のある人間にさらなる力を与えて、ただそれを利用すればいい。裏切りなど恐れる必要などありません。その力を利用して裏切るかもしれない男よりも強い力を持てばよいだけなのですから。もったいなくは思いませんが、天下を取るための逸材を人としての信用などつまらん理由でふいにするのは。……私が口だけではない事をロマリアとの戦いで証明してみせましょう」

ジェイドの言葉にグリードはしばらく黙り込んで考えこむ。

「お前の言う事にも一理あるが、ロマリアとは和平するつもりだ。

もう書状も送っている。残念だがお前の活躍を見れそうにはないな」
「和平ですか……。ですがそれで終わりではないでしょう」

「何が言いたい」

「私は大陸平定の為の駒にすぎないと言ったはずです。野心なき臆病者に私という存在は必要ない。しかし、大陸を治めるべき存在、皇帝と呼ばれるに相応しい人間には必ず私という駒は必要になります。陛下は皇帝として、何を為すつもりなのでしょうか。何を為すために皇帝になろうとしたのでしょうか」

「兄が私の事を誤解して恐れ幽閉などするからだ。何度話しても聞く耳を持たず、仕方なくこういう事になっただけだ」

「ご冗談を。では幽閉される前、お父上であるオリバー様やイエンス様の時代には皇帝になりたい気持ちなど微塵もなかったと仰るのですか？ そんな事はないはずです」

「貴様、あまり調子にのるなよ。俺が父上や兄上達が皇帝である事に何の不満を懐く必要がある」

「そうです。何故不満だったのか。欲しいものは何でも手に入る金があった、望めばいくらでも女を抱けた、誰もが貴方に頭をさげる地位もあった。それでも貴方は満足できはしなかったはずですよ。皇帝にあつて、皇帝の息子に、弟にはないもの。それは自由だ。真の自由を手にする権利だ」

「真の自由？」

「何者にも邪魔される事のない世界。それを築く権利を今の貴方は得たのです。大陸の西部で縮こまってつまらない王様ごっこをするのではなく。大陸を平定し、邪魔者のいない世界を築く事ができるのです。何万、何十、いや何百万という兵を動かし、邪魔者を滅ぼす手段を貴方は得たのです。それは皇帝の息子や弟では決してできない事」

「クックク、お前は本当に変わった奴だな。おもしろい、お前の望み叶えてやろう。だが、口だけの働きだったらどうなるかわかっているだろうな」

「私は陛下の期待に背くほどの無能ではありませんよ」

「いいだろう。さがれ」

そう言ってグリードはジェイドの姿を満足そうに見送る。

「あのジェイドという男は信頼できる男ではありません。あまり力を与えすぎるのは危険だと思いますが」

皇帝の間からジェイドが出て行った後、二人のやり取りを見ていたオイゲンがグリードに近づき口を開いた。

「あの男も言っていただろう、信頼や信用など必要ないと。うまく利用すればいい」

「しかし」

「オイゲン。刃物で怪我をする事を恐れては、料理もできぬし、敵兵も討ち取れんぞ」

「あの男はただの刃物ではございません。言うなれば妖刀」

「ふん、その方がおもしろい。俺は疲れたすこし休むとする」

そう言って自室に戻るグリードを見送るとオイゲンは大きく溜め息をついた。

後にオイゲンはこの日の出来事を自身の著書にこう記している。

グリードという皇帝が優れていたのは、軍事的な才能や内政の才、人臣の心を把握するカリスマ性ではない。自身に向けられる敵意を非常に敏感に感じ取る事が出来る事である。そんな男でも、人の持つ狂気というモノの本質を見抜く事は出来なかったのである。

皇帝

広々とした室内には庶民では一生手に入れる事のできないような
がものが多々ある。精彩に描かれた風景画や、でたらめに描かれた
ようにしか見えない名画。金銀でできた甲冑に何年も読まれていな
いであろう骨董品の書物が並ぶ本棚。ここは代々皇帝が寝室として
きた部屋。父が、兄達が使用していた部屋。ここが自分の新たな寝
床となった部屋なのだ。

豪華な装飾が施された巨大なベッドに俺は寝転び天井を見つめ思
考する。

何が変わったのだろうか。いや、何が変わるのだろうか。

バステイアの死。それは最後の血の繋がった家族の死。それは
俺に何をもたらししてくれるのか。

家族。

父が死んだ日、二人の兄は違った反応を見せた。イエンスは黙っ
て二度と目を覚ます事のない父を見つめ、バステイアンは声をあげ
嘆いた。バステイアンは父を見つめるイエンスを大袈裟に責め、そ
の様を俺はうんざりしながら見ていた。……茶番だった。兄達にと
って父の死自体はどうでもよい事なのだ。イエンスは父の死によっ
て、なくなりたくもない皇帝にならねばならぬ事を憂いていたのだ。
バステイアンが悲しんだのは父の死ではなくイエンスが皇帝になっ
てしまう事だったのだ。誰も父の死を悲しんでなどはいなかった。
もちろん俺自身も。

イエンスが死んだ時、バステイアンは喜んでいた。いや実際には
嘆き悲しんでいたのだが、俺には嬉しさのあまり泣いているように
しか見えなかった。案外、イエンス自身も死によって皇帝という地
位から解放される事を喜んでいたかもしれない。

家族とは何だったのだろう。家族の死は悲しむべきものののだろ
うか。俺には母の記憶はないが母の死を父や兄達は悲しんだのだろ

うか。

今日、最後の家族バステイアンが死んだ。その事自体に俺の感情を揺さぶるようなものは何もない。喜びや悲しみといったものはない。だが、無惨なバステイアンの遺体を見たとき、俺は不快感を覚えた。怒りにも似た感情が湧いた。それはバステイアンが家族であつたからなのか。

いや、そんな事は断じてない。もとからの男を生かすつもりなどなかった。生きて捕らえた所で処刑するつもりだった。あの男は俺を嫌っていただろうし、俺もあの男は嫌いだった。

それならば何故……。簡単だ。あの男が皇帝であつたからではないか。私が不快だったのは兄が無惨に殺された事に対してではない、皇帝という存在があのように辱められた事に対してなのだ。

だが、何故だ。何故、皇帝という地位、証、存在がここまで俺を魅了したのだ。幼い頃から俺はそれに魅入られていた。

不満だったのだろうか。

いったい何が不満だというのか。皇帝などならなくとも望めば何でも手にはいったのだ。

何でも……。

いや、違う。そうだ、望んでも望んでも手に入らなかったのだ。これだけは、皇帝という地位だけは。だからこそ魅力的だったのだ。だからこそ望んだのだ。

俺は退屈だった。退屈だった。退屈だったのだ。

どんなものを俺を十分に満足させてはくれなかった。一流の料理も一流の名画も劇も踊りも女も。一瞬の快樂の後にそれは押し寄せる。俺の全身を包み、取り付き、放さない。

退屈だ。退屈だ。退屈だ。

地獄だった。牢獄であつた。苦痛そのものと呼ぶ事すらできた。何と世界はつまらんのだ。この日々から救われる手段はあるのだろうか。……。あるのだ。あるはずなのだ。

皇帝。

それは地獄から俺を救い出す系だ。牢獄から助け出す鍵だ。この不治の病すら治す薬なのだ。

俺はそれを今日手にした。

脱け出せるのか？ 退屈な日々から。

いや、脱け出さねばならないのだ。呪われた日々から。もしも、皇帝という地位についてなお退屈であつたのなら、俺は何を目的に生きればよい。

退屈であつてはならない。俺はもうそれを手にいれてしまったのだから。

白髪の子、ジェイドは言った。真の自由を手にする権利を得たのだと。

そうだ、俺は自由になれるのだ。ならねばならぬのだ。退屈という束縛から自由にならねばいけない。

精一杯遊ぼうではないか、この新しく手にいれたこの玩具で。おもちゃこの玩具で遊べば、多くの人々が血を流す。この玩具で遊べば、多くの人々が死ぬ。

それは楽しいだろうな。いや楽しいはずだ。

今までできなかった事ができるようになったのだから、それは楽しい事に決まっているのだ。

ああ、なんて清々しい気分なのだろうか。この感覚は久しく感じた事のないものだ。

明日が楽しみだ。

明日からの日々は今までとは違う。今までとは違う。違う。違うのだ。

ロマリア王国、判断、決断

ロマリア王国。帝国北西部に隣接し、独立以来何百年にもわたり、帝国との争いを繰り返してきた国家。緑豊かな山々や深い森は天然の要害として機能し、幾度となく繰り返された帝国の侵攻を撥ね返す要因となった。

現国王であるローラント王は賢王として兵や民に慕われている。その王自ら兵を率いて帝国と決着をつけんと出陣する為の最後の会議をしていた丁度その時、帝国から一通の書状が届いた。

ローラント王はその書状を読み終えると、深い溜め息をつき周りにいた主だった將兵達に書状の内容を告げた。

「馬鹿げた事を。陛下、こんな話を受け入れる必要はありません」書状の内容を聞き終えた老兵は強い口調でそう主張した。それに周りの男達の多くがそうだ、そうだと同調する。

独立戦争以来、帝国とは長年争ってきた関係なのだ。親の代、爺さんの代、それ以上昔から戦争をしてきた。戦場は多くの場合ロマリアの領内であり、国民の多くは誰かしら肉親を失っていた。家族の男すべてを戦で失った者すらいるのだ。

帝国で起きた内乱の話はロマリアにも伝わっていた。例えば君主が変わろうと憎き帝国には変わりはなく、この絶好の機会を活かさないわけにはいかないと將兵達を考えていた。

「少し時間をくれないか」

王の言葉にどよめきが起きた。

「陛下！！今は一秒足りとも無駄にできません。何を迷う必要があるのです。君主が変わろうとオートリア家の人間が跡を継いだだけ、帝政に変わりなく、時が経てばまた王国に攻め入ってくるに決まっています！！」

部下が声を荒げて、ローラントは渋い表情を変えずにいた。

「私にはグリードという新たな若き皇帝が、どのような男かははっ

きりとはわからん」

「陛下はそのような人物を信用なさるといいますか」

部下の言葉にローラントは首を振る。

「私が気になるのは彼を皇帝にする為にオイゲンという者が協力している事だ。私は彼と何度か話をした事があるが素晴らしい男だった。私は彼を信頼に足る人物だと評価している」

「しかし陛下、オイゲン將軍も所詮は主君に叛旗を翻した男。かつてはそのような人物であつたかもしれませんが今もそうとは……」

「オイゲン殿は和平の為に証として自身の首をさしだしてよいとまで書かれている。彼ほどの人物が命をかけてまで新たな皇帝に尽くそうとしているのだ。無下にはできまい」

「彼の意味とは関係ないものかもしれませんが。新たな皇帝が將軍の首をかつてにさしだそうと、いやすでに將軍を手にかけているかもしれない」

「彼はそんなに簡単にやられるような男ではないよ。反乱が成功したのは彼の力があればこそであろうし、もし彼の力なしに反乱を成功させたのならば、新しい皇帝とはオイゲン殿以上のやり手という事になるな。そんな相手と易々と戦争などできないと思うが」

「しかし」

「お前達の言いたい事もわかる。だから一晩考える時間をもらおう」

「陛下……」

「これは命令だ。部隊は待機させておけ。明日、改めて指示をだす」
王の言葉に部下達はこれ以上逆らう事はできなかった。みな黙って頭を下げ、席を立ち自室へと戻る王を見送るのだった。

「どうかなさいましたか、お父様」

会議にでていたはずの父親を見て娘のイリスは座っていた椅子から立ち上がり心配するような顔をした。

「予定が変わった」

疲れた声でローラントは答え、イリスの隣にある装飾の凝った椅

子に腰掛ける。

「今日の出陣は中止になった」

「そうですか……」

悲しそうに言う娘を見てローラントは言う。

「なんだ、父親が戦争に行かないのがそんなに嫌なのか」

茶化して言うローラントにイリスは変わらない口調で話す。

「戦争をしないで済むわけではないのでしょうか。お父様の表情を見ればそれぐらいわかります」

「ハッハッハ。そうか、お前に隠し事は出来そうにないな」

ローラントは笑いながら娘の頭を撫でた。

イリスの母親は彼女を生んだ後、すぐにこの世を去った。残されたローラントはその後世継ぎの男子を得る為と周りから後妻を娶るよう言われるが、それを聞き入れなかった。彼は帝国との婚約破棄後にイリスを後継者に育てようと決心する。王国の歴史の中で女王が統治した時代が無かったわけではないが、男子が継ぐのが当たり前の慣習となっており、あくまで女性による統治は臨時的なものでしかなかった。それ故にローラントはもちろんの事、イリスに対する重圧も相当なものであった。もし、娘に国家の統治者として才覚がなければ、男子の養子を取る事も考えていたローラントであったが、イリスは多くの点で父親の期待以上に応えてみせた。父親や重臣達からよく学び、時には内政における問題を幼い彼女の提案が解決した事すらあった。

だが、彼女には大きな問題があった。優しすぎるのだ。民を想い、人々の為に何かをなそうとする事は大切な事であるが、それには限度というものがある。

彼女の母親も心優しい女性で、戦から戻ったローラントの無事を喜ぶ事はあっても彼の上げた戦果を喜ぶような事はしなかった。そしてその母親と過ごす事のできなかったイリスも血のなせる業か、母と同じように父親の無事を喜ぶ事はあっても戦果を喜ぶような事は決してなかった。

それは一女性として、いや一人間としては素晴らしい事であろうが、一国の君主としてはそれは優しさではなく、覚悟する事ができない臆病さでしかなかった。

「実はな、帝国から和平を申し込む書状が届いた」

その言葉にイリスの表情は一瞬、驚きと和平が可能だという事への喜びの入り混じった明るいものとなるが、父親の顔が険しいものである事を見るとすぐにまた元のような不安そうな表情に戻った。

「迷っているんですね」

「ああ」

ローラント自身も戦争などできればしたくない。しかし、避けれる戦を避け続ける事しなければ、やがてそれは後のより大きな災いとなる可能性があるのだ。

「お前はどうすべきだと思う」

ローラントは穏やかな口調で娘に尋ねた。

「……わかりません。ただ、戦争になればたくさんの方が命を落とす事になるのは間違いありません」

ローラントの予想通りの答えだった。

イリスの性格上、どんな場合でも人に戦を勧めるような事は言わないのだとわかりきっていた。そして彼女がローラントの質問にわからないと答える時、多くの場合それはそうすべきだと頭では判断していながらも心がそれに抗おうとしている状態にある時だった。

それは『逃げ』に他ならなかった。

君主として善政を敷く為にはその良心を蝕む痛みから逃げてはならない。苦痛の伴う判断を時には下せねばならぬだ。だが、それはまだ年が十二になったばかりの幼い少女には酷すぎるのかもしれない。

「そうだな……」

ローラントは溜め息混じりに頷いた。

「不安なのですね……。ごめんなさい、何のお力にもなれなくて」

ローラントは悲痛な表情で謝る娘を見て、そんな事はないと言お

うとして、はつとする。

何故賛成するはずもないとわかっていながらあのような事を尋ねたのか。

彼女を試す為か、いやそんな為ではない。娘に止めて欲しかったのだ、この戦争をはじめる事を。彼女に言っただけ欲しかったのだ、戦争など止めるべきだと。

戦争などしたくない。しかし、その判断が間違いだったならばという恐れ……。

自分も逃げようとしていた。恐怖を、苦痛を、後悔を生む事になるかもしれない決断から。

そしてそれをこの幼い少女に押し付けようとしていたのではないか。

そうであるとするならば、ああ、なんと愚かな王か。なんと愚かな父親であろうか。

「すまない、私は不甲斐無い人間だよ」

自然とローラントは謝罪の言葉を口にした。

イリスは父親の心中を察したのか、ただ黙って首を振る。

「イリス。お前が私の跡を継いだ時、良い時代だと呼べるようなものにしておきたいものだ……」

翌朝ローラントは再び会議室に人を集めると、早々に出兵に関する判断を告げた。

「出陣は中止だ。帝国の和平の申し出をうける」

王の言葉にその場にいた多くの者は不満を露にして抗議する。しかし、ローラントの決意は変わらない。

「お前達の考えている事はよくわかる。だが、私の判断が変わる事はない」

ローラントは毅然とした態度で命令するが、それでも食い下がる者もいた。

「陛下！！ 今帝国を討たねば、必ず後の災いとなるのですぞ」

「必ずとは言えぬだろう」

「いえ、必ずです。オイゲン將軍が存命の間は大丈夫かもしれませんが。しかし、彼も不死身の人間ではない。彼の死後、もしくはグリードという新しい皇帝の死後。帝国は再びロマリアに攻め込んでくるでしょう。一年二年ではなく百年二百年で判断すべきです。今の内に帝国という憂いを断っておくのです」

「百年二百年で判断して、後の災いになる恐れがあるからといって戦争を繰り返せば、大陸中の国々すべてを滅ぼさなければいけなくなるぞ」

「帝国と他の国とは事情が違います」

「過去に囚われ争いを続けても良い結果は生まれはしない」

「だからこそ帝国を討ち、ここで終わらすのです。忌わしきロマリアの負の歴史を」

男が熱弁し、王を説得しようとするが、ローラントは首を横に振る。

「帝国を破ってもそれで終わりではないのだ。もし帝国との戦いに勝てたとして。それからどうするつもりなのだ」

「どうと申されましても……、帝国無き後、その広大な領土を得れば、ロマリアは安泰」

戸惑いながら話す男にローラントは厳しい口調になる。

「そうはならんな。帝国の民が我々の統治を良しするものばかりであるはずがない。あの広大な領土を統治するのは一筋縄ではいくまい。力で押さえ込もうとするには広すぎる。無理をすれば多くの反乱を生み、それは結果としてロマリアを疲弊させるぞ」

「無理にすべてを押さえ込む必要もありますまい。手に負えぬ地域には独立を認め、小国としての存続させれば軍事的脅威となる事は抑えられるはず」

「小国が乱立すれば、新たな火種となる」

「必要となれば我々が介入すれば」

「介入しようとするのは我々だけとは限るまい。下手に手をだせば、

結局は新たな大きな戦争につながるぞ」

「それは……」

「帝国の周辺国の多くがロマリアに対して友好的なのは、帝国という共通の脅威があるからなのだ。もし、帝国という脅威が無くなれば、力の均衡は崩れ、新たな戦争を生む。無理をして帝国と争う必要もあるまい。勝てるチャンスであつても、勝てる保証はないのだ。平和に解決できるならそうすべきであろう」

ローラントの言葉に男もついに折れ王の意向に従う意志を見せる。「わかりました。陛下の決意は固いんですね。私がこれ以上言つても仕方ありますまい」

「では、すぐに帝国に使者を送るのだ」

ローラントの命でその日のうちに帝国へ使者が送り出され、使者には王直筆の書状がもたされていた。

末路と処遇

ロマリアとの和平にこぎ付けたオートリア帝国は反乱時にバステイアン側についた者達への処分を開始する。

処分がこれまで保留となっていた主な理由は言うまでも無く、和平失敗時のロマリアの帝国への侵攻を警戒した為である。貴族の寄せ集めの兵達とは違い、各師団兵の中には自身が所属する師団長を慕う者も少なく無いわけで、上司の処分により必要となる敗残兵の士気を著しく下げるのは危険であつたからである。

ただ、すべての処分が保留だつたわけではなかった。戦場から逃げ出した師団長がいたのだ。

第二十師団長ガエルである。

ガエルは敗戦時の混乱に乗じて戦場を離脱すると家族をつれて帝都から脱出し姿を消した。このような行いは当然許されるようなものではなく、すぐに処分が下る。残った財産や役職など没収となつたのは当然の事であるが、さらには近しい親戚の者すべてが捕らえられ、財産を没収された後処刑となつた。

このような厳しい処分であつてもそれを責める者はほとんどいない。戦場から勝手に逃走する行為は一兵士でも通常処刑となる。師団長が戦場から逃亡するなど信じがたいほどの恥すべき行為であり、重罪なのだ。

保留されていた処分を進めるにあたつてグリードはオイゲンとジェイドの二人を呼び出し助言を求めた。

オイゲン將軍だけでなく、他の有能な師団長達を押し退けてジェイドにも助言を求めた事は、グリードがいかにジェイドの才能や力に確信めいた期待をもっているかという事を表していた。それは、後に二將軍体制と呼ばれるものへの始まりでもあつた。

処分に関してオイゲンとジェイドの二人が一致していた点はこの機会に貴族達の力を削ぐという点である。

かつては帝国の躍進に貢献した貴族達であつたが長い年月が過ぎ、今ではその多くが墮落し帝国の国力を蝕む害虫と成り下がっていた。そして今がその害虫を駆除するいい機会だったのだ。

バステイアンの為に戦場に兵を送った、あるいは自ら兵を率いて駆けつけた貴族達には厳しい処分がまつていた。彼らは皇帝の為に兵を出す事の正当性を訴えたが聞き入れられる事はなく、ほぼ全ての財産が没収となつた上に貴族としての地位も失う事となつた。諸事情により戦場に兵を送れなかつた一部の貴族は結果として命拾いする事となつたが、彼らも新皇帝への忠誠の証として財産の一部をほぼ強制的な形で徴収された。

これらの出来事は新皇帝と貴族達との間に亀裂を生じさせたが、多くの大貴族達が没落し力を失つた為に、残つた貴族達では帝国にとつての脅威にはなりえなかつた。

貴族達が力を失う中で例外的に扱われたのはグリード達の反乱に協力したアレクサンダル伯爵の一族である。彼らは皇帝から財産の徴収を免除されただけでなく、数年間の税の免除など優遇される事となり、帝国内における唯一の大貴族と呼べる存在となつたのだつた。

そして貴族の処分とは異なり、捕らえられた師団長達についてはオイゲンとジェイドの主張は大きく違つていた。

「これから先、彼らの力も必要となるでしょう。処分なしとするわけにもいきませんが処刑としてしまうには惜しい人材でもあります。降格や給付金の減額などで対処すべきかと」

そう言つてオイゲンは捕らえられてる師団長達に対して寛大な処置をとるようグリードに助言する。

腐つても彼らは帝国軍の師団長である。その地位は最低限の実力を保証しているわけで、半壊とも呼べる状態の帝国軍を早急に建て直すには必要になるであろう人材であつた。

そのようなオイゲンの主張にジェイドは冷笑する。

「フフツ、將軍も馬鹿げた事をおっしゃる。従うべき相手を見抜けぬ者など無能でしかありません。陛下、彼らなどいなくとも軍の建て直しは私に任せて頂ければ問題ありません。厳罰をもって、陛下に背いた者達がどうなるか知らしめるべきです」

「彼らが先帝の為に戦ったのはあくまで皇帝に忠義を尽くそうとしたまでの事。その忠義心は今度は現皇帝である陛下に向けられるものとなるでしょう」

「皇帝の為に戦った貴族共は厳しく処分し、師団長には寛大な対応をとる。將軍ともあるうお方が随分と筋が通らない事を申される」

「貴族達は皇帝の為になくあくまでも私欲の為。帝国を蝕む元凶である彼らと一緒にはいできません」

二人の話をむずかしい顔をして聞いていたグリードが口を開く。

「筋が通るか通らないかなどどうでもよいのだ。どちらの案がこれから先の為になるのか、だ。オイゲン、ジェイド、何年だ。お前達に任せたとして、何年で軍を満足できるものにできる」

その問い掛けにオイゲンが即座に答える。

「兵の育成は何年かけても足らぬものですが……。三年、いえ二年、彼らの力があれば二年で帝国軍として形あるものはできましょう」

オイゲンの言葉を聞き終わるとグリードはジェイドの方へと視線を向ける。

「ジェイド、お前ならどうだ」

問われたジェイドは、余裕ある笑みを浮かべ答える。

「一年。私に任せていただければ一年で軍を建て直してみせましょう」

それを聞いたオイゲンは呆れながら言った。

「馬鹿げた事を……」

槍や剣を持って白兵戦を担当する歩兵を訓練するだけなら、一年という時間で十分できるかもしれない。しかし、今要求されてるのは軍全体の建て直しであり、弓兵や騎兵、魔術師、部隊指揮官などの訓練をするだけでも多くの時間を必要とするのだ。特に魔術師は

魔法の訓練からはじめるのなら十年単位の年月を必要としてもおかしくないもので、即戦力として帝国内や隣国の魔術師達を勧誘するとしても十分な数を集めるには莫大な資金と手間がかかり、到底一年で出来る事とは思えないものであった。

「出来もせぬ事を言っても自分の為にならんぞ」

グリードがジェイドに念を押すように言う。

「出来るからこそ、申しておるのです。私は、才ある皇帝に嘘をつくほど愚かな人間ではありません」

ジェイドは表情一つ変える事なく言い切った。

「……だそうだが？」

グリードが再びオイゲンの方を向く。

「できるものとは思えませんが……」

オイゲンはジェイドの方へ射るような視線を向けると彼の自信の根拠を問いただし始めた。

「ジェイド、お前の一年でできるという根拠、具体的な策を聞きたい。まさか何の策も無く言ってる訳ではあるまい」

「育成には時間がかかる。ならば、最初から力ある者達を集め、数を補えば良い。訓練は必要最低限の期間で十分でしょう」

「そんな者達をすぐ見つけられるというのか。一人、二人探し出しただけでは意味がないぞ」

「探し出すだけなら時間がかかりすぎるでしょう。ですから、向こうから来ていただければ良いのです」

「まさか……」

オイゲンの表情が一瞬変化する。

「向こうから来る？」

グリードにはジェイドの考えがわからず怪訝な顔をしている。

「陛下、闘技大会を復活させれば良いのです。もちろん生死を賭した真の闘技大会を」

「ほう、闘技大会か」

グリードが邪悪な笑みを浮かべる。

闘技大会。様々な方法で力と技を競う場。格闘術や剣技、魔術といったもの同士を競わせるよう制限をする場合があり、その中でも、一対一の決闘や複数人对複数人のチーム戦などの種類がある。また単純に人間同士の戦いだけでなく、人を大型の動物や魔物といったものと戦わせる場合もある。これは強者を決める大会というよりも貴族や民衆の為の娯楽的な要素が強いもので、希望者ではなく囚人や奴隷といった者達に強制的に参加させる事が多い。

これら様々な闘技大会は武術や魔術の向上、民衆の娯楽として機能していた面もあったが、モラルの低下や賭け闘技が過熱しすぎ破産する者ができたり、民衆が独自に大会を開き揉め事や治安の悪化に繋がった。このような問題は昔からあったものだが、グリードの父であるオリバー帝の時代にはかなり深刻な問題となっており、オリバーは闘技大会を行う事を全面的に禁止する事にし厳しく取り締まった。

それから今にいたるまで正式な帝国の闘技大会が行われる事はなかったのだが、イエンス帝の死後、バステイアン帝が即位すると、まもなくして取り締まりが緩くなり公ではないにしろ、貴族など一部の有力者達は秘密裏に闘技大会を開くようになっていた。

「帝国全土で闘技大会を開催するのです。莫大な賞金に釣られて帝国中から優秀な兵となる人物が集まって来るでしょう。そして優勝者を勧誘するのではなく、一回戦を勝ち抜いた段階で有力者の軍への勧誘を行っていくのです」

「一回戦だけでか？」

「そうです陛下。力ある者の戦い方、動きは一度見ればわかります。戦わせ続け、有力者同士がぶつかり怪我でもされたら意味がありません」

「しかし、軍へ誘った所でその者が応じるとは限らないだろう。軍へ入る気があるならとくに志願しているだろうに」

「応じさせてみせますよ。多少、手荒い方法を使っても」

ジェイドの話をオイゲンは黙って聞いている。

「オイゲン、お前はこの話どう思う。上手くいくと思うか？」

「上手くいく……とは言い切れませんが、失敗するとも限らないでしょう。……ですが陛下」

オイゲンの口調が少し強いものとなる。

「上手くいくかもわからないこのような方法に資金をつぎ込むよりも、時間が少し多くかかるものであっても確実な方法で軍を建て直すべきです。このような方法はリスクが高すぎるかと」

「リスクが高すぎるか」

迷いを見せるグリードに今度はジェイドが少し強い口調で主張しはじめる。

「陛下、一年です。一年で軍を建て直す必要があるのです。それどころか大陸平定の偉業を為すためには、一年という時間をかける事すら惜しいものなのです。我々はエルフ達と違い、あと百年と生きる事すらできぬでしょう。陛下がこの広大な大陸平定する為には一瞬すら惜しむべきなのです」

大陸平定という馬鹿げていると思えるようなこの男の主張を、オイゲンには笑う事ができるはずもなかった。それはこの男にそれが出来るかどうかの問題では無く、ジェイドという男が本気で皇帝となったグリードに向かって大陸平定を訴え、そしてグリード自身がその事に乗り気になっているという事が問題だったからである。そして、ジェイドがこの場にいる事がグリードにその気が少しでもある事を証明していた。

「まあいいだろう、おもしろそうだ。闘技大会の件は、ジェイド、お前の好きにしろ。……だが、アンドレアス達の件はオイゲンの話にも一理ある。お前の仕事が上手くいきそうかどうか、そうだな半年ほど様子を見ようじゃないか」

「なりません陛下。今、陛下に必要なのは一瞬の時すら惜しみ、そしてリスクを恐れない判断をする事なのです。もし、アンドレアス達に猶予を与える判断を下せば、この先何度も訪れる選択を誤る事となるでしょう」

食い下がろうとするジェイドをオイゲンが非難する。

「無茶を言うな、ジェイド。これは遊びではないのだぞ。人は大きな財産、それを簡単に捨てるような真似をして何の意味がある。お前が上手くやれば問題ない事であろう」

「大陸平定の大義を為す者に必要なのは、石橋を叩いて渡る臆病さではなく、濁流の中を泳ぐ強い意志なのです。それを今ここで示さなければならぬ。陛下は試されているのです」

試される、という言葉に反応したのかグリードの表情が少し機嫌を損ねたようなものとなる。

「物は言いようだ。それで、いったい誰が俺を試すというのだ。神か、それともお前がか？」

「時代です」

ジェイドは言い切る。

「歴史です。その流れが陛下が真の皇帝たり得る人物かどうか、まさに今試しているのです」

その言葉を聞いて、グリードは大声をあげて笑い始めた。

グリードにとって可笑しくて仕方がないのは、ジェイドの主張それ自体ではない。このような主張を、言葉を吐き出させる彼の持つモノが可笑しくて仕方がないのだ。

この男は狂っているのだと、グリードは実感する。

彼の言葉の多くは見え透いた嘘で塗り固められている。そして、この男の抑えきれない狂気、強欲と呼ぶべきモノがその嘘を引き裂くように膨張しているのが見えるのだ。

恐らく、この男はこの見え透いた嘘がばれないとは考えてはいないだろう、隠す気すら微塵にもないのだ。

この嘘は男の美意識が生み出した装飾なのかもしれないとグリードは思った。

男の狂気と欲の本質を判断する事は今のグリードにはできない。だが、それらが少なくとも今の自分に向けられた敵意では無い事は確かであり、放たれるモノは自身の興味を強く惹くのであった。

そして、この男の狂気はグリードにとって心地悪いものではなかった。

男の持つ不思議な魅力が自分を楽しませてくれそうなものである、グリードが男を重宝するのにそれ以上の理由はいらなかった。

「いいだろう。皇帝即位の祝典に合わせてアンドレアス達を処刑するでしょう。俺に逆らう者達がどうなるか示してやるうじやないか」その判断にオイゲンから異議があがる。

「陛下、どうか慎重に物事をお考え下さい。陛下の判断に多くの臣民の、そして帝国の命運が懸かっておるのです」

オイゲンの説得をグリードは一蹴する。

「それがどうしたというのだ。オイゲンよ、この際はつきりさせておこう。俺は父上とは違う。兄上達とも違う」

「陛下……」

「『臣民は帝国の為に、帝国は皇帝の為に、皇帝は皇帝の為に』だ。オイゲン、もうお前が世話していた頃のような小僧ではないのだ。

俺は皇帝だ。俺は、俺が望むように進むぞ」

その宣言は決意であり決別である。

彼は変わった事を示させねばならない。退屈で情性の日々を過ごすだけの男は死に、皇帝となったのだ。

それはグリード自身にとって必要なものであった。

こうして帝国の退廃的な時代は終わりを告げ、血と狂気の時代が幕を開ける。

衆愚

人間が愚かな生き物だと言えるのならば、民衆もまた愚かな存在と呼べるであろう。彼らには、目の前にいる人物が名君であるかどうかの判断などできやしない。それどころか、目の前にあるモノが人であるかどうかの判断すらできない。だから私は言っただけだ。あれは『豚』だと。

著『革命の日々』より

反帝国活動家 ヨシツブ：

ロマリアとの問題に解決の目処がつき、今後の大方の方針も決まった事を受け、内外に新皇帝の力を誇示する目的も含めた皇帝即位の正式な祝典が、帝都オートリアで盛大に行われた。

新たに皇帝となる人物を一目見ようと大勢の人が集まり、彼らの多くが歓声を上げてその青年を迎えた。

青年の風貌は決して皇帝として十分な風格をそなえていると言えるものではなかったが、それでも人々は彼の皇帝即位を歓迎した。今の彼らにとってグリードは血を分けた兄である人物を殺して皇帝となった悪党ではなく、バステイアンの圧政から自分達を救ってくれた英雄として目に映っていたのだ。

そして、これから先自分達が『普通』の暮らしをする事ができるのだという喜びと期待が彼らの表情を笑顔にさせた。

グリードが太く短い腕をあげ手を振ると、人々から大きな歓声がかかる。人々のその反応にグリードの顔からは笑みがこぼれた。

だがそれは何も微笑ましく暖かい光景であるわけではなかった。グリードは滑稽すぎて笑っていたのだ、これから先何が起こるかも知らず笑顔で自分に向かって手を振る人々の姿が。

自身の希望とはほど遠い現実が彼らの前に現れた時、今度はどんな目で自分を見るのだろうか、その事を想像すると、歪んだ快樂が

グリードの中で湧き上がった。

見え透いた嘘の好意、尊敬、畏怖の視線。そんなものよりはるかに、偽りのない、隠しようのない恐怖、屈辱、怒り、後悔、絶望。愚かな者達が見せるその表情の方が彼にとって心地よいものなのだ。やはり皇帝とは良いものだ。グリードは痛感する。目の前にいる何千者人間を破滅させる事すら簡単にできるその力の素晴らしさを。それに比べれば皇帝の息子、弟そんな存在はただの赤子同然だった。群集を見ながら彼は再び確信する。変化を。空虚な日々が終わりを告げた事を。

祝典も終わりにさしかかった時、手錠をされ目と口を塞がれた男達が連れてこられた。

男達が一列に並ばされた後、衛兵の一人が群集に向かって大声で告げた。

「この者達は、暴君バステイアンの圧政に協力し、皇帝陛下に敵対した者達である」

群集からどよめきが起こり、そのうち何処からともなく声があがった。

「殺せ、そんな奴等殺してしまえ!!」

「そうだ!! そうだ!!」

どよめきの中、男達は磔台に吊るされ衛兵達に槍を突きつけられる。

すると、どよめきが収まり、群集は彼らの死の瞬間を目に焼き付けようと見守った。

僅かに感じる者もいたであろうし、永遠にも感じた者もいただろう。

その静かな時間が流れた後、一人の青年が声を発した。

「ヤレ」

グリードが合図を出すと磔台に吊るされていた男達に向かって槍が突き立てられた。

その瞬間、その様子を見守っていた人々から歓喜の声が上がる。

「ざまあみやがれ！！」

「天罰だ！！」

既に絶命してゐるであろう男達に向かって次々と罵声が浴びせられていく。

「奴等にはこれでも甘いぐらいだ！！」

「これであの悪夢のような暮らしもは終わりなんや！！」

歓声と怒号が帝都を覆いつくさんとばかりに響き渡り、そしてそれは帝国中にすら伝わるような声となった。

その声を耳にしながらオイゲンは感じていた。

それが忠義を貫き死んでいった者達とそれを哀れに思う存在の『悲鳴』だったのだと。

グリード達は軍の再建に躍起になり、ありとあらゆる手段を講じ、祝典が催されてから二月も過ぎれば人々は現実を知る事となった。

バステイアンが課した異常なまでに重い税は軽減される事となったが、それでもバステイアン帝より前の時代と比べれば負担は大きくなままであった。そして、農村部では若い男子を強制的に徴兵される事が住民にとって深刻な問題となり始めていた。免除規定はあるのだが、徴兵の免除を受けれるような資金を彼らが用意できるはずもなく、多くの若者が帝国兵として徴集されていく事となる。示された徴兵期間は二年という比較的短いものであったが、度重なる戦争で疲弊しきっている彼らにとってはあまりにも重い負担であった。

そして、グリード達は闘技大会をすぐに各地で開催し始める。これは人材の発見以外にも臣民の不満を帝国から少しでも逸らそうという意図、さらには掛け金を徴収する事によって軍資金を調達する意味をもっていた。久しぶりに正式に開催される大会に多くの人間が夢中になり、目的は達成されていたが、当然治安の悪化など問

題も起きた。だが、グリード達はそんな事を気にする事もなく闘技大会の開催を続けた。

これらはすべて軍事力の強化というものを目指して行われたものであったが、グリード達はこれら以外にも禁じ手とも呼べる方法で兵集めを強行する。

それは、魔術師達の強制徴集だった。

彼ら魔術（魔法）の才能を持つ人間は限られており、その才能を開花させ十分に魔術を使いこなせるようになるには多くの歳月を必要とする。もちろん彼らの中にも例外はいた。僅かな期間で力をつける者もいたが、そのような者は後に大魔術師と呼ばれるような者達であり、非常に希少な存在である。このように魔術師達は特別な存在であり、多くの国々が彼らの力を欲していた。

帝国も例外ではなく、他の兵達とは比べ物にはならない高額な報酬をだし彼らを軍に加えていた。それだけでは無い、軍に直接参加していない魔術師達にも公認の魔術師の集まり『魔術ギルド』に資金を提供する事で、彼らの研究や育成を支援した。帝国側は支援の見返りに研究の成果の一部を受け取り、非常時には兵員として彼らの力を借りる事もあった。

しかし、これらはあくまで帝国の要請にギルド側が応えるという形であって、強制力を持つものではなかった。それは強制力を持たせ、戦時の度に動員される事を懸念した者達が国外に脱し異国に行けば、自国の脅威となる事もありえたからだ。そのため大国であればあるほど潤沢資金をつぎ込み彼らを囲おうと必死になっていた。

帝国には非公認、つまり支援を受けていない魔術ギルドも数多くある。彼らは様々な理由で支援を受けずにいるが、情報や研究に必要な物品を入手する事の容易さの利がある為に帝国内で活動していた。帝国側も一部の禁忌の魔術を研究する非合法集団以外は寛容に扱っていた。

しかし、それらの状況は一変する。

皇帝の命の下、公認、非公認問わずギルドの魔術師達に軍への協

力を強制したのだった。

条件に多額の報酬と二年未満の短期間というものがついていたが、当然戦時での動員も可能とするものであった為に、ギルド側は猛反発した。

それをグリード達は力で抑えこむ。研究資料や家族、あるいは未熟な弟子達を人質にし、抵抗を無理に封じ、魔術師ギルドとの戦闘を避けると同時に徴集に応じさせ人材の確保に成功するが、同時に多くの魔術師達が他国へ流出し始めた。

これらの無茶な策の数々は帝国内に軋みを生み、暴発寸前までもっていく。その限界がまさに一年という期間だった。その一年という期間の先にあった目標は当然ロマリア王国である。

だが、ロマリアを打ち破るには単純な兵員の増強だけでは足りない。と帝国は考え、一人の男に密命を与え北東に隣接する国、スタンチオ公国へと送り込んだ。

スタンチオ公国

スタンチオ公国。百五十年ほど前、帝国貴族であったスタンチオ公爵によつて建国された貿易国家である。この国が貿易国家として発展した要因は帝国の北東に位置し海に面していた事と、大陸北西部から中央部へと繋がる一つの海道を擁していた事が大きかった。大陸西部と中央部はアルベス大山脈とエルフ達の聖地でもあるサンタリオ大森林によつて隔てられており、この海道が貴重な陸路での交易ルートとなつていたからである。大陸西部からの輸出品の多くがこの国に集まり、逆に大陸中央部や東部の様々な物品もこの国へと集まつていたのだ。

帝国からの独立は比較的穏便なものであつた為、独立後しばらくの間は公国と帝国は蜜月の関係にあつたが、やがてその関係は冷めたものになつていき、バステイアンの時代には決定的に悪化してしまふ。そして、オートリア帝国とロマリア王国との戦争が始まると公国側は帝国への武器など様々な物の輸出を制限する事を決定する。その決定は今も継続されており、軍拡を進める帝国側にとって問題であつた。そこで、帝国は公国からの武器の密輸を計画し、その任務を何人かの男達に命じた。

その内の一人がキュウジであつた。彼はかつて商人としてスタンチオ公国で暮らしていた事があり、いくつか有力なパイプを持つていたからである。

キュウジはオイゲンの弟子であり、側近でもあるマルセルから命を受けるとすぐに、公国最大の貿易都市スタンチオノードへと向かった。

そして、この男には武器の確保以外にも別に大きな任務が与えられていたのである。

キュウジが通りを歩いていると、二人の男達が立ち話をしているのが見えた。

二人はかなり大声で話してるらしく、少し近づくと話の内容がまる聞こえであった。

「聞いたか帝国の奴等、また兵を集めてるらしいぞ」

「ああ、武器の方もかなり買い漁ってるって噂だ」

「また、戦争始めるつもりなのかね。やっぱり相手はロマリアか？」

「どうだろうな、この間停戦したばかりだろ。違うところに吹っ掛けるんじゃないか」

「嫌だねえ。せっかく皇帝が変わって多少はまともな国になるかと思ったら、これだもんなあ」

「本当に今度こそ終わりがもな。かなりガタがきてるみたいだし」

「そりゃあ、あれだけ戦争続きじゃな。いくらでかい国だからって持たないだろ」

男達の話聞いて、キュウジは失笑してしまった。

まあ、やれるだけの事はやってみるわ。

そう心の中で呟き、歩みを早め港の方へと向かう。

潮の香りがつよくなってきた所でキュウジはそのまま港の方へと出る事をせず、陽の当たりの悪い裏路地の方へと向きを変え進み始めた。薄暗い石畳の道を行くと古汚い一軒の建物があり、その前には無愛想そうな男が一人、鋭利な刃物をちらつかせながら立っていた。

キュウジはその男を気にする様子もなく家の扉に手をかける。

そのまま古びた木製の扉を押し開けると、薄暗い室内に大小様々な武器、防具が陳列されているのがキュウジの視界に入ってきた。さらに暗い奥の方にはカウンターテーブルがあり、その上には昼間だというのに灯のついたランプが置かれていた。

「誰かと思えば、懐かしい顔じゃあないか」

テーブルの脇にある通路から男がでて来ると、キュウジの顔を確認するなり少し驚いた表情をした。男の風貌は痩せ気味で顔

の皺がひどく、中年というよりも初老に見えるものだった。頭は所々白髪でハゲかかっている。

「仕事を頼みに来た」

「ヘッヘッへ。旨い話だろうな」

男が笑うとボロボロになった歯が見えた。

この男の笑い方とその声には何度会っても嫌悪感を感じる。

「ああ、多少は危険を伴うがでかい仕事や」

「こんな商売をしていて危険のない仕事の方が珍しいよ、ケツケツケ」

「なら、引き受けてくれるな」

けらけらと笑っていた男は、突然笑うのを止めキュウジを睨むようにして見つめると、甲高い声から急にドスの利いた低い声へと変わる。

「危険な仕事が多いからこそ、仕事は選ばないといけない。そうだろう」

「危険な仕事ほど得られる報酬もでかい」

「まあ、話してみる」

「兵士に必要な装備が欲しい。用意できるだけ」

その言葉に男の表情が戻り、再び甲高い声を発する。

「ヘッヘッへ、いちおうどこに運びたいかも聞いておこう。まさか

お前が戦争始めようってわけじゃないよなあ」

「帝国に。オートリアに運び入りたい」

「クツクツク、噂は本当みたいだな。いやあ、結構、結構。帝国相手だろうが儲かる話なら大歓迎だ。しかし、お前がそれを頼みに来るって事は、今は帝国の下で働いてるってわけだ」

「俺がどこにしようが俺の勝手。自分には関係ない話や」

「ケツケツケ、それもそうだ。だが、少し羨ましくてねえ。さぞ、皇帝陛下のケツを舐めて稼ぐ金は良いものだろうね。クツクツク、冴えないの商売人の嫉妬だと思っただけ流してくれよ」

キュウジは無視をして話を進めようとする。

「受けんのか、受けへんのか」

「受けるさ。受けてやらないと困るんだろ？ お前が。昔の商売仲間として助けてやるうじゃないか」

「どれぐらい用意できる」

「期間にもよるが……。一週間もらえれば槍と剣がそれぞれ二千、防具は一式揃えて千五百つて所だ」

「それだけか」

「おいおい、無茶を言うなよ。堂々と運べる状況じゃないんだ。帝国側へ運ぼうとする物の取り締まりが最近厳しくなっている。いろいろと準備がいるんだ。お前もそれぐらいわかるだろ」

「臆病風に吹かれて、大金逃がすつもりなんか？ これだけのかい仕事は滅多にない」

「チツ、いいだろう。二週間で倍用意する。その代わり、五割増し、いや二倍だ。相場の二倍は払ってもらうぞ」

「金は惜しまんよ」

「クツク、皇帝陛下はたいそう民から慕われているんだろうな、景気のいい事だ」

「とりあえず前金や。残りは実際に武器を受け渡す時に貰ってくれ、準備させておく。一週間したら細かい日時を決めにもう一度来る」

そう言つてキュウジが金貨の入った小袋をテーブルの上にだし、立ち去ろうとすると男が呼び止めた。

「待て、そう言えばおもしろいものが手に入ったんだ。まあ、見ていけよ」

男は近くにあつた呼び鈴をとり鳴らす。しばらくすると、通路の奥から少女が一人でて来た。少女はこの陰鬱な室内とは不釣り合いに着飾られており、場所が違えば良家の娘にも見えていたであろう姿をしていた。

少女はキュウジの方に一礼すると、男の方へと近づいていく。

「旦那様、お呼びでしょうか」

「ああ、この間手に入ったアレを持ってきてくれ」

少女は黙って頷くと再び通路の奥へと消えていった。

「相変わらずか」

キュウジが呆れたようなに言う。男は悪びれた様子もなく答えた。
「クヒヒ、一ヶ月ほど前に買ったばかりさ。値ははったがな、物覚えがいい。久しぶりにいい買い物できたよ」

「仕事に使いたいだけなら若い男の方がええやろうけどな」

「オイオイ、そう睨むなって、俺が買わないでもそのまま餓死するか、他の奴が買ってくかなんだ。俺よりひどいのなんてザラにいる」
キュウジには睨みつけるつもりなど無かったが自然とそういう目つきになっていたらしい。

「……前によく見かけた子達の姿が見えんが」

「前にいた？ ……ああ、ナタリーとクレアか」

「売りにだしたんか」

「クツク、まさか。俺もそこまで腐っちゃねえよ。ナタリーならたぶん奥で休んでるよ」

「休んでる？」

「チツ、……俺とした事が失敗した。ガキ孕みやがった」

男が苛立った様子で吐き捨てるように言った。

「お前のか？」

「他に誰がいるってんだ」

この男が奴隷商から女を買い始めたのは何も最近の話ではない。今までそういう話は一度たりとも聞いた事が無かった。キュウジはつきりこの男は体質的に無理なもののだと、そう思っていた男からの言葉だったので、キュウジは多少驚いた。

「いや、そりゃあ」

「ケツケツケ、他の男ってか。そりゃあないよ。奴隷にそんな暇がないのはお前ならよくわかるんじゃないか？」

古い記憶が、一瞬キュウジの頭の中を過ぎる。

束縛され、監視された生活。

「……で、そのガキは？」

「生まれたらシメるつもりだったが。クソッ、あの女どうしても育つてゐるって聞きやしねえ」

どうやら押されているらしい。この男なら問答無用でシメるか、孕んだ女ごと捨てるもんだと思っていたので、男の予想外の反応によほど女の事を気に入っているのかとキュウジは感じた。

「お前が父親か。生まれてくるくるガキにとつてはとんだ不幸やな」

「俺にとつてもとんだ不幸だよ。赤ん坊なんて五月蠅いだけじゃねえか、まったく」

男が溜め息ついた丁度その時、さきほど少女が消えていた通路からかわりに、年頃の美しい女が小箱を抱えて現れた。

「旦那様、シエリーの代わりに私が持つて参りました」

「ああ、ご苦労」

小箱を男に渡すと女はすぐにまた奥の通路へと戻っていった。

「今のも新しく買ってきた女か」

キュウジの問いに男は箱を開けようとしていた手を止め、怪訝な顔をした。

「何を言ってる。さっきのはクレアだぞ、あいつは昔からいるだろ」

「あれがか」

最後にみた記憶の中のクレアという女は冴えない暗そうな少女であり、さっきの綺麗な女とは結び付かずキュウジは戸惑った。

「ケケケ、俺があ年代の女をわざわざ買ってくるわけないだろ。

あれぐらいの年でいい女だとだいたい手つけられてるし、無駄に高いからな。それなら将来性あるのを買ってくる方が安くていい。何より長く楽しめる。クッククク」

「ガキが好みの女になるかなんてわからんやろ」

「俺にはわかるさ」

男はニヤリと笑い自信のある様子で言いきった。

「お前にはそっちの仕事の方が向いてるんちゃうか」

「趣味を仕事にしちゃだめだ。息抜きじゃなくなっちゃう」

「下種な趣味しとるわ」

「クツクツク、そういうなよ。下種な仕事をしている者同士だろ」
そう言いながらは男は何処からか小さな鍵を取り出して小箱を開けた。

「こいつも滅多にお目にかかれなとびっきりの美女だ」

キュウジの前に開かれた小箱が置かれる。

中には短剣が一本入っていた。

「こいつは……」

キュウジは短剣を手に取り、まじまじと見つめた。

握りや柄頭の部分には、小さい宝石なようなものが散りばめられて、細かな装飾が施されておりその部分だけでも注目に値すべきものであったが、もっとも特徴的だったのは赤く炎のように輝く刃の部分であった。

「オリハルコンか」

オリハルコン

宗教家は樂園つてのは、天界にあると言い張るが、俺に言わせればそれは大きな間違いだね。どこにあるかって？　ここさ、この地面の下だよ

大

鍛冶屋　リオネル

かつてこの大陸の地下深くにオリカルクムと呼ばれる巨大な国家を築き上げていた者達がいた。彼らはドワーフと呼ばれる種族で人に近い容姿をしており、背丈は人間の子供ほどしかない。だが、筋肉は人間よりもはるかに発達しており、一般の成人した人間では子供のドワーフの力比べの相手にもならないほどである。そして、文物的なものなのか、あるいは本能によるものなのかはわからないが、鉱物や金属の採掘、加工を非常に好む習性があった。

オリカルクムは歴史上ドワーフ達が築いた唯一の国家とされる。

そこでは、様々な鉱石が産出し、彼らはそれを製錬し多くの有用な金属を作りだした。

その中でも『オリハルコン』と『ミスリル』は人間には決して作れず、加工すらできない金属として重宝され、ドワーフはそれらの金属で作られた武具や装飾品をわずかに輸出する事で人間など他の種族から多くの食料を調達していたとされる。

そんなドワーフ達の国も彼らに伝わる『災厄の日』により滅亡し、多くの技術と知識が失われ、今ではオリカルクムが大陸の地下のどの辺りにあったのかすら正確に知る術はない。災厄の日を生き残ったドワーフ達も大陸中に散り、現在も国を持たず、人間社会に紛れて生活している者が多い。

今は無きオリカルクムの二つの特産品のうち『ミスリル』は別名、生きた鉱石、金属とも記録されており、長期間保存するのには特殊

な方法が必要であつたらしく今では『屍骸』となつてしまつた物がわずかに残っているだけである。

それに対して、『オリハルコン』は希少な物であるには違いなかつたが有用な形で現存している。鉾石自体は製錬する術が今だになく、嗜好品、歴史的資料、研究資料として一部の者達が所有するだけであるが、加工済みの武具や装飾品は非常な高値で現在も取引されている。

オリハルコンの特徴は鉾石を製錬する事により、炎のような光沢を持つ事と、特殊な条件下を除き決して錆びない事である。そしてドワーフ達の作りだしたオリハルコン製の武具は、人間のどんなに高名な鍛冶屋が作つたものであるうと鋼のそれでは太刀打ちできないほどの逸品だつた。

「装飾部分も欠けずに綺麗に残っている。これだけの代物、そうお目にかかれるものじゃない」

男が自慢げに言つた。

ドワーフ達は外見とは裏腹に手先が器用らしく、武器や防具に施す装飾は一流の職人達をも唸らすほど素晴らしいものであつた。その為、軍人や冒険者など単純な武具としての質を求める者だけでなく、芸術作品としてドワーフ製の武具を求める者もいるほどである。「確かに。で、これを俺に見せてどうするつもりや。ただの自慢か？」

「クックク、まさか。俺は物の良し悪しは理解できるが、だからと言ってこんなものをコレクションして見せびらかす趣味はない。」

……お前は今いろいろと金銭の融通を利かせられる立場なんだろう？

どうだ、こいつを買っていく気はないか」

「値段しだいやな」

「三百だ」

男が指を三本立てながら言つた。

「三百？ 銀か？」

「馬鹿いえ、金だ。金貨三百枚」

提示された値段にキュウジは呆れたようにため息をつく。

「他をあたれ。俺はコレクターでも暗殺業やってる人間でもない。いくらオリハルコン製でも短剣一本でそんなにだせるか」

「ちっ、仕方ねえ。気は進まないが、クレイグの旦那でもあたるとするか」

「クレイグ？」

「ケケ、なんだ知らないのか。この街で今、一番有名な商人だろうよ。丁度、お前の姿を見なくなった頃から、ここ数年で頭角を現してきたんだが、いろいろとやばい噂もつきまどってる男だ」

「だから気がすすまんのか」

「それもあるが、単純に金払いが悪い。まあ、貸しを作っておくのも悪くないがな」

「貸しを作っておきたいほどの大物なんか」

「ああ。少し前に、公国商工会の役員メンバーになったようだが、既に他の役員メンバーの大半が、新参のあの男に頭が上がらない状態って噂だ」

「へえ、そりゃあ……。で、それほどの男がこういう物を集めるのが趣味なわけ」

キュウジが短剣を眺めながら言った。

「武器、絵画、彫刻から皿までとにかく値打ちのあるものを集めている」

「なるほどな。よし、俺が買おうやないかこの短剣」

「なんだあ、急に。またこの辺で商売始めるつもりなのか？」

男は急に態度を変えたキュウジを訝しがった。

「いや、それでもそれだけの大物なら後々の為になるやろ」

「安易に近付くのはやめといった方がいいと思うがね」

「お前はあの男に短剣を売りにいくのは嫌なんやろ。だつたら素直に今、俺に売っとけ」

「クックク。お前がどうなろうと知らないが、厄介事だけはもちこんでくれるなよ」

「代金の金貨三百枚は武具の受け渡しの上に上乗せしといてくれ」

「金貨三百五十枚だ」

「さっき三百やと」

「情報料。短剣金貨三百、クレイグの旦那の情報が金貨五十枚」

「好きにしろ」

そう言つてキュウジが短剣の入った小箱を受け取り、この薄暗い建物から出ようとした時、通路の奥から女達の笑い声が聞こえた。

さっきの女達か？

薄暗い建物中で男に飼われている奴隷達の笑い声。自由のない生活、主人為に生かされるだけの道具。そんな境遇にありながらあの女達は笑っているのだ。

それはキュウジにとって何も不思議な事ではなかった。

奴隷の多くが自身の人間以下生活の中に希望を見出そうとする。

そして、人間以下の生活の中で笑顔すらみせる。慣れ、諦め、慰め。自分の生活が何の希望もないものだと思えぬ者達の抵抗。いや、逃走だ。

キュウジは奴隷に同情などしない。むしろ怒りに近い感情がわく時すらあった。それは彼らの多くが自分で望んだ結果の状態なのだと思うていたからである。

奴隷達には自由はない。しかし、それを手にしようとするチャンスは常にあるはずなのだ。

隙をみて逃げ出すもよし、武器をもち立ち向かうよし。だが、多くの者達がそうしない。何故なら上手くいくはずがないと考えているからである。事実、九割、いやそれ以上の確率で失敗に終わるだろう。失敗すれば、死すらも生ぬるいと感じる拷問がまっているかもしれない。

だが、奴隷は死人と変わらない。

死人が死んだところで何だというのか。

死人が拷問を受けたところで何だというのか。

醜いとすら思えるのだ。

偽りの生にしがみつこうとするその死人達の姿が。

「ああ、そうや」

キユウジは足を止め、振り返り男の方へ小さな物をなげつけた。

「何だこれ」

受け取った男が見てみると、それは古く薄汚れていて安物にしか見えない指輪だった。

「生まれてくる。不幸な腹の中のガキへ送る俺からのプレゼント」

「嫌がらせか？ こんなものより金貨の一枚でも多くくれた方が」

露骨に嫌そうな顔をして男が言った。

「お前にやない。ガキへのプレゼントや」

「プレゼントって言ったってまだ、男か女かもわからないのに指輪なんて……、まあいい、一応受け取っというてやるよ」

「じゃあ、一週間後に」

「ああ」

男はキユウジが去った後に指輪を眺めていると内側になにか彫られている事に気がついた。

「ん、なんだ」

それは小さく彫られた文字だった。

お前がいる場所は、お前が選んだ場所なのだ。

クレイグ

キュウジがクレイグと直接接触するのには多くの時間が必要となった。それはクレイグに対してキュウジの身分を保証するものが何も無かったからである。

公国内にはかつて商売をしていた頃のコネがいろいろとあるが、今のキュウジの身分を知られるわけにはいかないが為に、慎重に事をすすめる必要があったのだ。

キュウジはクレイグに近づく為に調査する中で、変装と言えるほどのものではなかったが普段の髪型や服装を変え、ほとんど度が入っていない眼鏡をかけるなどして雰囲気を変え、出来るだけ過去の足取りがばれにくいように行動した。そして、それが功を成し、流れの商人アカサとしてクレイグと会う約束を取り付ける事に成功する。だが、それは武具の取引を終えて二週間以上、命を受けて公国入りしてからは一カ月も経ってからであった。

動物の剥製に金の皿、偉大な学者達が著した書物が詰った棚に、宝石で装飾された鋼の盾。高価な品々が何の調和もなくゴミのように飾られる部屋にその男はいた。

クレイグの風貌は一見紳士の中年に見えるものであったが、キュウジは一目でこの男から隠しきれない下劣な人間の臭いを感じとった。

「私と直々に話したい事があるとか。いったいどのようなご用件で？」

クレイグは革張りの椅子に腰掛けながら、挨拶もなしにキュウジの顔を見据えながら尋ねた。

「御初にお目にかかります。私は流れの商人をやっているアカサという者で、この度、貴重な逸品を手に入れる事が出来たので、ぜひグレイグさんと思ひまして」

「ほう、それはそれは。いったいどのようなもので」

クレイグはわざとらしく言った。

クレイグほどの有力者が用件もわからず流れの商人に会うわけもない。当然キュウジは彼の部下である者に何を持ってきたかは伝えである。そして、それに興味があつたからこそクレイグはアカサという自称流れの商人と会っているのだ。

「これです」

キュウジはクレイグの目の前にある大きな机の上に小箱を置くとゆつくりと蓋を開けた。

「おお、これは素晴らしい」

中に収められていたオリハルコンの短剣を見てクレイグが感嘆の声を上げた。

「すこし、よろしいですか」

そう言うつとクレイグはキュウジが同意する前に早々とこの貴重な品を素手で手に取り眺め始めた。

「いやあ、これは素晴らしい。これほどの物は私でも中々手に入らない」

短剣を眺めるクレイグの顔から笑みがこぼれる。無理もないことだった。貴重なオリハルコン製の品々の中でも武具は特に珍しい物であつたのだ。

「気に入っていただけましたか？」

「ああ、もちろん。それでいくらで売っていただけるのかな」

「いえ、こちらの品はぜひクレイグさんにお持ちしたものです。金銭など必要ありません」

「ほう、それは……」

手にしていた短剣を箱の中に戻しながらクレイグは露骨に警戒した視線をキュウジに向けた。

「しかし、これだけの物をタダでというわけにもいかないと思いませんか？」

「これからクレイグさんとは懇意にしていただけだと……」

「懇意に、ですか」

「ええ」

「フフ」

クレイグが鼻で人を馬鹿にするように笑う。

「いや、失礼。しかし、流れの商人であるあなたが、これほどの品をタダで言うからにはそれなりの訳があるはずでは？」

クレイグは自分の権力を頼りにしようと近付いてきたであろう者に対する侮蔑と警戒の表情を浮かべながらキュウジに問うた。

「訳ですか。そうですね、私もそろそろ流れの商売などやめようかと思っと思っています」

クレイグの態度を意に介さずキュウジは答えた。

「ほう、それでこの国での商売を始めるのを助けてほしい、といったところですか」

「大まかに言えばそういう事にもなります」

「おや、違ったのですかな」

「違ってるわけではないのですが、その前に一仕事させていただきと思ひまして」

キュウジは本題に入ろうと切り出した。

虎狩り

命を受けて公国入りする一週間ほど前。

キュウジはマルセルに呼ばれ、彼の仕事場である一室を訪れていた。

「キュウジや」

キュウジが部屋のドアをノックすると、すぐに中から返事があった。

「どうぞ」

部屋に入ったキュウジの目に飛び込んできたのは、山のように書物が積まれ、びっしりと文字が書き込まれた紙が散乱している光景である。それらは本来、広い部屋であつたはずのこの一室を窮屈なものへと変貌させていた。

「見苦しい部屋で申し訳ない。片付けようとは思っているんですが、このところ忙しいもので。それにあまり他人に見せれるものではないので、人を使って片付けさせるというわけにもいきません」

机に背を向けた状態で椅子に座りながらマルセルは部屋に入ってきたキュウジに対して、早々にこの部屋の現状についての謝罪と言ひ訳を述べた。

「俺にはかまわんのか」

「今のあなたにとつては役立たないものしかありませんよ」

そう言いながらマルセルは辺りを見回すと、少し困つたような表情を浮かべた。

「どうしましょう。椅子が今私が使つてゐるものしかありませんね。使います?」

苦笑しながら椅子から立ち上がろうとするマルセルをキュウジは制止する。

「いや、このままでかまわんよ」

「そうですか。それは助かります」

改めて椅子に座りなおそうとするマルセルの表情からは、連日の激務によるものであるう疲れの色が見えた。

キュウジよりも若いその男は三弟として師であるオイゲンを支えるだけではない。旧体制派追放後における帝国の内政の多くは、オイゲンとその弟子マルセルに任せられ、マルセルは一人で様々な仕事を連日こなしていたのだ。不精な性格でもないマルセルが片付ける暇もなく、これほど部屋を散らかしてるのは日々の仕事の量の多さを裏付けるものであった。

「仕事の話を早いところ始めてくれ」

「ええ、二つほど頼みたい事があります。一つは北東にあるスタンチオ公国から兵士に必要な武器を密輸していただきたい。できるだけ多く頼みます。予算に関してはあなたに一任しますよ」

「二つ目は？」

二つあると言われて最初にでてくるのは楽な仕事の方だと決まっている、そして二つ目はわざわざマルセルがキュウジを部屋まで呼びつける必要があるほどの大きな仕事であるという事も。

「ロマリア王国とスタンチオ公国が同盟を結ぶよう、一仕事してもらえませんか」

奇天烈に思える依頼をマルセルは特に口調を変えるでもなく淡々とした口調で告げた。

「奇妙な話が耳から入ってきたような気がするが、俺の聞き間違いやないよな」

「ええ、ロマリアと公国、二つの国が同盟を結ぶように工作して欲しいのです」

「……、狙いを聞きたい」

わずかな沈黙の後、この策の真意をはかりかねるキュウジは素直にマルセルに説明を求めた。

「知らなくても仕事には差し支えないでしょう」

「無理に聞きたいとは言わん。やけど、目的を理解していた方が仕

事が上手くいくこともある」

「聡明なあなたなら、少し考えれば答えがそのうちわかりそうなものですが」

「まあ、話せんもんならしゃあない。一つ目の仕事は引き受けよう。二つ目はその少し考える時間を貰うとしよう」

マルセルが困惑の表情を浮かべる。

「珍しいですね。あなたがそこまで仕事の目的についてまで知りたがるとは」

「えらく珍妙な仕事に見えるものでね。多少興味が沸いた」

本当はキュウジには断る気などありはしない。もとより、自身の目的の為には困難な仕事であっても断る事など出来なかった。マルセルもその事を承知していたが、時の惜しさとキュウジへの仕事に関する信頼が話す事への躊躇を打ち消した。

「……いいでしょう。お話ししましょう。ですが、話すからには引き受けていただきますよ」

「ああ」

「陛下は再びロマリアとの戦争を始めるつもりです」

ロマリアとの戦争、それは明言こそされていなかった事であったが十分と予期できるものでありキュウジに驚きはない。

「常識的に考えりゃ、今から戦争を始めようって相手の同盟国を作るなんて愚策。それにロマリアは帝国の北西側、公国は北東側にある。こっちの戦力が分散するだけやろ」

それは普通の人間なら誰もが思うであろう疑問だった。

「まったく戦力を分散させない、というわけにはいきませんがある程度戦力の集中を行う事は出来ますよ。それにこの策の目的は単純なものなのです」

「単純？」

「虎穴に入らずんば虎子を得ず。ですが、親虎を狩るのにわざわざ危険を冒して虎穴に入る必要はない」

「そこで公国を餌にするわけか」

「その通りです。スタンチオ公国の危機、それを餌にしてロマリアという虎を狩るのです」

帝国軍は圧倒的な戦力を持ちながらこれまで何度もロマリアとの戦に敗れてきた。その最大の要因は戦場となるのがロマリア領内であったが為にロマリアの自国の自然、地形を有効に使った戦略、戦術によって部隊が大損害を受けていた事にあつた。それを防ぐ為に挟撃される事になるかもしれないリスクを負つてもロマリアを領内から引きずり出す必要があるとオイゲン達は判断したのだ。

「そんなに上手くいくかね」

「上手くいってもらわないと困りますので、上手くいかせてみせますよ。ですので、あなたも上手くやってください。同盟を成立させないと話が進みませんので」

マルセルは微笑みながらキュウジに難題を突きつけたのである。

「一仕事？」

眉間に皺を寄せながらクレイグはキュウジに次の言葉を促す。

「はい。この国とロマリア王国の同盟、その橋渡しを私にぜひやらせていただきたいのです」

場に一瞬の静寂が訪れる。

「何を言い出すのかと思えば……。そのような事を申されても悪い冗談にしか聞こえませんか」

素性の知れぬ男の馬鹿げた要求にクレイグも半ば呆れ気味に嘲笑した。

「真面目な話です。帝国はこの国の脅威であり、災いとなります。

すぐにでもロマリアと手を組み。脅威を排除する必要があるのです」

「あなたが帝国の存在をどう考えるかは勝手だが、私はただの商人だ。政治を自由に動かせるわけがない。私にそのような主張を説かれても困りますな」

「建前は抜きにしましょうクレイグさん。この国はすでに公爵家の

ものではなく商人達のものだ。実際に政治を動かしているのはスタンチオ公国商工会。そしてその役員メンバーの中でもあなたは一番の影響力を持っている。クレイグさん、間違いなくあなたはこの国の政治を動かせる人間ですよ」

クレイグは目の前にいる人物を計りかねていた。

よくいる媚びを売るだけの無能だと思つて接していたのだが、自分がこの国の有力者であると認知し、おそらく悪行の一端ぐらい耳にしているであろうに、物怖じする事なく踏み込んでくるこの男からは、自惚れた馬鹿者では済まされないものがあるように思えてきたのだ。

「いいでしょう。ですが、アカサ殿。あなたも建前は抜きにしてほしい。あなたは流れの商人だ。あなたの言う脅威があるこの国でわざわざ腰を据えて商売を始めずともいくらでも他に行けば良いのでは？」

キユウジに問いかけるクレイグの表情からは侮蔑の類いのものは消えていた。

「この国ほど、良い場所はそうはありません。この国を動かすのは貪欲な皇帝でもなければ無能な王でもなく、才能に溺れた傲慢な魔術師達でもない。自身の力によつて財を成す商人達だ。私は嫌なのです。ただある血筋に生まれただけの存在や大した苦勞もなく権力を手にする存在に振りまわされるなど。……この国では自身の力のある者が政治に関われ、無能な者はやがて政治の舞台から淘汰される。商人にとつてこの国は本当に素晴らしいものなのです。私は有能なあなたの力になりたい、この国に役立ちたい。そしてこの国の繁栄の恩恵を受けたいのです」

キユウジは落ち着きがありながらも力強い口調で自称商人アカサの本心を放った。その偽りの熱意が多少伝わったのか、クレイグは嘲笑とは違つた笑みを浮かべる。

「恩恵を受けたいですか。いやあ、結構、結構。力ある人間。有能な人間には確かにそれを受ける権利がある。だが、あなたがそのよ

うな人物であるとはかぎらない」

「有能でない人間にはこのようなモノを手に入れる事は出来ないでしょう」

キユウジが自身の持つてきた小箱の方を見ながら言った。

「なるほど……。しかし、それだけではあなたの言う事に納得して、では同盟の手伝いをしていただきましようとはいくらなんでもなりませんよ」

「私を信用できないと仰られるなら、それは非常に残念ですが仕方のない面もあります。何せ今日会ったばかりなのですから。ですが、これだけは言えます。ロマリアとの同盟なしにこの国の未来はないと」

「誤解してもらっては困るが、あなたの主張をまったく理解できない訳ではないのだ。帝国の危険性を認識しているからこそ、我々は輸出品に制限をかけた。だが、ロマリアとの同盟は、帝国への宣戦布告と同義と言っても過言ではないもの。商人は大きすぎるリスクを負う事は嫌うものだ」

クレイグの本心は別として、それが、公国内での現在の主流となっている考えである事は間違いなかった。この国の商人達は他国間で戦争が起こる事を常に望みながら、自国が戦場となる事は極端に恐れ嫌っていたのだ。

「最近、ついに帝国はロマリアへの航路での検閲まで始めたそうです」

「ほう、さすが、情報が早い」

「事実上、封鎖に近いものと聞いています。……クレイグさん、あなたは理解していらっしゃるはずですよ。帝国との関係は既に改善できるものではない。もし、ロマリアと帝国が争い、ロマリアが敗れるような事があれば、次に帝国の刃はこの国に向けられるでしょう。そうなつてからでは全てが手遅れなのです」

「わざわざこちらから帝国を刺激する必要もないと思いますが？」

もし、帝国がロマリアに再び戦争を仕掛けるようならば、その時に

決断しても遅くはないでしょう」

「遅いです」

キュウジは言い切った。

「帝国に対抗するには事前にロマリアとの関係を密にする必要があります。そして、それは戦後にも大きな意味を持つでしょう」

「戦後？」

「帝国亡き後、この国は帝国に代わり大国としてロマリアと共に二つの大国して大陸西部に君臨する事になります。その時に、いたずらに関係を緊張したものにさせない為にも早くからお互いの信頼を高める事は重要な事。ロマリアに対して事前に共闘の意思を示すか、便乗参戦するかでは大きく違ってくるのです。信頼もそして当然、得られる利益も」

「帝国亡き後ですか。これはまた大胆な予想をしておられる。たった一度の敗北であの強大な国家が倒れるとは考えにくい」

「滅びますよあの国は、戦争で負けるような事があれば簡単に。帝国の軍事力は脅威です。しかし、体制を維持する力強さはすでになく、強大にあらず只々巨大な国家となってしまうている。もはや帝国は限界の状態にあり、次に戦で敗れるような事あれば、それは帝国の終焉を意味する事となりますよ」

クレイグは考え込むようにしばらく沈黙し、大きくひとつ息を吐き出す。そして、キュウジに背を向けるように椅子から立ち上がると部屋の窓の外を眺め始めた。

「……最近、私の事を嗅ぎ回るネズミがいると聞いていたが、たいそう鼻の利くモノだったようだ」

それがキュウジのことを言っているのは明白だった。

「良い商人というのはみな鼻が利くものです」

「目だけでなく鼻ですか、たしかにそうだ。それに口が上手いくる。……いいでしょう、アカサ殿。あなたの話、買いましょう。」

実は私もあなたに近い考えをしていた。ただ、その時期を迷っていたのだ」

「光栄です。近い将来、英断だったと思えるものとなりましょう」
クレイグが振り返りキュウジの顔を見る。

「ただし、条件はいくつかつけさせてもらいますよ。……その自信に見合う成果を期待しておきましょう」

クレイグの言葉に困難な任務の達成の糸口がようやく掴めたのだとキュウジは感じていた。

同盟、それぞれの思惑

クレイグのだした主な条件は二つ。

ロマリアとの交渉に関してキュウジを補佐する為の同行者をつける事。そして、交渉にかかる費用を同盟に失敗した場合はすべてキュウジが負担する事である。

クレイグのつけた人間がキュウジの行動を監視する為のものである事は明白であったが、それは計画の大きな障害とはなりえなかった。キュウジは武器の密輸に関する取引は済ませており、あとはロマリア王国内での交渉が当面の仕事となるからだ。

資金に関しても同盟成立後にクレイグから掛かった費用分が支払われる事となり、事前援助を受けられなかったがその事もあまり問題とはならなかった。

それらの小さな障害よりもキュウジがクレイグの持つロマリア内の人脈と彼の名を使える事は大きな収穫であった。

事実、キュウジのロマリア内での交渉活動は驚くほど順調に進む。同盟交渉を始めてからわずか一月足らずという短い期間で同盟を成立させる寸前のところまで進める事が出来たのだ。

それはロマリアが再び急速に軍拡を進める帝国に対して不信と警戒心を強め、軍拡が完了する前に先に攻撃をしかけるべきだと主戦論を唱える者達が多く現れはじめており、穏健派もスタンチオ公国との同盟という圧力をもって帝国の矛を収めさせようと考え、主戦派、穏健派共に公国との同盟が有益であるという点は一致していた為である。同盟が帝国を刺激し戦争を招くとして反対する者はほとんどいなかったのだ。

クレイグの公国商工会に対する説得もすんなりと完了した。クレイグ自身、商工会役員の中でも大きな力をもっており、彼に頭の上がない者は数多くいたし、同盟交渉がバレれば帝国を刺激すると反対していた者達も日に日に強まる帝国の圧力と、ロマリアが同盟

に前向きである判明した事でその多くが賛成に回った。
同盟の成立。その新たな戦火の火種はまさに激しく燃え上がる
としていたのだった。

ハンスとミロスラフが軍務関係の報告をする為に皇帝の間を訪れ
るとグリードとオイゲン、ジェイドと何人かの衛兵達が見守る中で
半裸の男が二人、殴り合いをしていた。

「またか」

ミロスラフは嫌悪の表情を浮かべながら吐き捨てた。

「陛下の御前だぞ」

ハンスがミロスラフの露骨な態度を注意する。

「ああ、わかつている」

「陛下、軍務に関する報告に参りました」

「これが終わるまで、少し待っている」

グリードにそう言われ二人はオイゲン將軍のそばへと移動し、男
達が殴り合う様子を静かに見守った。

皇帝の間には殴り合う二人の男の拳の音と怒声だけが響き合っ
ていた。

いくらかの時が過ぎていく中で、何度も血飛沫が男達から飛び散
ちり、元来、神聖であるべきこの部屋の床を醜く汚す。そして、二
人の息はあがり、足元もおぼつかないものへとなっていく。

「うおおおおおお!!」

片方の男が大声をあげながら放った渾身の一撃がもう片方の男の
顔を捉えると鈍く骨の砕けるような音がし、殴られた男は床に倒
れこんだ。

「やった……。やったぞ!! 俺の勝ちだ!!」

殴り倒した方の男は息をきらしながら叫び、グリードの方へ顔を
向ける。

「これで、これで、いいんだな」

「ああ、これでお前の刑期はチャラだ」

グリードは血だらけの男に自身が犯した殺人と強盗の罪が清算された事を告げる。すると、男は腫れ上がった顔で満面の笑みを浮かべた。

「やったぜ、へへへ」

「まあ、待て」

グリードはジェイドの方に目で合図を送り、ジェイドはそれを受けて、ゆっくりと喜ぶ男の方へと近付いていく。

「なんだよ」

「お前の罪は清算された。だが、お前には死んでもらおう」

戸惑う男にグリードは死の宣告を下す。

「はあ！？ 何わけのわかんねえ事を言ってやがる。奴に勝てば自由の身にするって約束だろうが！！」

「クツクツク」

混乱しながら怒鳴る男の姿をグリードは馬鹿にするように笑った。

「何だよ！！」

「俺が約束したのはお前の罪を清算するという事だけだ」

「だから俺はそれで晴れて自由の身ってわけだろ！！」

「勘違いするなよ、屑の分際で。この国で自由の身であるのは一人だけだ。お前は死ななくてはならない、俺が今そう決めた」

「ふざけるな！！ わけわかんねえ事言ってねえで約束は守れよ！！」

「約束は守っている。お前はもう罪人ではない。だが、皇帝であるこの俺がお前の死を望んでいるんだ。お前が死ぬ理由にはそれで十分だ」

「馬鹿いうな！！ そんな無茶があるか！！」

「好きにほざけ。お前は死ぬ」

そう言っただけでグリードが再び目でジェイドに合図を送ると、ジェイドが剣を抜く。

「待てよ。おかしいだろ。無茶苦茶だ！！ クソ、てめえぶっころ

して……！！」

男がグリードに襲いかかろうと動いた瞬間、ジェイドの鋭い一刀が男を肉体を切り裂く。

「ぎゃああああ」

男は悲鳴をあげながら絶命し、床に倒れ付した。

「これも飽きてきたな」

誰に言うわけでもなく死体を眺めながらグリードが呟く。

「おい、お前らこのゴミを片付けろ。……ハンス、ミロスラフ待たせたな」

グリードは衛兵達に後始末の指示をし、ハンス達に報告を促した。
「陛下、これまでの……」

目の前で二人の人間が死んだばかりだというのに、まるで何事も無かったかのようにハンスとミロスラフの報告が始められたのだった。

キウウジの同盟工作が順調に進みロマリアとスタンチオの同盟成立が目前となってきた頃、オイゲンはアレクサンダル伯爵の自宅へと招かれていた。

「旦那様はお庭の方でお待ちになっておられます。ご案内いたします」

「ああ」

応対にでてきた使用人に案内され大きな庭園にでると、そこに白い椅子に優雅に腰かけるアレクサンダルの姿があった。

「着たか、オイゲン」

帝国唯一の大貴族となったアレクサンダルは神妙な面持ちで客人を迎える。

オイゲンは言葉を発する事なくアレクサンダルの傍にある空いた椅子に座り、彼とは向かい合う形となった。

二人の老齡の男の間には椅子と同じ白い机があり、その上にはテ

イーポットと紅茶の注がれたティーカップが一つ、空のものが一つあった。

案内をした使用人が空いたカップ方に紅茶を注ぎ終わるとアレクサンドルは彼にさがるよう命じた。

「それで、わざわざ呼びつけるとはなに用だ」

二人きりになって、先に口を開いたのはオイゲンの方だった。

「美しい花を愛でる余裕すらもないか」

オイゲンがアレクサンドルの邸宅を訪れる事は初めての事ではなかった。二人は古くから既知の間柄であり数々の戦を共にした戦友でもあった。

そして、そんな二人がアレクサンドルの邸宅で会談する時は、彼の自慢の美しい庭園で花々を愛でながらゆっくりとするものだった。だが、今のオイゲンから発せられる言葉にはそのような余裕は感じられなかった。

「……アレク、申し訳ないが今の私には時間がないのだ。為すべき事が多くあるのだ」

「為すべき事が……。オイゲンよ、それを為した先に何がある」

問い掛けにオイゲンは沈黙する。

「それは本当にお前がすべき事なのか？ お前は、聡明な男だ。気づいているはずではないのか、本当に為すべき事に」

「話はそれだけか。今日はこれで失礼しよう」

「待て、オイゲン！！」

席を立とうとするオイゲンをアレクサンドルは大声で制止した。

「陛下はまた、ロマリアとの戦争をはじめつつもりであるう。今、そのような事をしている場合か？ 民は疲弊しきつておる。その民の為に為すべき事が今お前がしようとしてる事なのか？」

「私がすべき事は陛下の命に従い、滞りなく進める事だ」

「ただ命令に従っただけなら、誰でもできる。お前がすべき事はこの国が間違った道へと進むの止める事だ。それがわからんお前でもなかろう」

「陛下の決意は固い」

「それでもお前がすべき事は変わらぬ」

アレクサンダルの顔がより神妙なものになる。

「オイゲン、陛下は……、いやあの小僧は人の上に立つ器ではない」
アレクサンダルの衝撃的な発言にもオイゲンは顔色を変えずにいる。

「陛下は陛下だ。どのような人間であろうとあの方がこの国の皇帝だ」

「皇帝足る人物こそが皇帝でなくてはならない。そうでなければこの国は滅ぶだけだ。そう思ったからこそ、オイゲン。貴様もバステイアンを討ったのである。何故あの時、そのままお前が皇帝の座につかなかったのだ。グリードに才がない事をお前はよく理解していただろうに」

問い詰めるアレクサンダルとオイゲンの間に短い沈黙が訪れる。

「グリードはオリバーの最後の子だ」

沈黙を破ったオイゲンの言葉は静かな決意とも諦めの境地ともとれる複雑なものだった。

「それだけか。それだけが多くの人間を犠牲にしてもあの小僧を皇帝の座に座らせておく理由なのか！！」

「それで十分であろう」

「馬鹿げた事をいうな。オリバーは確かに素晴らしい男だった。だからと言って、その子がこの国を破滅へと ойやるのを黙って見ているつもりか！？」

「頼まれたのだ。彼の死の直前に、この国と子供達の事を」

オリバーが死の直前にグリード達の事をオイゲンに頼んだのは、それが親心からきたものではなくただ帝国の事を考えてのものだった可能性は高かった。だが、オイゲンはそれがほとんどまったく言っていないほど父からの愛情を与えずにいた子供達へ、帝国を愛し、尽くして死んでいった男が見せた唯一の愛情だったのだと願っていた。

「オイゲン、オリバーなら斬るぞ。この国が破滅に向かうぐらいならば自身の最後の子であろうと」

「そうかもしれんな」

「だったら」

「だが、約束は約束だ。……アレクよ、私はもう歳を取りすぎた。英雄はすでに死んだのだ」

その言葉にアレクサンダルは啞然と、そして絶望にも似た表情を浮かべた。

「本気で言ってるのか？」

「ああ」

「そうか、英雄も老いて死んだか……」

悲しみの満ちた目をしてアレクサンダルは呟いた。

「誰もが老いるさ」

「そうか、ならばもう何も言うまい……」

「すまん」

席を立ち去ろうとするオイゲンにアレクサンダルは忠告する。

「……オイゲン。ジェイドは、あの男は危険だ。あの男は必ずこの国の災いとなるぞ。……いや、既になつておるか」

「わかつている。では、失礼する」

そう言つてオイゲンが去ると、あとには美しい花に囲まれた老人と、一口も飲まれる事の無かつたティーカップが残されていた。

戦争へ

一年という歲月。

それはある者には長く、また別の者にとってはあまりにも短いものであった。

オートリア帝国皇帝グリードが、打倒ロマリアの準備に許した期日が残りの数日となった頃、ついにその時が訪れた。

ロマリア王国とスタンチオ公国の同盟成立である。

同盟の誕生は大々的に発表され、その知らせは大陸西部の国という国を瞬く間に駆け巡った。同盟を知った数々の国は帝国とこの二国の戦争が迫っている事を実感した。発表されたこの同盟の理念『二国の繁栄の為に、脅威に対して共に力を合わせ対抗する』、その一文が指し示す『脅威』が帝国の事であり、この同盟が軍拡を進める帝国を激怒させる事は容易に想像できたからである。

そして近い将来訪れるであろう大戦争に対する中小国の王達の思惑は様々なものがありながらも、いずれの国もその形勢を見守ろうという態度では一致していた。

同盟成立の報が帝国に届くとグリード達はすぐさま帝国各地に散り任務にあたる師団長達に召集をかけた。

幾日後、皇帝の間に集まった彼らに同盟が工作活動によるものである事が伝えられると、事前に工作の事を知らされていた一部の師団長達を除き、その突飛に思える外交工作には何人かは驚きの声を漏らし、ほぼ全ての者がその意図を訝しがった。

オイゲンが工作の目的を伝えると納得し感心する者も中にはいたが、リスクの高いその行為には否定的な意見が相次いだ。

しかし、実際すでに同盟は成立してしまっており、この工作活動の成果を否定しても何ら事態を改善させる案をだせるわけではなかった師団長達は結局、オイゲン将軍が示す作戦を遂行するしかなかった。だが、そのオイゲンが示した作戦自体、またもや師団長達を

困惑させるものであった。

「本気でこのような作戦を決行されるおつもりですか？」

バステイアン討伐後、旅団長から師団長へ昇格となったフィリップは戸惑いを隠せぬ表情で場に集まった者達に問いかけた。

「何か他に良い案でもおありですか？」

ジェイドが平然とした態度でフィリップに代案を求める。

「他にと、言われても……。少なくともこの作戦は危険すぎます、戦争を回避し外交努力によって緊張を緩和させる方が懸命かと。ロマリヤも戦争など望みはしないでしょう」

「と、フィリップ殿は申されていますがどう致しましょう」

ジェイドに発言を促がされると玉座に腰掛けるグリードは怒気をも含んだ低い声で言った。

「馬鹿げた事を言うな。俺はジェイド、お前の言葉通り一年待つてやったのだ。期待に応えてみせる」

「もちろんで御座います陛下。……という事ですフィリップ殿、陛下のロマリヤ打倒の決意は固い。ご理解頂けましたかな」

「くっ、しかし……」

食い下がろうとするフィリップを制止し、割り込むようにしてメストが口を開く。

「ジェイド殿はえらくこの作戦に自信があるとお見受けする。必ずこの作戦が成功するとお考えか」

「当然。皆様方が協力し、与えられた指示をまっとうすれば、必ず成功しますよ。何せ歴戦の英雄であられるオイゲン將軍が考案なさったものです。私も多少お手伝いさせてもらいました」

「オイゲン殿も同じ様にお考えか？」

メストはオイゲンにも同じ質問をぶつける。

「八割、といったところだ、この作戦が成功する確率は」

オイゲンの言葉に場の空気はよりいっそう重くなる。

「八割！？ これは遊びではないのですよ。この無謀な作戦は失敗した時には帝国にとって致命的なものになります。必勝のものでは

いのならば、もつと慎重に事を運ぶべきです」

フィリップの言葉にオイゲンは首を左右に振る。

「すでに事は動いた。この状況で打てる最善の策、それがこの作戦だ」

オイゲンの言葉に明確な代案持たぬフィリップはこれ以上食い下がる事はできなかった。それはオイゲンが素性の知れないジェイドとは違い帝国を長らく支えてきた英雄であり、フィリップ自身この老兵の軍才を認め、自分以上のものと評価していた事も関係していた。

「將軍も謙虚なお方だ、これほど素晴らしい計画の成功率がたったの八割だなんて。フフ、それではみなさん異議なしという事でよろしいですね」

ジェイドが見回し、師団長達の表情をうかがう。みな神妙な面持ちながらもこれ以上異議の声があがる様子もなかった。

「それでは、各自与えられた指示通り動いてください。最後に陛下から一言お言葉を」

場の者達の視線がグリードの方へと集中する。

視線を浴びながらグリードは師団長達へ不気味な笑みを浮かべ言い放った。

「俺がお前達に期待する事はたった一つだけだ。……一年待ったのだ、俺を退屈させるような真似だけはしないでくれよ」

会議が終わったその夜。オートリア城の一室で、ついに始まるうとしている大戦争の前にオイゲンはイエンスと交わした言葉を思い出していた。

「この国は誰の為にあるのだろうか」

亡き父オリバーに代わり皇帝になろうという男はオイゲンの目の前でそう呟いた。

「何を仰いますか。この帝国は皇帝陛下の為にこそ存在し、そして」「そして皇帝は臣民の為に在れか」

イエンスが冷めた口調で言った。

「『臣民は帝国の為に、帝国は皇帝の為に、皇帝は臣民の為に』、そんな古い理想はもう当の昔に死んでしまったよ」

「イエンス様、これからお父上に代わり帝国を導かんとする貴方様がそのような考えでは困ります」

「父はこの国を救おうと奔走し、荒れ果てたこの国にかつてのような平穏を取り戻した。だけど、それは一時的な、見せかけのものでしかない。この国の根本を、運命を変える事はできなかったんだ」

「それではお父上の成し遂げられなかった事をイエンス様こそが」

「僕に父親以上の才覚などありはしないよ、自分の事は自分がよく知っている」

「及ばずながら私もイエンス様のお力に」

「オイゲン、僕は父がすべき事はこの国を救う事なんかでは無かった。そんな気がするんだ」

「イエンス様……」

「あまりにも長い時の流れは、帝国という存在を怪物にしてしまった。怪物は生きる為に臣民を喰うだけに足らず、皇帝すらも喰らう存在になってしまったんだ。……たぶん僕はこの先長くはないだろう。だから、この怪物を討つのは僕なんかではないし、きっと君でもないのだろう」

悲しみと諦めの帯びた表情で語るイエンスにオイゲンはかけるべき言葉を失う。

「喰らうものすら失くし破滅するのが先か、正義と信念を持った英雄に討たれるが先か。……いや、案外もっと単純な存在が終わらすのかもしれないな、フフツ」

そう言って笑うイエンスの表情はオイゲンの脳裏に焼きついたのだった。

トントン。

部屋の戸を叩く音がオイゲンを物思いから覚ました。

「ミロスラフです」

「入れ」

ドアを開けて入ってきた弟子の表情は険しいものであった。

「何か問題でもあったのか」

「いえ、そうではありません」

「自分の役割が不服か、ならば他の者に……」

「そうではありません！　ただ、作戦全体がオイゲン様らしくないといえますか……」

「私らしくないか」

「そうです、この作戦からはこの国に住む人々の事が抜け落ちていきます。まるで犠牲になるのも厭われないかのような」

「事実そうであろう。何せ作戦の発案者はジェイドだ」

「ジェイド？　あの男のですか」

「そうだ、私はそれにすこし手を加えただけなのだ」

「他に策は本当に……」

「陛下の決心が揺るがぬ今、これがもつとも目的を達成する為に最善の策である事は間違いないであろう」

「その為に多くの民が犠牲になる可能性があってもよいと」

「それが陛下の望んだ事だ」

「陛下が望むのであれば、何万、何十万の人間の身を危険に晒してもかまわぬと」

弟子の問い掛けにオイゲンはゆっくりと静かに頷いた。

「それもやむを得まい」

『貴公らが策した同盟が帝国を脅かさんと意図するものである事は明白であり、そのような事を謀る愚か者達を帝国が是認する事は決して有らず。事ここに至っては武をもつて征する他なし』

オートリア帝国がロマリア王国、スタチンオ公国に宣戦布告し、大戦争の火蓋が切られたのは同盟成立から二週間と三日後の事だった。

宣戦布告を受けたロマリア王国国王ローラントは帝国との西部国境地帯であるブレイ地方に兵を展開し、帝国軍の侵攻に備えた。ブレイ地方は幾度となく繰り返された帝国のロマリア侵攻、その拠点となる帝国の大要塞ケンロウからの侵攻ルートとなる場所であった。帝国がここを侵攻ルートとしてきたのには、ブレイ地方を通るのが王都ロマリアへの最短ルートである事が大きい。自然豊かなロマリア領内において帝国が大軍を運用する事は容易ではなく、補給線の距離が長くなる事を嫌ったのだ。

幸いにしてこの国境地域の帝国側にはロマリア側を見渡すような巨大な崖があった事から、そこにケンロウ要塞が建築される事となる。

ケンロウは長い歴史の中で改修、増築を繰り返し、大要塞ケンロウとして帝国の侵攻拠点となるだけではなくロマリアから敗走する事となつてしまった軍の逃げ場、そしてロマリアの反攻を阻止する要としての機能も持ち合わせていた。

「敵はやはりケンロウから攻め入るつもりようです。敵軍の入城が確認されました。規模的には一個師団かと思われます」

ローラントのもとに斥候からの報告を受けた将がやってきて帝国軍の動向を伝える。

「予想通りの動きですな。どう致しましょう」

老兵ラワンがローラントに今後の確認をとる。

「ケンロウから攻め込むつもりならば手筈通りに動いてくれればよい。しかし……」

ローラントがその先を言いよどむと彼のそばにいた若い男が王の代わりとばかりに口を開いた。

「しかし、一個師団というのが気になります」

「どういう事だカルロ」

ラワンはその若き将カルロに説明を求める。

「我々が軍をこの地に展開している事は相手も承知のはず。ならばこのブレイ地方を突破するのにはもっと多くの兵が必要なのは自明

の事。すでに我々がこの地に展開して二日目ほど経ちましたが、あの要塞にいるのは常駐兵とさきほどの援軍を合わせて、多く見積もっても一万の兵にも満たないものかと」

「困だと言いたいのか？」

「その可能性は十分にあるかと」

「陛下もそうにお考えで？」

「うむ」

ローラントはカルロの事を高く評価していた。

カルロは軍人一家の長男として生まれ、幼い頃から一軍の将としての英才教育を受けその才を磨き、若くして数々の戦功をあげていた。

また、人格的にも問題のない人間であり、ローラントはもし自身の娘イリスに君主たる才無き場合は彼を養子とする事を検討するほどの人物であった。

「しかし、急な同盟で帝国側の用意がととのつてなかっただけの可能性も……」

大男の将アーノルドが別の可能性を指摘する。

「それもないと言いきれぬ」

「でしたら陛下。ここはこちらから仕掛けてみるのも手かと」

相手が仕掛けてくる前に侵攻拠点となるケンロウを先に攻略してしまえば、帝国はブレイ地方方面からの侵攻が困難となる。そして地理的に防衛しやすい他方面からの侵攻を余儀なくされ、ともすれば王国への侵攻そのものを断念させる事も可能となる。

「それこそが、相手の狙いやもしれん」

ローラントは懸念を抱いていた、オイゲン將軍が準備もままならぬ状態で宣戦布告などという失態を演じるのだろうか。グリード帝がよほどの無能であり焦って戦を強行した可能性もないわけではなかったが、そんな希望的観測で戦況を判断するのは危険すぎるように思えた。

「では、このまま相手が動くのを待つおつもりで？」

アーノルドは不満ありげに言った。

「そうしたいところなのだが……」

「これだけ敵の動きが鈍いとなりますと主力が我が方ではなく、公国の方に向かった可能性があるかと」

「わかつておる」

カルロの指摘にローラントは渋い顔のまま答えた。

ローラントは帝国が主力を公国に向ける可能性は低いと考えていた。

帝国が主力を持ってロマリア王国に勝つのと、スタンチオ公国に勝つのでは大きな違いがあったからである。

もし、帝国がロマリアに勝つ事ができたならばスタンチオ公国は降伏、最低限でも停戦協定を結ばざる終えなくなる。同盟の軍事的主力がロマリア軍であり、とても公国だけでは帝国には対抗できないからだ。

逆に、帝国が先に公国を降伏させる事に成功したとしてもロマリアには戦鬪で傷ついた帝国軍を破るだけの軍事力がある。

その事は帝国がリスクを負ってまで公国に主力を向けるという可能性を限りなく小さなものになっている。そうローラントには思えた。

だが、今起こっている出来事はその小さかったはずのものを大きくしていった。

悩むローラントのもとに新たに慌てながら兵がやってきて叫んだ。

「伝令！！ 敵がサウゾン地方から進入してきたとの事です！！」

「何だと！！」

アーノルドが驚きの声をあげる。

サウゾン地方はロマリア南部側の国境で森深き地域、天然の要害と呼べる場所である。

「やはり、ケンロウの部隊は囷なのか。陛下、すぐにでも」

「慌てるな、予期できた事だ。ラワン、カルロ、兵を率いてサウゾンに向かうぞ。アーノルド、お前にはケンロウの見張りを任せたまえ」

「御意」

ようやく事態が動き出したのだとロマリア軍は感じていた。

だが、実際には彼らの知らぬところで戦況は既に大きく動いていたのだった。

復讐の機会

スタンチオ公国南西に位置する国境の街マランダ。

そこに帝国軍が姿を現したのは宣戦布告から半日も経たぬ頃であった。

「オイ、ありや何だ」

街の物見塔からはるか彼方に起きた異変に気付き公国兵が声をあげた。

「帝国の奴等だ！！ もう来やがったのか！！ 住民の避難を急がせろ！！」

傍にいたもう一人の男は彼方の異変を確認するとあわてて塔の鐘を鳴らした。

ロマリアとの同盟後、帝国との戦争が近いと感じたマランダの人々の多くは既に沿岸部の街や首都への避難をはじめていたが、全ての者がそう簡単移住できるというわけでもなく、いくらかの人々は街に残ったままであった。

だが、実際に戦争が始まり、帝国が宣戦布告と同時に公国領内に侵入し、国境の街を次々と焼き払いはじめたという情報がこの街へ伝わると、残っていた人々も持てるだけの財産を持ち出し避難し始めた。

焼き払われた街から運良く逃げ出せた者の話では街の守備隊はもちろんの事、意志をもって街に残っていた住民から逃げ遅れた住民まで虐殺したのだという。その話を聞いたマランダの守備隊も帝国の卑劣な行いに激怒していたが、現状の戦力では一矢報いることから困難であった為、このままでは街を捨て撤退せざるを得なかった。「畜生！！ 援軍はどうなってるんだ。俺達の街が燃えちまうのを眺めてろってか！？」

「すでにこっちに向かってるそうだが、間に合いそうにもないか…

…」

「それも本当か疑わしいね。なにせ公国兵は腰抜け揃いで有名だからな」

苛立ちを抑えきれぬという表情で男は吐き捨てた。

スタンチオ公国の正規軍は常に戦争続きであった帝国兵とは対照的に独立後戦争が一度もなかった為、他国や傭兵での軍歴がある者を除けば素人に毛が生えたような者ばかりという有り様で、わずかばかりいる経験者のほとんども戦争のないこの国で軍人として過ごすうちに腕が錆び付いてしまっていた。

「自分達の事ながら、情けない話だな……。しかし、こう言うのも癪だが、今回、商人連中はえらく気合が入っているらしい。やつ等の私兵は頼りになるかもしれん」

独立後、公国の正規軍が戦争に参加する事は無かったが、公国商人達の私兵となると話は違った。有力な商人達は帝国の腐敗した貴族達とは違い、他国への影響力など自身の利となりそうな戦場にはたとえ危険であつても積極的に私兵を投入したし、商売仇の抹殺など血生臭い事もやらせていたのだ。その為、彼らは常に腕の立つ兵士を必要としており、実際にそういう輩を雇い、飼っておけるだけの豊富な資金も彼らは持っていた。

ロマリアとの同盟を決めた後、公国商工会は帝国との決戦を見据え、大勢の傭兵を追加で雇い入れた。小金を惜しんで全てを失う事の恐ろしさを知る商人達はまさに桁違いの大金をつぎ込んで大傭兵部隊を結成していたのだ。

「その商人様達はこの街を助けようと必死になんてならんだろうよ」

「そうは言うが……、ん！？ あれは……」

帝国軍とは反対の方向に現れた何かに男が気付き指差した。

「どうした」

「援軍だ！！ 援軍が到着したんだ！！」

「何だって！！」

もう一人の男も指差さされた方向に目をやりその姿確認する。確かにそこには人の群れらしき姿があった。軍旗の紋章をしか

り確認できるような距離では無かったが、方角から考えて、それが公国軍である事は間違いなかった。

「間に合ったか！！ 急いで人を送らせろ！！ 帝国がそこまで来てる事を知らせるんだ！！」

「わかつている！！」

一人は慌てて物見塔から降りていき、残った男の方は再び鐘を鳴らし叫ぶ。

「援軍だ！！ 援軍が来たぞ！！」

「敵は郊外に部隊を展開したまま動こうとしません。いかが致しますか」

公国軍が先にマランダの街に到着すると、市街戦を嫌ったのか、帝国軍はマランダ郊外の平原で進軍を止めていた。

「援軍でも待っているか……。それとも夜を待っているのか……」

公国軍の正規軍総大将として指揮を任せられたトレントは報告を聞いてどう動くべきか悩んでいた。

「こちらから仕掛けるべきだ。たしかに予想より敵の規模は大きいようだが、まだ十分にやれる数だ。敵の援軍が到着する前に叩く、基本中の基本だ」

総大将であるトレントに同等、あるいは上から目線ともとれる発言をする男。

「だが、そろそろ日が沈みはじめる」

「そんなもの相手も同じ条件だ。魔術師連中に照明の魔法をやらせておけば問題ない」

「本当に敵が援軍を待っているのかはわからん。街を利用して誘い込んで迎えうつ方がこちらの兵の消耗を抑えられる」

「実際に援軍が来て手がつけれなくなっても知らんぞ」

「あんたは少し焦りすぎてるんじゃないか、ガエル。自分を散々な目にあわせた仇を前にして」

「俺が焦ってるだと？ 貴様らが敵を前に臆してるだけだろう？」

ガエルは敵意すら込めているかのように強い口調で言い放った。

トレントの指摘通りガエルには焦りがあった。反乱軍の鎮圧に失敗したあの戦い、あの戦場から逃げ出し、なんとか辿り着いたスタンチオ公国。そこで掴んだチャンス、復讐の、新たな成功への機会を得て彼は焦らずにはいられなかった。

公国商工会の莫大な資金が作りあげた大傭兵軍、それを纏め上げ指揮するチャンスがガエルは得る事に成功した。

それは彼が帝国軍師団長としての長年経験が商人達に買われた事と、ガエルと同じように公国に逃げてきた旧帝国貴族達の推薦があった事は大きい。

逃げてきた貴族達は少くない資金を提供し、公国にとっての新時代、自身達にとつての復讐と再び権力を得んが為にこの戦に協力していたのだ。

ガエルは商人達と貴族達の間でどのような取り決めがあったのか細かい事など知りはない。だが、この機会をモノにしないでならぬという事だけははっきりとしていた。

「動くつもりがないのなら、俺達だけでやらせてもらおうぞ」

「何を馬鹿な事を！！ 軍の指揮権は私にあるのだぞ」

「貴様にあるのは軍の指揮権だ。俺は商工会から直々に私兵共の指揮を任されている」

「戦力を分散させるつもりか！？」

「させるかどうかは貴様が決める事だ。傭兵共の指揮は俺のやりたいうようにやらせてもらう。素人同然の臆病者達に付き合って機を逸するわけにはいかんのでね」

「クッ……」

実績らしい実績を持たぬトレントは言い返すことが出来ない。何より彼自身、軍を動かすべきか、そうではないのか判断つかぬところがあつたのでは土台無理な話であつた。

「それでは失礼させてもらう」

「待て!!」

引きとめようとするトレントを無視して、ガエルは作戦室から去っていった。

「本当に奴等、打って出てくるでしょうか」

マランダの街を遠方に見据えながら副官はジェイドに尋ねる。

「ああ、彼が指揮をとってるからには」

「ガエル殿でありますか……」

帝国は公国側の情報を多く掴んでいた。その多くは密偵達からもたらせられるものであり、とくにアカサとして商工会の懐にまで潜り込むことに成功していたキュウジからの情報は有用なものが多かった。

公国に逃げ込んだ没落貴族達が商工会と手を組んだ事や、ガエルが商工会の用意した傭兵部隊の指揮をとる事になったのもすべて帝国側に漏れていたのだ。

「彼には忍耐というものが少し欠けている。感情をコントロールできずに冷静さを失いがちだ」

「今回もそうなるか？」

「あの男が辛抱できるはずがない。目の前に殺したくて仕方がない相手を見つけてね」

「殺したい、ですか……」

副官は視線を自分達の軍団旗の方へと向ける。

そこには鋭い爪と牙を持ち、巨大な翼を生やした醜悪な獣いた。それが、ジェイドが指揮する今の第二十師団のシンボルマークだった。

第二十師団はもとはガエルが指揮をとっていた軍団であった。それが今や彼の部下だった男のかつての旅団マークをつけて動いており、その男は自分を裏切り窮地へと追い込んだ張本人でもあるのだ。それだけでも、腹立たしい事であるのに、さらに男はマランダにいるガエルを挑発するかのようになんと軍団旗を掲げていた。

「フフ」

ジェイドから笑い声が漏れる。

ジェイドの存在に気付いているであろうガエルの心中を想像すると、ついつい笑みがこぼれてしまう。

「しかし、万が一という事もあります。敵が出てこない場合は……」
「心配する事はない。その場合の手も準備はしている。杞憂にすぎないだろうがね」

ジェイドは確信していた、腹を空かせた獣が餌につられないわけがないと。

「結局、貴様もついてくるのか」

「当たり前だ。戦力分散なんて愚行できるわけなかるう」

「フン、せいぜい足手まといにならんようにな」

マランダの街から打って出たガエル達に、トレント達も合流するしかなかった。戦の基本は数である。その優位を見す見す逃すなどトレントには出来なかったのだ。

郊外に展開する帝国軍の陣容はハンス率いる第三師団、ジェイド率いる第二十師団、トンボ率いる第三十師団、合計約一万五千。対する公国軍は正規軍約八千、傭兵軍団約一万二千の合計約二万の軍勢。

数の上では公国有利であったが、帝国軍の中でも最精鋭と呼べるハンスの師団や、旧第四二〇旅団兵の多くをそのまま抱えて込んでいるジェイドの師団には数を覆せるだけの力は十分にあった。結局この戦いの勝敗は両軍の戦術、そして未知数とも言える公国の傭兵部隊の力量によって決まりそうなものとなっていた。

「何か策があるのだろうか？」

マランダの街から威勢良く飛び出したガエルに勝算の根拠をトレントは問うた。

「シンプルにいく。相手の正面に兵をぶつける、それだけだ」

「何だと！？ 何の策もなしに兵を動かしてるのか？」

「正面にぶつける、それが策だ」

「そんなものが策と呼べるか！！」

「腕のいい傭兵が揃ってるが、所詮は急造の寄せ集め。むやみやたらに動かすより、単純にいくのがいい」

「いくら数に分があるといって、それだけで勝てると思っているのか？」

「安心しろ。切り札ぐらいは用意してある」

「切り札だと？」

「まあ、見ている。はじめるぞ！！」

ガエルが攻撃の合図をだすと太鼓の音が辺りに響きはじめ、傭兵部隊が動きだす。

「クツ、好き勝手にやりやがって。……お前達、遅れをとるなよ！！」

ガエルのやり方に呆れながらもトレントは兵達に指示をだし、傭兵部隊に遅れないよう正規軍の動きを合わせる。

こうして帝国軍と公国軍の決戦はちょうど夕陽が赤く燃えながら沈んでいく頃に始まったのだった。

帝国軍の魔術師達が放つ雷撃が突き刺さり、火球の雨が戦場に降り注ぐ。

公国軍の魔術師達は前進する部隊を守ろうと必死に魔法の障壁を張るがその隙間から、そして障壁に幾つもの魔法がぶつかり打ち破るようにして、着実に帝国軍の魔法攻撃は公国軍に損害を与えていた。

魔法戦においては完全に帝国側有利となっていた。

大枚を叩いても魔術部隊の用意は簡単にできるものではなく、その数や質に差があったからである。

「障壁を張るのに集中させろ！！ 反撃は最低限でよい！！」

ガエルは自軍の魔術師部隊に防御を徹底させる。

公国軍側にとって、魔法で削りあうよりもいかにして損害少なく敵軍に張り付くかが重要だったのだ。

「くたばりたくなかったら、とっとと敵にぶつかれ！！ 突撃しろお！！」

「オオウ！！」

公国軍の前線指揮官が発破をかけると、兵達はそれに答え、歩を進める。目の前の仲間の肉体が雷撃に貫かれようと、燃えて墨に化そうと彼らには前進する事しか許されなかった。歩みを止めれば、前進を続ける部隊を守るようにして張られる障壁の外にでてしまう、それはすなわち死を意味するのだ。

魔法戦がはじまり公国軍が帝国軍のもとに到達するまでのわずか三十分ほどもかからぬ時間の間に、公国側はすでに死傷約千ほどの損害をだしてしまっていた。

この事は戦場において魔術師達がどれほど重要な存在であるかを如実に示すものである。

「大丈夫なんだろうな」

トレントはついに敵軍のもとまで辿り着いた自軍の兵達を見つめながら尋ねた。既に陽は沈みきり、松明や照明魔法の光が戦場を照らしている。

「問題ない」

自信があるように答えるガエルの視界の手前側には、敵軍に到達する事無く魔法攻撃や弓矢の餌食となったいくつもの死体が転がっていた。

キーン、カーン。

剣と剣、剣と盾、剣と槍、槍と槍。

無数の武器がけたたましい音をあげ、戦場に木霊する。

カキーン、ガン、ガキーン。

そして無数の箇所で鮮血が飛び散る。

「くたばれや！！」

「ギャアアアア」

両軍の兵の怒声と悲鳴が飛び交い、幾人もの命が失われていく。魔法攻撃を掻い潜り辿り着いた先に待ち構えていたのは、また別の地獄だったのだ。

「くそお、こいつら手ごわいぞ……」

実戦経験の浅い公国軍正規兵にとつて、多くの精鋭部隊を持つハンスやジェイドの師団を相手にするのは困難なものであったのだ。質の差がありすぎ数の分などあつてないようなものとなつてしまつていた。

「チツ、雑魚共がそいつは俺が殺る……」

カキーン、ガン、カキーン。

「クソ、しぶとい奴め」

頼みの綱である腕利きの傭兵部隊ですら帝国の精鋭には梃子摺つていた。

特にハンスの師団の攻勢は顕著で、それにつられるようにして公国全軍が押される形となつてしまう。

「不味いぞ、ガエル。やはり何の策もなしに勝てる相手ではなかったのだ……」

後退させられていく軍を眺めながらトレントがガエルを責めるように言つた。

「慌てるな」

「この無様な状況を見て慌てるなだど!? あんたが勝手に兵を動かしたばかりに俺の部下達が死んでいるんだ……」

語気を荒げるトレントを冷ややかな横目で見ながらガエルは傍にいた男に指示をだす。

「そろそろ奴等の出番だ、合図を出せ」

「はっ!!! 了解しました」

指示を受けた男は何やら呪文の詠唱し始める。

「安心しろ。いまからとつておきのカードを切る」

「とつておきだと?」

「切り札は的確に使用してこそ意味があるのだ。まあ見ていろ、す

ぐに戦況は好転する」

ガエルがそう言いきった時、呪文の詠唱を終えた男の手から一際大きな火球が放たれ、高々と立ち昇った。そして火球が音を立て破裂すると、明るい緑を帯びたいちだんと目立つ光が闇夜に散った。

切り札

「オイ、出番だぞ」

魔術師はガエルからの合図を確認すると傍で座り込む背丈の低い男に話しかけた。男は全身を黒のローブで覆っており、まるで闇夜に同化しているようで視認し辛い。

「見りゃあわかる」

男はゆつくりと立ちあがり、自身のローブに手をかける。

「やっとコイツのお披露目ってわけだ」

嬉しそうな声色で喋りながら男はそのままローブを脱ぎ捨てた。

「クレイグ様の大切な品だ。期待に応えるだけの仕事はしてくれよ」

「安心しろ、傭兵稼業を長い事やってきてるが、払った金貨の枚数に見合わない働きをした事は一度たりともねえ」

「今回もそうしてくれ」

「ガッハツハ、まかせとけ。……しかし、コイツは本当に商人風情にはもったいない品だな。良い武具つてのはやはり実戦で使わないとな。部屋の片隅に置いて眺めるだけだなんて腐っちゃまうぜ」

男は身に着けている鎧と手に持つ両刃の斧を見ながら感嘆の声をあげた。

月と前線を照らすために打ち上げられる照明魔法、そして松明。それらからわずかに届いた光が男を赤く燃え上がらせる。

彼が纏う『それ』は炎そのものであった。いや、炎よりよほど神秘的に見える美しさを持つている武具である。炎と違い自ら光を放つ事はないが、わずかな明かるさの中でも十分とその美しさは実感できた。

「さすがドワーフってか」

「ああ。……本当に不思議だぜ。これだけのモノを作る力があるながら、何で俺達の国は滅んじまったのか」

嘆くドワーフの男は髭面の顔半分ほどの部分を除いて、頭から足

の先までオリハルコン製の防具で守られている。

この一式を揃えるだけでいっただれほどの金額がかかるものか
ドワーフの男には見当もつかない。

「歴史の授業をやる為にここに来たわけではないだろ。合図は既に
でてるんだぞ」

急かす魔術師の言葉にドワーフは若干機嫌を損ねながらも、頷き
了承する。

「それじゃあ始めるか。魔術師さんよお、前線に着くまでの障壁は
頼んだぜ」

そして、装備の重さを気にする様子もなくドワーフは前線に向か
って走り出したのだった。

ガエルの言う切り札とはオリハルコン装備で身を固めたドワーフ
の傭兵の事であった。しかも、一人だけでは無く三人もいたのだ。

彼らには防具に加え、オリハルコンの両刃斧、両手剣、メイスの
いずれか一つが与えられていた。

これら三人のドワーフ達の装備品はすべてクレイグが長年をかけ
て集めたものであり、これだけのものは多くの時間と途方もないよ
うな大金をかけたただけでは手にいれる事はできない。公国の大商人
としての人脈があつてこそ用意できたものであつた。

オリハルコン製の武具を託された傭兵が三人共ドワーフだった一
番の理由は装備の重さにある。オリハルコン製の武具は鉄や鋼の装
備よりもはるかに重く、全身鎧となると普通の人間ではまずまとも
に動けない。そこで、人間達よりも筋力に長けるドワーフ達の出番
となったわけである。重さだけではなく装備のサイズがドワーフ向
けに作られていたものだったという事も大きい。平均な人間の戦士
とドワーフの戦士の体型には差がありすぎたのだ。

このようにオリハルコンの全身鎧は装備できる者を選ぶ欠点を持
っていたが、その防御力はまさに鉄壁と呼ぶに相応しいものであつ
た。

「邪魔だ！！ どれどけ！！」

ドワーフの傭兵スタールは目の前にいる帝国兵を片っ端から斬りつけていく。手に握られたオリハルコンの両手剣は敵を鎧ごと切り裂き絶命させた。

「ギヤアア」

「何だよこのドワーフは！！ どうしろって言っただよ！！」

突如現れたオリハルコン装備の敵兵に帝国兵達は恐怖した。

ガキーン。

「おい……、嘘だろ勘弁してくれよ」

たった一度敵の攻撃を受け止めただけで、自慢の武器も盾も使い物にならなくなっていく。

キーン。

対して帝国兵の攻撃はオリハルコンの鎧にはかすり傷程度しかつけない。

「公国の奴等、なんてものを用意してやがる……」

多くの者にとってオリハルコン製の武具など書物や噂話の中、金持ちが趣味で展示する為の美術品という存在であったし、当然の事ながら兵士達もオリハルコン装備の敵と戦う機会など今までありはなかった。ましてや全身オリハルコンで固めた敵など信じがたいほどの存在である。

だが、現実にはその敵が目の前に現れてしまったのだ。

「悪夢だ」

恐ろしいまでに優れたその性能を彼らは今まさに身をもって実感していた。

「剣や槍じゃどうしようないぞ！！」

「魔法だ、魔法攻撃しかない！！」

帝国兵の一人が魔術師の支援を受けようと大声をあげた。

「だめだ！！ 俺達にも当たってしまうぞ！！」

それを慌てて別の兵士が止める。

強力な魔法攻撃は前線で戦う帝国兵を巻き添えにになってしまう為、

できるわけがなかった。だからといって味方を巻き込まないような弱い魔法ではオリハルコン装備の男に通用するようには思えない。それに、公国軍も魔法攻撃には細心の注意を払っているはずで、下級魔法では攻撃が届く前に男を支援しているであろう敵の魔術師の障壁に阻まれてしまう可能性が高かった。

他にも帝国軍魔術師達の大半はすでに魔力が枯渇してしまっているという問題があった。

一般的に大軍同士の戦闘において魔術師達は最初の魔法戦で魔力のほとんどを消費してしまう。それは味方を巻き込む危険なしに上級魔法を撃てる場面など最初の魔法戦ぐらいしかないからである。

大量の魔力を消費して強力な魔法を敵に向けて放ち、大量の魔力を消費して強力な障壁で味方を敵の魔法攻撃から守る。

そうして、その日使用できる魔力のすべて、あるいはそのほとんどを消費してしまうのは、言わば軍における常識であった。

魔力がわずかに残ってる魔術師達も下級魔法すら無駄に何発も撃てるような状態ではなかったのだ。

「ちくしょう！！　じゃあどうすればいいんだよ！！」

絶望したような表情で叫ぶ帝国兵。

「顔だ、顔の部分を狙うしかない……」

スタールの兜はフルフェイスではなかった為に、唯一顔の部分のいくらかは露出させていたのだ。

「そんな無茶な」

「やるしかない、やらなきゃ殺られるだけなんだぞ！！」

「くそおおお！！」

覚悟を決めた兵士達は次々とスタールに襲いかかる。

キーン。

ガキーン。

カキーン。

だが、彼らの攻撃のすべてはあっさりとスタールの両手剣に阻まれてしまう。

当然の結果だった。相手はただオリハルコン装備をつけただけの素人ではなく、多くの戦場を経験してきたであろう傭兵なのだ。スータルにとって顔のわずかな部分を守るだけなど容易い事である。

「オイ、オイ。もう終わりかい、ひ弱な人間の戦士さん達」

ドワーフは馬鹿にするように笑いながら言った。

「じゃあ、今度はこつちからいかせてもらうぜ!!」

そう叫び次々と帝国軍兵士にスータルは襲いかかった。

「うわー」

「ギャアアア」

いくつもの悲鳴があがる。

「おらおら、ドワーフ様の御通りだぜ!!」

まさに一騎当千、スータルの周囲には帝国兵の屍の山が築かれていく。

「おらあ、俺様に続け野郎共!!」

「オオ!!」

暴れる回るドワーフに戦意高揚する公国兵達。

「いつきに押し崩せえ」

「いけ!! いけ!! 押せ、押せええ!!」

公国軍が投入した三人のドワーフ達はそれぞれ脅威的な戦果を上げ続ける。

そして、ドワーフのもたらしたその勢いに乗り、公国軍はそのまま帝国軍を押し返し始めたのであった。

ジェイドのやり方

「そんな事できるわけなからう!!」

公国軍との戦闘前の師団長達による作戦会議においてハンスは珍しく激怒していた。

密偵から公国軍にオリハルコン装備の傭兵が三名いる事を戦闘前に知らされ、ジェイドから味方ごと魔法攻撃するという作戦が提案されたのだが、ハンスが拒否していたのだ。

「では、どうするおつもりで？ この戦いがどれほど重要なものとなるかハンス殿は十分とご理解なさってるはずでは？」

嘲笑うような調子でジェイドはハンスに尋ねる。

「くっ、ならば私が直接討ち取ろう」

「それは、それは」

「そうすれば問題ないはずだ」

「そりゃあ、おもしろそうだ」

トンボが笑いながら言った。

「ですが、ハンス殿ほど腕の立つ騎士でも、もしもという事があります。貴方の身に何かあった場合、その時は私の作戦を実行させてもらいますよ」

「わかった。だが、約束してもらおう。私の身に何か起こるまでは勝手に手をださない」と

「もちろんですよ。まさか、生きている貴方事吹き飛ばすわけにもいかないでしょう。後が怖いですしね」

そう言って笑みを浮かべるジェイドだが、その目は笑ってなどいない。

「騎士の名誉にかけて約束を違えるような事はしないでもらおう」

「騎士の名誉でも神様でも、好きなものにかけて約束しますよ」

「その言葉信じておこう。では、これで失礼させてもらっ」

「ええ、これにて解散という事で」

席を立ちその場を離れるハンスの姿を見ながらトンボが言った。

「騎士の名誉だってよ。ヘッへ、本当に立派な騎士様なこった。けどジェイドいいのか、約束なんてしちまってたけど鬱陶しい奴だしそのまま殺っちまうか？」

「別に構わないさ。奴が有能な軍人である事は違いない、実際に討ちとれたならそれも良しだ」

「くつくつく、利用できそうなら、骨まで利用する男だもんなあ、お前は。……それよりもだ。俺もオリハルコン装備の敵には興味があるぜ。いっちょ暴れてきてもいいか？」

ニヤつきながらトンボが言った。

「好きにしろ。俺はお前がくたばりかけたら、そのまま攻撃させるだけだ」

「心配するなって、いくらオリハルコン装備だからと言って、俺様がドワーフのチビ共に殺られるわけねえだろ。ガッハッハッハ」

大声で笑う大男の姿をジェイドは冷めた目で見ていた。

「報告！！ 敵の反攻の原因ですが、どうやら全身オリハルコン装備のドワーフがでてきたもよう。前線の兵達ではまったく歯が立たないようです。確認されているのは三名で、第三十三旅団、第二十旅団、第四百三十旅団がそれぞれ交戦中との事です」

前線の兵からの報告にジェイドは特に表情を変化させるわけでもなかった。

「やはりでてきたか」

ぽつりとジェイドが呟く。

「やはり？」

「フフ、いやこちらの話だ」

そう言われた兵士は傍にいる副官の男と互いの顔を見合わせながら沈黙した。

「いかが致しましょう。一度兵を退いてしまつて立て直すという事

もできますが……」

副官の男がジェイドに助言する。

「その必要はない。魔力の残った魔術師達を用意しろ」

「魔術師ですか？ たしかに幾人かの魔術師は魔力を残してるでしょうが、前線の兵がいるかぎり魔法攻撃にも制限が」

「彼らには皇帝陛下の為に、尊い犠牲となってもらおう」

平然と言い放つジェイドに副官は一瞬の間、絶句してしまう。

「いや、しかしそれはあまりに……、兵達を退かしてからの方が後の為にも」

「後の為にも犠牲になってもらうのだ。考えてみる、後退する前線の兵を敵が安易に見逃してくれはしないだろう。意地でも張り付いてくる。当然そんな敵から兵を後退させるには困となる者を多く必要としてしまう。ならば最初から後退などさせず、味方ごと敵を殺ればいい」

ジェイドは冷めた口調のまま話を続ける。

「それに、そのドワーフは奴等にとって最重要な駒だ。前線の兵を後退させはじめ距離ができれば敵側も魔法攻撃を警戒する。それでは兵を退かせた意味が無くなる。味方ごと攻撃はしてこない、その油断を利用するわけだ」

「しかし……」

食い下がるうとする副官にジェイドは先ほどよりも若干強い口調になる。

「いいか、これは命令だ。もたもたすればそれだけ帝国側の骸の数が増えるだけだぞ」

「わ、わかりました。準備させます」

副官の男は従うしかなかった。ジェイドがどのような人物であり、下手に逆らおうとすれば自身の命が無いという事を理解していたからだ。

それにジェイドの師団は旧四百二十旅団の兵をはじめとして金と恐怖によって集められた集団であり、仲間を見捨てる事に躊躇いが

少なかった。まともな人間が多くいた旧四百二十旅団を除く他の旧二十師団の兵達の多くは他の師団に移ったり、一年前の戦いで戦死してしまっていたのだ。

力量はあれど寄せ集めの仲間意識の欠けた集団である現第二十師団、それが今回のような状況ではいい方向に働くのである。

「それと、第三十三旅団と第四百三十旅団の方にも同じように手助けする準備を」

「はっ、しかし彼らはハンス殿とトンボ殿の師団の所属。勝手に彼らの兵ごと攻撃したとなると問題に……」

「許可はとつてある。準備だけさせておけ。合図をだしたら構わず攻撃させる」

「許可ですか……」

副官には信じられなかった。ジェイドと古くからの付き合いであるトンボの師団は実質ジェイドの師団のようなものであったが、ハンスがこのようなり方を許すとはとても思えなかったのだ。

「何度も同じ事を言わせるな」

「わかりました。師団内で魔力の残った魔術師達をかき集め、攻撃準備をさせます」

「それと、そろそろ頃合だ。例の伝令もだしておけ」

「了解しました」

副官の男は啞然とした表情のまま話を聞いていた兵士達に指示し、自身も魔術達のもとへと奔走し始める。

そして前線を見つめるジェイドは独り、笑みを浮かべるのであった。

ハンスとスタール

「どうした、どうした。これが栄光ある帝国軍様の實力かあ!？」
スタールがたじろぐ帝国兵を挑発するように言い放つ。

「いったいどうすれば」

前線で戦う帝国兵達の間には絶望的な雰囲気漂っていた。

通常の武器は通用せず、魔術師が苦勞して味方の間を縫う様に放つ魔法攻撃も下級魔法の為、避けられ、障壁に阻まれ、当たったと思えば、鎧や兜の傷が少し増える程度である。

「このままでは……」

ほとんど打つ手なしとなり、兵士達が死を覚悟したその時、後方から馬が駆ける音と共に一人の男が現れた。

「ハンス様!!」

「師団長!!」

その男の姿を見た帝国兵から驚きの声と共に安堵の声があがる。

「ハンス様なら奴も……」

ハンスは馬から飛び降りると、そのままスタールの前へと立ちはだかった。

「奴の相手は私がする。周りにいる敵兵の相手は任せたぞ」

「わかりました!!」

ハンスの指示に帝国兵達はスタールを避けるようにして彼の周囲にいた公国兵と戦いはじめる。そして、不自然なようにハンスとスタールの決闘の為の空間できていく。

「ほう、お前が噂の三弟のうちの一人、第三師団長のハンスか。光栄だぜ、普段の俺じゃあ相手にはならないだろうが……」

スタールが不敵に笑う、そして……。

「今の俺はまさに無敵!! 悪いがその首もらうぜ!!」

スタールは地面を蹴り上げ、そのままハンスへ斬りかかる。

シュツ。

だが、彼の両手剣は空を切る。

「まだまだ!!」

シュツ、シュツ。

二度、三度と斬りつけるがすべてかわされてしまう。

「チツ、ちょこまかと」

そう言つてスタールが体勢を立て直しもう一度斬りかかろうとした瞬間、公国兵の誰かが射つた矢がハンスに襲いかかった。

キン。

ハンスはその不意打ちの矢を剣で難なくと弾き飛ばす。

それを見た、スタールが絶叫する。

「誰だあ!! こいつは俺の獲物だ!! 手出しするじゃねえ、てめえら雑魚共はお呼びじゃねえんだよ!!」

スタールの叫びに萎縮したのか、それから二発目の矢が飛んでくる様子は無い。

「傭兵にも騎士道を理解するものがあるとはね」

ハンスの言葉にスタールは笑つて否定する。

「ガッハッハ。騎士道だつて? 勘違いするなよ小僧、俺は傭兵だ。ただ貴様ほどの獲物を他人に横取りされるのが許せねえだけだ!!」

「それは……、残念だ!!」

今度はハンスがスタールに襲い掛かる。

「何!!」

その速度はスタールの予想よりもはるかに速かった、慌てて剣で自身の顔を守ろうと構えるが……。

シュツ。

ハンスの攻撃も空を切るだけであつた。

「クツクツク、お前わざと外したな」

ハンスは肯定も否定もしないで、もう一度剣を構えなおす。

「そりゃあそうだよな。あんたの剣がどれほどの名剣か知らないが、こいつにはかなわない」

スタールは自身の持つてゐる剣を少し振つて強調する。

「当ててしまえば、下手すりゃそのままボキンだ」

「それはどうかな」

「戯言を……、それじゃあいっちょ試してみるかあ!？」

再び飛びかかるスタール。

シュ、シュ、ブオン。

「避けてばかりでは俺には勝てんぞ小僧!！」

ブオン、シュ、ブオン。

攻撃をかわし続けるハンスにムキになってしまうのか、スタールの太刀筋が大振りで荒いものへと変化していく。

通常の防具なら隙だらけの攻撃であつた。だが、今のスタールが気にかけるべきは顔のわずかな部分だけ、姿勢をある程度制御するだけでも致命傷となる攻撃を防げるのである。

ハンスも容易には反撃できない。

ブオン、ブオン、ブオン。

両手剣を振り回し続けながらスタールが言う。

「おいおい、まさか逃げ回って俺のスタミナが切れるのを待ってるつもりかい？　だとしたら、やめときな小僧。俺たちドワーフはてめえら柔な人間共とは違うんだぜ!！」

彼の宣言通り、ハンスが何度となく避け続けても剣速が鈍る様子はなかった。

「なるほど、さすがはドワーフ族だ」

ハンスは足を止め、しっかりと剣を構えなおす。

その様子を見てスタールが言った。

「覚悟を決めたか小僧。俺の攻撃をかわそうが、受けようが結局はダメなのさ、お前は俺に討ち取られる運命なんだよ!！」

今まで以上の渾身の一撃を放つドワーフの傭兵、その攻撃はついにハンスを捕らえる。

ガキーン!!

一際大きな金属音がした。

音を発した金属の武器が弾き飛ばされ闇夜の空に舞い上がる。

そして、その武器の使用者も自らに襲いかかったとてつもない力を受けて二、三メートルほど吹き飛ばされてしまう。

「何故……」

男は目の前の光景、自身の身に起こった事を信じられないという表情をしていた。

「何故、俺が、俺が……」

スタールは尻餅をつきながらハンスを見上げていた。

「何をした、何をした小僧……」

ドワーフが怒鳴り声をあげる。彼の手には既に武器はない。

「慢心したな、ドワーフの戦士よ」

ゆっくりとハンスはスタールとの距離詰めていく。

「慢心だと!? いったい何を……、確かに俺の攻撃は貴様を捕らえた。何をした!! 何故俺の攻撃を受けたお前の剣が無事なのだ!?」

距離を詰め終えたハンスが剣先をスタールの方へと突きつける。

「攻撃をかわし続け、動きが鈍るのを待っていたのではない。私はずっとお前の太刀筋、その癖を見ていたのだ」

「だからどうした。そんな事をしたってお前の剣ではまともに受け止める事などできるはずが!!」

混乱するスタールの目の前に突きつけられたハンスの剣が淡い青色の光を放ち始める。

「その光、まさか……」

「ようやく貴公にも見えたか、この剣に宿る力のオーラが」

「くっ、マジックソードか」

付与魔術（魔法）、物品に魔力を与えてその物の性能を変化、向上させる魔術。今ではこの術の使い手は少なくなっており、さらに術の効果は一時的なものでしかない。

しかし、かつてこの大陸に住む人間達が一つの大帝国パンゲアのもとに統治されていた時代には、付与魔術は最盛を極めていたという。魔術師達は魔力を宿した物品を次々と生み出し、その性能は実

に様々で優れた物が多く、宿した魔力の効果は永続するものが多かった。

これら大帝国パンゲア時代の付与魔術から生み出された数々の品を『マジックアイテム』と呼び、人々は珍重していた。マジックアイテムはそれぞれ、剣ならばマジックソード、盾ならばマジックシールド、指輪ならばマジックリングなどと呼ぶ事もある。

ハンスが持つ剣もそんなマジックアイテムのうちの一つだったのだ。

「最後に言っておこう。貴公が敗れたのはこの剣の力のせいではない。自身の装備に自惚れた、その慢心が敗北を招いたのだ」

「クッククク、慢心か。なるほど……、確かにお前は腕の立つ騎士様だぜ。三弟の名は伊達じゃなかったってわけだ。……小僧、あの世で再び立ち合う機会があれば、その忠告を活かさせてもらっぜ」

スタールが敗北を悟ったという顔をしながら言った。

「さらばだ」

「地獄でまってるぜ」

それがこの男の遺言となる。

死を覚悟して抵抗する様子のないスタールの顔をハンスが貫く。

カン。

ドワーフの頭を貫き、オリハルコンの兜に剣先がぶつかる音がした……。

トンボとギン

魔力とは無限の可能性を秘めた存在である。炎に生まれ武器へと姿を変え、水に生まれ盾となる。傷を癒す力となり、病をもたらず災いにもなる。肉体の限界を引き上げ超人の力を与えるこの力の原理を、その謎をすべて解明できたなら、それは我々が神々を超越した瞬間となるであろう。

魔術師ソーサン：著『ソーサンの魔術理論
と魔力の可能性』より

魔力は大なり小なり多くの人間に宿る力であり、魔術師は己に宿ったその力を放出し、形成し、操る才能を持つて生まれた者達にすぎない。そして、魔術師としての才を持たずに生まれた者にとっても、肉体に眠る魔力が常に無意味な存在であるとは限らない。

体内に眠る魔力は時に肉体へ作用し、その限界を高める。ドワーフ族の怪力に力負けしない人間の細身の戦士が現れるのもこの為である。また、何も筋力だけが魔力の影響を受けるわけではない。魔力は視覚、嗅覚、反射神経など様々なものに影響する。場合によっては記憶や性格などと言ったものにすら影響を与える事もあるのだ。魔力がどれほど肉体に力を与えるのかは、魔力の質、量、系統、そして影響を受ける側の体質による。基本的に他者から魔力の影響を受けるよりも、自身が持つ魔力からの影響の方が強いものとなる。優れた魔力とその影響を大きく受ける体質、その両方を備え生まれた者は超人と呼べるほどの力を発揮する事が出来るわけである。

歴史上の英雄達の多くもそういう者達であった。

公国軍の切り札として投入された三人の内の一人、ドワーフの傭兵ギンはクレイグより与えられた棘付きのオリハルコンメイスを使

い、次々と第四百三十旅団所属の帝国兵を討ち取っていた。

何人、何十人もの人間の骨を手に持つメイスで殴り潰しても、オリハルコンのメイスは少しも変形する様子はない。

「派手に暴れるじゃねえか」

さらに何人、何十人と相手し続け、周囲の帝国兵を粗方始末し終えたギンの背後から男の声がした。

慌ててその声の方へと振り返った彼の視界に飛び込んできたのは、ニヤニヤとこちらの様子をうかがっている大男の姿だった。

「巨人族か？」

ギンは大男を見上げながら思わず呟いた。

「おいおい、そこまででかくはねえだろ」

大男は巨大な棍棒を手に、ギンを見下ろしながら笑う。

大男の身長は人間のものとしても異常なほど高く、筋肉の発達も凄まじい。まるでドワーフが巨大化したかのような身体つきである。傭兵生活の中で人間の自称力自慢の輩は数多くみてきたギンであったが、これほどの大男は見たことなかった。

「雑魚共ではお前の相手にはならんみたいだからなあ。トンボ様が直々に遊んでやるよ」

大男が名前をギンに告げる。

「トンボ……、なるほど貴様がトンボか」

思い当たる節がある名だった。

「おやあ、お前みたいなのと知り合いになった覚えはないんだがなあ」

「別に知り合いってわけではないさ。こういう稼業やってれば、派手に暴れ回ってる奴の名前は嫌でも耳に入ってくる。『鉄腕のトンボ』の名前もな」

「へえなるほどなあ、そいつは悪くねえ」

名前が売れてる事に気をよくしたのかトンボは満足気な表情を浮かべる。殺し合いをする敵を前にした者の表情とは思えないものである。

「噂もまんざら嘘ばかりというわけではなさそうだ」

『鉄腕のトンボ』。

誰が言い始めたかなど定かではないが、帝国軍に素手で鉄の鎧を着た兵士を易々と殴り飛ばす大男がいる、という噂が大陸西部の国々で活動する傭兵達の間流れ始めたのは比較的最近の話だった。

噂話というのは、尾ひれがつき大袈裟になってしまいがちなものである。

しかし、ギンの目の前に現れたトンボの筋肉質な巨体は噂話に信憑性がある事を示すのに十分なものだった。

「だが、こいつは並の武具じゃない。噂通りの怪力の持ち主だろうと、このオリハルコンの前では無力」

「試してみるか？ おチビさん」

余裕綽々たるトンボの態度に、少なからず苛立ちを覚えるギン。

「後悔するなよ、デカブツ！！」

メイスを思いっきり振り上げながらギンはトンボの方へ突進する。そして、一気に距離を詰め終わると、目標の目の前で地面を蹴り飛び上がり、脳天めがけていつきに得物を振り下ろした。

トンボはその攻撃を持っていた巨大な棍棒を受け止める。

ガーン。

金属音と共に両者に衝撃が走る。

攻撃をしかけた方は自分の攻撃の反動に押し返されるようにして飛ばされ地面に着地し、受けた方は何歩か後退させられる。

「おお、こいつはすげえな」

トンボが攻撃を受けた棍棒を見ながら言った。

特製の巨大棍棒がべこりと大きくへこみ、いくらかの箇所は石が砕けたかのように欠けてしまっている。

「勝負あつたな」

ギンは自分と相手との武器の状態を見比べ言い切った。彼のオリハルコンメイスには変化はない。

「こうでなくっちゃおもしろくない」

絶体絶命のはずの大男には相変わらずの余裕があった。

「どこにでも己の力を過信する者がいるが、貴様は特にそういう大馬鹿者らしい」

「うだうだ言ってねえでかかってこいよ、チビ助。次はちゃんと本気でやってやるからよ」

トンボは持っていた武器を投げ捨てると、素手でずっしりと構えた。

ギンは正気とは思えぬその行動を目にして半ば呆れ気味に言う。

「お前ほどの馬鹿は逆に称賛に値するかもな!!」

一撃で決める、その気でギンは再び飛び上がりトンボの頭蓋骨めがけて攻撃する。

ぶしゅつと血と肉片が飛び散り、トンボが奇声をあげる。

「グアアアアアアアアアア!!」

攻撃は必殺の一撃になるはずだった。

「貴様……」

ギンは驚愕した、奇声をあげながらもオリハルコンメイスの攻撃を両手だけで受け止める大男の姿がそこにあったからだ。

「さすがに結構痛かったぜ」

メイスの棘が突き刺さり、両手から血液を滴らせながらトンボが言った。

ギンは必死でメイスをトンボから引き離そうとするが、柄頭をしつかりと巨大な両手で握られてしまっておりどうにもならない。

只々、彼の体がぶらぶらと宙に揺れるだけである。

「やめろよ……、結構痛いんだって言ってるだろ!!」

「グホオ!?!」

ギンの腹部に衝撃が走り、思わずの柄の部分から手を放してしまった彼はそのまま吹き飛ばされてしまう。

そして、鈍痛に耐えながら起き上がったギンが見たのはへこんで変形した己の鎧の姿であった。

「ば、化け物め」

心のそこからそう思ってた言葉だった。

そんなギンを尻目に、トンボは殴り飛ばした方の手である左手の指をじろじろと見ている。

「やっぱりいてえなあ」

メイスを握った血だらけの右手と同じく血だらけの左手の指を交互に眺めていたトンボであったが、突然何か思いついたのかニヤリと笑みを浮かべた。

それから、左手でまたメイスの柄頭の部分を握りだす。

「はああああああああああ」

唸り声と共にトンボの体中の血管が浮きあがる。

メイスの棘が奥深くへと突き刺さるのか、血が指の隙間からどんどん溢れてくる。

「まさか……」

ギンは唾然としてその光景を見ていた。

トンボが何をしようとしているかは薄々と理解できる。だが、彼の本能はそれを拒否した。

不可能だと思ったのだ。それが可能だったならば、彼の運命は決まったも同然であるのだから。

「はああああああああああ」

メキメキ、メシメシ、バリバリ。

トンボの両手とメイスの柄頭から漏れ出す音は、ドワーフの傭兵にとつてまるで残酷な運命を知らせる鐘の音である。

「はああああああああああ」

バキリ。

その音を聞いて楽しそうにトンボは言った。

「まあ、こんなもんか」

そして、彼がメイスから両手を放つとぼろぼろと金属の破片零れ落ち、醜く変形してしまったソレがぼとりと地面に落ち転がった。

「おチビさん、次は力比べといこうや」

悪魔が微笑む。

「や、やめろ……」

弱いギンの声が聞こえぬのか、あるいは無視したのか、ゆっくりと迫って来るトンボ。

恐怖で足が竦み逃げられない。

「やめてくれ……」

許しを乞うドワーフの手をトンボの血だらけの手がしっかりと握りこむ。

「まずは、左手から」

トンボは右手でギンの左手を押し込む。

「があああああああああああ」

ギンの間接は悲鳴をあげる。

化け物染みた怪力、ドワーフ族の豪腕をまるで赤子を相手にするかのような力。

「ぎゃあああああああああ」

ぼきりと鈍い音とともに激痛がギンを襲った。

「ドワーフもやっぱりたいした事ねえな。もうちょっとがんばってくれよ」

がっかりしたという口調で言うトンボ。

そんな彼にギンは必死で命乞いをする。

「まで、もう俺はこれ以上戦えん……、や、やめてくれ……」

そんな姿をトンボは嘲笑いながら言う。

「いいぜ……、お前が右手で俺の左手に一分耐えれたら助けてやるよ……」

「ぎゃあああああああああ」

十秒とかからなかった。

あっという間にギンの両腕は折られてしまう。

「残念だったなあ」

嬉しそうな顔をしながらギンの頭からオリハルコンの兜を取り外すトンボ。

激痛と絶望の中でギンが次に耳にしたのは死神の宣告であった。

「ドワーフの頭蓋骨って結構硬いんだろ？」

三枚目

「準備出来たのは、三人編成の三部隊だけしか……」

ジェイドの指示を受け、師団内から余力のある魔術師を必死でかき集めた副官であったが、用意できたのはそれだけの数だった。

普通の兵士ならば脅威となりえるだけの戦力ではあるが、相手がオリハルコン装備の兵士となるとどうしても火力に不安が残る。

「まあ、いいだろう。相手の不意をつくならそれぐらいの数が逆に丁度よい」

多くの魔術師が強力な魔法を放とうとすれば、当然空間にある魔力の流れ、濃度、そういったものの変動は大きくなる。それはすなわち、魔法の発動前に敵側がその攻撃を察知する可能性が上がってしまうという事になる。

少数で不意を付く形の方がよいとジェイドは判断したのだ。

「では、さっそく攻撃を？」

「ああ、二百二十旅団と交戦中の目標に関してはすぐに始めさせる。他の二匹は知らせがはいつてからでいい」

「わかりました」

「私は近付いて目標を仕留めきれるか見ておこう」

「何もジェイド様自らそのような事をなさらずとも」

副官が戸惑いながら言った。

「失敗なら私が進められるようにね」

「危険ではありませんか？ それに戦闘中に知らせとやらが入ってくる可能性もあります」

「いらぬ心配だ。知らせに関しては入ってきたならお前でもすぐにわかる」

「……わかりました」

抽象的な話に釈然としない感がありながらも副官はジェイドの考えに従うしかない。

「では、任せた」

そう言つてジェイドはさつさと前線の方へ一人で向かつてしまふ。残された副官は急いで指示内容を部下達を使い魔術師達へと伝達させる。

「二百二十旅団と交戦中の目標について攻撃の許可がでた。すぐに始めろ！！」

待機していた三人の魔術師はその指示を受けると、体内に残る魔力のすべてを費やして強力な魔法を作りあげ始めた。

体内で魔力を練り、空間へと練った魔力を放出し、そして放出先の空間内で魔法へと形成する。

ただ、威力の高いものを作りだせばいいわけではない。不意をつく為に通常よりも攻撃目標との距離をとっており、いたずらに魔力を込めただけの魔法では途中で暴発、暴走してしまふ。そうならぬように適切な魔法を作りださねばならない。

それには高い集中力と繊細な感覚、丁寧に魔力を練り上げ、魔法を形成する為の時間が必要となるのだ。そうして三人の魔術師が生み出す、無数の魔力を帯びた氷の槍、破壊力のある稲妻、大きな火球の魔法は、たった一人の兵士を殺す為のものだった。

前線で戦う者達の中で最初にその脅威に気付いたのは公国軍側の一人の魔術師である。彼の任務は公国軍の切り札であるドワーフの傭兵、ゴールを魔法攻撃から守る事であり、ゴールが前線で暴れはじめるまでは神経を尖らせ警戒していたが、敵味方入り乱れての戦闘が始まつてからは心のどこかに油断し警戒を怠る部分があった。

その為、彼が気付いた時にはすでに魔法が発動される寸前となっていた。

「まずいぞ、奴等味方ごと殺るつもりだ！！ 障壁を張れ！！」

彼の叫び声に、近くにいた幾人かの公国魔術師は慌てて部隊を守る為に障壁の魔法を発動させる。

だが、その多くはすでに魔力のほとんどを使用しており、弱弱しいものしか張ることができない。

それに問題は魔力の量だけではなかった。

強力な魔法攻撃に時間が必要のように、それを防ぐだけの障壁を作りだすのにもまた時間が必要なのだ。

「無茶苦茶しやがる!!」

無敵の防具を身につけたゴールもさすがに焦っていた。

オリハルコンがどれだけ丈夫であろうと、中身は生身の肉体である。無事ですむ保証はない。

当然、他の兵士達も大きく動揺していた。

「そんな、嘘だろ!!」

「俺達を捨て駒にしやがった!!」

「奴から離れろ!!」

両軍の兵士達がターゲットであろうゴールから離れようと距離をとり始める。だが、魔法の範囲から逃れるには気付くのが遅すぎであった。

帝国側の前線を援護していた魔術師達は慌てて己の身を守る為だけの小さな魔法の障壁を張る。

無理矢理召集されただけの彼らには帝国兵達を守る義理などありはしないし、自分一人を守るだけの小さいものなら短時間でもある程度強力な障壁を作れるからだ。

「くるぞ!!」

兵士の叫び声と同時にそれは飛んできた。

いくつも重なるようにして張られた魔法の壁へ最初に衝突したのは、氷の槍である。

闇夜の中、風を切りながら現れた無数のそれらは淡い青色に光りを放ちながら次々と魔法の障壁へとぶつかる。

バリバリバリ。

碎け散るような爆音。

その音が鳴り続ける間に障壁はさらに弱いものへとなっていく。

「だめだ、もたない!!」

魔術師達の中の誰かが弱音を吐き、砕け散る音が鳴り止むとまた別の魔術師が叫んだ。

「次がくる！！」

稲妻の強力な一撃が障壁にぶつかる。

バチーン。

稲妻は辺りに雷撃を飛び散らせながら、音をたてて障壁と共に消滅する。

魔法攻撃を防ぐ壁を失った者達は悲鳴をあげる、悪魔の攻撃はまだ残っていたのだ。

「まだくるぞ！！」

「うわああああああ」

「助けてええええ」

巨大な火球が彼らに襲いかかる。

ドーン。

地面にぶつかりとそれは爆発を起こし、大地と兵士達を焼き払った。たった一発の魔法が両軍合わせて八百名近い人命を瞬時に奪いさる。

爆発に巻き込まれた中で生き残っているのは己の身だけを守ろうとした何人かの魔術師達だけ、そうなるはずであった。

だが、炎の中をゆつくりと動く魔術師ではない者がいた……、ゴールである。

「やってくれるじゃねえか」

ゴールの周りには、焼け焦げた遺体がいくつも転がっていた。

彼が強力な火球魔法の直撃に耐えたのには、身に着けていたオリハルコン製防具の性能の高さはもちろんの事、ドワーフ族であったという事も大きい。途方もない時の間、ひたすら優秀な鉱物を求めて火山や地下深く、マグマの熱に当てられた中で生活してきた彼らは熱に強い皮膚を手に入れていたのだ。もちろん人間に比べてという話で、限度はあるのだが。

「ん、敵か、味方か」

炎の熱で視界の先が歪む中、ゴールは自分以外にも動く何かがいる事に気付く。それはゆっくりと彼の方へ近付いてきている。

「誰だ!!!」

現れたのは白髪の男だった。

薄ら笑いを浮かべながらゴールを見つめるその男が持つ雰囲気には、ただの兵士達とは違うものがあつた。

不自然な落ち着きと、溢れ出す禍々しさ。友好的な者ではないと本能が判断する。

「てめえか、こんなふざけた真似しやがったのは」

「だったらどうしますか？」

間違はなくこの男の仕業だ、ゴールはそう直感した。

夕刻から続く戦場の喧騒、焼け焦げたいくつもの遺体と、赤々と燃え上がる炎の中で二匹の獣が睨み合う。

一匹は傭兵として、もう一匹は軍人として戦場を渡り歩き。

一匹は金の為に、もう一匹は生理的な欲求を満たす為に無数の人間を殺し続けてきた。

二匹に共通するのはただ、己が為に凶器を握り続けた事。

「ぶっ殺す前に名前だけ聞いておこう。こっちは傭兵稼業の身でね。あんたいい値つくんだろ？」

「帝国軍第二十師団師団長ジェイド」

その名をゴールが知らぬはずがない。

「なるほど、狂乱の貴公子様か。どうりでイカれた面してるわけだ」
「フフ、ドワーフの方よりは整つてると思いますか」

「よく言うぜ。人の面の皮こそ被ってはいるが、中が透けて見えちまつてるよ。殺人狂の化け物の顔がな」

「怖いのですか？」

「まさか、化け物退治は好きでねえ。金になるからな」

「残念ですが、お金にはなりませんよ。……貴方はここで死ぬ」

「ほざけ、狂人!!! くたばるのはてめえだ!!!」

ゴールが両刃の斧で攻撃を繰り返す。

ブオン。

だが、簡単に避けられてしまう。

ブオン、ブオン。

ジェイドは余裕の笑みを浮かべながら、ゴールの攻撃をかわし続ける。

攻撃が当たる気配はなくゴールは体勢を立て直す為に一度足を止めた。

予想以上のジェイドの身の動きの速さは、いくら優秀な戦士であろうとその限界を超えているとゴールは感じていた。

「チツ、てめえ加速の魔法をかけてやがるな」

「ええ」

あっさりと認めるジェイド。

「だが、魔法の効果はそのうちきれる。いつまで逃げまわっているかな」

体内の魔力によってもたらされるものではなく、意図的に他者、あるいは自分自身で肉体の能力を向上させる魔法をかけた場合、かなりの負担が肉体にかかってしまう。

その為、比較的短時間で魔法の効果は消えるようになっていく。

もし、無理に魔法をかけ続けられれば死に繋がる場合もあるのだ。

「逃げてるわけではないですよ、からかって遊んであげてるだけです」

「なめた口ばかり叩きやがって」

ブオン、ブオン

必死に攻撃を続けるゴールだが、時間が経ても経ても、ジェイドの動きが鈍る様子はなく、一向に捉える気配がない。

さすがのゴールも何かがおかしいと感じていた。

「もう終わりですか？」

嘲笑うジェイド。

「何をした、何故スピードが落ちない」

問い掛けに答えず、ジェイドは相変わらず人を馬鹿にしたような

笑みを浮かべるだけだった。

「チッ、……俺を殺すじゃなかったのか？ 攻撃を避けるだけじゃ、俺は死なんぞ」

このままでは、いつまで経っても埒が明かないと、ゴールがジェイドを挑発するかのように言った。

いくら動きの速いジェイドでもゴールを攻撃しようとすればわずかも隙が出来るはず、そこを上手く捉えようとゴールは考えたのだ。

「そうですね。そろそろ終わりにしますか」

ジェイドの言葉に、ゴールは思惑通りに事が進みそうだと思った。だが、ジェイドは予想だにもしない行動を取り始める。

ガシャン。

手に持っていた剣を放りなげて捨ててしまったのだ。

「何を考えてる」

「貴方を殺そうと」

余裕を見せ続けるこの男の意図が読めず、空手で棒立ちのその姿にゴールは戸惑う。

「もう攻撃をかわしたりはしませんよ。どうぞ、かかってきてください」

隙だらけにしか見えないその姿は、いつそう不気味さを増したように感じられた。

「こないんですか？ ではこちらからいきましょう」

ジェイドの言葉にゴールの足が動く。

相手の攻撃を受けてその隙を付く、それがゴールの狙いだったはずなのにジェイドの予想外の行動は、彼を動揺させ焦らせた。

「なめやがってー!!」

襲いかかるゴールに、ジェイドは言葉通り一步も動こうとはしない。しかし、動きだしたゴールを見たジェイドは腰を一段と低く落とし、まるで背丈の低いドワーフ為に首を切り落とし易くするかのようにつく。

「もらったあ!!」

ゴールの持つ両刃の斧がジェイドの首めがけて振り下ろされる。

ガシッ!!

「な!?!」

ゴールの腕と彼の両刃の斧の柄の部分をジェイドが掴む。

わずかに刃先の数センチ先にはジェイドの首があるというところで、斧は止まっていた。

「くっ、くうう」

ゴールが力み動かそうとしても、ジェイドの両手はしっかりと腕と斧を抑えびくともしなかった。

「てめえ……」

「クツクツク」

邪悪に笑うジェイド。その顔からは人の面の皮など消えていた。

「てめえ、筋力強化まで……」

「まさか、俺にかけてた呪文の効果なぞとつくの昔に消えてるよ」

「馬鹿を言え、そうでなければてめえみたいなひよろい野郎に俺の一撃を受け止めれるわけがない!!」

必死の形相でジェイドの手を振り解こうするゴールだが、ジェイドはそれを楽々と封じている。

その怪力がジェイドにかかる魔法によってもたらされているものだ。ゴールは考えていた。

「クツクツク、ずつとさ」

ジェイドの瞳に宿った狂気が広がっていく。

「不思議だったんだよ……」

語り始めたジェイドの言葉には愉悦と嘲笑が混ざっている。

「どうして、お前達はこんな物を作るだけの技術がありながら、オリハルコン製の両刃の斧の柄を握るジェイドの手に力が込められる。」

「人間から逃げるようにして地下に国を築き暮らしてたのかって」「逃げるだと、俺達の先祖は逃げてたわけじゃねえ」

「逃げてたさ」

「地下の豊富な鉱物を求めて暮らしていただけだ!!」

「違う、逃げてたのさ。逃げて、逃げて、暗い陽の当たらぬ地下で惨めに暮らしてたんだよ、お前達は」

「何だと!!」

「だって、そうするしかなかったんだよ。ドワーフはみんなお前みたいに弱かったから。クッククク」

「てめえええええええ!!」

怒鳴るゴールの思いとは裏腹に動かそうとしても武器はびくともしない。

「術さえできればお前なぞ」

「お前はまだ気付かないのか」

「なにっ」

「さっき言っただろ。俺にかけた魔法の効果などつくに消えてる」

「馬鹿を言え。現に今こうやって……、ま、まさか」

「クッククク、そうさ。魔法がかかっているのは俺じゃあない。お前だよ、お前にかけていたのさ。しかし、驚いたよ。魔法に弱い種族とは聞いてたが、自分に魔法がかけられたかも気付かぬほど、馬鹿で、マヌケで脆弱な奴等だったとは」

「な、何をした。俺の体に何をした!!」

「衰弱の呪文、徐々に肉体の限界を引き下げる魔法だ。たしかに他の魔法に比べて異変に気付きにくいものではあるが、ここまで術が進行しても気付かぬマヌケは初めて見たぜ」

「衰弱の呪文だと、てめえ『ブラッドマジック』の使い手か……」

禁忌の魔術『ブラッドマジック』。大昔の大魔術師グアイドが生み出した魔術である。

魔王ウルトルが作り出した魔界。そこからこの世界へやってくるとされる魔族や悪魔、一部の魔物達が使う暗黒魔法（闇の魔法）の力に魅せられたグアイドは秘密裏に多くの人体を実験台にしながら研究を続け、血の魔法とも呼ばれるこの魔法を生み出した。

ブラッドマジックは暗黒魔法にも引けを取らぬほど凶悪、強力な術で、グアイドの研究に気付いた当時の国王は大軍をもってなんとか彼を討ち取ったが、術は戦いから逃げ延びた弟子達によって各地に広まってしまふ。

大陸各地の当時の国々は最初こそ、その魔法の強力さに惹かれ、術の研究を許可、支援していたがすぐにその魔法の危険に気付き弾圧した。

ブラッドマジックは非常に強力ではあるが、暴走しやすいものだったのだ。

未熟な魔術師達がブラッドマジックによって次々と災いを国にもたらし、滅亡してしまった国すらあったという。

この扱い難く、暴発、暴走しやすい凶悪な性質からブラッドマジックは大陸中でその使用と研究を封じられ、その決まりを破る者達には極刑の罰が与えられる事となる。

その状況は現在も代わりなく、ブラッドマジックを正式に許可している国はない。

だが、どんな時代にもその力に魅せられる魔術師達は存在する。

彼らは秘密裏に研究をし術を身に付け、同志を集め、非合法集団を作り上げさらに研究を進める。一種の宗教と呼べるようなこの魔法への狂信的な信仰を持つ集団すらあった。

「こんな術を使ってただで済むと思ってるのか」

ゴールの言う通りブラッドマジックは帝国においても極刑となる重罪、いくらジェイドと言えどバレるような事があれば破滅である。

「魔法に疎いドワーフに教えてやるよ。この術の優れたところはその威力だけでなく他の呪文と違って探知され難いところだ」

ブラッドマジックは少量の魔力で莫大な力を発揮する。その性質は必然的にこの魔術に他の属性の魔法に比べて感知され難いという特徴を与えていた。

「だが、完璧な魔法というわけではない。もちろん欠点はある」

「欠点だと？」

「臭いだ。術の生贄となった亡者達の血の臭いがするのさ。フフ、
だけどここは戦場のだ真ん中、血の臭いを気にする奴なぞいやしい。
それにこの悪臭だ。お前だって何もおかしいとは思わなかった
んだろ」

「くっ……」

二人の周囲に漂う悪臭はひどいものだった。ジェイドがかけたブラッドマジックや辺りに転がる無数の遺体が流した血の臭いも当然あったが、それよりも火球の魔法に焼かれた人体が焦げる臭いは特に強烈であった。

「このまま衰弱の呪文の進行でくたばる様を眺めるのもいいもんだが、残念ながら俺は忙しい身でね。そろそろ終わりにさせてもらう」
ジェイドは相手の体を引き寄せ、片腕と腋だけでその動きを封じる。

そんな事が可能なほどゴールの筋力は低下していた。

ゴールは既に自身が身に付けている防具の重さに耐えるので精一杯で、ジェイドを押し退ける力など無い。

「何をするつもりだ」

ジェイドが空いた方の手をゴールの鎧の部分に添える。

「まあ、見ておけ」

そう言つてジェイドが呪文を念じる。すると、鎧の手が当てられた部分の色が変わりはじめる。

オリハルコン特有の炎のように美しい光沢は失われ、黒く淀んだ色に染まっていく。

それは徐々に広がっていき、ジェイドの手より一回り大きなものとなった。

「腐食の魔法だ」

鎧の黒く濁った部分はボロボロと崩れ落ち、ゴールの腹部に悪寒が走るような感触が生まれる。

「馬鹿め、調子に乗りぎたな。こんなに変色させれば、ブラッドマ

ジックを使った事などすぐにバレる。てめえも終わりだな」

「証拠を残さなければいい」

「なっ!?!」

「俺は火属性の魔法にも心得があつてね。クックク、この至近距離ではオリハルコンの防具とて爆破の呪文で木端微塵だ。もちろんお前の体もな」

魔法の魔力はたとえ対象者が死のうと一定時間その遺体に残留する。

ブラッドマジックは感知され難い魔法ではあるが、万が一遺体をすぐに調べる者がいれば使用した事がバレる可能性は零ではない。で、あるならば魔力が残留する肉体事吹き飛ばしてしまえばいいわけである。

「ま、待て!!」

「では、さようなら」

問答無用でジェイドは爆破の魔法を発動させる。

ドーン。

ジェイドの手から爆炎が上がり、ドワーフの肉体をその装備品ごと散り散りに吹き飛ばす。

爆発によつて生まれた衝撃波はジェイドの周囲の遺体を吹き飛ばし、めらめらと燃えていた炎を掻き消すほどの勢いであった。

この程度なら、奴等でも問題ないか。

ハンスとトンボの事がジェイドの頭をよぎり、どこか不満気な表情を浮かべ彼はその場を去ろうと歩きだす。

ヒヒーン。

突然ジェイドの後方から馬のいななきが聞こえ、さらに男の声がある。

「ジェイドオオオオ!!」

ジェイドが歩みを止め振り返り、声のする方を向くとそこには見覚えのある男が馬に跨っていた。

「おやおや、これはお久しぶりです」

「キサマさえ、キサマさえいなければ!!」

ジェイドの前に現れた男の顔は鬼の形相である。その顔を嘲笑うような口調でジェイドは言った。

「そんなに怖い顔しないでくださいよ、前師団長殿」

敗軍の将

勝敗は決した。

ガエルのもとにスタールとギンが戦死したという報が届いた時、彼は自身の命脈が尽きた事を悟った。

「どうするんだー!!」

公国正規軍総大将トレントは大見得を切って傭兵達を動かしたガエルを責めるように問いただす。

現状の戦況は反転攻勢にでた公国軍が帝国を押し込んでおり、一見公国有利というものであった。

だが、三枚の切り札のうち二枚が無力化されたとなれば、いつ帝国側に戦況が傾いてもおかしくはない。それどころか、兵士の質を考えればそうなる事は必然であった。

「どうもこうもない。このまま押しきる」

「無茶だ。こちらにはこのまま敵を押し切るだけの力はない。それどころかじきに押し返されはじめるぞ!!」

「言っただろうここで勝つ必要があるのだと。撤退させたいのか？退かせてどうするつもりだ。籠城でもするのか？してどうなるしてどこを守る、何を守る。ここで敵軍を破らねば貴様らの焼かれる街が増えるだけだぞ」

「それは……」

まるでガエルは彼の作戦には非がなかったかのようにトレントに對して強い口調で言った。

トレントは答えに窮する。

「だが、何か……」

「何か？ 貴様にできる事はせいぜい神に祈る事ぐらいだ」

「言わせておけば」

ガエルのさすがの言い様にトレントもついに激怒する。

だが、そんな彼を無視するかのように振る舞い、ガエルは自身の

馬を呼んだ。

「オイ、聞いているのか！！　もとはと言えばあんたが勝手に……」
ガエルは理解していた、この戦に勝ち目がなくなった事を。しかし、軍を退かせるわけにはいかなかった。

この敗戦の責任は間違いなくガエルにある。逃げ帰ったところで傭兵軍の大将としての任を解かれる事は間違いなく、それはガエルにとって死と同等の意味を持った。例えこの場から逃げおおせようと前回の反乱軍戦と違い再起する為の舞台はもうないのだ。

だとするならば、今この男に出来る事は自分をこのような状況に追い込んだ者への復讐、ただそれだけである。

たった一人の人間を殺す事が目的となった今の彼にとって、もはや帝国と公国との戦いの結末に意味はない。

「どこへ行く！！」

トレントは馬に跨り陣を離れようとするガエルを引き止める。

「最初から間違っていた。俺が直接動けばこんな事にはならなかったのだ」

「馬鹿な事を。あんたが一人ですらどこでどうにかなるもんではないだろう」

「どうか、貴様らが頼りにならんから俺がでる必要があるんだ」
戦況が悪化していくのを変える事は出来はしないだろう。それでも目的の人物を抹殺する為にはガエル自身が動くしかなかった。

ドーン。

突然前線で大きな爆発が起こる。

それは最後の切り札であるゴールがいるであろう場所であった。急がなければならない、時間が過ぎるほどにガエルにとっての目標達成が困難になるだけなのだから。

「チッ、とにかく俺はでる！！」

「待て！！」

トレントの最後の制止を振り切るようにガエルは強引に馬を走らせる。

「クソッ、勝手にしろ！！ もう付き合いきれん！！」

前線に向かうガエルの後ろ姿を見送りながらトレントは吐き捨てるように言った。

「おい、傭兵共を囷にいつでも撤退できるよう準備しておけ」

「撤退ですか……」

「そうだ。何か文句でもあるのか？」

「いえ」

近くにいた副官に撤退準備の指示をだすトレント。

彼ももつこの戦が負け戦となるであろうという事は理解できていた。

ただ、退かせたところで何か特別な打開策があるわけではなく、それが彼がずるずるとガエルの作戦に付き合わされる事に繋がっていたのだ。

それでもガエルとは違い彼には時間、猶予があった。

この戦の結果はガエルの暴走と呼ぶべき強引な作戦の強行によるものだと言張できるし、この戦場から撤退後に公国軍の独力で帝国軍を押し返せずともロマリアが帝国を破る可能性は十分にある。ここでガエルと共に破滅する必要も義理もなかったのだ。

「傭兵共にはこちらの動きを悟られるなよ」

「はっ」

これから劣勢となるであろう公国軍にとって、金の為だけに働く忠誠心の低い傭兵達は信頼できない。

ならば弱兵であろうと公国領内に家族を持つ公国正規軍を籠城戦に備えて温存する必要があるとトレントは判断した。

「オリバーの三騎士も残るはオイゲンだけとなるか」

トレントは破滅していく一人の男に世の無常を少なからずとも感じていた。

「そんなに怖い顔しないでくださいよ、前師団長殿」

目前の男のそんな言葉を聞きながら、ガエルは憎しみと怒り増幅させる。だが、彼の中にはそれ以外にも喜びに似た感情が僅かながらも生まれていた。

広い戦場の中でこんなにも早くジェイドを見つけられるとは、まるで抹殺するチャンスを大いなる存在が与えてくれているかのようだったからだ。

「賊上がりの分際で、一端の師団長気取りか。虫唾が走るわ!!」
キサマのような姑息な奴さえいなければ俺は!!」

「まだ帝国軍の師団長でいられた? フフ、それに何の意味があるのですか。貴方が今のような境遇にあるのは何も私のせいではない。貴方はよくご存知なはずでしょう、この世界には弱い者に生きる資格などありはしない事を。……貴方が弱かっただけですよ、いや弱くなりすぎたのかもしれませんが。でも、同じ事です、もう貴方は必要のない人間だ。だから私は必要のない人間に退場していただくのを少し早めただけ」

「黙れ!!」

「もう終わったのですよ、貴方が生きる事を許した時代が」

そう言いながらジェイドは辺りに転がる遺体から使えそうな一本の剣を拾いあげた。

「ジェイド!!」

ガエルが馬の横腹を蹴り、馬を急発進させる。

ガキーン。

馬の突進をかわし、さらに馬上から放たれたガエルの剣の一撃を受け流すジェイド。

攻撃を流されたガエルは馬を反転させ、再びジェイドに向かっていく。

ヒヒーン。

馬が悲鳴をあげた。

ジェイドが突進をかわしながら馬体を剣で切り裂いたのだ。

「もらったああ!!」

その隙を付くようにガエルは馬上から飛び降りるようにしてジェイド目掛けて剣を叩きつけた。

だが、その攻撃も避けられてガエルの剣は激しく地面を斬り付ける形となってしまう。

砂埃が宙に舞い、大きく体勢を崩したガエルにジェイドは反撃の剣を繰り出そうとするが。

ヒュン。

ジェイドの顔先わずかのところでガエルの剣が空を切った。

体勢を崩したまま斬りあげるように放ったガエルの攻撃はそこらの兵士が万全の体勢から放つ一撃よりよほど速いものであった。

「なるほど、これは予想以上だ」

ジェイドの試しているかのような言い方はガエルの不快感をさらに募らせる。

「自惚れるなよ」

一目見た時からガエルはジェイドの事を嫌っていた。それは生理的嫌悪としか言いようがないものである。

自分の部下となつてからはジェイドの振る舞い方がいちいち癪に障り、嫌悪感は日増しに強くなった。

それでも、ガエルはジェイドの実力を認めていた。いや、認めざるを得なかった。ジェイドの武人としての実力は彼の存在をどれだけ嫌悪しているようが、突出していたからだ。

「それは貴方でしょう」

カキーン、ガキーン。

何度もぶつかり合う剣と剣。

ガキーン、カキーン。

ガエルの攻撃はドワーフ達のように重い一撃でありながら、さらに速さも備わっていた。

致命の一撃を受ける事は無かったが、徐々にジェイドが押されていく。

やがて、ジェイドから余裕が消え、狂人の顔が浮かぶ。

「フフ、敬意を表するよ。老いてなお醜く抗うお前の姿には」

そう言ってジェイドが強く念じるとおどろおどろしい魔力が彼を覆い始めた。

それは鼻をつく臭気を放つ魔力だった。

「キサマ、そんな術をどこで」

「知る必要はない。お前はもう死ぬのだから」

ゆっくりとジェイドが踏み出したかのように見えた。

「なっ!?!」

だが、彼はそこから驚異的な加速で一気にガエルとの距離をつめると、これまでとは比べ物にならない速さで斬り付けた。

キーン。

間一髪の所でその攻撃を剣で弾くガエル。

だが、体勢を立て直す間も無く、次の攻撃がガエルの左腕を斬りつけた。

「ぐっ!?!」

血が飛び散る。

苦痛に少し顔を歪ませたガエルに対してジェイドの圧倒的な速度での攻撃はさらに続く。

ヒュン、シュン、キーン。

その全てをぎりぎりの所で避け、流してはいるがいつ次の一撃をもらってもおかしくない状況である。

戦いを優位に運んでいたはずのガエルを防戦一方に追いつめるジェイド。ブラッドマジックによる強化魔法の効果はそれほど強力なものだった。

強化魔法はいつかは切れるものではあるが、それまで守りきれる様子ではない。

「無様だな。三騎士様も所詮はこの程度か!?!」

必死で攻撃をかわす、ガエルに罵声を浴びせるジェイド。

「いい加減に理解しろ。弱者であるお前は俺に殺されるだけの存在なのだ!?!」

右から左から、上から下から、自由自在に剣を操るジェイドの攻撃が再びガエルの肉体を捉える。

「うっ」

右腕、右足、左足、右肩、左肩。

深い致命の一撃にならずとも、斬りつけられた各所から次々と血が噴き出す。

「アッハッハッハ、踊れ、踊れ。虫ケラの踊りで俺を楽しませろ！」

小さな虫の羽や足を千切り遊ぶ子供よりも、確かな悪意と強い快楽に溺れるようにジェイドは笑った。

「ほら、ほらどうした。威勢よくでてきてその様か」

もはや勝負になっていなかった。

ジェイドの攻撃を防ぎきるだけの体力はガエルにはすでになく、ジェイドがわざと急所を外して遊んでいる状態である。

必死に攻撃に耐えるガエルの姿は痛々しく、それがジェイドを余計に興奮させた。

「殺してやるよ」

ジェイドが宣言する。

「殺してやるよ。お前もお前の妻も子供も。俺が全部殺して奪ってやるよ！！」

その挑発的で、屈辱的で、醜悪で、おぞましいジェイドの言葉はガエルの鬱積してきた感情をついに真に爆発させた。

「ジェイドオオオオオ！！」

ガエルが馬に乗って現れた最初の時よりも強く絶叫した。

傷だらけとなったガエルの体。その彼の指にはめられていた一つの指輪が叫び声に呼応するように輝く。

「くっ」

指輪は強力な魔力を放ち、ジェイドを吹き飛ばした。

吹き飛ばされたジェイドが顔をあげるとその視線の先には指輪から放たれた強い魔力に覆われたガエルの姿があった。

「これは……」

魔力に覆われたガエルの持つ雰囲気、オーラは人としてのそれではなく、獣どころか、鬼と言うべきほどのものに變化していく。

その凄絶な魔力のオーラは、ガエルの持つ真の力を目覚めさせた事を証明するものだった。

「ようやく狂鬼士ガエル様のお目覚めってわけだ」

強力な力を誇示するかのようなガエルのオーラを見てジェイドは喜んでいた。

狂鬼士

不安を捨てる。恐れを捨てる。そして希望を捨てる。そうして残った感情こそが本物なのだ。さあ行け、怒れる戦士達よ

蛮怒王 ドドルガ

男には何も無かった。

臆病者と呼ばれ、名ばかりの騎士としての称号を持った父親とそんな父親に愛想を尽かした母親。男を愛し、男が愛すべきはずの者達は愛おしさとは程遠い存在であった。

曾祖父、祖父達が築いていった一族の富と名声は凡庸にすら劣る父親によつてそのほとんどが消えてしまい、使用人達は皆、父の代でこの家は破滅すると話しまだ幼かった彼を哀れんだ。

男がわずか十五歳の時に、嫌々駆り出された戦場で臆病者の騎士が死ぬ。最後は逃げ回った末の無様な戦死だった。

一家の主が死ぬと残り少ない家の財を持ち出して母親は行方を眩まし、それから幾日かすると今度は城から使いの者達がやってきて男に唯一受け継ぐ物だったはずの騎士の称号が剥奪される事が伝えられた。

当然だった、父親がした事を見れば当然の事なのだ。それでも、心の底から溢れていく純粋な感情をその時の男には抑える事などできはしなかった。

全てを無くした男は、何も持たぬ事に気付いた男は叫ぶ。
世の理不尽を、己の境遇を。

あんな奴がいなければこんな目には合わなかった。

その思いは他者への憎しみと怒り。

あんな奴がいなければ俺は生まれる事すら出来なかった。

その思いは自身への憎しみと怒り。

叫びが産声へと変わったまさにその瞬間に、男は真に生まれた。十五歳のその日に、慈愛の中ではなく激しい怒りの中で男は生まれたのだ。

城からの使者達に襲いかかり瀕死の重傷を負わせ、それを止めようとした者達にも怪我を負わせた。

衛兵達が駆けつけて来ると、彼らから剣を奪いとり我流の剣技でさらに暴れまわった。

男が取り押さえられた時、最終的に死者は二十名近く、怪我人はその倍以上にのぼっていた。

捕らえれた男は死刑になるはずだったが、執行の前日に刑が取り消される。彼の存在に目を付けた者がいたのだ。

そして騎士の称号剥奪も取り消され、十五歳の騎士が誕生する。

男にとって手にした騎士の称号は取り返したモノでは無く、生まれて初めて掴み取ったモノだった。

十五歳の騎士は次々と戦場に赴き戦果をあげ、瞬く間に出世していった。

無我夢中に戦い続け十八で大隊長、二十で旅団長、そして二十一年で師団長へと上り詰めていく。

彼がこれほど早く師団長にまで成り上がったのは実力はもちろんの事、運も大きな要因だった。

その運とは彼が十八の時に偶然手に入れた指輪、マジックリングとの出会いの事である。

その指輪の力が初めて彼のもとで発揮されたのは指輪を手にして一月ほど過ぎてからの戦場、彼が絶対絶命の危機に陥った時だった。危機に陥った男は死を前にして恐怖するのではなく怒った。その万物に対しての怒りが指輪の力を解放させる事となる。

指輪に込められた魔力と爆発させた怒りで男は鬼と化し、その圧倒的な力で危機をのりきった。単騎で敵軍を圧倒するようなその戦いは狂気すら感じさせるもので、男は狂鬼士ガエルと呼ばれ、当時同じく活躍していたオイゲン、ベルントと並んでオリバーの三騎

士と称えられるようになる。

だが、高まる名声と莫大な富がガエルを満たす事は無く、ただ戦い続ける事だけが当時の彼の全てだった。

彼がその頃に拘っていたと言えるのは臆病者の父親とは違い、自身が騎士であるに値する者だという証。それは戦う事でしか彼には証明できないモノであった。

しかし、そうであつたからこそ彼は怒りという感情に素直でいられたし、怒りに素直であり続ける限り、指輪はガエルに応え続けたのだ。

そんなガエルに変化をもたらしたのは一人の女性との出会いだった。

彼女がガエルに与えた愛情は、偉大な騎士を墮落させる事となる。妻を持ち、子を持った男は愛を知り、力を失つたのだ。

希望、期待、愛情、人が人である為に必要なものは、鬼が鬼である為にはあつてはならないモノだったのだ。

それらの感情は恐れと不安、そして躊躇いを生む。

感情の爆発で自我を失い、そのまま破滅するやもしれぬと躊躇う騎士に指輪がその力を与える事はなくなった。

それでもガエルは幸せだったのだ。

偉大な騎士はその幸福によって眠りに付き、もう目覚める事はないはずだった。

あの男が現れる事が無ければ……。

「グアアアアア!!」

言葉になつていない叫びが大地を揺らした。

「鬼とはよく言つたもんだ」

ジェイドの視界に映るのは、うつすらと人の面影を残した鬼である。

異様なまでに隆起した筋肉は身に付けている防具までも破壊しそ

うなほどで、その体を覆う魔力は重々しく禍々しい。

さきほどまでは確かにあった大きな傷も、指輪の力によって完全に塞がっていた。

「グオオオオオオ!!」

叫ぶ鬼の顔は怒りに歪んでいた。

「今度はもつと楽しませろよ。俺は見てみたいんだ、鬼がナクところを」

「アアアアアアアア!!」

二人がほぼ同時に動く。

ガキーン。

速度は互角だった。

キーン。

だが、パワーには差があった。

荒々しく暴力的なガエルの攻撃は空を斬るだけでもその空気を揺すほどのもので、強化魔法のかかったジェイドを凌駕していた。

シュン、ブオン、キーン。

攻撃を絶妙なタイミングで避け、受け流すジェイドだが反撃する機会が見つからない。

ガエルの防御を捨てた狂気染みた攻撃が、逆に反撃の隙をなかなか与えなかったのだ。

チツ、無理矢理でも。

ジェイドは押され崩れかけた体勢から強引に片手を空け魔法を發動させる。

バーン。

瞬時に手から炎が炸裂し、ガエルの肉体を十メートル近くも吹き飛ばした。

無理な体勢から短時間で発動させたその魔法では、狂鬼と化した今のガエルにとって致命の一撃にはなるまい事をジェイドも承知していた。

鬼が起き上がるうとする間にすぐに次の魔法を練り上げる。怪し

き魔力の塊がジェイドの肉体から放たれ、それは忌々しい魔力の霧となり、ゆつくりと目標の方へ向かっていく。

迫り来る魔力の霧をガエルは避けようとしてもしない。

見えてないのか？

ジェイドのその考えはすぐに否定される。

命中したはず魔力の霧はガエルのオーラに掻き消されたのだ。

ジェイドの放った魔法は衰弱の魔法だった。先ほどのゴールとの戦いでは恐ろしい効力を見せた魔法も今のガエルにはまったく効かない。

それは今のガエルが真の戦士である証だった。

「クツクツク」

ジェイドは笑った。

それは余裕や恐怖からくるものではなかったし、強敵との戦いが楽しいわけでもない。

強敵を我が手で殺せる快楽を想像すると笑わずにはいらなかったのだ。

ヒュン……キン！！

二人の戦場に邪魔が入る。突如公国兵達が現れ、矢をジェイドに向けて放ったのである。

「ガエル様！！　こんなところに」

現れた公国軍の兵士は三人だけ、炎の中の生存者を探しにきたのか、あるいはガエルを探しにきたのかジェイドには判断つかぬところであったがどちらにしろ邪魔者には変わりない。

まずその邪魔者達から始末しようとジェイドが動こうとすると同時に。

「ぎゃあああああ」

公国兵達は悲鳴をあげ絶命した。

ガエルが彼らを襲ったのである。

もはや、ガエルには敵味方を区別するほどの思考すら残っていなかった。そのわずかな思考能力すらも怒りの力に変えていたのだ。

「クツクツク、いいぞ。それでいいんだガエル!!」

理性の欠片をも失うほどに怒り狂った狂人と歪んだ快楽に溺れる狂人。二人の狂人同士の戦いは凡人が束になろうと止められはしない。

「来いガエル!! 俺は今のお前を殺したくて仕方がないぞ!!」

「アアアアアアア!!」

鬼が吼えジェイドに斬りかかる。

ガキーン。

強力なその一撃をジェイドは剣で受ける。彼の体からはブラッドマジックの魔力が溢れ出ていた。

ジェイドは鬼の圧倒的パワーに対抗する為、限界を超えるほどに自身へ強化魔法をかけたのだ。

そんな無茶をした魔法の効果は長く続かない。それどころか、魔法によって死や障害の残る危険性が増大していた。

ガキーン、キーン。

だが、関係ないのだ。

この戦いは限界を超えた者同士の戦いであり、そうしなければ確実な死が相手から与えられるだけである。

限界を超えず死ぬか、限界を超えて死ぬかもしれないを選ぶか、

……ジェイドは後者を選んだ。

「アアアアアアア!!」

ジェイドの頭上へ、ガエルの渾身の一撃が振り下ろされる。

ドドン。

間一髪の所で避けられたガエルの剣は音をたてて大地を裂く。

その隙に後方へ飛びのいたジェイドは高速に剣を操り、空間を斬った。

そうすると、いくつもの真空の刃が生まれ、ガエルに向かって飛んでいった。

「ガアアアアア!!」

次々と命中する真空刃、だが鬼の体には浅い傷しか付けられない。

飛んでくる刃にもかまわず、ガエルは強引にジェイドとの距離を詰めていく。

ガキン。

両者の剣がぶつかりとジェイドの腕が跳ね上がり、剣が飛ばされてしまう。

「腕の一本ぐらいくれてやるぞ!!」

その言葉に従うわけではなかったが、体勢を崩したジェイドの左腕をガエルは勢いよく斬り付けた。

魔法で強化された片腕を斬り跳ばそうと力んだその瞬間、ガエルの動きがわずかに鈍り、隙が生まれる。

「終わりだ、ガエル!!」

ジェイドは空手となった右手から強力な魔法の短剣を作りだし、ガエルの首めがけて突き立てた。

「ガアアアアアア!!」

ナイタ鬼の首をそのまま掻き切るようにして切り裂くとどす黒い血が噴き上がる。

そのまま倒れるようにしてガエルは崩れ落ちた。

「ハア、ハア……、ハハ、ハッハッハ、アッハッハッハ」

斬り落とされた左腕の事など気にする素振りをみせず笑うジェイド。

「ハッハッハッハ、良い声でナイタなあ、アハハハハハ」

ジェイドの脳は十分な睡眠をとった後の人間のように冴えきっており、胃は十分な食事にありつけた人間のように満たされていた。

……彼は射精していた。

これだけが、この快樂だけがこの狂人にとって本物だった。

「ハッハッハッハッハ……」

突然、快樂に溺れる男の狂気の笑いが止まった。

転がるソレが動いたのだ。

「ガッア、ガア、アアアア!!」

止めを刺したはずの鬼が彼の目の前でゆっくりと動き立ち上がる。

満身創痍のジェイドにもう勝ち目はない。左腕は無く、武器も無く、強化魔法の効果はきれてしまい、魔力もほとんど底をついている状態だった。

そんな絶望的な状況で常人には理解しえない言葉が自然とでる。

「いいねえ」

ジェイドにとって今のガエルはこの世でもっとも美味な食事であり、どんな美女よりも魅力ある存在なのだ。それだけのモノを目の前にした彼からそういう言葉がでても仕方のない事だった。

「アアアアアアア！！」

立ち上がった鬼が目の前で咆哮し、狂人を滅殺せんと天高くその拳を振り上げる。

それでもなおジェイドは笑みを浮かべた。

死を前にして恐怖も絶望もなかった。

ただ彼が惜しんだのはこの狂鬼を殺す快楽、今の自分にそれをもにすだけの力がない事だった。

「アアアアアアア！！」

破滅の一撃が振り下ろされようとしたその時、突然鬼の動きが止まった。

ジェイドにとって悪い予感が、彼の脳裏に浮かぶ。

「オイ、ふざけるなよ……」

鬼の形相のまま微動だにしないガエル。

「ふざけるな……」

ジェイドの中から快楽が消え、怒りが生まれる。

「ふざけるな、……ふざけるなああああ！！」

ジェイドが絶叫した。

しかしガエルは動かない、いや動けなかった。

指輪の魔力の効果なのか、ガエルは拳を上げまさに振り下ろさんと叫んだその姿で石のように膠着し、息絶えていたのだ。

許せるはずがない。

ジェイドにとって、自分の手によってではなく、怒りと指輪の力

に耐え切れず死んだガエルを見ることは、美食家の前で一流の料理を腐らせるようなものであり、絶世の美女が老いて醜悪な老女となつていく姿をみるようなものであり、苦痛でしかなかった。

だが、どれだけジエイドにとって耐え難きものであっても、現実の光景は彼に残酷な勝利を告げていた。

彼は生き残ったのだ、ガエルの鬼としての寿命に助けられて。

戦況

新たな部隊が戦場に突如として姿を現したのは、ガエルの戦死後から程なくしての事だった。

それはジェイドが前線にでる直前に伝令を向かわせておいた部隊であり、戦局を決定付ける一手。

既に公国軍にはこれ以上の戦力を相手する余裕はなく、マランダの物見塔から敵の増援が向かっているとの知らせを受けたトレント達は即座に撤退を開始した。

撤退時の囫とされた傭兵達の中には、正規軍側の不審な動きを事前に察知していた者もあり、彼らは撤退指示がでる前から隙を見て、あるいは撤退時に上手く戦場から離脱したが、比較的経験浅い傭兵達は逃げ遅れ、追撃戦にうつった帝国の軍勢にあつという間に飲み込まれてしまう。

雇い主に見捨てられた傭兵達の中には戦意を失い、帝国側に降伏しようとする者達もいたが、街を焼き払い、その住民達を殺戮するような帝国軍が一度剣を向けた彼らを許すはずもなく、虐殺とも呼べる一方的な攻撃の餌食となってしまう。

こうして、公国軍は狙い通りに傭兵達を犠牲にして、正規軍戦力の温存に成功するがそれはトレントの采配が良かったというわけではなく、端から帝国側に本気で公国軍の戦力を追撃しようという意志がなかったからである。

帝国側の狙いは最初からロマリア王国軍を引き摺り出す事であり、その餌となる公国軍を壊滅させ、降伏させてしまうような事態は避けたかったのだ。

この一戦をとおして公国側は合計約七千五百名という大量の死傷者を出し、兵力を大きく削がれてしまう。

帝国側にとってこの成果は十分すぎるものであり、彼らはこの戦いの後、すぐに公国西部に追加の三師団規模の侵攻軍を投入し、電

撃的に公国西部を攻略。西部と南西部合わせて六師団以上という圧倒的な戦力で攻めてくる帝国軍を前に公国軍は戦線を縮小せざるを得なく、多くの砦や城、街が放棄され、結果として国土の八割以上を彼らはわずか一週間と経たぬ間に失う事となった。

この一連の結果は公国側のロマリアに対する不信感を生む。

公爵家に代わり、事実上政治を行っていた公国商工会の有力者達は、最大の都市であるスタンチオノードに集結し対策を練っており、その中で、帝国がこれだけの戦力を公国方面につぎ込めるのはロマリア方面が手薄となっている証拠であり、それは裏で帝国とロマリアが組んでおり、公国を嵌めたのではないかという、一見馬鹿げたような疑いも、真剣に議論されるほどであった。

だが、どれだけ疑心を募らせようと、結局はロマリア軍なしには現状を打開できるはずもなく、彼らはどうにかこの窮状をロマリア側に伝え、助けを乞う必要があった。

幾人もの使者がロマリアに向けて放たれるが、帝国側は押し込んだ戦線を海上、陸上共に大軍をもってして封鎖。一人として公国の人間がその先には進めぬ状態となってしまうていた。

焦り、苛立つ大商人クレイグは、遂に同盟の提案者でもある男にその責任を負わせるようにして、ロマリアへの使いを命じる。

男が帝国の放ったスパイであり、その命令こそが帝国の狙いであるとは知らずに……。

公国からロマリアへ向けての決死の使者達が送られ始めるよりも幾日も前、ロマリア南部サウゾン地方に、国王ローラントの姿はあった。

ローラントの軍勢は南部側の国境に帝国軍が現れたとの知らせを受け、急ぎ駆けつけたのだが、そこで待っていた兵からの言葉は意外なものだった。

「……空だったのです」

「なっ、空とはどういう事だ」

ラワンが動揺しながら言った。

「そのままの意味であります。敵の姿は無く、無人の状態でありました」

報告する兵士の顔も自分でも信じられぬというような表情である。彼が言うには、サウゾン地方の守備部隊はローラントの事前の指示通り、敵影を確認後、すぐに最前戦の二つの砦を放棄。後方の砦に待機し、さらに幾つかの砦をローラント達が援軍に現れ合流できるまで放棄する手筈だったのだが、最初の二つの砦を攻略したはずの帝国軍の動きがまったく無かった。不審に思った守備隊の将は彼と幾人かの者達に放棄した砦の様子を見てくるよう命じたのだが、命を受け彼らが向かった先で見えたものとは占拠しているはずの帝国軍の姿ではなく、無人の砦であったというのだ。

「どういう事でしょうか」

困惑しながらラワンがローラントの方を見る。

「陛下、これはやはり……」

カルロのその言葉にローラントは険しい顔で頷き言った。

「急いで、ブレイ地方に引き返す」

最悪の事態に陥り始めている。そんな予感がこの瞬間において二人の男に共通していた。

だが、それはまだ絶望ではない。

ローラントは最低限の守備兵力を残したまま、再び軍勢をブレイ地方へと向かわせた。

「陛下、ご報告申し上げる事が」

夜を徹し、ブレイ地方へと引き返してきたばかりの国王ローラントにアーノルドがやや興奮した面持ちで言った。

「夜明け頃にケンロウの様子がおかしいとの報告があり、ただちに調べさせたのですが、信じられぬ事に一夜のうちに無人のものとなっているようです……」

「なんだと、こちらもか！！ いったいこれは……」

アーノルドの報告を直接受けたローラントではなく傍にいたラワンの方が驚愕の声をあげた。

いくつもの戦を経験してきた男である彼がこれほど明らかな動揺を見せる事は、この状況がどれほど奇妙で不自然、不気味であるかを示していた。

「要塞内に何か細工をしているような事は？」

「はい、その可能性も考え調べさせましたが、今のところ何か見つけたとの報告は入ってきておりません」

「これは案外アーノルドの言っていた通り、帝国軍はうまく機能していないという事ではないでしょうか？」

「そうです陛下、これは千載一遇の機会。ケンロウを占拠し、そこから一気に帝国軍を蹴散らしましょうぞ——」

ラワンとアーノルドはこの奇妙な状況をどちらかと言えば楽観的に捉えているようで、危機感とい点においてローラントやカル口とは少しばかりか溝が出来ていた。

だが楽観的、悲観的どちらに考えようが、これ以上敵がくるのをただ座して待つだけには最早いかなかった。

ここからすぐにも大きく動く必要性をローラントも考えはしたが、帝国の動きに翻弄されブレイ地方とサウゾン地方をほとんど休みなく移動した兵達の疲労は溜まっており、休息が必要だと判断する。

「安全が確認されしだいケンロウに入り兵の休息を取る、それから動く前に少しでも情報が欲しい。特に公国方面の戦況が知りたい。さらに斥候をだして周囲と公国側を調べさせるのだ」

「御意」

敵情を理解せずに、無闇に大軍を敵領土内で動かす危険性は高く、兵の休息が必須ならばその間に少しでも情報を集めさせる事はとても理に適ったものだった。

無人のケンロウの占拠は何一つ問題なくスムーズに行われ、ロマリアと帝国の長い戦いの歴史の中で難攻不落を誇った砦は呆気なく

ロマリアのものとなる。

やがて、ケンロウに入って三日は経った頃、ローラントの指示で放たれ斥候達が幾人か戻り、ケンロウからある程度の距離である周辺の情報はおよそ明らかとなった。

斥候のもたらした情報は予想の範囲内のもので、少なくともこの辺りには大規模な敵軍は確認されておらず、いくらか小規模なものの姿があるだけでロマリア軍本隊の進軍に大きな支障をきたす存在ではなかった。

その情報と兵の疲れがほとんど取れた事を確認したローラントは、まだ公国方面の情報が不十分な中で主だった将兵を集め宣言する。

目指すは帝都オートリアであると。

これに多くの者達は喚声を上げ応えたが、カルロは急な進軍にわずかながらの懸念を口にした。

だが、ローラントもその危険性は十分と理解はしていたし、カルロも懸念を持ちながらも結局はこの作戦の必要性は理解していた為に、進軍は実行される事となる。

今までの手薄な敵戦力は直接知らせがなくとも公国の危機の可能性を十分と表しており、これ以上の躊躇は許されなかった。素早い正確な情報は大切なものであるが、遅すぎるそれを待つは価値を大きく損なうところか、害となる事すらあるのだ。

帝都を手早く陥落させる事が帝国への致命の一撃となり、それは公国をも救う事になるのだと、この時彼らは考えていた。

そして国王ローラントの号令のもと総勢約六万八千もの兵がケンロウから帝都オートリアに向けて侵攻を開始するのだった。

救うべきは

「クックック、無様だな」

跪く男の姿を蔑み、愉悦するように太ったそれは大きな椅子に腰掛けながら笑った。

オートリア帝国皇帝グリード、彼は帝都から離れ、公国との国境沿いにある城に居た。そして、そこで各方面から入ってくる最新の戦況の報告をオイゲン將軍と共に受けていたのだ。

「申し訳ありません。しかし、事は何の問題もなく進んでおります。どうかご安心を」

詫びる男の言葉はどこか冷めたもので無感情、そして形式おびている。

「別に戦況に不満があつて言つてゐるわけではない。ただ単純に、そんな姿で戻ってくるとはいささか滑稽でな。クックック」

グリードの目の前にいたのは、片腕を失くし現れたジェイドだった。

彼はガエルとの戦闘後、わずかに残っていた魔力で火の魔法を使い、切断部を焼き止血。部隊の指揮を部下に任せて先にグリードのいるこの城まで帰ってきていたのだ。

「大事を為すには犠牲は付き物です。この失くした腕もまたそうであつたでしょう。公国との戦いにはそれだけの価値がありました」

「そうして無様に逃げ帰ってきているわけか」

グリードは相変わらずの意地悪く下品な笑みを浮かべながら言った。

「まさか。もはや公国軍相手に私が直接指揮を執る必要もありません。他の者に任せておいても問題ないでしょう」

「ハッハッハ、冗談だ。お前がそこの臆病者とは違ふ事なぞわかっている」

「この戦において警戒すべき敵はロマリアのみです。彼らとの戦い

において、たとえ肉片一つになろうと陛下の為に戦いましょう」

「相変わらず大袈裟な奴だ。もとよりお前の作戦が上手くいくのなら、肉片になる必要もなかるう」

「もちろんでございます」

「まあ、期待しているぞ。……いや、期待というのは変だな。上手くいつて当たり前前の事なのだから。……ジェイド、失望させてくれるなよ」

重く静かな圧迫にも、ジェイドはいつもの落ち着いた調子で答える。

「御意のままに」

帝国領内を進軍するローラント達は道中、帝国軍のゲリラ的な抵抗を受けた。

それがロマリア軍の進軍速度を落とす事を目的としたものである事は明らかであり、このような攻撃は元来ロマリアが得意とし、帝国からの侵攻を防ぐ際に多用していたものだった。

このゲリラ的攻撃を担当していたのは、ミロスラフの部隊で彼らの高度に組織化、精練された部隊による散発的で執拗な攻撃は大規模な軍を運用するローラント達には効果的だった。

ローラント達は帝都オートリアへ向かう為の障壁となる城ノード城、その付近へと辿り着くまでに予定よりもはるかに多くの日数を消費してしまう。

苦勞し辿り着いたノード城は帝国にとってロマリア、公国両方面に展開するには不可欠な補給線の中継地点拠点であり、敵軍の帝都進入を防ぐ重要な城でもあった。その為、これまでとは違い多くの戦力がここには配置されており、常駐の守備兵に加え、ケンロウから移動してきた兵達、メスト率いる第十六師団、ホルガー率いる第二十五師団、アレクサンダル伯爵の私兵達と周辺にはミロスラフの師団も展開し、総勢二万五千以上もの兵員がこの戦域に投入されて

いた。

六万を超える兵を引き連れたローラント達だが、野戦とは違い城攻めとなると相応の時間と被害を覚悟しなければならない。それでも、ロマリア軍はこのノード城を攻略し、帝都侵攻を急ごうとしていた。

未だに不明慮な公国方面の戦況しだいではもたもたしている、敵領内において包囲孤立する危険があり、速やかな帝都攻略が危険を解消すると同時にこの戦争の終結につながるとローラント達は考えていたのだ。

だが、今まさに総攻撃を開始しようかというその時になって、思ってもよらぬ人物が彼らの本陣に現れる事になるのだった。

「ご報告申し上げます、公国よりの使者と名乗る者が現れました。陛下に直接ご報告申し上げたいと申しておられますが……」

兵の知らせに、本陣にいる者達は驚きの声をあげた。

「通せ」

喉から手が出るほどに欲しかった公国側の情報。無下に扱うわけにはいかない。

もちろん攻撃を開始せんというこの瞬間に、それを持った人間が固く閉ざされた国境地帯を越えて現れた事に何の警戒を持たぬローラント達ではなかった。

しかし、通された使者の顔を見た時にそれらの類いは吹き飛んだ。

「アカサ殿ではありませんか」

将兵の一人がその使者の顔を見るなりに言った。

アカサ、つまりキュウジの顔を知る者達はロマリア軍の上層部には多くいたのだ。

彼がロマリアと公国との同盟に関して直接動いていたのだから、当然国王であるローラントもその顔には覚えがあった。

「御目通りの許し、感謝致します。ロマリア国王陛下に至急お伝えせねばならぬ事あって参上したさいにございます」

急ぎの使者の声は非常に緊迫感のある重いものだった。

ローラントは直ぐにでも用件を、そして情報を聞くつもりだったが、その前に一つだけ気になる事があった。

「我々の陣がこの地にあるとよく御分かりになられたな。ここに着き、そう日が経っているわけでもあらぬのに」

疑いや、警戒というほどのものではなかったが自然と感じ取った違和感が言葉となってでていた。

「ロマリアへと直接向かう途中にて、帝国の民共のうわさ話を耳にし、急遽この地へと参りました」

大嘘である。

キュウジは帝国から公国へと送られたスパイであり、彼のもとには帝国軍から様々な情報が入る立場だったのだ。

この男が巡回の厳しい国境をすんなりと抜けられたのも、ロマリアがこの地にいる事を把握できたのもそのおかげである。

キュウジにはクレイグが逃亡を警戒してつけた監視役の人間がついてはいたのだが、それも道中で難無く始末してしまっていた。

「そうであったか、してそれほどに急ぎ伝えなかった事とは」

「陛下、公国は今非常に危機的な状況にあります。帝国の大軍が国境を越え入りこみ、いくつもの街々を焼き払い多くの住民が犠牲となっております」

「なんと惨い事を帝国め」

話を聞いていた者達が憤りながら言った。

「防衛に向かった公国軍が善戦するも敗退、状況は日々悪化しております。どうかお力をお貸し下さい。すぐにでも兵を向かわせていただければ公国はもう持ちませぬ。公国はこの絶望的な状況を打開しようとして、そう遠からぬ日に最後の攻勢にでようとしております。どうか、どうか陛下のお力をお貸し下さい」

キュウジの要請に周囲がざわめく。予想よりもはるかに事態は深刻なものだったのだと、彼らはこの時になってようやく実感していたのだ。

そんな中でアーノルドは今の作戦の続行を主張する。

「陛下、アカサ殿の命がけの願いを無下にはできませんが、この城を攻略し帝都を落とす事が肝要ではありませんか？ 下手に公国へと向かいますと挟撃される恐れが……」

当然の主張だった。ローラント達は何も公国を見捨てて囷に帝都を攻略しようとしているわけではない。帝都攻略が結局は公国を救う事にもなるのだと考えていたからこそ、この城攻めを強行しようとしていたのだ。

ならばここは当初の方針通りに動くべき、そう主張する者がいても不思議ではなかった。

だが、キュウジが次に放った言葉はそういった考えに疑念を生ませた。

「それでは全てが手遅れとなってしまう。敵は皇帝自ら指揮を執り、公国に攻め入っているとの話もあり、一刻も早い援軍が必要なのです」

「なんと、皇帝は帝都を離れているのか」

三度陣内が騒がしくなる。

「ふむ、そう考えれば我が軍の方へと向けた兵力の少なさが理解できる」

ローラントの考えが導き出したものを、察し理解できなかった者達のうちの一人が素直に尋ねる。

「どういう事でしょうか」

「最初から帝都を守る気などないのだ」

「まさか、そんな……」

帝都オートリア。ロマリアにとってそれは憎むべき敵の街である。だが、帝国にとってそれは歴史あり、栄華ある崇高な都で、それを犠牲にするなどそう易々と出来る事ではなかった。

「グリード帝が帝都を守る気がないというならば、話が変わってくる。例え帝都を攻め落とした所で相手側に和平に応じる考えがなければこの作戦は成り立たぬ」

「ですが、帝都には多くの民がおりましょう。そのような者達を見

捨てる事など到底出来ぬ事かと」

「そのような事ができる男なのかもしれん」

歴代の皇帝の中には人の上に立つに相応しくないであろう者達が多くあり、ロマリアも長年そのような者達に苦しめられてきたのだ。そして現に今の皇帝は公国の罪無き民をも惨殺しているというのだから、常識的に備え持っているであろう良心や理性というものを期待する事は難しかった。

「……ではこのノードを抑え、帝国軍を分断しこの地にて迎え撃つというのは」

「それでは公国が持ちませぬ!!」

王と将兵達の話に割って入りキュウジは必死に訴えた。真意は別にあるのだが公国へ向かってもらわねばという点は同じだったのだ。その思いが伝わったのかローラントが決意を込めて口を開く。

「民は血を分けた家族である。それを無慈悲に見捨てる事など我々はすべきであるまい。そして同じ志を持った友を見捨てる事もまた私には出来ぬ。救援に向かうぞ。我らの手で直接皇帝の首を取り、この戦いを終わりにするのだ」

王の宣言を聞いてキュウジは心の中でほくそ笑む。

慈悲ある王の決断は、無慈悲な者達が望んだものだったのだ。

「ははっ!!」

将兵達が慌ただしく移動の準備を始める。救援に向かうと決めた以上、わずかでももたついてる余裕などないのだ、救援の遅れがそのまま自らの破滅へつながるのだから。

ロマリアと帝国。どのような結果になろうと、この二国にとって大きな分岐点となる決戦がもうそこまで迫っていた。

震動

暗闇が全てを覆う世界の中に、うごめく影がいくつもあった。暑苦しく窮屈な空間にそれらはある、日常とはかけ離れた場所に彼らはいた。

ここに朝は訪れないであろうし、夜もまたなかった。

常人には、この場で長く過ごす事などではしない。彼らがここにいるのは与えられた使命をまっとうする為である。

彼らはただひたすらにその時を待った。それが短いものだったのがあるいは長いものであったのか、彼らには判断つかぬ事である。

何故なら闇はその感覚すら狂わすのだから。

「本当に奴らはきてるのか？」

影が別の影にむかつて何かを確かめようとする。

「俺が知るかよ」

「もうだいぶ時間が経っているだろ」

「だからそんな事、俺がわかるかよ!!」

影は何かに苛立ち。影は影に苛立った。

彼らは待っていた、ただひたすらに。

「そろそろだ」

また別の影が呟いた。

「何でわかるんだよ」

「そんな気がするんだ」

影の予感的中する。

突如ゴオオッと地鳴りがし、世界が震動した。

「来たぞ」

「来たぞ」

「出番だ」

影が、いくつもの影が闇の中で興奮し叫んだ。

使者の要請を受けて目的地を変更したロマリア軍であったが、無論、何の障害もなくそこまで進めるわけではなかった。

進路を変えたロマリア軍を追跡しようとノード城から帝国軍部隊が出てきたのだ。

数で圧倒するロマリア軍は野戦にさえ持ち込めばその程度の敵は粉碎できるのだが、迎え撃とうにも追跡してくる部隊には戦闘を行う意志は無く、ただ執拗に後を追ってくるばかりであった。

敵軍の追跡を妨害する為にローラントは後方にいくらか大きな部隊を置く事にする。それは戦力分散を行うという事になるのだが、適切な規模ならば、本軍が接敵した時に包囲されてしまうという危険性を大きく下げることができるという判断のもと実行された。

部隊の規模は一万近く、つまり本軍約五万八千、距離において後方に約一万。それらの大軍がシチ二街道を通り公国へと向かう形となる。

シチ二街道は帝国と公国とを結ぶ街道の中でも最も頻繁につかわれるものであり、他に比べ道幅が広く、短い距離で安全に目的地へと目指せるルートだった。

行軍に際しても有用なこの道を、公国の救援にと急ぐロマリア軍が使用するのは至極当然で、万人が予想できる事でもあった。

そんなシチ二街道には途中、帝国領側の国境地帯においてヒミリ森林が存在していた。この森は凶暴な魔物こそでずに獣がいくらかでる程度であったが、なかなか規模の大きなもので兵を隠すに適した場でもあった。

当然ローラント達は警戒する。

斥候を放ち、丹念に森を調べさせながら進んだが帝国軍の姿を見つける事はなかった。

それでもなお警戒を怠らずに進んでいき、もう森を抜けようかという時になって、彼らの眼前に街道を挟むようにしてそびえ立つ小高い丘が現れる。

ローラントは兵を隠すのならば、まずそこであろうと考え、念入りにその丘を調べさせたのだが、戻ってきた斥候の報告は意外なものだった。

「帝国軍を発見いたしました！！ この森を抜けた平野にて公国軍と交戦中のもようです！！ 敵軍の規模はおそらく一万ほど、公国も同程度であるかと思われます。丘に敵兵の姿はありませんでした！！」

何という天命か、背を向けた敵軍がこの先にいるというのだ。

周りの者が興奮気味に王に言った。

「陛下、これはチャンスです」

誰でもわかる事だった。わずか一万の敵軍が交戦しながら背を向けてるのだ。

しかし、王は諸手を挙げて事態を喜びはしなかった。上手く事が行き過ぎているのが不気味だったのだ。

それに、ここはまだ端といっても帝国領土内であり、追い込まれたはずの公国軍が反撃にでたとしてもここまで追い返したというのか。あるいは何らかの事情でここに孤立していたのだろうか。釈然としないものが彼の心の内に残る。

それでも、攻撃の命令を王は出した。

森にも、道の両脇にあるあの丘にも敵はいないのだ。敵がいるのは前方の平野。それで他に何を警戒すればよいというのか。

部隊は行軍速度を上げ森を抜け、わらわらと前方の平野へでていく。

帝国軍もとくに彼らの存在に気付き、大慌てしているだろう。

ロマリア軍の兵士達はそう想像していた。

半分ほどだろうか、それほどの数が丘を横切り、平野へとでた頃にそれは突如として訪れた。

ガタガタガタ。

一度大地が小刻みに揺れた。それが始まりの合図である。

ゴオオオオオオ。

今度は大きく大地が揺れた。

激しい地鳴りを立て、大地が裂ける。

裂け目は街道を切るだけでなく木々をも飲み込み、森の奥へと続くような大きなものだった。

「うわあああ」

「なんだあああああ」

次々と人がその裂け目に飲まれていく。

「ぎゃあああ、たすけてえええ」

裂け目に落ちずにすんだ者達も激しい揺れに立っておれず、地面に倒れこんだ。

「何だ、何だ」

突然の地震にロマリア兵達は騒然となる。

巨大な裂け目に部隊は分断されてしまい、一時的な混乱にロマリア軍は陥った。

本軍の前方で指揮を執るアーノルドのもとにも地震での被害の知らせがすぐに届いたが、アーノルドは部隊をそのまま進めるよう指示をだした。

「かまうな。救助は後方の部隊に任せておけ!!」

ここで部隊を止めているわけにはいかない。もう目の前に敵がいるのだ。ここで引き返しても助けられる数などしれているし、どれだけ時間がかかるかわからない。

本隊が裂け目によって約半分に分断されてしまったとしても、二万以上の兵達がいる計算になる。

それだけいけば、おそらく一万ほどの敵軍を後方から討ち破るのにそう手間はかからないはずである。結局前方の敵軍を速やかに殲滅する方が多くの者を救う事につながるのだ。

だが、その指示をだして幾ばくかもしれないうちに新たな報告が彼のもとに入ってくる。

「敵が反転してこちらに向かってきます!!」

その報にアーノルド達は驚愕した。

帝国軍の前方にいる公国軍も約一万、後方のロマリアを相手にするよりも強引に前を押し崩し、戦場からの離脱を図る方がまだ懸命な選択である。

何故、帝国が強引に反転しロマリア軍に挑もうとしているのか。

その意図を瞬時に理解できたものはロマリア兵の中にはいなかった。前方にも異変が起こり始めた頃、裂け目の辺りでは必死の救助作業が始まっていた。

「早く助ける！！」

裂け目に飲まれそうになっている男が、わずかなでっぱりに掴まりながら叫ぶ。

「今助けるぞ！！」

男に気付いた兵士が引き上げようとその手を伸ばした時、森の奥から何かが飛んできた。

ボーン。

何かは兵士の体を直撃し、彼は火だるまになってそのまま男より先に裂け目へと落ちていく。

その光景を見た兵士達には何が起こったのか、何が起きようとしているのか理解できなかった。

正常に頭が働くよりも先に、無数の新たな凶器が彼らへと襲いかかる。

「なんだ！！」

「うわああああ！！」

あちらこちらで小規模な爆発が起こり、鮮血が飛んだ。

「な、て、敵襲だああああ！！」

隊列のどこかで叫ぶ声がある。

「何だつて！！」

ロマリア兵達は自身の目を疑った。いつまにか、右手にある木々の奥にそれがいたのだ。

矢を放とうと弓を構えた幾人、幾十、幾百者もの帝国兵がそこにはいた。

「放てええええ」

帝国軍の部隊長が命令を出すと、帝国兵達は一斉に矢を放つ。無数の矢が木々の間を風を切りながら飛んだ。

咄然とする者、覚悟を決めた者、救助しようとしてる者、地面に今なお飲まれようとしている者。その誰にも等しく無差別にその矢が降り注ぐ。

「ぎゃああああ」

「うわああああ」

ロマリアの兵士達が次々と矢に倒れる。

救助活動で隊列が崩れているところに、いきなり敵が現れたのだ。魔術師達が魔法の障壁を張る時間などなかった。

「くそ、斥候の奴等の目は節穴か!!」

いくら視界の悪い森でもこれだけの数の敵を見逃すなど通常はありえない。

だが仲間の失態と考え、それを責めたところで事態が改善されるわけでもなかった。

「急げ!! 障壁を張れ!!」

次の攻撃は何としても防がねばならない、ロマリア軍の部隊長が魔術師達に命令を飛ばした。

「放てえええ」

魔術師達が障壁を張るよりも早く、帝国兵の弓から矢が再び放たれる。だが、その矢が目標物に届く前に障壁の魔法が発動した。

バチーン。

雷、火、水に地。多彩で統一性のない障壁が次々と発動し、矢を弾く。

「間に合った!!」

誰かが歓喜の声をあげた。

「放てえええ」

帝国軍が障壁にも構わず、攻撃を重ねる。今度は矢だけではない。攻撃魔法も発動され、それらは木々を薙ぎ倒してロマリア兵達に襲

いかる。

ドーン。

爆音がし、空気が揺れる。

バリバリ、バチーン。

石や氷の凶器が砕け、雷撃が弾かれる音がした。

障壁は帝国魔術師達の攻撃になんとか持ち堪えている状態だった。いつまでも、この街道で固まって敵の攻撃に耐えているだけにはいかない。

「反撃だ！！」

ロマリア兵達が武器を構え、敵に向かおうとする。魔法使い達も守勢一辺倒ではなく反撃の魔法を発動させようとした。

「ぎゃあああああ」

だが、再びロマリア兵が絶命していく声をあげた。

「何だ。うわー！」

張られた魔法の障壁、そのまったく反対側から新たな敵の攻撃があつたのだ。

「何故、こつちにも！！」

右手側に出現した帝国兵達と同じように左手側の森からも突如として現れた敵の姿があつた。

同じ様に無数の矢と魔法攻撃がロマリア兵に襲いかかる。

氷の刃が木々を切り飛ばし、肉を裂いて、大地に突き刺さる。

炎の爆発が動揺する兵士達を吹き飛ばす。

致命的と言える一撃だった。

ロマリアの魔術師達は最初に現れた帝国兵の攻撃を防ごうと距離を取り、障壁を張っていたのだ。

つまり、左手側。今受けた攻撃の最前列となる場に多くの魔術師が無防備とも言える状態だった事になる。

魔術師は攻防の要であり、それを失うはあまりに大きな痛手だった。

「どっから出てきやがった！！」

まさに混乱としか言いようがない状態にロマリア軍は陥る。隊列は乱れ、どう守り、どう攻撃すればいいのか判断できない。

このような絶望的な事態に陥っていたのは、何も裂け目付近の部隊だけではなくた。

街道を挟むように森からは次々と帝国軍が姿を現し、ロマリア軍のほぼ全ての部隊が突然の挟撃に曝されていた。

ただひたすらに左右から飛んでくる攻撃に蹴り殺されるような地獄。この戦場はロマリア軍にとって、まさに地獄へと変貌する。

力の差

ロマリア軍の前方で戦う帝国軍と公国軍。その周辺には両軍の死体が散らばり横たわっている。

他のどのような戦場とも変わらぬ惨く残酷な情景がここにあるのだと、一見しただけならばそう誰もが思うのであろう。

だが、大地を揺らす音が周囲に鳴り響いた時、まるで死者を呼び起こす呪文がかけられたかのように、むくりとその死体達が起き上がったのを見たすれば、彼らは何を思っただろうか。いや、事を瞬時に理解できるだろうか。

そのある種信じ難い光景こそが、まさにこの瞬間に起きていた事だった。

「よし、いくぞ」

起き上がった死体が血の通った言葉を喋る。

「やっとか」

敵軍同士であるはずの、帝国兵の死体と公国兵の死体が熱を帯びた会話をする。

そう彼らは死体でも無ければ、公国軍兵士でも無い。死体役を演じる帝国軍兵士達だったのだ。

彼らは生きている。生きて、その命をかける彼らの戦いが今まさに始まるうとしていた。

彼らの部隊長達が、声をあげ命令をだしている。掲げられていた公国軍旗が捨てられ、帝国軍旗を掲げる兵士達と一緒に、彼らは森林を抜けたばかりのロマリア軍部隊に突撃を開始した。

「謀ったな帝国の奴らめ！！　なんと卑怯な真似を」

アーノルドが、何が自分達の身に起きているのかを理解した時、すでにロマリア軍側には多くの死傷者がでていた。

無理もない。敵は前方のみならず、左右の森の木々の奥からも次々と現れていたのだから。

彼らが一体どのようなにしてロマリアの斥候の目を盗み潜伏していたのか、それを理解するには視線を落とす必要があった。

そう斥候達が目をむけるべきは森の草木の茂みでは無かった。彼らの足元から続く、大地そのものに注意を払うべきだったのだ。何故なら帝国の伏兵は地面の下、何百、何千もの人間が、多くの労力を割いて造られたいくつもの地下壕に潜伏していたのだから。

これらはこの戦争が計画された時になって急ぎ掘られたものであり、まさにこの一戦の為に帝国が用意した秘策だった。

このシチ二街道を公国救援の為にロマリア軍が利用する可能性は高く、また帝国側もそうなるよう策してはいた。しかし、もしこの街道をロマリアが通らなければ全てが無駄になるというリスク、それを冒した秘策に彼らは惜しみなく人員と月日を費やし、この地下壕郡を掘ったのである。

そして彼らが掘ったのは地下壕だけでは無い、あの大地を裂くほどの魔力を秘めた巨大な魔方陣を地下に仕掛けていたのだ。

それが報われたと言うべきか、その効果は絶大だった。

「くそ、どうなっている！！」

突如として現れた帝国兵にロマリア兵達が焦り、声を荒げる。

深い森の木々が急に出現した敵兵を正確に計れなくしており、それは兵達に指示を与えるべき者達の判断を鈍らせた。

前方の部隊に限れば、後方は巨大な亀裂によって、退却が不可能になっており孤立。左右からは規模不明の敵軍の攻撃、前方からは帝国軍約二万。絶望的としか言いようのない状況に彼らはあったのだ。

亀裂を修復しようとロマリア軍の魔術師部隊も試みるが、森からの挟撃による妨害だけでなく、街道を挟むようにしてある二つの丘の上からも、帝国兵達が矢と魔法の雨を降らせていた。

そして、視界も圧倒的に帝国側が確保しており、ロマリア側の動きは完全に把握されてしまっていたのだった。

「とにかくあの丘を片方でも押さえねば、どうにもならん！！ 急

ぎ確保に向かわせる！！」

アーノルドの指令に副官が困惑の表情を浮かべ口を開く。

「しかし、敵の攻撃激しく、森の奥へは一向にすすめません！！
とくに丘周辺にはかなりの規模の敵軍が潜伏しているかと」

副官の言葉通り、実際に帝国は両丘の周辺には集中的に戦力を配備していた。帝国軍もその重要性を十分と理解していたのである。

「かまわん！！ どれだけ犠牲をだそうが、あの丘を取られたままでは勝ち目はないぞ！！ どちらでもよい、現状少しでも近づける方の丘を確保させる！！」

アーノルドの言葉もまた正しかった。分断、孤立したアーノルドやラワン達の部隊、約二万強では前方や両側の敵兵を均等に相手するのではなく、最低限の戦力で防衛しつつ丘の確保を優先するのが精一杯に出来る事だった。

それに丘の確保に向かっているのは何も前方に孤立してしまった彼らだけではなく、後方のロマリア軍もまた同じだった。

「どうだいけそうか？」

裂け目より後方に展開する部隊の中にローラントの姿があり、王は丘の確保へ向かわせた部隊の様子をカルロに尋ねた。

「いえ、少しは森の奥へと進めているようですが、かなり抵抗が激しく、確保出来るにしても時間を要するかと……」

「そうか」

険しい顔で考え込むローラント。

「陛下、ここは退却も視野に入れる必要があるかと」

この圧倒的に不利な状況。

当然、ローラントもとうに考えてはいる事だった。

「しかし……」

王は前線で孤立し、必死に戦っているアーノルドやラワン、その兵士達の顔を思い浮かべる。

カルロも王が何を気遣い、躊躇しているのかは理解していた。

「彼らも長年陛下のもとで働く者達です、今の状況を理解している

でしょう。兵達もまた陛下に忠誠を誓った身、どうか目の前の者達だけでなく、ロマリアで暮らす民達の為に何をすべきかを判断して下さい」

「わかっておる」

王の選択は限られている。

彼はこの場で破滅を迎えるわけにはいかぬのだ。それは何も己の身が惜しいわけではないし、もし自身の命で全てが上手くいくというならばそれを喜んで捨てるぐらいの気概は持っていた。

されど、ロマリアはこの戦いで王を失うわけにはいかない。今のロマリアには何の問題も無しにローラントの後を継げる者はまだいない。生きてこの戦いをきり抜ける必要が彼にはあった。

幸いと言うべきか、後方には後を追ってきている約一万もの部隊がいる。それらと合流を果たし、ロマリアに帰還できれば少ない可能性ながらも防衛に専念するだけの戦力は残る。

そして、もしここで無理に戦いを続け全滅したならば、確実にロマリアは滅び、多くの民に不幸が訪れることは明白だった。

「それで奴は見つかったのか？」

ローラントがある人物の行方を尋ねると、カルロは首を振り答えた。

「いえ、恐らくもう完全にこの一帯からは離脱、あるいは帝国側に合流したかと……」

奴とはアカサ、つまりキュウジの事だった。彼は公国からの使者としてこの一軍に同行していたのだが、この混乱の中姿を眩ましたのだ。

「なんてことだ。もつとあの時……」
後悔してもしきれぬ後悔。

ローラントは急に現れた使者に対する『違和感』の正体をもつと真剣に考え、理解すべきだった。

そうすれば、彼がこのロマリアを陥れようとしていたという可能性にも気付けたかもしれぬというのに。

「陛下、こうなると公国の事も」

「ああ、わかっておる」

カルロの懸念は王の懸念でもあった。

あくまで可能性にすぎない。それでもアカサという公国の中枢部に深くかわる人物がこのロマリアに害をもたらす者であった事は簡単に見逃せるような事ではない。

つまりはこの公国への救援を急ぐ事自体、その必要性に疑問が湧いてくるのだ。

公国と帝国が共謀していた、そのような可能性がでてきたのである。

今のロマリア軍は公国方面の正確な情報はあまり把握できておらず、その事は疑いをより色濃くした。

「……やむを得んか。カルロ、ロマリアの地まで退却し態勢を立て直す」

「はっ！！」

結局はそれしか彼らには手の打ち様がなかったのである。

ロマリアとのこの一戦に帝国側の用意した陣容は当然の事ながらかなりの規模のものであった。

囹役かつ前面の担当となる部隊の規模は約二万、担当はそれぞれ帝国軍側が、グリードとバステイアの戦いにおいて戦場に参加出来ず処刑を免れたロベルトの率いる第四十師団に、マヌエルの第五十二師団。公国軍に偽装していたのは、ジェイドの第二十師団、トンボの第三十師団である。彼らの用意した公国の軍旗などの品はそれまでの戦いや落とした城、砦から押収した品だった。

森林に配置された伏兵には、全師団から集められた兵士の集まりが数百人規模、つまり大隊規模の戦力がいくつも配置されていた。

それらは合わせても、約一万に届かぬほどの規模でありロマリア軍の規模を考えれば数としては大きな戦力ではなかったが、森林地

帯という地形と街道に沿って長く伸びたロマリア軍の陣形がその効果を最大限に引き出していた。

それに最重要とも呼べる街道沿いの二つの丘には、その伏兵達とは別に精鋭部隊であるハンスの第三師団が直々に担当していたのだった。

これを破るは容易ではない。

しかし、全体の数だけを見れば三万強ほどのもので、かなり大規模ながら五万八千を率いるロマリア軍には届かない。

それに前面だけで二万の兵士を投入している事から、裂け目により分断された後方のロマリア軍を相手する部隊はさらに分が悪くなる。

つまりは帝国軍は分断したロマリアの前方の部隊の壊滅に力を入れていく事になる。

だが、ロマリアのローラント王は後方の部隊にいた。それは帝国側が魔方阵の発動を誤った事は意味するのだろうか。

違う、そうではなかった。それは帝国側の狙い通りの事だったのだ。

帝国はわざと、ローラントに逃げ道を用意していた。彼らにはロマリアの王に生きてロマリアの地を踏ませる必要があったのだった。帝国軍は全てを、いや、この策を練ったジエイドという男は全てを見通していたのである。

押し寄せる敵軍の波に、アーノルド達の部隊は崩壊した。

敵がその懐深くまで入り、その指揮系統は機能不全に陥っていた。それは巨大な亀裂により孤立した他の部隊も同じであり、壊滅、全滅はもはや時間の問題となっていた。

「お前達！！ ロマリア兵の意地を見せてみる！！」

アーノルドが兵達を鼓舞し、兵達もそれに応え奮戦するも状況は悪化していくばかりである。

「ぎゃああああ」

アーノルドの目の前で一人、また一人と味方の兵士が倒れていく。やがて、気付けば彼の周囲はロマリア兵の無数の死体と、血塗れの凶器を構え、殺意を剥き出しにした敵で溢れかえっていた。

そんな中で、血の臭いこそ纏いながらもその色を付け汚す事は無かった一人の男が現れ、アーノルドの前に立った。

「貴方がアーノルド殿ですね」

「お前は……、何者だ!!」

男は不気味な笑みを浮かべ、見下すかのような瞳でアーノルドを見ていた。

傍若無人、卑劣な帝国兵達の中でもその男からは異様のオーラが放たれている。

野蠻で荒々しい殺気ではなく、静かで冷たく、ゆっくりと、じわりと絞め殺すような息苦しい殺気。

只者ではない。戦場に生きてきた者なら誰しもがわかるその男。

「帝国第二十師団を任せられております、ジェイドという者です。

アーノルド殿、ローラント王は既に貴方方を見捨てて、退却を始めたようです。……どうです、勝ち目のない戦はこのあたりで終わりにしませんか?」

ああこ奴がそうか。なるほどその姿、一目見ただけで合点がいく、そうアーノルドは思った。

その名を、その男がしてきた悪行の一端をロマリアの将兵達も耳にはしていたのだ。

そして噂に違わぬ男なのだと、今の男の姿を、目を見れば理解できた。

「ほざけ小僧!! 陛下の身をお守りし、お前達を一匹でも多く血祭りに上げるのが我らの使命。この命尽き身を滅ぼすまで、戦いは終わらん。剣を抜け!!」

怒号にも怯む事なく、ジェイドは笑みを浮かべたまま鞘から剣を抜く。

「やはり、貴方ではダメですか。もっと話のわかる方を見つける事

にしましょう」

剣を構えるジェイドには左腕が無く、右腕一本の体勢である。

噂のこの男が隻腕の剣士などという話はアーノルドはまったく聞いた事が無かった。

と、すれば比較的近い時にその腕を失くす何かがあったことになる。そして恐らくそれは戦に違いないと彼は直感した。

「先の事より、己の身を案じたらどうだ？ 俺と剣を交えては、片腕を失くすだけでは済まぬぞ！！」

一撃で決める。そう思いアーノルドはジェイドの方へ距離を詰め斬りかかった。

ガキーン。

アーノルドの攻撃はけたたましい音こそ鳴らせど、鮮血は飛び散らず、火花を散らすしか出来なかった。

大男の振り下ろした大剣を、ジェイドは右腕一本だけで支えた剣で簡単に受けてしまったのである。

「ぬうう、くっくっく」

アーノルドが力んでも、ジェイドは余裕の表情のままびくともしない。

「ば、馬鹿な……」

この戦いの中で、既に百何十名もの敵兵を斬り捨て、疲労の蓄積が無いと言えは嘘になる。されど片腕の男如きに、渾身のそれが軽々と止められようとは、悪夢でも見ているのかとアーノルドは思った。

そして彼をその悪夢から覚ましたのは、背中に走った激痛だった。「ぐあっ……」

周囲に溢れかえる帝国兵達が放ったいくつもの矢がアーノルドの背中に突き刺さったのだ。

暗黙の了解と言うべき事に、多勢に無勢の状況で将同士の戦いに下級兵士が横槍を入れさせるのは避けるべき事とされていた。

それは、敵であれど奮戦する一軍の将への敬意を示し、相応しい

死場を与える為でもあり、自身達の誇りの為でもあった。

だが、そのような決まりをジェイド達が理解し、尊重するはずも無かった。

「それでも、騎士の端くれか……、恥知らずの卑怯者め……」

苦痛に顔を歪ませながらも、アーノルドは必死に踏ん張る。

ジェイドはそれを冷めた表情で嘲笑うようにして彼に死の宣告を告げる。

「勘違いするなよ、虫ケラ。 雑魚の騎士ごっこに付き合うほど俺は暇じゃないんだ。 せいぜいあの世で騎士ごっここの続きでもしてな」
「ジェイドオオオ!!」

押し合う剣をアーノルドはもう一度振り上げ、憤怒の力で振り下ろそうした。

だが、天にその大剣が掲げられた時、無情の矢が再び彼の背中に向けて放たれた。

「くたばれ」

冷たい宣告の通りに、その大剣がジェイドに向けて振り下ろされる事は無かった……。

戦の後は

シチ二街道、ヒミリ森林付近での戦いでロマリア軍は大敗北を喫する。多くの将兵が討ち死にし、精鋭の兵達を失う事となったのだ。ロマリア王国国王ローラントが、苦渋の決断を下し故郷の地まで退却した時、彼の連れる兵は六万八千もの大軍から大きく減少し、わずか三万五千ばかりとなっていた。兵士達は帝国によって無惨にも殺され、五千名以上の者が捕虜となったのである。

そのうちの多くは亀裂により孤立させられた前方の部隊であり、長年ローラントのもとで仕える老兵の将ラワンの姿もそこにあった。ラワンは、ローラント達の退却後もしばらくは戦い続けたが、王の退却の時間を十分と稼げたと判断すると、ジェイド達に兵達の身の安全を約束させ、部隊を降伏させた。

残虐無慈悲な振る舞いを続ける帝国に、そのような約束がはたして意味を持つかと言えば、冷静、客観的な視点で指摘すれば大きな疑問符が付くと言わざるを得ない。

しかし、鉄の心を持つはずの者達も、真の恐怖と絶望を前にわずかな希望にすぎるしかなかったのである。

特に部下を持つ身の者には、それが部下の為であるという免罪符が付くのだ。その誘惑を断ち切る事は難しかった。

帝国はロマリアの戦いの後、彼らを呼び寄せる餌として残しておいたわずかばかりの公国領への最後の攻勢を行う。

多くの戦死者や、傭兵達との不和などで激減した戦力では帝国軍をまともに相手する事は出来るはずも無く、公国はわずか建国から百五十年ほどばかりでその歴史に終止符を打つ事となった。

公爵一家や有力商人のいくらかは海道を通り、大陸中央部へと逃れたがクレイグは混乱するスタンチオノードにて何者かにより殺害されてしまう。

それは商人の国とも呼ばれる事もあるほどの貿易国家の終焉を象

徴する事件であった。

持ち出された資産や、戦火に焼失してしまった資産は莫大なものであったが、それでもなお公国の地には多くの財が残されていた。

帝国は残された公爵家の財産や商人達の商品を没収するだけでなく、住民達のわずかばかりの金品までも略奪を許可し、兵達に分け与えた。

人として誇りある一部の師団、者達はそのような行いを拒絶したが、結局はそれを喜び受け入れる者達の取り分が増えただけの事であった。

その中でもつと醜く稼ぎに稼いだのは、言うまでも無く荒くれ者達の集まりでもあったジェイドやトンボの師団、第二十、第三十師団の者達であった。

彼らの行いは、公国の民だけでなく仲間であるはずの他の師団の帝国軍兵士達からも批難めいた言葉が聞かれるほどにひどいものであったが、皇帝の許可を得て行われた蛮行であるが為にそれを気に留める様子は無かった。

しかし非道なる事なれど、これらの行いは皮肉にも同じように皇帝らの蛮行に苦しむ帝国の臣民の生活を救う事につながった。

つまり、帝国は戦費としての大きな負担を長年強いてきた臣民ではなく、新たに帝国に加わる公国の民とその財に向けたのである。長く続いた重い負担は、帝国の臣民の不満を爆発寸前の限界までに高めていたがこの戦争の結果、勝利と負担の矛先の変化によってそれは解消されていた。

この一戦は大陸西部の支配者が誰であることを明確に示す戦いとなつたわけだが、帝国は更なる飛躍の為に公国併合とロマリアの弱体化だけでは満足しなかった。

公国併合後、オートリア帝国皇帝グリードは兵達と共に帝都に無事帰還し、今だ戦争中であるロマリア王国との今後について臣下の者達と話合っていた。

ロマリア軍はあの一戦での敗北後、帝国領からほとんどの兵を退

かせてはいたが、要所である大要塞ケンロウの支配は続行しており、帝国がロマリアの王都を武力によって攻略するにはこのケンロウか、天然の要害である南部ルートを通る必要があり、いずれも大きな被害が予想された。

しかし、この話合いでは今後どう動くかという類いのものが討議される事はなく、事前に決められていた事柄の軽い確認のようなものだけであり、グリードはオイゲンやジェイド達の話为满足そうに頷き、聞き任せるだけで終わる。

そう、全ては上手くいっていたのだ。この戦が始まる前にジェイドがグリードに話し望んだ通りに……。

「何だと、俺の耳がおかしくなったのかと思ったが、……貴様はそんな馬鹿げた事を正気で言っているのか？」

ロマリア、公国との戦争前、帝都の城でジェイドからその策の全てを聞く中で、グリードは驚きと同時に不満の声をあげた。

「もちろんでございます陛下」

「馬鹿を言つな。ロマリアなど捻り潰してしまえば良いだろう。何故生かす必要がある」

ジェイドから聞かされたのは、ヒミリ森林付近での戦の後、ロマリアとは講和しろという話だった。

もちろんその条件は帝国に有利なものではあるが、グリードは公国とロマリアは共に、併合する前提の戦だと思い聞いていたのでそれを簡単に了承する事はできなかった。

彼の不満はロマリア併合という帝国の悲願を達成できぬ事にもあったが、ジェイドの話にはそれ以外にも解せない事があった。

「捻り潰すにしても今の戦力では時間がかかりすぎます。ロマリアの地の利、そしてその防衛能力の高さは歴代の皇帝達との戦が示すとおり容易なものではありません」

「だからこそ、公国を餌に引き摺り出す。そう申したのは貴様だろうが」

「それでもです陛下。引き摺りだして殲滅に成功しようと、ロマリアの地の残兵共とその民の抵抗は激しいものとなりましょう」

帝国の領土ほどにないにしても、ロマリアの領土も大きなものであり、それら全てを無理に併合したところで、激しい抵抗に長年苦しめられる事になり、思うような利を得られるとは限らない。

その懸念を緩和、あるいは排除するには大規模な領土の割譲と共に講和し、なおかつロマリアを属国として支配するのが得策である。ジェイドは考えていたのだ。

この策の要はロマリアが属国であれど、存続する事にある。それは割譲され帝国領となる領土に暮らすロマリア国民達の不満を帝国だけでなく、自分達を切り捨てたロマリア王国へと向ける為である。同じロマリアの民であった者同士に不和を生ませ、団結した独立運動を阻止するのが目的だった。

領土の割譲によって国力を低下させ、敵性国家としての脅威を排除し、なおかつ新たな領土の反乱を効率的に抑え統治する。

そのジェイドの狙いは理に適った策であったが、グリードには理屈でそれを理解できても、よしとするだけの感情までは持てず이었다。

それはロマリア独立後、歴代の皇帝達の悲願でもあり、偉大な英雄として賛美された父オリバー帝すら成し得なかった偉業に対する、あるいは父親そのものに対する無意識なうちのこだわり、コンプレックスがさせた事か。この若き皇帝はなんとかロマリアを完全に併合すべきと結論付けられないか思案する。

究極的わがままによって、理なき結論を断行する事は簡単な事であるが、彼もそこまでは愚かな人間では無かったのである。

「全て焼いてしまえば良い」

苦し紛れにでた言葉にすぎなかった。そして、ジェイドはそれをあっさりと否定する。

「それではいけません。大陸統一の戦いはまだまだ続きます。その費用を賄うにはロマリアという財を無駄に消耗させるわけにはいき

ません。不毛の大地にしまい、その全てを併合するのでは無く、生かし、搾れるだけ搾り取るのが上策なのです」

「公国の街は焼き払うのにか」

ロマリアに劣らぬ豊かな貿易国家、商人国家のスタンチオ公国。

その街もまた焼き払うには惜しいだけの財である事は事実だった。

「それはやむを得ない事なのです。ロマリアを確実に誘きよせる為には必要な事です」

「ふん、搾り取る対象ならこの帝国にもいくらでもいるだろう。奴等の血肉で戦費を補えば良い」

「もはや、臣民の負担は限界まできています陛下。いま必要なのはその負担を代わりに負わせる家畜共の存在です」

「家畜だと、……そうかロマリアの奴等は家畜と申すかジェイド」

「一度陛下に刃を向けた者達です。その程度の扱いで十分でありましょう」

物怖じせぬ口ぶりはグリードを変に刺激し、愉快な気分にした。
「クッククク……、そしてその畜生を妻に迎えるか？ このオートリア帝国皇帝であるグリードの妻に畜生を充てよと言うのか貴様は？」

不気味な笑みの後、明らかに不快であるという口調で話すグリードの瞳には重く静かな怒りと、憎悪と言うべきほど感情が浮かんでいた。

ジェイドの話す講和の条件にはロマリアの属国化、大規模な領土の割譲そして、ローラント王の一人娘であるイリス姫との婚約があったのだ。

それが人質としての意味合いの強いものである事は明白だったが、ジェイドが家畜にすぎないとまで呼んだロマリアの人間と、偉大なオートリア帝国の皇帝との婚約が釣り合うはずもない。屈辱、侮辱、恥辱、そう思えるほどにグリードは特にこの講和条件を嫌った。

もはや、衰退し滅び行く王国の王族なぞ、彼の眼中には無かったのである。

しかし、ジェイドはこの婚約の重要性を説き、グリードを説得した。彼は物事の道理、理屈だけで皇帝の理解が得られぬ事を悟るとその感情に働きかけた。

「陛下、それでロマリアの動きを抑えられるのです。婚約、結婚など別に形だけのもので何の問題ありません。……それにイリス姫との婚約はローラント王が一方的に破棄した事、オリバー帝との誓いを遂行させる事にも少なからずとも意味がありましょう」

ロマリアの一方的な婚約破棄はバステイアン帝の怒りを買った戦争につながった。そしてそれはグリード達の反乱のきっかけとなったのである。

今こうして、この皇帝の座にグリードがいるのはイリス姫との婚約破棄というものがあつたから、そう呼べなくもない。

再びの婚約はグリードにとつても不快であつたが、それを強要されるロマリア側もまた屈辱的に感じるには違いなく、そしてそれは嫌いだった兄バステイアン帝が身を滅ぼし、叶える事のできなかつた事なのである。

そう考えれば、新たな時代を迎えた帝国の最初の一步の、勲章、証。それに相応しくもあるのではないか。

そして、そう考えるしかグリード自身、この講和に婚約の条件を加える事に対する、彼の本能的拒絶を抑える術は無かつた。

「不必要になる時がくれば、……その時は好きになさつて下さい。新たな方を皇妃にするも良いでしょう。されど、しばしの間だけでもイリス姫がこの帝国に嫁ぐ必要があるのです。ご理解下さい、陛下」

皇妃というのは簡単に挿げ替えられるほど、価値のないものなのか。いや、本来そのような事は断じてない。

だが、若き皇帝の新たに生まれ変わったこの帝国ではそれが許される。それどころか、何の問題も無かつた。

全ては皇帝の意志。皇妃なぞ絶対神そのものとなつた男の前ではその程度の存在として扱う事が許された。

皇帝自身がそれを許すのだから、それは許されるのだ。

「皇妃を処分するも自由か。まさに家畜の扱いだな」

「ですが、多少は御気に召すところも見つかると、何せ非常に美しい方だそうですから」

「せめてそうでないと困るな。……だが、所詮は畜生だ」

肥え太った豚のような青年は、薄笑いをしながらジェイドの要求を呑んだ。

血辱の三十日

そのおぞましい箱が最初にローラントのもとに届けられたのは、ひどく長く続く雨のせいで三日も太陽がその姿を見せずにおった頃であつた。

ロマリアのおかれた状況は非常に危うく、その未来を暗示するかのような空は人々の心までも曇らせていた。

そんなこの国の国境を、覚つかない足取りで歩く一人の若い男がいた。身に纏う衣服は、衣服と呼べぬぼろきれのようなものであり、彼は衰弱しきつた表情で、弱々しくも必死に一つの箱を抱え歩を進める。

あと一步、あと一步とまるで何かにとり憑かれたかのようにひたすら歩き続けた男だったが、ついに力尽き、もう一步も動けぬとその場に倒れそうになった。

「おい！！ そこのお前、止まれ！！」

国境を警備するロマリア兵達がそんな男の姿を見つけ彼に駆け寄る。

「こ、これを」

男は兵士達に必死に自分が抱えていた箱を手渡そうする。しかし……。

「うつ」

兵士達はその箱から放たれる強烈な腐臭に顔をしかめた。

「なんだ、これは」

気狂いの乞食かと、見下げる兵士達に男は涙を浮かべて訴える。

「ああ、どうか、どうか陛下に」

「馬鹿を言え、こんなもの！！」

箱を叩き落とそうと、兵士が腕を振り上げると男は抱え込むようにしてその場に倒れこみ絶叫した。

「届けねばなんだ！！ 陛下に届けねば！！ この箱を、ラワ

ン様の御首級が入るこの箱を――」

男の正体は帝国との戦いで捕虜となった若いロマリア兵だった。

帝国は捕虜となっていたラワンを処刑すると同時に一人の若いロマリア兵を解放し、彼にラワンの首と共に、厳しい講和条件が書かれた書状を持たせた。

男はロマリアとの国境沿いで開放される事となったのだが、そこまでの移送には結構な日数を要し、首の腐敗が進行してしまっていた。

当然の如く、首を納めた箱からは異臭が漂う事になるわけだが、幸か不幸か解放されたロマリア兵の鼻は拘留中での度重なる拷問によって機能しなくなっていた。

そう、帝国は身の安全を約束して降伏させたロマリア兵士達に日夜拷問を繰り返し、痛めつけていたのだ。

拷問を受けるロマリア兵達には自分達が何故このような仕打ちを受けるのか理解できなかった。彼らにはただ非情な帝国兵達がそれを楽しんでいるかのようにしか見えなかった。

吐くべき情報も無く、日々繰り返される終わり無き過酷な試練に耐えられずに、自らその命を絶つ者もでていた。

彼らの帝国に対する憎悪は増すばかりであったが、それ以上に罪無き仲間達への慈悲を望む気持ちが強くなっていったのは至極当然な事だった。

しかし、それこそが帝国の狙いであった。

「ああ、なんと劳しい事か」

ローラントの前に置かれた箱、その蓋が取られると同時に悲愴に満ちた声がそれを見守る人々から漏れた。

「なんと惨い事を」

亡き忠臣の無惨なその姿を見て、ローラントの内に怒りの感情が湧き起ころぬわけがない。だが、それは怒涛のように押し寄せるものではなかった。

それどころか、己の無力さを懺悔するかのような思いと、人の生の、人の心の無情さを嘆く感情が、この瞬間において彼の内の多くを占めていたのである。

ラワンの首は語る。これほどまでに人は醜くなれるのか、と。

醜きは帝国の蛮行か、それとも己の亡骸か、王の無力さか。いや、人の世が築く全てが、人の持つ本質こそが醜いのだと叫び声が聞こえる。

「陛下、このような蛮行決して許せはできません。必ずやラワン殿の無念、晴らしてみせましょうぞ!!」

将達の怒声にも似た音も、今のローラントには浮いて聞こえた。

「陛下!!」

「ああ、わかっておる。それで、これを届けた者は？」

「はい、衰弱激しいですが。治療のかいあって命は取り留められるでしょう」

「そうか。そやつにも苦勞をかけたな。十分と労ってやれ」

「はっ!!」

他の者が講和について王に尋ねる。

「陛下、書状の内容についてですが。これは我々が到底受け入れられるものではないかと」

ローラントも黙って頷く。

「奴等は完全に我々の事をなめておるのです。必ずや思い知らせてやりましょうぞ」

次々と将達がそれに同調の声を上げる。

しかし、王と一部の将達は、厳しい現実をよくよく理解しており、その威勢に単純に同調する事は出来なかった。

とは言っても、この段階において帝国との講和が考えられないのは彼らも同じである。

そんな者達と威勢よく勇ましい発言を繰り返す者達の心境が変化していくのは、それから一月ほどかけてであった。

つまりはこの日が『血辱の三十日』と呼ばれる日々の始まりであ

った。

ラワンの首が届けられた次の日、また同じように一人の若いロマリア兵が国境にて発見される。

彼もまた帝国の捕虜となっていた者であり、その手にはラワンが納められていた箱よりも一回り大きな箱が抱えられており、その中には大量の耳が詰められていた。

それは無論、帝国に拷問を受け、虐殺された兵士達のものであった。

箱を運んできた男は泣き叫びながら訴えた、自分の目の前で彼らは殺されたのだと。

その次の日も、やはり同じように一人のロマリア兵が保護された。そして彼も同じように箱を運ばされており、その中には目玉だけが詰められていたのである。

毎日、毎日、帝国から解放された一人のロマリア兵が箱を抱えて、故郷の地で保護され、その箱の中には鼻、指、歯と代わる代わる人体の部位が詰められていた。

箱を届けた者達は一様にそれらが彼らの目の前で殺されたロマリア兵達のものである事を話した。

箱が届けられ始めて、一週間。その日箱を届けた男は一枚の書状を持たされており、そこには簡潔な一文だけが書かれていた。

『講和に応じぬ場合、その代償は全ロマリア国民の血で償う事になるであろう』

それは帝国側が示した常軌を逸した行動によって証明されていた。この一文が決して例えや誇張などでは無く、文字通りの意味である事を。

この帝国の書状を見て多くの者は胆を冷やした。

ラワンの首が届けられた日、威勢よく発言していた者達もはやそのような虚勢は張れず、暗い現実を直視せざるを得なかった。

国王ローラントもまた、誰よりもロマリアの行く末の危うさを理解しており、帝国との講和の機会を無下にする事はもはや出来な

った。

それでも、平気で約束を反故にし、外道の振る舞いを続ける彼ら
を無条件に信用し受け入れる事は不可能である。

その不可能を可能にせざるを得なかった出来事が起きたのは箱が
届けられ始めてから二十九日目の事であった。

「陛下、どうか御慈悲を！！　どうか御慈悲を！！」

一人の男が跪き、慈悲の心にすがった。帝国皇帝の慈悲では無く、
主君であるロマリア国王ローラントの慈悲に。

慈悲を乞う彼もまた、箱を届ける役目が与えられたロマリア兵で
あった。その全身には無数の痣があり、片目は大きく腫れて塞がっ
ている。

男が泣きながら自らの王に訴えるのは、今だ帝国に捕らえられ、
拷問を受け続ける仲間達の無事であり、それが何を意味しているか
は彼自身もよく理解していた。

「貴様！！　自分が何を言ってるかわかっておるのか！！　陛下に
そのような事を！！　筋違いも甚だしいぞ！！　ええい、こやつを
とつと連れ出せ！！」

一部の将が男に罵声を飛ばし、男をローラントの前から連れ出そ
うとする。

男は他の兵士達に引きずられながらも、叫び続けた。

「御慈悲を、どうか御慈悲を！！」

その言葉ばかりを繰り返す男の、戦士としての精神はとうの昔に
死んでいたのである。

この出来事が、ローラントに一つの重大な決断を促がし、翌三十
日に箱が届けられると、彼は将達を集めて、帝国との講和を模索す
る事を宣言した。

その決定に、一部の者達は当然の事ながら反対の声をあげたが、
多数の者達は現状を理解して、王の言葉に従った。

しかし、ロマリア側も無条件に帝国の要求を受け入れるわけにも
いかず、少しでも厳しい講和内容を軽減できないかと、話し合いの

席を設ける事を帝国へと要求し、それを受けた帝国側は軍において、皇帝やオイゲン將軍に次ぐ、実力者になりかけていたジェイドを使者としてロマリアへと送る事となった。

この決定はジェイド自身が志願したものであった。

魔力球

ロマリアへの出発を明日にと控えた夜中、ジェイドは部屋で一人激痛に悶え、呻いていた。

「くっ……」

腕が焼けるように熱をもったかと思うと、次の瞬間には凍えるような冷たさになり、また次の瞬間には肉が張り裂けそうな激痛へと変化する。

彼に残された右腕が叫ぶ、殺してくれと。

「ハア、ハア、ハア」

どれほどの時間を耐えたのか、気がつけば夜が明けようとしている。

この一夜、彼は一睡もする事なく、朝を迎えた。

まだだ、まだ完璧には……。

ジェイドはさきほどまでとは違い、嘘のように軽くなった右腕を見ながら今日彼がすべき事について思いだそうとしていた。

彼の頭はまだどこかぼやけ、意識がはっきりとしていなかったのである。

男が古びたその建物にやってきたのは、帝国と公国との一戦、ガエルが死んだ日からそう遠くない時、まだロマリアが帝国に大敗を喫する前の事だった。

「アンタが、噂の、ケツケツケ」

薄暗い部屋で、ぼろのローブを纏った老人が笑う。

彼は、冷たい目で自分を見つめる男を前にしても何ら動じる事無く、余裕の態度でいた。

「話は聞いているだろうな」

「ああ、言われた物はちゃんと用意しとるよ。ジェイドさん、ケツ

ケツケ」

老人の笑い声と同時に落雷の音がジェイドの耳に入ってきた。

「見せろ」

「へいへい、こっちに来てもらえますかね」

老人は手にランプを持つと、薄暗い部屋からさらに暗い地下室へとジェイドを案内する。

「しかし、また急ですな。受け渡しはもう少し後になるかと思ってましたが」

「事情が変わった」

「その腕ですかい。最近でしょう、それを失くしたの。ケツケツケ」ジェイドは返答しなかった。する必要も無かったからである。

「おやあ、無視ですか。まあ、いいでしょう。どのような事情があるにしても、私はこいつをアンタに渡すだけだ」

地下室の隅に積み上げられた木箱から、老人は二つの奇妙な球状の物体を取り出し、箱の上に置く。

「こいつですよ。アンタが望んだ品は。魔力球、どうです、綺麗でしょう。ケツケツケ」

老人が魔力球と呼んだその物体を手に取り、自分の顔の横までもつてきて振る。

それはランプの明かりを反射し、鈍く光っていた。

木箱から取り出された二つの魔力球のうち、一つは小さく、もう一つはそれよりも一回り大きい。共に奇怪な装飾がされているながらも、中心部は宝石が埋められたかなように妖艶な色を放っている。

人を惑わす、悪魔の色。

「使い方は簡単。こいつをアンタの腕に埋め込むだけ」
「どうやる」

「たいそうな手術なんていらんよ。力を発動させて押し付けるだけでいい。それだけでコイツはアンタの腕に潜り込む。ああ、でもその腕じゃな、無理か、ケツケツケ。まあ、強く握るだけでも問題ない」

「それじゃあ試してみるか」

ジェイドが置かれた大きい方の魔力球を手にとると、老人は慌てて止めに入った。

「おいおい、ちょっと待ってくれ。ここですか？ 聞いてると思うがこいつはまだ完璧とは言えないんだ。無茶をして死なれても後片付けするのは私だ」

「黙れ、じじい。お前は自分の立場がわかっているのか？」

「くっ……。ちっ、それじゃあせめてこっちの試作品を試してからにしてくれんかね。こいつなら負荷は少ないし、これで問題を起すようじゃ話にならん。と言っても、百人いて九十九人は死ぬ。残った一人も死なず済むだけって話で、まともに扱えたのは数えるほどしかおらん。それでもやるっていうのかい。ケツケツケ」

小さい方の魔力球をジェイドに渡しながら、老人は不気味に笑う。ジェイドは魔力球を受け取ると、無言でその力を発動させ強く握りこんだ。

魔力球は、雨が地面に染み込むように、ジェイドの手の平から右腕の中へと溶け込んでいく。

その瞬間、彼の腕には激痛が走り、たまらずジェイドは顔を歪める。

戦いで受ける傷とは違い、魔力球がもたらすそれは非常に不快なものだった。

「ぐっ」

「ほう、ご立派、ご立派。ケツケツケ。それだけで意識を失う奴等も大勢いるのに、立派だよアンタ」

老人の馬鹿にしたような声も今のジェイドには届かない。彼は必死に激痛に耐えていたのだ。

五分ほどだろうが、ようやく痛みが落ち着きだした頃になって老人はジェイドに再び声をかける。

「どうですか、ケツケツケ。ご気分は」

「悪くない」

ジェイドが右腕をかざしながら言った。彼は感じていた、新たな小さな魔力を。

「確かに、力を感じる」

「ほう、ほう。上出来、上出来。さすがは帝国の騎士様はそこらのボンクラとは違いますな。ケツケツケ」

「これでどれだけの力になる」

「言ったでしょう。これは所詮試作品だ。筋力にしても一割の強化にも届かないでしょうな」

「それじゃあ話にならん」

「だから、こいつが肝心。ケツケツケ」

残された大きい方の魔力球を老人が持ち上げる。

「私は生涯をかけてこの魔力球の研究に取り組んできた。来る日も来る日も、研究し続けついにここまでできたんですよ、ケツケツケ。

はるか古の時代の魔術師達が作りだした傑作。それに、オリジナルに、限りなく近づけたのがこの第三世代の作品」

「御託はいい。そいつはどれだけの性能がある」

「計算上は筋力なら最低二割は、魔力も一割は上がるでしょう」

「たったそれだけか」

「それだけとはなんとも残酷な事をおっしゃる。アンタほどの一流の人間ならそのすごさ、差がわかるでしょうに」

「まあ、ないよりはマシか」

ジェイドが老人の手から魔力球を奪い取り、また己の腕に埋め込もうとする。

それを見て、老人がまた慌てた。

「おいおい、今さっき、腕に試作品を入れたところだろう。試作品は二、三日もすれば自然と消滅する。それからにしないと、お互いの魔力球が干渉して負荷がとんでもない事になる――！」

「何だと？ 消滅するだと？ おい、まさか、こっちのかいのも時間が経てば消えるのか」

「いや、第三世代のこいつはそうそう消滅しない。一度埋めたら、

人間の寿命ならまず間違いなく持つ。しかし、そんな事を問題にしているんじゃない」

「なら、いい」

「本気か？ アンタ間違いなく死ぬぞ。言っておくがこの第三世代でも、今だに人間では完全に成功した事はないんだ。ただでさえ危険だっていうのに、それを……」

「理論上は成功する人間だっているはず、そうなんだろう？」

「それはそうだがな」

「だったら問題ない。俺がどの程度の存在か試す機会にもなる」

「ああ、もう私は知らんね。好きになさい、ケツケツケ」

呆れたような視線をジェイドに向ける老人。

ジェイドはそんな視線を気にする事無く、再び魔力球の力を発動させ、強く握り込んだ。

「ぐああああああああ」

さきほどより激しい苦痛が、ジェイドを襲う。

「さて、大言壮語とならん事を祈りますよ」

老人はのた打ち回るジェイドを暗い地下室に残し、上の部屋と戻っていた。

そして、ジェイドは一人、明かりのない一室で苦しみ続ける。

「おやあ、まさか、こいつは驚いた」

地下室に残して三十分、ジェイドが暗黒の地下室から生還してきたのを見て、老人は驚きと喜びの顔で彼を迎えた。

「アンタ本当に……、ケツケツケ。最高だよ、最高の逸材だ。生還おめでとう。ケツケツケ」

ジェイドは老人の祝辞を無視して、ドスのきいた声をだして睨み付ける。

「あとどれぐらい残ってる」

「っへ？」

「同じものが、あとどれぐらい残ってるか聞いているんだ」

「同じものって、魔力球かい？ こいつはそう簡単に作れるもんじ

やないんだ。もう二つほどこしか予備はない」

「よこせ。そいつを全部だせ」

「ちよつと待ってくれ、一つだけなら構わんが、二つともつてのは勘弁してくれ」

「死にたいのか？ お前を今すぐここで殺しても構わないんだ、俺は……」

「アンタ、そいつは約束が……」

「だせ、とつと全部」

「つたく、年寄りをいじめて楽しいのかい。……言っておくがな、こいつをあと二つ手にしたところで、アンタ以外に耐えられる人間はそう見つかるもんじゃない。どうせ、無駄になるだけだよ。ケツケツケ」

「黙れ」

「ハア、わかったよ、わかった。だせばいいんだろ」

老人は呆れながら溜め息をつき、再び地下室から残る魔力球を持つてくる。

「もう一度言っておくがな。アンタを除いて、まともに扱えた人間はいない。そのアンタだって、今は力が安定しているようだが、これから先までどうなるかの保障はない」

老人の忠告をまったく聞く事なく、ジェイドは置かれた魔力球のうちの一つを手にとり力を発動させる。

魔力球が怪しい光を放つ。

「おい！！ 狂ったか！！ こいつは一人一つまでだ。さつきは試作品だから耐えられたかもしれんが、今度は必ず死ぬぞ！！」

「がああああああああ」

ジェイドの絶叫が、部屋に轟いた。

それからどれだけ時間が過ぎたか、老人は目の前のものをすぐには受け入れる事が出来ずにいた。

「信じられん。夢でも見てるのか、それとも悪夢か？ 本当にやりやがった。アンタの体はいつたいどうなってるんだ？」

驚愕する老いた男の前には、人間というものを超越してしまった
としか言いようのない男が立っている。

「こいつは確かにいい。力を感じるぞ、じじい」

この男、ジエイドの腕には三つの魔力球と、試作品が埋め込まれて
いた。

老人の長年の研究、構築された理論、論理、計算。全てを否定し、
無視するかのように、彼は何の問題もなしに生存していた。

「ほんとになんともないのか？ ケツケツケ」

「さあな」

「今のアンタはとんでもない力を手にしていることになる。三つも、
正確には今は四つか。それだけの魔力球が同時に腕に埋まつてるん
だ。とんでもないパワーだ。だが、その不安定さも予測できん。今
は無事だとしても……」

「覚悟の上だ」

「そうかい、本当に驚いたよ。……いったい何がそこまでアンタに
力を求めさせる。ケツケツケ」

「見たい景色がある」

「見たい景色？」

「その為に、その為だけにこいつの力は必要になる」

「そいつはまたあ。……アンタの見たい景色ねえ。ろくでもないん
だろうな。ケツケツケ」

狂人の世界は凡人には理解できない。そして異種の狂人にとって
も完璧に理解できるものではない。

その先にあるのは

ロマリアとの会談は当初、王都の外れにある王族の別荘にて全て行われるはずであった。

しかし、ジェイドはその会談に国王ローラントの姿がない事を知ると、その会談を拒絶し、直接ローラントと会わせるように要求した。

ロマリア側は二、三日かけてジェイドを王なしでの会談に応じるよう説得するが、彼がそれを了承する事は無かった。

ロマリア側がジェイド達、帝国側の使者を警戒するのは当然の事であり、彼らが恐れてたのは他ならぬ王の謀殺だった。

それでも結局は、ロマリア側はジェイドの要求に応じロマリア城、玉座の間にて講和に向けての話し合いが行われる事となる。ただし、帝国の使者団のうち、ジェイドを除く者達は全て別荘にて待機するという条件付きとなっていたが。

ローラントとジェイドの会談は重々しい空気の中で始まった。

玉座に腰掛けるローラントから幾ばくか距離をあけた位置にローラントは立ち、彼を警戒する衛兵や将達は険しい顔つきでそれを見守っていた。

「ロマリアの王よ、これ以上の無益な争いに終止符を打つ意思とわずかばかりの知性と良識が残っていた事を、皇帝陛下はお喜びになられております」

「なんと無礼な！！」

「知性と良識だと！？ どの口でそのような事を言うか！！」
周囲の者達がざわつく。

「ジェイドよ。我々ロマリアは最初から争いなど望んではいなかった。無益と知りながら、何故、帝国は戦を繰り返す。多くのロマリアの民がその犠牲となってきたのだ」

「ご冗談を。我々は無益な争いは好みませんが、必要な事にまで臆

するほど臆病者ではないだけです。ロマリアの独立によって帝国は大きな損失を被った。帝国があるべき姿に戻そうとしてきただけでありましょう」

「その手段が戦か。何故、武器を手取る事しか帝国はしないのだ。知性と良識がお主達にもあるというのなら、言葉というものがある」

「先に武器を取ったのはロマリア側でございましょう。武器を一度手に取った相手に、言葉とはなかなか通じぬものです」

「その機会は幾度となくあっただろうに」

「ですがそれは、全て偽りだった」

「偽りとしてしまったのは、常にお主達ではないか」

「常にとはいどい事を申される。勘違いなさってるのか、あるいは理解するだけの頭をもたぬか。ボールは常にロマリア側にありましたよ。従うか、刃向かうか」

「何故そこに、共存という選択肢を与えぬのだ」

「それは土台無理な話でございましょう。皇帝陛下は全ての頂点であり、それは絶対であるのです。その下にいるのは懸命な従う者達か、愚かな刃向かう者達。共存、対等などというまやかしの存在は許されない。あなた達は愚か者達の子孫だった」

「それが講和を望む国からの使者の態度か――！」

ジェイドのあまりの態度にまわりの者達から怒声が飛ぶ。

「勘違いなさっては困る。帝国が講和を望むわけではありません、これは情け。哀れな愚か者達に対する施し。貴方方が生き残る唯一の可能性。それを皇帝陛下が与えて下さっているのです」

「それがあの箱だと申すのか」

ローラントの言う箱とは無論、ラワン達、捕虜となった者達を拷問し、処刑し、その遺体の部位を詰め、帝国からロマリアへと送りつけた箱の事である。

「仕方ないではありませんか。さきほども申したでしょう、武器を取った相手に言葉だけではなかなか通じぬのです。ですから、多少

の工夫が必要だった。貴方方が事を理解するのが早ければ、犠牲はもっと少なくて済んだのですが」

「あのようなやり方では、信頼を余計に失っただけだ」

「信頼？ フフ、そのようなもの最初からありはしないでしょう。

あつたのは実利。その計算が狂った先にあつたのがロマリアの現状でしょう」

「何」

「ローラント王よ。あなたは愚かな王だ。先帝が死んだ時、貴方方は和平に応じるべきではなかった。そうでしょう？」

ロマリアの王よりも先に話を聞く周囲の者達の方が我慢の限界に達した。

「陛下！！ これ以上の話し合いなど無意味。こやつら帝国との和平や講和など無意味。それをこの男自身の言葉と態度が示しておりましょう！！」

「では、殺し合いを続けますか。貴方方、ロマリアの人間が全て死に絶えるまで。老人、女、子供、赤子の血肉で大地を染めるまで。貴方方に与えられた選択肢は、服従か破滅かそれだけなのです。服従と言っても属国としての自治は許されるのです。これほど寛大な処置はありません。聡明なご判断を願いたいものです」

興奮する男達を蔑むようなジェイドの視線と冷酷な言葉が場の空気をより一層、重く、冷たく、静かにした。

「力で気に入らない者達を抑え付け、刃向かえば奪い、殺し尽くす。帝国はそれを繰り返し続けるか」

「それでいいではありませんか」

「何だと」

「殺し、殺し、殺し合い。奪い合えばいい。力ある限り、常にその勝者であり続けるのだから」

「その先にあるのが自身の破滅であつてもか」

「それは違いますよ。その先にあるのは、己以外が全て息絶えた世界」

「それを破滅と呼ぶのだ」

「クック、あなたはわかっていらつしやらないのですか。その終焉の景色こそが王者の光景だという事に」

「それが、皇帝の欲するものか？　なんと愚かな」

「終焉の景色を望んだ者こそが、皇帝である他ならぬ証。ならばそれを欲するは、当然の事であります」

「お主も死んだ世界だぞ。それともお主は最後に牙を向くか」

「まさか、私は陛下が望むなら喜んでこの命を捨てましょう。真の王の誕生を見送って死ねるなら、これほどの喜びはないではないですか」

狂人の真意は理解しがたく、その狂気は凡人を飲み込む。

「今の帝国の人間は左様な考えの者ばかりなのか」

「あなたはよほど物事の理解が苦手なようだ。何故、わかりきった事を、既に申し上げた事を、何度もお聞きになさる。存在するのは、懸命な服従者と愚かな反逆者。私達は懸命な方であるだけです」

「愚かな帝に服従する者の懸命さほど、哀れな事もあるまい」

「愚か者は帝にあらず。帝であるならそれは即ち……。ご安心して下さい。少なくともあなたはよりは優秀な君である事を、現状が証明しているではありませんか」

「なるほど、だからお主達は、私の首は繋げておきたいわけか」

「ご名答です、ローラント王。賢い王は帝国にとって非常に都合が悪いのですよ。ですから、属国ロマリアの王は愚か者でなくては困る。討つべき機会をみすみす逃し、退くべき時をなかなか判断しきれず無闇に犠牲を増やすような方が理想だ。ですが、まるつきりただの馬鹿でも困る。あなたはどちらですか」

「私に帝国の都合を考えろと言うか」

「いえ、命令やお願いではございません。これは必然。あなたは考えざるを得ない、帝国の都合を。だって、そうではありませんか、我々にとって都合の悪い事は、あなたの大切なロマリアの民達にとつてはもっと都合が悪いのですから」

悪魔の弁舌にローラントも黙り込むしかなかった。

父親がその部屋に入った時、彼の一人娘は窓の外に咲く花々を椅子に座り眺めていた。

花は例年に比べて咲きが悪く、どこか寂しげな雰囲気を漂わせている。

「イリスよ」

ローラントが娘の名を呼ぶと、彼女は外の景色を眺めたまま返事をした。

「はい」

「帝国との講和が決まったよ」

イリスはローラント方へ向き直り、笑顔を作る。

それが何を意味するか、彼女は十分と理解していた。だからこそ笑顔だった。

ひどく悲しそうな表情を浮かべる父親をこれ以上、傷付けたくは無かったのだ。

「そうですか」

この講和が、手放しで喜べるものではない事はロマリアの人間の誰もが知っていた。

それが破滅への道となる可能性もある事を誰もが理解していた。

そして、それでもなお、受け入れなければならぬ現状があった。

「すまない」

「お父様、そのような事は仰らないで。私はロマリア国王の娘です。私はこの国に暮らす人々の為にも、自分に与えた役目を全うするだけの事ではありませんか」

ローラントの謝るべき相手は、救えなかった者達であろう。無惨に死んでいった者達であろう。

王自身それを知っていたから、余計に辛く、余計に無力さを感じていた。

娘のイリスが己の境遇を恨み、将兵達が王の無力さを罵倒したならば、その気も多少は和らいだかもしれない。

良き人であつたかもしれない。だが間違い無く、最後には王として愚かだったと言わざるを得ない彼を、それでも必死で支えようとする者達の姿が無情であり、非情であり、痛々しかった。

「すまない」

繰り返された言葉が空虚に響く。

「お父様……」

イリスは椅子から立ち上がり、父親の胸に顔を埋めるようにして、彼を抱きしめる。

「お父様の娘として生まれてこれた事ほど、幸福な事はありません。私は、あなたの娘のイリスは幸せでしたよ。だから今度は、少しばかり、その恩に報いさせて下さい」

娘の父親に対する深い愛情も、父親の娘に対するそれも、濁流には抗えないものなのだろうか。

いや、流されるだけではなく、彼女は自分の足で歩もうとしていた。その先にあるのがどのようなものであろうと、彼女は那道を行こうとしていた。

流されようが、歩もうが、結果が同じでは意味がないとする者もいるだろう。

だが、その道中の小さな差異は、小さな明かりとなって照らすはずである。小さくとも覚悟を持った人間の見る景色は絶望の一色ではないはずだ。

辿り着く先が同じでも、見える景色が違ふならば、意味はある。そう信じるからこそ、彼女は歩もうとするのだ。信じるからこそ、意味は生まれるのだ。

暗い嵐に飲み込まれていく親子の姿が、世に繰り返される悲劇の度に存在したものにしか見えずとも……。

狼はもういない

アルバ 「君はいつもそうだ！！ 何もわかつちやいない癖に、僕を馬鹿にして！！」

ルドルフ 「それは誤解だ、アルバ。私は君の事を思つて」

アルバ 「だったらどうしてあの時、僕の言う事を信じてくれなかつたんだ！！」

劇作家 アルバート：

作 悲劇『鏡の目』より

グリードは夢を見ていた、幼い日の出来事を。

彼は見ていた、父親との数少ない思い出を、言いようのない憎むべき日を。

なんで今頃になつて。

彼が夢から覚めた時、最初にでてきた感想がそれであつた。

幼きグリードには友と呼べるような者は一人もおらず、大人達やあるいはその子が、時々によつてその相手をさせられていた。

グリードのわがままは幼少頃は今以上にひどく、彼らを困惑させ、迷惑をかけ、そして嫌われていた。

最初の頃こそは無邪気と呼ぶべきか、そのような者達の態度に気付かずにいたが、次第に彼らの態度が意味するものを理解していくと、グリードは己の孤独に直面せざるを得なかつた。

言動はグリードを常に気遣い、敬うようなものだったが、その目は、その心は、それとは全く異なるものだと思つた時、彼は自分が愛情や、友情、敬意や、共感、そういった類いからは程遠い場所に存在してしまっている事を知つた。

兄バステイアンはひどくいじわるであり、グリードの方から避けていたし、イエンスは父オリバーの跡を継ぐ為の教育を熱心に受けて、幼い弟に構う暇などありはしなかった。

そして、オリバーも、帝政とイエンスの教育にほとんどの時間を費やし、残る二人の息子については、他の者に任せっきりであった。グリードの存在は、血の通った者達の中ではひどく軽く、薄いものだった。むしろ、血のつながらぬ者達の嫌悪や、侮蔑の中の方にこそ、はつきりと存在できていた。

だから彼は、それを好しとすることはなかったのだ。

やがてグリードは頻繁に世話係の隙を見て部屋を抜けだすようになり、大人達の困惑した顔や狼狽した顔を見て楽しむ日々を過ごすようになる。

その日の出来事もまた、係りの者から放れ、城内の中庭に一人いた時の事であった。

帝都、そして帝国の力を象徴する存在でもあるオートリア城は、大陸中でも有数の巨城であり、その中庭となるとかなり規模があった。

巡回の兵士はもちろん何人もいるのだが、広い中庭に隠れるグリードを見つける事は容易い事ではない。

今度は見つけるのにどれぐらいかかるかな。

花々に囲まれた場所に身を隠し、ほくそ笑むグリード。

それから彼は空を眺めるようにして、その場に倒れこみ目を閉じた。

何だか疲れたな。

彼はいつものように考えた。

ここで寝てしまったところで問題はない。どうせここには、自分を嫌う人間は数多くいれど、襲う人間などいやしないのだから。

その日は意識が遠ざかる感覚が、彼にははつきりと感じられた。

それからどのぐらいの時間が過ぎたか、一時間か二時間か、あやふやな時の流れの中で彼は目を覚ますとその異常に気付く。

変な感覚だった。時が止まったように、空気の流れが淀み。それでいて、心地良さが彼の周囲を覆っている。

陽をみると、眠る前から高さが変わっていないように見える。

おかしいな。結構寝ていたと思ったんだけど。

違和感はそれだけではない。

鳥も、虫も、人も、それらが発する音が全く聞こえてこないのだ。

ああ、まだ夢を見てるのか。

グリードは自然とそう考えた。

どうしよう。

誰も、何もいない夢の世界。

そこで彼にできる事、彼がしたい事など何もなかった。

しかし、それを苦痛に感じる事もまたなかった。

何故ならこの夢の世界は、彼の日常とそう違ったものではなかったのだから。

もう少しくうしていよう。

グリードは漠然と景色は眺め続けた。誰もいない世界を眺め続けた。

誰も、何もいない世界でよかった。彼が急いで退屈な現実へと戻る必要はないのだ。

悪くない。

少なくとも、この夢の世界には不思議な心地良さがある。

ガサッ。

突然、音のないはずの世界で、草花を揺らす音がした。

慌てて音のする方へとグリードが視線をやると、そこには真っ白な体を持つ狼が彼を見つめていた。

えっ……。

グリードは固まってしまふ、ただ自分を見つめるだけの白狼の眼差しに。

そこには敵意や憎悪といったものはなく、愛情や同情といったものもなかった。共感や賛同といったものはなければ、肯定や否定も

なかった。そして、善や悪もない。

ただ見つめていたのだ。その存在全てを見透かすかのように。そして、その行く末を見守るように。

それは観察者というべき眼だった。

獣が人間を害意なしに観察していた。

ああ、そうか夢だったか。

最初に思考能力だけが動き出した。

夢ならば不思議ではない。それが放つものは、現実にはありえないはずなのだから。

身勝手な少年に、瞬時に畏怖の念を抱かさせるほどの圧倒的な存在感と、神々しさは夢の中の存在でしか持ち得ぬのだ。ただの白い獣が皇子であるグリードの存在全てを凌駕しているなど架空の世界でしかありえないのだ。

計りようのない時を狼と少年が見つめ合う。

そして、その中でゆっくりとだが確実にグリードの意識や思考が明瞭になっていく。

それは世界を、夢の世界を揺るがした。

グリードは無意識のうちに忘れていたまばたきを一度だけ行う。

たった一度だけ、その一度のわずかな間に白狼はグリードの前から消えていた。

その事実を認識した途端に彼は、音が帰ってきた事を知る。

鳥の声、草花が風に揺れる音、巡回しているであろう兵士達の声に、足音。

「ハア、ハア、ハア」

長い間止まっていたかのようにグリードの呼吸は荒れていた。

夢……、なんだよな。

呆然と立ち尽くすグリード。

立ったまま見ていた夢。そう考えるしかない。

だが、それでは納得しようもないものがあるのも確かだった。

「グリード様！！ 何度も申してるではありませんか、勝手に動き

回ってはいけませんと――！」

今日の護衛を命じられた兵士が、ようやくグリードの姿を見つけ、駆け寄ってきた。

しかし、そんな兵士の焦燥を込めた言葉も幼い皇子にはほとんど届いてはいなかった。

「そこに……」

グリードが兵士に教えるように指を差す。

「そこに狼がいたんだ、白い狼が」

グリードの話聞いた者達は最初こそは驚きの表情を浮かべたが、すぐにそれは普段のものへと戻っていった。

何故なら、彼らはみな同じように考えていたからだ。

厳重な警備で守られる巨大な城の中庭に、狼が一匹迷い込むなど有り得ぬ。また、つまらない嘘を言い出したと。皇子には本当に困ったものだ。

表面上は信じる素振りを見せたり、夢だと言い聞かせようとするなどの違いはあっても、彼らの本心には、嘘に呆れたというような心情が共通していた。

それは余計にグリードを腹立たせ、彼はあの不自然な夢の世界が現実のものだったと強く考えるようになっていく。

そして、この世であの白狼の存在を認めるのは、彼だけというわけでもなかった。

なんと父であるオリバー帝が、グリードの話に一番強い関心を持ったのだ。

オリバーは珍しく息子グリードの部屋を訪れると、わざわざ世話の者達をその部屋から退出させ、二人きりの空間を作ってから尋ねた。

「それは本当なのか、グリード」

真剣な目をしていた。彼は、幼い息子の虚言だけとは考えていなかったのである。

「本当の事です、父上。あれは到底夢の事だとは思えぬ出来事です」

普段自分に向けられる事のない父親の視線、それが妙に嬉しくて仕方がなかったのか、グリードは一時は夢ではないかと考えていた出来事を強く、真の光景だったと主張した。

「そうか」

「はい！！」

息子の部屋で親子二人だけの会話、一般の家庭では至極当たり前のそれも、この二人にとっては希有なものだった。

自然と興奮状態にあるグリードを見たオリバーは、それが白狼を見た事によるものと解釈してしまう。

もし、この時に違ったものをオリバーが理解し、それを受け入れる事が出来たなら、未来は、グリードの運命は大きく変わったのかもしれない。

されど、この帝国の英雄オリバーには、雨が天から降る事はあっても、地から昇る事がないように、政治の流れは見れても、息子一人の感情の流れまでは見れてはいなかった。

いや、それどころか最初から見ようとしてもしてこなかったのである。彼にとって息子とは、自分の跡を継ぐ可能性のある人物、帝国の未来を担うかもしれない人物であるにすぎなかった。

だからこそ、もっと与えるべきものがあるうというのに……。

「お前は戦狼の話はもう聞いた事あるのだろうか」

「センロウですか？ えっと……」

「まさかないのか？」

「えっと、聞いた事あるような、ないような」

曖昧な態度を見せるグリードに、オリバーは戦狼とそれに纏わる伝説を話し聞かせる。

戦狼とは古くから大陸中に知られた伝説上の存在であった。

真っ白な体を持つ狼として描かれる事が多く、また様々な宗教の教典や古典でもそのように記述されている事が多い。

ある者は神として崇め、ある者は神の使いと信じ信仰しており、多種多様な宗教に肯定的な存在として捉えられていた。

特に広く知られる言い伝えに、時代の英雄達がみな白い狼、つまり戦狼を見るというものがあり、そういう話もあってか武人から信仰される事が特に多かった。

ただし、信仰と言ってもその多くは、深く、排他的なものなどではなく、縁起がよい程度の浅い信仰である。

もとより大陸西部一帯の国々では、宗教というものはそれほど熱心に信仰されているわけではなく、一部の国や種族を除けば、信仰は浅く多種多様なものにわたり、無神論者や無宗教といった者すらいた。

これにははるか昔にオートリア帝国が大陸西部のほとんどを支配していたある時代、時の皇帝が、皇帝こそ神であるとして元来の宗教そのものを否定し、弾圧した事の影響がある事は否定できない。

神々を信仰する宗教こそは弾圧されたが、当時の帝国は非常に豊かであり、また皇帝自体も総合的に見れば非常に才に長けた者達ばかりであったので、民は無理に信仰を維持する必要を感じていなかったのだ。

長く続いた弾圧は多くの者達から神々に対する信仰というものを消し去り、皮肉にも皇帝の神格化というたった一つの宗教を急速に普及させていった。

だが、そういった状態が長く続くわけもない。

少数なれど一部の者達は従来の信仰を強烈なものへと変貌させていたし、皇帝に対する信仰と呼ぶべきほどの崇拜は、名君、あるいは最低でも凡君であれば維持できたであろうが、時代の流れの中で生まれる暗君、それがもたらす帝国の腐敗によって簡単に崩れさせてしまうのだ。

グリードの時代には、もう本心から皇帝を神と同等として崇める人間なぞほとんど存在しなくなっていた。

幼少のグリード自身、宗教といったものには興味がなく、戦狼の

話が少しばかり耳に入る事はあっても、それをまるで覚えていなかった。

「おお！！ では父上、私が見たのはその戦狼だと言う事ですか。なんと素晴らしい、英雄達の仲間入りとは！！」

「お前が見たというのが嘘か夢でないのならな」

「嘘なものですか、夢なものですか。あれは間違いなく、真の出来事でした！！ 父上、私は神に選ばれたのですよ！！」

喜びを隠す事もしないグリードを洪い顔のまま見つめるオリバーが、一つ溜め息をついてから口を開いた。

「グリード、これからイエンスと共に行動せよ」

イエンスと共に行動する。それが意味するのは父親から直接、帝王学を学ぶ事になるという事だ。

「父上それは……」

「いろいろと教えておかねばなんのかもしれん」

生まれて初めてグリードの存在が父親の視界に入ってきた瞬間であつた。

「兄上、私は選ばれたのですよ」

空いた時間、イエンスと兄弟二人きりになると、幼い弟は第一後継者である兄にその話をよくした。

戦狼に出会ったのだと、すごい事なのだと。繰り返し、繰り返しグリードは兄に話した。

「そうか。それはすごいな。でも、何度も聞いたよその話は、他の者達に話してあげるといい。きっとみなも驚く」

言ってる事とイエンスの表情は乖離している。

興味のなさそうな、まるで信じていないようなそれが、グリードには不快だった。

「もう城の者達はみな知っております。兄上、皇帝は優秀な者こそがなるべきだとは思いませんか」

グリードは暗にイエンスに第一後継者から辞退すべきだと言いた

いのだ。戦狼に会った、その一点だけを強調して。

「そうだね。僕もそう思うよ」

いつもの調子で話すイエンスに余計に苛立つグリード。

彼に皇帝になりたいという欲求がまったくないわけではなかったが、この頃に関して言えば、実際には本気で兄の代わりに皇帝になるうというよりも、兄が自分に対して嫉妬や羨望して欲しいという感情からくる言葉だった。

わがままな少年はかまって欲しかったただけだった。常に自分より優秀で、常に父オリバーに期待される兄に。

「だったら――！」

「でも、僕に言われても困るよ。父上にも相談するといい。僕は反対しないよ」

「そのような事、私から言えるわけ……！！」

「そうかい、なら僕から父上に相談してみよう」

兄の視界には自分の約束された将来を脅かそうという弟すら入っていないかったのだ。

わかりきった事が、イエンスからの申し出をオリバーは一蹴する。イエンスは長兄である以外にも三兄弟のうち飛びぬけて物覚えが良く、優秀だった為、グリードの話と言い伝えだけを信じ、代わりとするなど有り得なかったのだ。

グリードも兄の頭の良さはわかっていた為に、一連の態度はその余裕からくるものではないかと感じていた。つまり、馬鹿にされているのではないかと。

明確に存在する兄との差、そしてそれから生まれる言い様のない焦り、劣等感少年に致命的な過ちを犯させてしまう事になる。

「父上、また戦狼が――！」

噓。

「今度は傍まで来て」

徐々到大袈裟になっていく噓。

「戦狼が話しかけてきました――！！」

父親が自分の存在を見失わないように、自分の価値を証明する為に、それは肥大化し、脆くなってなお繰り返された。

本人だけは気付かぬ。本人だけがわかっていなかった。

もう、誰もがそれを偽りと知っている事に。

「グリード、どうしてそんなつまらない嘘を付く」

ある日オリバーは息子の部屋を訪れると、ひどく落胆した表情で息子を問い詰めた。

「えっ……」

「お前のつまらない嘘のせいで、多くのモノを無駄にしてしまったのだぞ」

「父上、何を言って……」

理解したくない現実が顔を出す。

「もうよい。私が馬鹿だったのだ。お前の言う事を信じたばかりにイエンスはお前と同じぐらいの歳でもっと物事の分別がついていたぞ」

「父上！！ 私は本当に戦狼と話を……」

見えていても、見えぬふりをしていた現実がそこにはあった。

「もうよいと言っておるだろう」

「父上！！ 本当に戦狼が私の傍まで……」

受け入れざるを得ない現実がそこにはあった。

「くだい」

「父上！！ 本当に戦狼と出会ったのです！！ 私は……」

丸の偽りの中にある一の実を、誰が知りえようか。

「グリード」

オリバーの目からグリードの姿が再び消えていく。

「もうイエンスと共に動かずともよいぞ。これ以上、迷惑ばかりかけるな」

「父上……、本当に私は見たんです」

もうグリードの絞るような声も、オリバーには届かない。

部屋から去っていくオリバーの姿を見て、グリードは実感した。

世界が閉じていく、何かに引き戻されていく感覚を。

気付けば彼はいつもの場所に立っていた。

侮蔑と敵意、軽蔑と憎しみしかない世界に戻ってきたのだ。

夢の世界は終わった。ただそれだけの事にすぎない。

何も苦痛なはずはない、何も辛いはずはない。

どれだけの時間、少年は呆然とその部屋で突っ立っていたのか。

尋ねてきたオイゲン将軍の姿に気付いたのは声をかけられてからであつた。

「グリード様」

「オイゲン、俺は見ただ戦狼を……」

「ええ」

「どうしてみな信じてくれぬ」

「私は信じますとも、……私も一度見た事がありますから
まるで鏡だつた。

オイゲンの言葉は、グリードの姿を映す鏡だつた。

なんと滑稽で、なんと醜悪で、なんと愚かである事が。

父オリバーが見たもの、感じたものがそこに映っていた。

それを見たなら、見てしまったならば、そこから生まれるモノは
同じだつた。

オイゲン、どうしてそんなつまらない嘘をつく……。

もう、この世界に狼はいない。

式

死神がやってきた

列を成してやってきた

どこへ行かれると尋ねれば、みな顔伏して嘆くだけ

よくよく考えみたならば、死神の行き先一つだけ

嗚呼、この地も地獄なら、帝都の城は獄の中

作者：不明

ロマリア王国イリス姫は、帝都から彼女を迎え入れる為に送られた、帝国軍第一、三師団の混成部隊の手によって帝都まで護送される事となった。

名目上第一師団は皇帝直属の部隊であり、象徴として彼らが皇妃となる人物を迎えぬわけにもいかなかったのだ。ただ、もっとも優先すべきは皇帝の御身を守る事であり、グリードが帝都に鎮座している以上所属の全兵士で護送の任に就くわけにもいかない。そこで、実質的な主力は第三師団となり、師団長であるハンスが混成部隊の指揮を執る事になったのだった。

第一師団の人間も、彼らに対する指揮は普段からオイゲン將軍が執っていたので、その愛弟子とも言えるハンスの指揮下で動く事は対する反発は皆無だった。

第三師団にこの任が与えられたのには、この師団に対する帝国上層部の信頼の厚さが背景にある。

彼らは戦闘の練度だけでなく、平時の品位というべきものを備えており、それらは日頃の訓練と師団長であるハンス、その師である英雄オイゲン將軍に対する絶対的なまでの信望によって支えられていた。

帝国における有数の実力者となったジェイドも品位という面においては、彼らが自分の師団より幾分も優れている事を重々承知しており、オイゲンがこの任に第三師団を充てようとした時には、まったく反対しなかった。もとより彼には『名誉ある任』には何ら興味がなかったのだが。

唯一この決定に不満がわずかでもあったと言えるのは、同じ將軍の愛弟子である第四師団師団長ミロスラフだった。

彼は自分が戦時はともかく、このような任務、特に他師団まで指揮を執るとなると、ハンスに分がある事を理解していたので、二人同時に話があれば、結局はハンスに譲っていただろう。しかし、まったく自分に話がこずに、最初からハンスにいったとなると、内にしこるものがあるのは確かだった。

ただし、今の時期に帝国が多くの兵力をこの護送の任だけに充てるわけにもいかずにいる事を彼は理解しており、これが両名の不和の原因となるような事もなかった。むしろ、ハンスやオイゲンはジェイドを筆頭に醜悪に堕ちていく帝国軍内で信頼に値にする数少ない人物であり、皇帝であるグリードすらも、もはや軽蔑に値すると考えていた彼にとって帝国軍で命を懸けるその意味、理由となっていた。

護送の当日、王都に姿を現した帝国軍の部隊を見て、歓迎するロマリアの民など誰もいやしなかった。

王都を無血行進する帝国兵の姿は、彼らにロマリアの歴史的敗北という現実を残酷にも突き付け、見送る民衆に時折微笑み、気高く振舞わんとして馬車に乗り込む姫君の姿は、属国という張りぼてで飾られたロマリアを暗示するかのようで痛々しかった。

馬車を送り出すロマリアの楽団達の演奏も、滑稽なほど明るく勇ましいもので、いったい何の為に奏でられる音なのか、その場には多くの人々には理解出来なかった。

一人の従者すらも許されず異国へと運ばれていく少女の行き先は、

一生そこからでる事も叶わぬやもしれん檻の中であり、その檻に棲むは神をも恐れぬ、おぞましき鬼なのだ。

いったい誰が、それを笑顔で見送れようか。

帝都までの護送の行進は、華々しいというよりかは重々しく緊張感の伴ったものであった。

ロマリア領内においては、講和に納得できない一部の反帝国主義者達が、イリス姫の奪還を企てているという噂も流れており、気の抜けぬものだったのである。

それでも、彼らが帝国領内へと入ると、だんだんと行進を見送る人々の顔にも変化が表れ、帝都へと着いた時には、まさに万雷の拍手と歓声が彼らを迎え入れた。

「帝国万歳、皇帝陛下万歳」

運ばれてきた勝利の証に、人々は沸き返る。

「帝国万歳、皇帝陛下万歳」

あちらこちらで同じ言葉が繰り返され、その誰もが狂気の祭りに興奮していた。

決して楽ではなかった暮らし、まるでそれらを忘れようとするかのように人々は、一人の少女の不幸と、一国の敗北を祝し、一人の青年の欲望と、一国の勝利に酔いしれた。

ロマリアの王都とは正反対に、迎え入れる帝国の楽団達の演奏は、それが何の為に奏でられる音であるかはつきりとしている。

浮かない顔をした馬車の中の少女が、狂気を行進を眺めながら何を考えていたのか、それを知ろうとする者は、この帝都には存在しない。

威厳ある帝都の巨城も、異国の姫君にはただ不気味で恐ろしく映るだけだった。

「ほう、悪くない」

陰悪な空気に覆われた皇帝の間、遠路はるばる連れてこられた美しきロマリアの姫君を、グリードは悪意を持ってにやり見えた。

まだ齡十三の王族の少女が、これまでグリードの抱いてきた娼婦

達とは明らかに異なる女の資質を持つことは一目見ただけで理解できる。

同じ金髪なれど明確な違いがあり、同じ碧眼なれどやはりそれも違うものとしが見えない。

わずかでありながら、はっきりとしている。同質でありながら、異質であり、同色でありながら、異色である。

いったいそれはどこから生まれるのか。

上流階級に生まれた人間と、高級なれど所詮は卑しい身分の生まれである者達との違いなのだろうか。

それは違う。

彼は知っている、娼婦よりもよほど醜い貴族の女達を。

幼い日より見てきた醜悪な存在は、選ばれたはずの人間だったではないか。

だからこれまで、娼婦の女は数多く抱けど、貴族の娘は一人として抱いた事は無かった。

当時のグリードの地位ならば、有力貴族の娘ならいざ知らず、こちらの一介の貴族の娘なぞ、いくらでも遊び捨てたのに、彼はそうしようとはしなかった。

上流階級層相手の娼婦ばかりを好み、一夜か数夜の遊びでその関係を終わらせたのだった。

無論容姿に限って言えば、数多の女から選びぬかれた高級娼婦達の方が平均的には優れていたし、その一点において彼は抱くに値するだけの価値を見出していた。

権力に、そしてそれが与えるだけの莫大な富に媚びる女達。

娼婦も貴族の娘も、その媚びた顔に違いはなかった。

己の為に媚び続ける娼婦も、家の為と偽る貴族も、その表情は偽りの妖艶さである。

いや、妖艶というものの自体が偽りであり、幻であり、脆く危ういものだという事は十分と理解していたはずだ。

ならば何故、娼婦が魅せる幻には酔えて、貴族の娘達が魅せる幻

はああもひどく映ったのか。

それが顔をろくに知らぬ間に死んだ母親に対する一種のコンプレックスからくるものだという事には今のグリードが気付く事はなかった……。

イリスの存在が、そのグリードのコンプレックスの先へと進めたのには様々な理由がある。

一番に大きいのは、彼女が受け入れざるを得ない存在だったという事だ。

人間誰しも、己に与えられたものがどうしようもなく無価値で、無意味だとは思いたくはない。

グリードは無意識の内に、イリスという存在が一時的にでも妻となる、それだけに相応しい人物だと評価したかったのである。

もちろん手放して彼女の存在を受け入れ、評価していたわけではない。ロマリアという落ちぶれた王国の王族にすぎぬ事は理解しており、そういった複雑な評価、感情が混ざり合った上でのものだった。

しかし、それが彼女に帝国の貴族娘達とは一線を引かせるだけの印象を持たせたのだ。

当然、彼女が元来持つてる性格やそこからでる立ち振る舞いといったものも、素晴らしいものではあった。それでも、この一見だけの場では、そこに違いを見出すのは難しいのである。

彼女が帝国ではなく異国の出身となる事も、グリードに母親の亡霊を感じさせぬには有利に働いた。

一部の特殊な性的嗜好の持ち主以外は、自分の下で喘ぐ母親など見たくはないものである。今のグリードが無意識ではあっても、『帝国』の貴族の女達に己の母親を感じる状態では本来誇るべき帝国という出自が妻になるには邪魔となったのである。

このように、小さくも様々な事情が、グリードにとってイリスを他の女とは違うモノに感じさせたのだった。

グリードとの謁見を終えたイリスには、それから翌日に控えた式

まで過ごす場として、城内の豪勢な客室が与えられる事となった。

客室と言っても帝国の人間達が彼女の監視についており、心休まるような空間で一夜を過ごせるわけではない。そしてせまりくる式自体、決して彼女が、ロマリアの人々が心から望んだものではないのだから、憂いの夜となるのも当然であつた。

翌日。

快晴、雲一つない空の下で偉大なる帝国の皇帝と、その皇妃となる姫の婚姻の式が盛大に執り行われた。

式典には、大陸西部の国々だけでなく、中部、そして、はるか遠い東部の国からも、祝いの使者が送られ、帝国はその者達に新たな力の象徴を誇示した。

それは式典そのもの、皇妃となるイリスそれ自身である。

この豪勢な式典においてロマリアからの列席者は認められず、そこに懲罰的な意味が込められているのは誰の目にも明らかであつた。

ロマリア王国国王ローラントからの祝いの言葉が書かれた書状こそ読まれたものの、長らく抵抗を続けた一国の王がどのような気でそれを書かねばならなかったか、その心中を諸国の列席者は十分と理解し、哀れみ、逆らえば同じ末路だったのかと恐れた。

この式典を心から祝した者はそう多くはない、一部の過激な帝国主義者、帝国に狂酔する者達を除けば、帝国臣民達はおるか、グリード自身すら喜んではいなかったのだから。

彼らの多くが、この式典に笑みを持って臨んだのは、その先にあるそれぞれが画く未来があつたからである。

オートリア帝国皇帝グリードが、宿敵ロマリア王国を破り、国王ローラントの最愛の娘を、最初の妻として娶つたのは、彼がまだわずか齡十九の頃の事であつた。

愛と憎しみ

満月がその美しい姿を、夜の闇に浮かべた頃になって、ようやく式を終えた二人は、これから共に過ごす事となるその部屋へと足を踏み入れた。

「どうだい、素晴らしい寝室だろう」

イリスに向けられたグリードの笑みが、自慢というだけではなく、そこに悪意が潜んでいた事に、鋭敏な感性を持つ少女が気付かぬはずも無い。

室内に飾られる豪華で貴重な品々は、帝国の武の、血塗れた欲の犠牲者達だった。不安に押し潰されそうになりながらも、それと必死に戦う少女もまた同じ事。

愛が二人を結び付けたのではない、恐怖が彼女の自由を奪ったのである。

「どうした。気に食わないか？」

「いえ……」

彼女が何に怯え、恐れているか。それに気付かぬほどグリードも鈍感な男ではない。

彼は楽しんでいた。もがく虫ケラの足を引き千切るように、葛藤する少女の反応を堪能していた。

「愚かだな」

「えっ」

何かまずい事でもしたのか、グリードの言葉はイリスを一瞬不安にさせたが、どうやらそうではないらしい。

「無力であるとは、何とも愚かな事だ。なあ？」

グリードが何を言わんとしてるのかは理解できる。しかし、どう反応すべきかイリスには判断できなかった。

「お前の国は弱かった。だから、小娘一人守れもせぬ」

グリードの腕がイリスの方へと伸び、その手が彼女の頬に触れる。

イリスは顔を伏せると、手を避けるようにしてついそのまま反らせてしまう。

その動作をしてしまった事を彼女は慌てて、謝ろうと顔を上げたのだが、そこにあったグリードの反応は意外なものだった。

「クツクツク、じゃあ誰が悪かった。ロマリアをそこまで弱く腐らせたのは誰だ？」

伸びた腕を戻すと、グリードは笑い、蔑んだ。

「お前の父親だ」

「そのような事は……」

「違わない。ロマリアの王の甘さが、今日のお前を生んだのだ。憎くはないか？ お前を切り捨ててまで、和を望むあの男が」

「どうしてそのような事を……、陛下が望まねば私がこの場にいる事も無かったでしょう。それなのに、父を責めるなど……」

「俺が望んだ？ クツクツク、そうだな。だからお前は捨てられたんだ。俺が望めば、娘すら売る男にな」

「それは違います。私は自身で覚悟を持って、この結婚を受け入れたのです。ロマリアに住む人々の、そして帝国の人々の為にもなると思って」

「民の為だと、馬鹿げた事を。お前は己に酔っているだけだ。逃れられぬ運命に、まるで自分から立ち向かわんとする偽りの姿に酔っているだけなのだ。お前が望もうが、望むまいが結果は同じだ」

「結果が同じだとしても、私が覚悟を持つ事がそんなにいけない事でしょうか。人々の為に、自ら歩を進めようとする事がそんなに卑下されねばならぬ事なのでしょうか」

「お前は誰の為でもない、己の為に酔っているだけだと言ってるだろうが。他者の為などと、偽りに酔うから腐るのだ。お前達の国は」

「国を治める者達が、他者の為に、民の為に生きぬのでは、意味がないではありませんか。善き世を作る為に、共に力を合わせる事こそ、国事に携わる者の使命ではありませんか」

「善き世だと？ お前のいう善き世とは何だ」

「誰もが平和に暮らせ、貧しさとは無縁となれる世界を……」

「そんなものは存在しない。おとぎ話の世界ではないのだ。お前にはまだわからぬのか。それともロマリアの人間はお前のような夢家ばかりなのか」

「たえ困難であつても、それに近付くように努力する事が……」

「叶わぬ夢を見続ける馬鹿では、王は、皇帝は務まらん。この世の真理は弱肉強食、俺はロマリアを食ったのだ」

「武力で滅す事は出来ても、その全てを手にする事はできません。

陛下、人の心は武力では決して手に入らぬのです」

「できるさ。俺が望めば、心など容易くな」

イリスは首を振る。

「愛情は、愛情によつてしか応えぬのです。それを無下にすれば、世は腐敗し、混迷の時代が待っているだけではありませんか」

「愛？ 他者の愛だと。クックク、そんなゴミは必要ない。必要なのは憎悪だ。それをうまく利用すればいい」

「それでは、善き世になるはずがありません」

「言つたはずだ、お前の望む世など、無意味な夢だと。真の善き世とは、強者の安泰にあり、その強者として君臨し続けられる世の事をいう。弱者は強者に思つまま操られる存在にすぎぬ。心すら思うがままにな」

「憎しみだけでは、心とは呼べません」

「憎悪こそが、人間の根幹だ。心だ」

「どうして、そんな考えを……」

この異常に歪みきつた思想はどこから生まれるのか。

イリスは少しばかり躊躇した後、決心するとグリードに尋ねた。

「陛下は、陛下は誰かを愛した事がありますか？ 誰かからの愛に触れた事がありますか？」

激怒するかに思えた。もし、歪んだ思想がコンプレックスからくるものだとしたら、それに触れようとした彼女に怒りが向けられるのだと。

しかし、そうであればどれほど良かっただろうか、そうであればどれほど救いがあったか。

グリードは頬を緩ませ笑う。

「ああ、当たり前じゃないか。俺は誰よりも深い愛情を受け育ったのだ。最も尊き愛を、唯一皇帝の愛を受ける存在だ」

「それは、お父様の？」

「クックク、父上だと？ とつくの昔にあの男は死んだ。お前でも知らぬわけなからう」

「でも……」

「皇帝は唯一人。この俺だけだ」

「えっ……」

突風が寝室の窓を強く叩く。

それは男の深い闇の一端に彼女が初めて触れた瞬間、少女を打った衝撃音のようだった。

無言の時。

あまりにも深い絶望は、ただただ哀れであり、それを前にした彼女からは怯えと恐れが消えた。

「陛下……」

イリスの瞳の変化は、グリードを困惑させ、その正体に気付くと、部屋の空気を一変させた。

「何だその目は」

先ほどまでの余裕の表情は消え失せ、怒りの感情がグリードから顔を出す。

「何だと言ってるんだ!!」

「きゃあ!!」

突然グリードはイリスを床に押し倒すと、馬乗りになりその太く短い腕を振り上げた。

バシン!!

平手が、イリスの頬を叩く。

「お前は憎いんだろ!! お前をこんな目に合わせる俺が、お前を

切り捨てた父親が、国が！！」

怒号が室内に響き渡る。

グリードは両手でイリスの衣服の襟を掴み、起こしあげ顔をつきつける。

「俺の顔を見ろ！！」

イリスの眼には、涙が浮かびはすれど、そこにあるべき感情をグリードは見つける事が出来ない。

「お前は自分が置かれた状況がわかっているのか！！」

バシン！！

容赦ない平手がまたイリスの頬を打つ。

「陛下！！ 陛下！！ どうかしましたか！！」

さすがの騒ぎに、見張りの兵達が寢室のドアを叩き確認を取る。

「うるさい！！ 馬鹿にしつけしてる最中だ！！ お前達は黙って見張りをしてろ！！」

グリードに一喝された兵士達はもう何もできない。下手に逆らえば平気で首が飛ばされるのだ。彼らに出来る事は、イリスが次ぎの朝日を無事拝めるように祈る事ぐらいだった。

バシン！！、バシン！！

殺意まで込められた憎悪にグリードは包まれていた。

これほどまでに人はおぞましくなれるものなのか。愛情と信頼に囲まれ育った少女は、この時初めて、人間の持つ狂気、本質の一端に直面した。

圧倒的な恐怖が、理性や知性を凌駕する。止めようのない震えが、彼女を襲う。

「ハア、ハア、どうだ理解できたか。自分の立場を」

馬乗りのまま、息を切らし、睨みつけるグリード。イリスには、何故これほど急に彼が激怒したのか理解出来ない。

「も……、申し訳ありません陛下。どうかお許し下さい」

それでも、何を詫びてるのかもわからぬままに彼女は自分の頬を何度も打った男に許しを乞うた。

圧倒的な狂気に、まだか弱い少女は屈せざるを得なかった。

「フンッ」

手をイリスから放し、立ち上がるとグリードは寝室から出て行く。そしてそのまま、この日は部屋に戻ってはこなかったのだった。

その夜、少女は泣いた。

打たれた頬が痛くて泣いたのではない。恐怖に怯え泣いたのではない。

情けなくて、悔しくて仕方がなく泣いたのだった。

故郷の地を発つ時に、あれほど決心していたはずだったのに。目の前にした圧倒的な恐怖に屈した事が、己が許せなかった。

詫びた事が、許しを乞うた事が我慢できぬのではない。恐怖に震えた事が許せぬのだ。

それに立ち向かうはずだった。結果は変わらぬとも、心は強くあるうとしていたのに。

愛が必ずしも愛を生むとは限らない。それでも、憎しみは憎しみしか生まない。だったら、私は……。

朝焼けの光と共に、少女は再び決意する。

もう二度と、この夜のような涙は見せぬと。

カルディナ

私は奴等の誰よりも剣の扱いに長け、誰よりも上手く兵を操り、誰よりも多くの敵を討ち、誰よりも多くの城を落とした。

それでも奴等は、私が女であるという理由だけで、この国の導き手となる事を拒絶したのだ。

だが、何よりも許せなかったのは、そんな無能な男共の影で私の振る舞いを馬鹿にし続けた女共だ。

女に生まれたというだけで闘争を捨てた雌豚共だ。

革命家 カザリン：

著『闘争の資格』より

帝国南西部に連なるようにして隣接するドラクレア、バテノア、ルドーの三王国は長年独立を保っており、その歴史はロマリアよりも古い。

三王国を囲うようにしてそびえ立つ山脈が、防壁の役目をこなし、帝国の侵攻を防ぐ助けとなっていたのである。

三王国は対帝国時においては、結束し対抗したが、決して好い関係同士というわけでもなかった。互いに争い、国境地帯の街や村は領有者がころころと変わり、国境線も頻繁に変化していた。

しかし、それも囲われた山脈内、三王国間の話であり、彼らの領地にその他の国が侵略、成功した事は、これまでの歴史上一度たりともなかった。

そんな三王国の北西部に位置するドラクレア王国にとっても、帝国によるロマリアの属国化は重大な懸念事項には違いなく、王国を治める王アルバートの長女カルディナは、特にこの状況を危惧していた。

「父上、三王国のみならず、諸国との連携を計り、広域において対

抗せねば、とても防ぎされるものではないでしょう」

長い髪を結い束ねた美女は、まだ二十歳といった年齢にもかかわらず、王である父親に気後れする事なく、強い口調でそう主張した。「そんな事はわかっておる。しかしな、お前も知つての通り、バテノアとルドーは口ガド地方の鉱石発掘の件で、先日戦争を始めたばかりだ。まずはそれを解決し、しっかりと三王国の結束を固めた上で、共同して動かねばならん」

三王国が戦火を交えるのは、決して珍しい事ではなく、彼らは様々な権益をめぐり争いを繰り返していた。だが、それは国家の存亡をかけるようなほど大きな戦いに発展する事はまず無く、大部分の国民にとっても、戦争など軍同士だけ、お偉いさんの関心事項であり、勝てば多少暮らしが楽に、負ければ少し大変にと、その程度のかかわりしか考えられぬものだった。

頻繁に領有者の変わる国境沿いの街、村に暮らす人々も税の納め先が変わるぐらいの認識であり、愛国心というものは皆無だった。

三王国間の戦争は、帝国やその他の巨大な国家が行うような、街や村を焼き払い存亡をかけた残酷無慈悲な戦争では無く、ひどく小規模な、そして言ってしまうえば商業的とも言える割り切った戦争である。仲介に入り、互いの妥協点を見出し、講和に持っていく事は、時間がある程度かければそう難しい話でもない。

だからこそ、アルバート王は講和の後に改めて、三王国で今後の対策を練ろうとしていた。勝手にドラクレア王国が動く事で、二国からの印象を悪化させたくなかったのである。

「そんな悠長な事を！！ 父上、バテノア、ルドーの件とは別に、同時に諸国との連携を、……特に十二指同盟とは今から始めるのも遅いくらいではないですか！！」

「姉さん、そう父上を困らせるような事ばかり言っではいけないよ。父上だっているいろいろと考えてのうえの事だ。僕達はまだ若い、長らくこの政の世界で、その手腕を発揮してきた父上の考えに素直に従うべきじゃないかな」

語気強く主張するカルディナを諭すように言う青年。名をイバン、年は十六、アルバートの長男にて、その第一後継者である。

年はカルディナの方が上であるが、ドラクレアの王家は男子優先の世界であり、長男であるイバンが最有力の後継者となるのは当然の事だった。女に生まれたカルディナにも、後継者権はあるもののその優先度は低く、王の長女でありながら、親族の男達よりも後継順位は下となり、彼女が王の後、もしくは弟の後を継ぐ事はまず有り得ない事だった。

「父上はまだ理解なさってないのよ！！　今の状況がどれほど危険なのか！！」

「こらこら、まったくその気の強さは誰に似たのやら。私とて、帝国の強さ、そして凶暴さは十二分と警戒しておる。しかしな、焦って物事の順序を誤れば、上手くいくはずの事もそうはいかなくなるのだ」

「今は焦らねばならぬ時です！！　多少手荒くとも急いで……」

「もうよい。お前の心配はようわかった」

「わかっておりません！！」

「いい加減にしないか、お前は不安感から少しヒステリックになっているだけだ。頭を冷やしなさい」

「そんな……私は！！」

「姉さん、いいかげんにしなよ。政治の事は父上に、そして僕達に任せくればいいじゃないか」

イバンの言葉は、姉の心に棘のように突き刺さる。

「どうして！？　私も父上の、ドラクレアの王の娘よ。国の将来を案じ、意見する事がそんなにいけない事！？」

「それは素晴らしい事だと思うよ。でも、姉さんには他にすべき事があるだろう。もういい年なんだし、そろそろ相手を見つけてさあ」

「何よそれ。国の一大事に、男でも探してろって言うの」

「それも大事な事じゃないか。この間、父上が話していた人、すご

く良いと思うけどな」

「そんな話、今は関係ないでしょ！！ 私が女だから、女に生まれたから政治に口を出すなって言いたいわけ！？」

「そうじゃないって。姉さんが、この国の、一族の為になるような人と結婚するのは、とても重要な事じゃないか」

「好きでもない男と結婚する事が、この国の一大事より、そんなに大切な事かしら」

「どうしてそうなるんだ。僕だって、姉さんを大切に、幸せにくれるような人じゃないなら反対するさ。王国の為にも、姉さんの為にも良い話だと思って」

「嘘ばかり。……貴方が今こんな話をしようとするのは、私の意見を聞く気がないからでしょ」

姉の頑なな態度に、イバンは溜め息をつく。

「もうよせと言っておるだろ。カルディナさがりなさい」

アルバート王の三度目の忠告に、さすがのカルディナもこれ以上食い下がれなかった。

「失礼します！！」

不満を露わにしながらも、王に一礼するとカルディナは己に劣らぬ、美しい護衛の女騎士を連れて玉座の間から退室した。

「やれやれ」

アルバートは去っていく娘の後ろ姿を見送ると、イバンと顔見合わせ苦笑いする。

「あやつの気の強さには、困ったもんだ。もう少し、淑女らしく振舞えぬものか」

「気の強い人ではありませんけど、普段はあれほど感情的になる事もないのですかね。政治の事になると、少し……」

「あれをみると先人達の教えの正しさに感心してしまうよ」

「教え？」

「女に政治を任せるものではない」

「ははは、姉さんが聞いたらひどく怒りますよ」

「内緒にしておくのだぞ。あやつに怒られると、少ない寿命がさらに縮んでしまうわ」

「ええ、父上にはまだまだ健康でいてもらわねば困りますからね。僕はまだまだ若輩の身、いろいろご教授して頂かないと」

父親であるアルバートと、弟イバン、彼らは何もカルディナを忌み嫌っていたわけではない。むしろ深く愛していたし、カルディナもその事をよく知っていた。

だからこそ、極当たり前のように繰り返される、二人のこのような言動に、国政という世界に、カルディナは苛立ちを覚えるのだった。

この時代、大陸の多くの国、多くの種族において、性別の差異は致命的なほどに政治的発言権を奪っていたのである。

「もう嫌になるわ」

カルディナは自室に戻るなり、護衛の女騎士に愚痴を零した。

「陛下も、カルディナ様のお考えを直接お聞きになって、少しは理解をお示しになられておりましたし……」

「だから？」

カルディナが鋭い目で女騎士を睨む。

「無意味では無かったかと」

「そうかしら？　だと良いのだけれど」

相変わらずの不満気な顔を浮かべたままの姫君に、女騎士は、困惑とも同情ともとれる視線を向けていた。

「貴方は本当にすごいわ。立派なエレナ。貴方だけじゃない、薔薇隊の者達はみな、女の身でありながら、己の才覚だけで立派な仕事を任されているんですもの。それに比べて、私なんか……」

ドラクレア王国軍に所属する薔薇隊は、女騎士のみで編成された集団あり、時に戦場に送られる事もあったが、基本は城内や城下街の警備といった任が与えられ、男ではいろいろと問題がでそうなところでは特に重宝されていた。

警備が主な任務であつても、まず戦場などでその実力を高く評価されねば薔薇隊に属する事は出来なかつた。当然、王族の護衛となると、その剣技は、そこらの男兵士が束になつたところで敵うものではない。

エレナはまだ十八という若さで、カルディナの護衛を任される存在になつており、その剣技、実力には男達も舌を巻いていた。

そして彼女は、薔薇隊のエースと言ふべき存在であるだけでなく、カルディナの幼馴染であり、無二の友でもあつた。

「そんな事は……」

「そんな事あるわよ。私に出来る事なんて、貴方に愚痴を零す事と、憎む事だけ」

「カルディナ様……」

「ああ、心配しないで。父上や、イバンの事じゃないわ。二人共、大好きよ。家族だもの当然じゃない」

もし父親を、そして弟を憎めたならばどんなに楽な人生だつたらうか。

「私が憎めるのは己だけ、女に生まれてしまったというその事実だけ」

愛すべき友であり、忠誠を誓う主人でもあるカルディナの抱える大きな苦悩は、エレナが気安く解決できるものではない。

政治を憂う女に出来たのは、友に愚痴を零す事であり、主人を思う女に出来たのは、その愚痴を聞いてやる事ぐらいであつた。

普段は、気が強いながらも、どこか冷徹にさえ捉えられる事のあつる美女も、父親や弟、そしてエレナの前では時折、このようにして子供っぽく感情を露わにして見せた。

それはカルディナの、その者達に対する人間的信頼からくるものには違いなかつた。

十二指同盟

帝国東南部、そこには幾つもの国家が小さくも確かに点在している。その数十二ヶ国。

十二の小国は、帝国という巨大な怪物に吞まれてしまわぬように、『十二指同盟』と呼ばれる枠組みをつくり対抗していた。

いや、対抗というにはあまりに非力、脆弱な存在だったろうか。

何せ、この組織を構成するそれぞれの国家は小国も小国、一番大きな国でも街を三つほど抱えるだけの面積しかなく、ほとんどの国は一つの街しか、都市国家とも言うべき者達の集まりだったのだから。十二指同盟、その名の由来は『我々は帝国という巨人の指ほどの存在でしかない』その集まりだという先人達の自戒を込めたものであり、この集まりが、長年のロマリアのような、明確に反帝国を掲げるわけにはいかなかったのである。

彼らも最初から、ある種帝国に臆するような国々だったわけではない。十二指同盟、その前身である二十八武同盟では、反帝国を明確にして対抗していたのだ。

二十八武同盟は、名の通り、二十八もの国々の集まりである。

その当時の帝国はとうに繁栄の時代を過ぎ、バスティアン帝の時代や、オリバー帝が帝国復興の為戦い始めた頃のように、ひどく衰退していた。

二十八武同盟には、帝国に対する驕りというべき部分が間違いないくあり、彼ら是对帝国戦争に積極的に参戦し、帝国領土を、権益を奪い、その規模を拡大していった。

しかし、そういう時代には、呆気なくも残酷な終焉が待っていたのだ。

帝国は眠れる巨人である。その巨人が一度目を覚ませば、有象無象な国々など簡単に吹き飛ぶのである。

帝国の人々が望んだからか、あるいは時代か、歴史か。帝国に突

如として現れた救国の英雄達は、あつと言う間に各地の戦況を一変させる。

二十八武同盟も、復活した帝国軍の勢いの前に圧倒され、なんとか講和までもつていった頃には、十二ヶ国しか残っていない有り様となっていたのだった。

この出来事を境にして彼らは、十二指同盟と名を改め、己が身に合った戦略をとるようになったのである。

この度の帝国対ロマリア、公国の戦争に、十二指同盟は帝国に大きな脅威を感じながらも参戦しなかった。それを後の歴史家達は、ある者は当然、仕方のない事と言い、ある者は臆病者達の最も愚かな判断だったと評するのである。

「いやあ、しかし、ロマリアがこうなっちゃってしまつては、あの時、参戦しないで正解だったと本当に思いますよ」

十二指同盟、第七指、パルメント王国国王ボルドーが脂肪で満ちた頬を緩ませながら言った。

「いやはや、先人の教えには耳を傾け、従うべきですなあ。帝国恐るべし、我々が加担したところで、滅ぶ国がいくつか増えただけの事でしょう」

十二指同盟、第十一指、マルダーマヤ王国国王キニチが、髭をいじりながら溜め息をつく。

「避けれる争いは、避けるべき。さすれば神のご加護もありましようぞ。醜く争えば、神の怒りに触れるだけです」

十二指同盟、第四指、ロマス教国大司教ヨスパヤは、落ち着きながらも、どこか気に触るような口調で話す。

「神の教えとやらはどうでもいいが、俺達が己から帝国に刃を向けるなど、土台無理がある話。こうして、集まるだけの事すら、帝国領を、その許可を得て通らねばならんものだからな」

十二指同盟、第八指、トリ二首長国トリ二一家頭領マルダラの言葉に、その場にいた者達の多くが同調する。

「まったくその通り」

「己が分を弁えろという事ですな、はっはっは」

しかし、これらの会話をただ好しとして聞いていた者達ばかりでもない。

「皆様方、気楽な事ばかりおっしゃられる。この度の集まりの意味、忘れられたわけではありませんな？」

十二指同盟、第一指、ダルタール王国の若き国王レアンドロが、呆れた口調で忠告した。

「まったく。アンタ達は、この危機的状況がわかってないようだな。帝国は間違い無く、次の動きにでる。明日にでもこの東南部平定に軍をだしてもおかしくないんだぞ」

十二指同盟、第二指、ガザクレア王国国王ラウルもレアンドロに続いた。

ロマリアの歴史的敗北と、公国の完全併合は、十二指同盟にとって予想外、最低最悪とも言える結果だった。誰もあの戦争が、ここまでの完全なる決着で幕を閉じるとは考えていなかったのである。

二人の発言に対して、ボルドーが自嘲と嫌味を混ぜて言葉を返す。
「そう言われましてもなあ。お二方は、私達と違い大変大きな国だ。貴方達ならまだしも、われわれに出来る事なぞ、そう多くはありませんよ」

「その多くない出来ることをなす、その為のこの集まりではありませんか」

レアンドロのその発言に、今度はキニチが噛み付く。

「それで、貴公には何か名案でも？ 今後の推移を注意深く見守る、とか分かりきった事はよもやおっしゃらないでしょうな」

「それも大切な事です。しかし、ここで明確に決めておきたい事があるのです」

「決めておきたい事？」

「我々が帝国に対して、どこまで譲歩でき、どこまでいけば武をもつて対抗するのかを」

「馬鹿げた話を、武をもつて対抗するだあ！？ 勝てねえ戦とわか

りきつてする馬鹿がどこにいるんだよ」

マルダラがレアンドロを嘲笑った。

「ではトリ二首長国は、帝国の要請を全面的に受け入れ、完全併合される事も仕方なしとするのですね」

不穏な空気に、一同の緊張が高まる。

「それも仕方ねえだろ。あんたの国と違って、帝国は真正正銘、混じりっ気なしの大国だ。時代の流れに逆らうだけの馬鹿は早死にするだけだぞ」

「流れにしたがって早死にするとしても、貴方は逆らわずにいられるのですか？」

「何が言いたい」

二人の会話にラウルが横から入る。

「いいか首長さん。今の帝国の皇帝は、外道も外道だ。平気で街を焼き払い、逃げ出す住民までご丁寧に虐殺する鬼畜よ。そんな奴に命だけは助けてやるからと言われたらそのまま信じて、国を丸ごとやっちまうのかい？ それこそ馬鹿も馬鹿、大馬鹿者じゃねえか。統治の邪魔、危険因子として殺されるのがオチだろうよ」

「そうは言いますがラウル殿、ロマリアのローラント王は、生きておられるではないか。我々だって同じように命までは……」

ボルドーが冷や汗をかき、作り笑いをしながら言った。

「本気で言ってるのかよ。俺もあんたも、首長さんも、ここに雁首そろえて出席なさってる方々、誰一人として、いや全員合わせたってローラント王と対等じゃねえんだ。帝国がローラントを生かすのは、その利用価値があるからであって、俺達は毛ほどの価値もねえんだよ」

ラウルの発言はかなり厳しい言い方であったが、それに誰一人声を荒げて反論しなかった。それが真、正論だったからである。

重苦しい空気が場を覆う。誰もが口を閉ざす中、最初にその沈黙を破ったのはレアンドロであった。

「ラウル殿の発言には、少し棘がありました、その内容に関して

は、私もほぼ同感です。今の帝国には、筋というものがない。無闇に武器を取るわけにもいきませんが、その逆、言うがままに従う事はさらに愚かな選択だと私は考えてます」

「結局、戦争したいって事だろ」

マルダラの悪態にも、レアンドロは気にする素振りを見せず、話を続ける。

「どうすれば、ただ従うだけでなく、そして、戦を回避できるか。

それは、やはり帝国の利を誘導する他にないでしょう」

「帝国の利？」

「何が言いたいのですかな」

場の者達の疑問に、レアンドロは答える。

「筋のない帝国が何の為に動くか、それが自分達の利の為であるは明白。それを誘導する。つまりは、我々に対する不当な要求が、その利に反すると思わせればよいのです。その為には……」

レアンドロの話は単純明快だった。

彼の言う誘導とは、外交によって十二指同盟がさらに諸国との連携を計り、大きな連合体を結成する事によって帝国との武力的格差を是正する事や、帝国内の反帝国分子に支援を行いその治安を悪化させ、帝国の軍事、経済にダメージを与えるなど、『今は同盟と戦争すべきではない』と帝国に思わせられるようにする事である。

これらはかなりの危険が伴う事であり、はやくから帝国側に察知されれば、当然その怒りを買ひ、戦争を避けられなくなる。しかし、レアンドロはこれらの方法でしか、自分達が生き残る術はないと考えていたのだ。

「そして、これらの策を無駄にしない為にも、我々には覚悟が必要となります。戦う覚悟、ここからは退かぬという覚悟です。闇雲に対抗せよというわけではありません。策が成されるまでは、譲り、耐えられるものは耐えねばなりません」

帝国との戦争となれば、諸国と連携が取れ、勝つ事が出来ても、この十二国のうち半数残れば上出来、多くは歴史の荒波に消えてい

く事になるだろう。その覚悟を、この男は問うているのだ。

レアンドロの話に一同の表情は険しいながらも、仕方なしといったものになっていた。

彼らも己が地位にまったくの無欲となれば、今からでも国を捨て逃げ出し、安全に生涯を送れる事だろう。

だが、人間、手にしたものをそう簡単には手放してたくないのである。

「まあまあ、皆様。神も我々を見守ってくださいとおられます。祈りが届き、帝国との戦争、それ自体が防げるかもしれません。ほっほっほ」

ヨスパヤの根拠の無い希望が当てになるになるわけでは無いが、帝国と必ず戦争するわけでも無いというのは事実には違いない。

十二指同盟は、この会議にてレアンドロの案を採用する事を決定。ダルトール王国の主導もと、生き残りを賭けた策を実践するのだった。

この頃、帝国南西『三王国』や、帝国東南『十二指同盟』のみならず、大陸西部の中小各国は、帝国への警戒を強めていた。

戦争とまでいかずとも、ついに宿敵ロマリア王国を破り、さらに巨大化し始めた帝国がこれらの国々に対して、ほとんど干渉する事無くいるとは考えられなかったのである。

必ず何らかの要求をしてくると、各国上層部はその対策に頭を悩ましていた。

しかし、それはロマリアから得た領地や、公国を完全に併合し直した事による巨大な新領土の統治、それが軌道に乗ってからであると、一部の国を除いて誰もが思っていた。

不安定な統治下でのさらなる戦火は、アンバランスに太っていく怪物『オートリア帝国』をいとも簡単に崩壊させてしまうような危険を孕んでいた事は紛れも無い事実であり、十二指同盟、第一指、ダルトール王国の国王レアンドロも、それを狙っていた。

最近の帝国はその華々しい戦果とは裏腹に、臣民達は長年その戦費の犠牲となっていたし、軍にしても、連戦続きで兵士達の肉体的、精神的負担は小さくは無い。

一度の敗北で、自壊し始め兼ねないのが今の帝国であり、その弱点の修正、克服は短期間でできるようなものでは無かったのだ。

だが彼らは、帝国という怪物が常識、常道を超越した存在だという事を、そう遠くない未来、改めて知らしめさせられる事になるのだった。

希望をもたらすは

イリスが帝国へとやって来て一月ほど。彼女は皇妃となりながら、相変わらず監視される日々、不自由な生活を強いられていた。

グリードが日々政務に励む皇帝の間へと、彼女を連れ行く事はなく、日のほとんどを主のいない一室か、護衛という監視役付きの城内に設けられた庭園で過ごすしかかったのである。

そんなある日、庭に咲く花々をいつものように眺めていると、突如何やら思い付いたのか明るい顔となり、護衛の兵士達に彼女が話しかけた。

「あの」

「はっ、何でありましょうか」

兵士のうちの片方が、特に表情を変える事もなく、淡々と応じる。イリスの護衛には、常に二人以上の人間が付くように指示されており、それは単なる逃亡や自殺などを阻止する意味合いの他、護衛の人間と彼女の仲が必要以上に深くなる事を防止する意味も持っていた。

過剰な親近感、あるいは情欲的感情は、人間が持つ合理的判断というものを狂わせる。

長い歴史の間に生まれた悲劇の中に、そういった類いが起因となっているモノは少なくはないし、大衆の心を打つ劇もまた、そういった合理を超えたモノを表現した作品であった。

だが、一部の人間にとってそれは、何も美しいお話、悲劇などではなく、単純に怒りに触れ、都合の悪いものでしかない。

「お菓子を作りたいと思うのですが」

「菓子……、ですか？」

「はい」

「お望みの菓子を申して下されば、すぐに持ってきてさせていただきます」

「いえ、自分で作りたいのです」

「作りたい、ですか……」

男が困ったようなで、同僚の方を見た。

「大丈夫じゃないか、調理室の辺りには重要な物は何も」

「そうじゃなくて」

男が小声になる。

「刃物を使う事になるだろう。大丈夫なのか？」

「む、それは確かにまずいな。よもやという事もだが、単純に、怪我をされるだけでもまずい」

「やはりここは許可をとってからの方が」

「ああ」

護衛達の方針が固まる。

「皇妃様、ここはきちんと陛下からの許可を頂いてからという事で、今から御伺いしてきますので、少々お待ち頂けますか」

「そうですか、ではよろしくお願いします」

イリスの性分としては人を使うのは好きでなく、自分の足でグリードのもとへ行きたいと思っていたのだが、ここにいる人間達がそれを望んでいないのだから任せるしかない。

イリスはまだ信頼されてないのだ。

グリードが将達から様々な報告を受け、指示を出す皇帝の間へと入る事を禁じられていたのは、その証だった。

「ところで、ご自分でお召し上がりになる菓子作りの為にという事でよろしいんですね」

イリスは首を振って否定し、笑顔で答える。

「いえ、日々の政務にお疲れであるう陛下の為にと思ひまして。よかったです皆さんの分もお作りしましょうか、時間は十分にありますし」

暇を持て余すように見えるイリスとは違い、グリードは忙しそうであった。と言っても、そのほとんどは玉座に座り、報告を受け、オイゲンやマルセル、ジェイドと言った者達の案や要望を許可するだけだったのだが。

無理に休もうと思えばいくらでも出来はする。しかし、グリード本人も、ロマリアとの戦いに勝ち、一息つくどころか、もう次の段階へむけて進む、その不安感とでもいうものから、細かい国内情勢を把握しないと落ち着かなかったのである。

グリードとイリスが共に過ごすのは、昼食の時と、皇帝の間から戻り夕食、翌朝食事を終えて去るまでの間だけで、二人が帝都の名物、帝都大劇場の公演と一緒に視聴したりなど、夫婦憩いの外出時間などまったく無しであった。それどころかイリスは式の日を除いては、城内の一部分より外へと出る事すらなかったのである。

「なんだ、調理室を使いたいだと？ そんなもの好きにさせておけ。俺は忙しいんだ、いちいち聞かずに自分達でそれぐらい判断出来るのか」

不機嫌な皇帝は、わざわざ自分のもとへと現れたイリスの護衛をなじった。

イリスを妻に迎えてからというもの、彼の正体不明な苛立ち日は日に大きくなっており、今日のそれはいつにもましていた。

帝国のこれからに対するものとは別にこの一ヶ月、彼女の理解し得ぬ言動に、心が騒がせられるのである。

無理に連れてこられ、式の日の夜にはあのような出来事があったにも関わらず、翌日にはもうどこかぎこちないながらも必死で歩み寄ろうと、グリードに笑顔で接する彼女のそれは、媚と呼ぶには透き通りすぎていて、居心地の良さと悪さが混在していた。

それは離れてもまた同じであり、何故、そこまで彼女の存在が自分にとってこれまでの女とは異質なのか、このときのグリードにはまだわからなかった。

「申し訳ありません。刃物を使う事になるやもしれませんので、万が一という事もあるかと思ひまして」

「それを防ぐのがお前達の役目であろう」

「ええ、ですからこうして陛下に伺って……」

「馬鹿かお前は。小娘一人の刃物の動きすら捉えられなくなるほど鈍ったか。怪しい動きをしたら止める、お前達なら雑作もない事だろうが」

「申し訳ありません。返す言葉も御座いません」

「わかつたら、とつとと消えろ」

細かい理由も聞かれる事無くあつさりと許可がでる、それだけでなく、罵倒まで付いてくる始末。気分屋の主を持つと、仕える人間は苦勞するものである。

「皇妃様、本当に何もお手伝いしなくてよろしいので」

イリスが調理室で菓子作りの準備をしていると、今日の当番であるのか、使用人の女達が不安そうに尋ねてきた。

「ええ、なるべく自分だけで作りたいのです。ただ、何がどこにあるかまではわかりませんので、それは御教え頂きたくて」

「そんな教えるだけだなんて、言ってくださえば、お持ちしますよ」戸惑う女達に、イリスは微笑む。

「出来る事はなるべく自分で、です」

イリスの菓子作りは見事なものであった。誰から習ったのか、手際良く調理していく。

彼女が作っていたのはロマリア独自のケーキで、出来あがったそれを切り分け皿に乗せると、菓子作りを見守っていた女達や護衛の者達の方を見て言った。

「ありがとうございます。無事完成しましたので、皆様もどうぞ」と言われても、言われた方は『はい、いただきます』とはいかない。

「お気持ちは嬉しいのですが……」

兵士と使用人達が顔を合わせ戸惑う。

「もしかしてみなさんケーキはお嫌いでしたか？」

「そうではなくて、皇妃様が陛下の為にわざわざお作りになられたものを、陛下よりも先に食すのは……」

言われてみれば、そうである。イリスとしては、自分の為に作った物が先に食べられたところで別に怒りはしないが、変なところで気難しいグリードの事となると考慮する必要もあるかもしれない。た。

「うつん、そうですか。それは困りました」

最初から、この場にいる者達にも振舞おうと作ったケーキである。グリードとイリス二人で食べるには大きすぎる。

日を挟み何日もかけて食べるようなものでもないし、せつかく作ったのだから彼ら、彼女らにも食べて欲しいものである。

しばらく何やら考え込むイリスだったが、突然また笑顔になったかと思うと、使っていない果物を一つ手に取り、皮をむき出す。そしてその果肉を切り取ると、切り分けたケーキのうちの一つに乗せた。

「これは陛下専用のケーキという事で、他の皆様の分よりも少し豪華にしてみました。これで、残ったケーキを食べてしまっても失礼にはなりませんでしょう」

「本当にいいのでしょうか」

「はい、大丈夫ですよ。きつと」

「きつとですか……」

「はい、きつとです」

少女の屈託のない笑顔にこれ以上、その場にいる者達は抵抗できなかった。

「美味しいですー！　今度、私も子供達にぜひ作ってみとうございます」

使用人の女達は、素直にイリスのケーキの味を褒め、楽しそうに会話していたが、護衛の兵士達というのと。

「これホントに大丈夫だろうな」

美味いとは思いつつも、二人小声で不安げに会話していた。

「今さら言ったってどうにもならんだろ。いくら陛下でも、こんな事ではよもや首を斬るような事は……」

「そのよもやがあるかもしれないお人だから、不安なんだろうが」
そんな二人にイリスが気付く。

「どうかしましたか？　もしかしてお気に……」

「いえ！！　王妃様がこれほど菓子作りが上手いとは存じておりませんでしたので、驚いていただけであります！！」

「それはよかった」

イリスは無邪気に皆の反応に喜んでいた。

グリードがイリスと共に夕食を食べていると、彼女の機嫌はどこか良さそうであり、何やら隠しているようにも見えた。

「さきほどから気になっていたんだが、えらく機嫌が良さそうではないか。何かあったのか」

「そう見えますか？　でも、久しぶりの菓子作りが楽しかったものですから」

「ああ、そう言えばそんな話聞いていたな」

グリードはすっかり忘れていた。

「はい」

「まあ、菓子作りぐらい好きにしろ。それでお前の機嫌がとれるなら安いものだ」

グリードの反応はイリスにとって意外なものだった。彼女はてっきりグリードが、許可を貰いにいった護衛の兵士から、誰の為にその菓子を作ろうとしていたか聞いているものだと思っていたので、ひどく冷たい対応に思えたのだ。

実際にグリードが聞いたのは、ただ調理室をイリスが使いたがっているという部分だけ。当然イリスが自分で作った物を食べたただけの話だと思い込んでいた。

「あの……」

「何だ」

「伺っておりませんか」

「ん？」

「陛下の為にと、ケーキを作ってみたのですが」

「何だ、俺の為だと。お前、自分で食ってしまったんじゃないのか？」

「いいえ。もちろん自分の分も作ってはあります」

「どこにある」

「今日の夕食のデザートに出して頂くよう頼んでおいたのですが…」

…

「おもしろい。楽しみにしておこう」

「はい」

それから二人は他愛のない会話をしながら食事を続け、ほとんど食べ終わってしまった頃に、ようやくそれは運ばれてきた。

イリスが故郷ロマリアの地で、その作り方を習ったケーキ、果物をふんだんに使用したロマリア風のケーキが。

通常、果物を利用したケーキをそのまま長時間放置していると傷んでしまうものだが、料理や食物の保存について、大陸の富裕層の間ではそれらの問題はいくらか改善していた。

温度を上手くコントロールする事さえできれば、傷みやすい品もある程度長持ちするようになる為、一般の人間達は冷えた井戸水や地下室を利用して、温度対策しているわけだが、富裕層となるとそれだけでなく、冷蔵庫、あるいは冷凍室と呼ばれる部屋を、物入れを作り、氷を利用して品を冷やしていたのだ。

氷は水が冷やされ、出来る物であるが、雪の降らぬ地区や時季でも、魔術師の力を借りる事によって入手する事が出来、富裕層の多くは魔法によって生み出された高価な氷をわざわざ買い付け、利用していた。さらに一際大きな財産を築いた者達の中には、直接その手の魔法に強い魔術師を雇っていたりもした。

当然、オートリア城も、専属の魔術師達が、氷を作るだけでなく、直接強力な魔法で室温、湿度まで調整したりして素材や食品の管理をしていたのである。

「上手いもんだな」

グリードの前に置かれた皿の上のケーキ。見た目はこれまで彼が食べてきた物とは少し異なっていたが、綺麗な出来栄で、イリスが菓子作りになれている事がわかる。

「久しぶりでしたので、少し緊張しましたが、美味しく作れたと思いますよ」

「ふむ」

グリードがフォークを手に取り、ケーキへと突き入れようとする、

……が、直前で彼の手が止まった。

それを見て、イリスの表情も変化する。

「どうかしましたか？」

「イリス、お前はそこまで愚かな人間ではないだろうが、一応確認しておこう。……わかってるんだろ？」

「えっ」

「お前がここに意味を」

「急に何を……」

「俺に何かあれば、お前だけでなく、故郷の地も地獄を見る事になる」

グリードが眼光鋭くイリスを射すくめる。

「この菓子、よもや盛ってないだろうな」

「そんな……」

不穏な空気を察知して、食事の世話役が間に入る。

「陛下、皇妃様には常に護衛の者達がついております。そのような事は不可能かと」

「この果肉、他の物とは少々違う。見れば、イリスお前の分には乗っていないようだが、こいつに盛ってあるんじゃないか」

「それは陛下の為に特別に……、どうして私がそのような事をせねばいけないのです……」

「それとも、今日あたりは何もせず安心させておいて、次、その次と機会を待ち、一服を盛るか」

「あんまりです、陛下。私はただ喜んで頂ければと思って……」

イリスは謂れ無い疑いに、表情を曇らせる。

「クツクツク、冗談だ。お前がそこまで馬鹿な女ではない事ぐらいわかっているさ」

彼は自分に向けられる、憎悪や敵意といったものには敏感であり、イリスにはそのような感情がない事は十分と承知していた。にも関わらず、わざと彼女を傷付けるような言葉を吐いていたのである。

グリードはイリスの反応を見て楽しんでいただけだった。

「では、頂くとするか」

今度は何の躊躇いもなし、ケーキを口へと運ぶグリード。

「ううん、なかなか美味い。褒めてやるぞ、イリス」

「ありがとうございます……」

沈んだ表情でイリスは答えた。

夕食を終えたら入浴、そして後はもう寝るだけである。

グリードは寝室へと戻ると、その部屋に置かれた巨大なベッドの端に腰掛けた。

彼と共に夜を過ごすべき妻は、その中には見当たらない。

イリスはというと、離れるような位置に立ち、窓の外の星を眺めていた。

「そんなに嫌か？」

「えっ……」

イリスが振り返りグリードを見る。

「俺と毎晩、共に過ごす事がそれほど苦痛か？」

グリードの言葉には怒りが込められていない。むしろ楽しそうで、彼女が頷く事すら望んでいるかのようである。

「いえ、そういうわけでは……」

「クツクツク、だが皇妃となったお前の義務だ。それはしっかり果たして貰わねばな」

「はい、わかっております」

「わかってはいるが、覚悟が出来ぬか」

「覚悟ならこの国へと参る前から出来ております」

「そうは言うが、そうは見えんぞ」

「そんな事は……」

イリスの反応を見ながらグリードは溜め息をつく、急に真面目な口調となった。

「イリス、俺にはお前がわからん」

問われたイリスは沈黙で答える。

「お前が何を考えているか、どうにも解せない」

「私は……」

何か言おうとするが、また黙り込んでしまう。

「俺にいい顔しようとする事は、何も不思議じゃない。媚びを売り、対価を得ようとする女は山ほど見てきた。だが、わからんのは、そういう奴等とどうも違うようにしか思えんのだ、お前は」

「その……、他の方々の事は存じませんが、私は陛下の為に……妻である者が夫の為に尽くそうとするのはそんなに変でありましようか？」

「それはくだらぬ理想だ。望まず妻となったお前が、何故そんな事をせねばならん。現に今、お前は嫌がついていないか、俺に抱かれるのを。そんな相手に尽くすとはおかしな事を」

グリードの言葉を聞いて、イリスは窓から離れ、ゆっくりと歩み始める。

そして、彼女は夫の隣へと腰掛け、顔を少し赤らめながら言った。
「嫌というわけではないんですが、どうにも恥ずかしくて」

「恥ずかしいだ？　とうに初夜など終えて、もう何度としてることだぞ」

「でも、慣れぬのです……」

「それで今日は嫌だと」

「陛下がお望みならば私はいつでも……。ただ、少し心を落ちつかせる時間が欲しくて、それで星を眺めていただけの事なのです」

グリードが呆れたようにまた溜め息を吐く。

「お前は俺が憎くないのか？ 嫌ではないのか？」

「どうしてそのような事ばかり仰られるのですか、陛下。私がお慕いする事が、そんなにご迷惑なのでしょうか」

「迷惑も何も、お前は自分がここに来た経緯をもう忘れたのか？」

「それは……」

「ここへと来て、式を終えた日の事を忘れたのか？」

グリードはあの日、イリスに容赦なく手を上げた。それは彼女に間違いなく強い恐怖を与えたはずだ。

それなのに翌日にはもう、グリードとぎこちないながらも何とか会話をし、良好な関係を築こうとしてきたのだった。

恐怖は感情を支配する。

恐怖が憎悪を抑え込み、絶望の中で従順であろうとする事は珍しいものではない。しかし、イリスの場合はその最初に存在せねばならぬ憎悪というものがなかった。

この帝国へと来て、不安や悲しみという表情は見せても、憎しみという部分だけは決して見せなかったのである。

「以前にも申しましたが、憎しみは憎しみしか生まぬのです。そして愛情は、愛情を生むやもしれぬのです」

「だから、お前は愛すると？」

「はい」

「それが俺でもか」

「人を愛する事に理由などいりません。夫を愛するのも同じです。私が陛下の妻である。それだけで、陛下を人として、夫として愛するに十分な理由ではありませんか」

「……なるほど、お前の考えはよくわかった」

「わかつて頂けましたか」

イリスが笑顔を作る。

「つまりは他の者が夫であつたなら、お前はその者を愛するという事か」

「そんな」

「その時は俺などどうでもよいわけだ」

「そういつつもりで申したわけでは……」

「わかってみれば、これほど単純で明快な話もないものだな」

そう言つて立ち上がり、去ろうとするグリードの手をイリスは慌てて掴んだ。

「陛下、誤解です!!」

「誤解も糞もあるものか、イリス。お前が言う愛してる人物ってのは一体誰だ？」

「陛下の事で……」

「違う。お前が愛してるのは、『自分の夫』だ。オートリア帝国の皇帝ではないし、ましてや、グリードという人物であるうはずもない」

彼女の手を振り解きグリードは去っていく、そしてまた最初の日と同じく背を向け去っていく。

「待つてください、陛下……」

グリードが軽く振り返ると、そこには泣いているイリスの姿があった。

「ごめんなさい……。申し訳ありません……」

必死にこらえようとしても、流れる涙は止まらない。

イリスは己の傲慢さを恥じ、悔い、泣いていた。

何が、愛だろうか、何が、妻としてだろうか。

わかつたような事を言つた自分が恥ずかしい。

どれほど傲慢で、傷付けるような事を平然と言っていたのか。

「傍にいてください……」

しぼり出した声で懇願する。

「おいていかないでください……」

このままでは本当にすべてが終わってしまうような気がして。あの深い闇から救うのが、完全に不可能になつてしまふ前に伝えなければならぬ。

「傍にいてください、グリード様」

イリスの言葉が、表情が、涙が、男に小さくも激しい変化をもたらす。

どんなに小さくとも、確かにあるものならばよかった。
結局はそれを望んでいたのだ、彼自身も。

言葉を、思いを、考えを。

彼女の愛情というものを。

「イリス」

グリードは彼女のもとへと戻ると、立ち上がり抱きしめた。
説明するには、無数の要因と複雑な流れがありすぎる。

しかし、それこそが感情であり、単純な理屈、合理を凌駕するモノ。

どんなに醜く生きてこようとも、グリードも人の子に過ぎぬのだ。

「もう一度聞く。お前が愛してるのは誰だ」

「グリード様です」

「どうして」

「わかりません」

「わからないのに愛してるのか？」

「はい。理由がなくてはダメですか？ 理由がなくては信じてもらえませんか？」

必死にすぎるような声に、グリードの腕に力が入る。

「いや、それでいい」

グリードはベッドの上へとイリスを押し倒す。

一瞬の驚きはあったものの覚悟を決めたか。顔色をほんのりと赤らめながらも、イリスは真っ直ぐとグリードの瞳を見つめていた。

グリードは思った、彼女の姿は彼のこれまで見てきたあらゆるモノよりも綺麗だと。

美人は数多く見たし、抱いてきた。されど、これほど真の意味で惹かれる女は初めてだった。

その事が、言い表せぬ苛立たちになっっていたし、焦りになっていた。

わずかな日数を共に、過ごせば過ごすだけ惹かれ、イリスという存在が急激に手放し難くなっていく。それはグリードにとって今までに無い経験であり、恐怖ですらあった。

その恐怖を、彼女を抱いてる時だけは忘れられていた。しかし、抱けば抱くほど、その分反動は大きくなり、苛立ちも、焦りも大きくなっていった。

グリードは確信する、それからようやく逃れられるのだと。

「イリス、お前は俺のものだ」

ひどく自己中心的で尊大な宣言にも、イリスは静かに頷き、答える。

「グリード様」

「今は、様はいらん」

さすがに少し戸惑った表情を見せたイリスだったが、グリードの望んでいるモノを理解するとすぐに笑顔となり、誓った。

「はい。……これからもずっと愛しています、グリード」

いつ以来の事だろう。もしも、母親という者がいたらそれはこのような存在だったのだろうか。

六も年下、わずか十三歳の少女に頭を撫でられながら十年数年ぶりにグリードは泣いていた。

グリードを覆う暗黒に、少女がかざした小さな炎の光。すぐにも消え得るこの危うい感情が、どのような結果をもたらすのか。

それは誰もはつきりと予測出来る事ではない。

多くの犠牲の上に成り立った望まぬ婚約。亡者達は怨嗟の声を上げ続けているのだろうか。

血塗られた幸福など、許されるものではないのかもしれない。それでもイリスは、グリードの腕に抱かれながら感じていた。

今日は久しぶりに、とてもよい日だったと。

「狼を見たんだ」

「狼？」

「白い狼を見たんだ……」

有用な駒

「今日のところはこれで終いにする。あとは任せたぞ、オイゲン、マルセル」

「はっ」

少し前まで、形だけながらも、日が沈むまで政務に勤しんでいたグリード。

それが今や、最低限の報告を受けるだけで仕事を切り上げ、あとは重臣達に任せ皇帝の間から退室してしまう。

イリスがグリードに菓子を作った日以来、そしてその夜の出来事以来、皇帝は人が変わったように国政への興味を大きく削がれたようだった。

いや、というより、それよりもっと大きな関心事項が新たに出てしまった様であった。

それは無論イリスの事である。

式を挙げて一月ほどの間は、ひどくぞんざいな扱いをされていた。それが今では朝から昼まで、そして、わずかの時間だけ政務をこなすと早々にグリードはイリスのもとへと戻り、あとはもう離れる事をしなかった。

イリスを伴つての城外への外出もし始め、傍目には非常に仲のいい夫婦になったように見える。

そんな皇帝のあまりの態度の急変にも、当初、多くの者は困惑こそしていたが、それほど大きな問題とは捉えていなかった。

夫婦仲が急激に良くなったからといって、実務に多大な影響を持つオイゲン、マルセル、ジェイドといった者達に、現段階では何ら支障は無く、彼らに不慮の事故や病でもない限り、体制に影響はないからである。

オイゲンに至っては、この状況を歓迎している節があるぐらいだったのだが、ジェイドの様子だけは少しばかり違った。

「まったく気楽なもんだぜ。こっちは、また命のやりとりしようかって時に、大將は嫁さんとお楽しみしてんじゃあなあ。引き締まらねえ」

巨漢が広々とした一室で愚痴っていた。

帝都の外れに建てられたばかりの屋敷。豪勢というよりは気品に重きを置いた外観を持つそれは、軍においてオイゲン將軍と対にならんとすジエイドの新居。

ジエイドは今日、そこに珍しくもトンボを招いて、何やら談議していたのである。

「お前はいつも好き放題暴れるだけじゃないのか」

「まあ、そりゃあそうなんだがよ。……しかし、また今頃になって女に嵌り出すなんて、そんなにイイのかね、あの姫さん。別品って言ってもまだ十三のガキだろ。最低あと四、五年は寝かさんとおもしろくも何ともねえだろ」

「お前の趣味も、あの男の趣味も、俺には関係ない事だ」

「ガッハッハッハ、ちげえねえ」

「だが、女の方は別だ」

「別？」

「ああ。あの娘、少々やかいな事になるやもしれん」

「夢見がちのお姫様って話だが」

「その夢を見せている相手が悪い」

「豚に夢は見れんぞ」

「その豚に見せようとするからタチが悪い」

「マジで言ってるのかよ。あの豚が善政なんて興味持たずがねえ。欲望に忠実だぜ、あのタイプ」

「欲望の矛先が変われば結果、政の仕方も変わる」

「へえ、そんなもんかね。で？ それを防ぐのに、あの小娘を消すってか？」

「その選択も当然残しておく」

「グハハハ、平然とおもしろい話してくれるじゃねえか。いいねえ、

それで俺にどうしろと？ 俺様と仲良く談笑したいわけじゃねえだろ、本題に入ってくれや」

「……トカゲ、蜥蜴の頭が欲しい」

トンボの顔つきが変わる。

「どこから聞いた」

「耳から入ってきた」

「いつも通り、気色悪い野郎だ。まあ、いい。尻尾ならまだしも頭になると高くつくぜ」

「金は惜しまん、命もな」

「ご立派になられたもんだ。おめえには似合わん立派な屋敷まで建てて、さすがは次期將軍の呼び声高いジェイド様だぜ」

帝國軍における頂点は皇帝であり、その下に將軍がある。現在、帝國の將軍は、正式にはオイゲン一人しかおらず、その影響力は絶大。

かなりの部分で独自運用の利く、ジェイドの師団もその影響を完全に排除する事は難しい。無論それはジェイドにとって好ましい事ではない。

「人を使い、人に会う立場になるとボロ屋に住まうというわけにはいかない」

「悪鬼、狂人の類いには、ボロ屋が似合いだがなあ」

「つまらん事ぐだぐだ言つてないで、紹介するのか、しないのか。はつきりしろ」

「別に金だ、地位だ。そんな見返りを期待するわけじゃねえ。ジェイド、おめえに蜥蜴を紹介してやったら、おもしろくなるか？」

「当然。……その為の駒だ」

「ガッハッハッハ。なら断る理由もないわな」

トンボはジェイドの要請を快諾すると、席を立った。

「まあ、会っただけならそう難しい事じゃない。だけど、奴等が駒になるかはお前次第だぜ」

「駒にならないならそのまま潰すまで」

「どつちに転んでもおもしろい事になりそうだなあ、おい。楽しみだ」

帝都から南方に馬を飛ばして三日と半日、主要街道から外れ、森を抜けた先に廃墟と化した小さな街があった。

疫病と度重なる戦争、恐ろしい魔物達の襲撃によつてもう五十年以上も昔に滅んだこの街には、いつの頃からか帝都を追われた悪人達や、行き場のない棄民達が集い暮らし始めていた。

そうして出来上がったスラムにも劣る『人捨て場』の治安は格別に悪く、この場で一年生きれば一人前、五年生きればたいしたものと言われる世界だった。

ただひたすらに他者を食い物にする地獄では、強者とそれに媚びへつらい力となれる者しか生きられない。他に行き場のない者達が派閥を作り、別の行き場のない者達を貪り食う。

目立つた産業など無いこの人捨て場の収入源と言えば、街道での強盗、追い剥ぎや人攫いがもっぱらである。その稼ぎも、人捨て場に帰ると、多くの者達が狙い奪おうとしてくるのだ。

何故、人捨て場到大勢の犯罪者達がいながら、彼らは大規模に団結せずに少ない稼ぎを食い合うのか。それは協調を嫌う彼らの性質にも問題があった。しかし、一番大きな理由は、やりすぎるわけにはいかない、というのがあったのだ。

人捨て場は帝国の領土を考えれば帝都からそれほど離れているわけではない。手当たり次第街、村を襲い、人を攫い、金品を強奪してたのでは、すぐに帝国軍に目をつけられ、人捨て場ごと掃除されてしまうのである。

それに対して、ほどよく襲う人間を選別していれば、つまり他国からの重要な使者、有力貴族や、軍関係の家族などには手をださないなどある程度節度を持っていさえすれば、帝国側としても、犯罪者や貧民の隔離、屑同士の共食いによる手間の削減と、人捨て場という場所を残しておくメリットも大きいのである。

政府と犯罪者達の妥協点、そこに生まれたのがこの人捨て場だった。

「ああ、相変わらず陰気臭いところね」

少女は空気が淀み、腐った臭いを放つ街に戻ってきた。

死んだ街の街道を何ら躊躇いも無く歩く彼女を、道端の男達はしげしげと見つめる。

「おい見ろよ、ありやあ……」

「何だよ、もう帰ってきやがった」

「あの、噂は本当みたいだな」

「俺も昨日見たぜ。別の奴をさ」

あるグループは、疎んじるように会話をし別のグループは。

「嘘だろ……、なんで奴がいるんだよ」

「しつ。あんま見るんじゃねえ」

怯えるように会話していた。

「へっへっへ、女じゃねえか」

背中に大きな刺青を入れた半裸の大男が、どす黒い欲を含んだ目で少女を観察している。

この街で女は貴重である。弱肉強食、わずかな富の中でその存在は非力すぎ、彼女らの多くは街の強者の特権としての所有物という存在でしかない。

だから、この掃き溜めを堂々と歩く見た目十と二、三年の少女によからぬ事をたくらむ輩がいても不思議ではなかった。

「おい、まずい事考えてるんじゃないだろな」

大男の隣にいる、ぼさぼさ頭の小汚い男が言った。

「ああん？」

「身形を見る。服だつて、結構な値がしそうだぜ。どこの奴の飼猫だ」

「だから何だつていうんだ。やり終わったら埋めちまえば、誰がやったなんかわからねえよ」

「目撃者が多すぎる」

「うるせえ、こんなチャンス滅多にねえんだ。派閥だろうがボスだろうが、文句ある奴は俺がぶつ殺してやるよ。びびってるならここでじっとしときな。お楽しみを見せるだけなら許してやるからよ」
「くそつ、俺はどうなってもしらんぞ」

大男は仲間の忠告も聞かず、少女の方へと近付いていく。

「あいつ……、馬鹿だろ」

「新入りか、かわいそうに」

「馬鹿で運の無い奴は長生きできないもんだ」

大男の行動を見たまわりの奴等はひそひそとそれを揶揄した。

「止めなくていいのかい。あんた」

ぼさぼさ頭の小汚い男に一人別の男が近付き声をかけた。

「知らねえよ。ああなったら奴は止められん。派閥のボスだろうが、何だろうが殺し合うまでだ。俺はもう縁を切らせてもらうけどな。ここに来て日が浅いのになさつそく目つけられたらたまねえよ」

「派閥のボスねえ。そんな生易しいもんじゃないんだがなあ」

「えっ」

「悪魔だよ、ありゃあ。鬼を食ってでも生きる悪魔だ」

「はあ？」

小汚い男にはその意味をまだ理解する事は出来なかった。しかし、わずか一分と経たぬ後に彼は知る、悪魔の持つ牙の恐ろしさを。

「お嬢さん、ダメじゃないか。一人でお散歩してちゃあ。危ない所なんだ、おじさんが守ってあげるよ。まあ、料金はちよつと特別だけど」

「邪魔よデカブツ、退きなさい」

下品な大男に少女は怯む事無く言った。

「おいおい、手厳しいな。生意気なイイ女は嫌いじゃないが、ガキはだめだなあ。ガキは素直に怯えてないと」

「最後の忠告よ。目の前から消えて、薄汚いデカ豚」

少女の言葉に大男がキれる。

「ぶざけんなよ、糞餓鬼！！……いいや、面倒だ。殺しちまって

からやるか」

大男の腕が少女の首へと目掛けて伸びた次の瞬間。
バチーン。

音を鳴らして閃光が走り、大男の巨体を貫いた。

「汚いうえに馬鹿で、弱い。まさにゴミね」

声を発する暇なく絶命した男の肉片を見て、少女は嘲罵を浴びせる。

そんな光景に驚愕する大男の仲間だった小汚い男。

「ま、魔法か？」

「しかも、あの発動の速さだ。並の奴じゃ一傷すら負わせられねえよ」

「ちっ、だからやめとけって……、俺は止めたんだ」

「ケツケツケ、まあ怖いのはあの娘の強さだけじゃないがね」

意味有り気に男が笑う。

「はっ？」

疑問符の付いた顔をする小汚い男に、彼は手のひらを差し出す。

「銀貨一枚ってとこだ」

「何が」

「今からの情報料、聞きたいなら銀貨一枚」

「ふざけんな、そんな金あるか」

「ないならこっちはかまわないけどさ。この街で長生きしたいなら知っておいて損はないぜ」

「……ちっ、わかったよ」

小汚い男が銀貨一枚を渡す。

「まいど」

「それで、何だよあの娘の強さ以外に怖いところって」

「属してる組織さ」

「何だよ派閥の話かよ。んなの見ればわかるだろ。あの強さの奴がいる派閥のヤバさなんて」

「ただの派閥じゃねえ。アレに比べれば、ここでの派閥のボスなん

てまさに猿山のボスにすぎない」

「どういう事だよ」

男が周囲を一度見回した後、小声になり言った。

「蜥蜴だよ」

「はっ？ トカゲ？」

「馬鹿！！ 声がでかい！！」

慌てたように小汚い男を注意する。

「何だよ……、トカゲがどうしたって……」

「アンタ、この世界に入って短いのか？」

「いや、キヤリアは結構ある方だと」

「だったら、噂ぐらい聞いた事あるだろ」

「トカゲねえ。トカゲ……」

少しばかり思考する小汚い男だったが、急に血の気が引いた顔になる。

「おい、トカゲって、あの蜥蜴かよ」

「そう、まさにそれだよ」

「嘘だろ、何でこんな掃き溜めに」

「理由なんて誰も知らない。……わかってるのはある日やつ等が現れて、丁度三ヶ月ほど前にまたこの街を去って行った事だ」

「去って行ったって……、じゃあ何で今いるんだよ」

「さあな。またしばらくこの街を拠点にするのか、それとも臨時の用があるだけか。どっちしろ関わらないのが一番だ」

「ほんとにやっかいな奴等ばかりの掃き溜めだな、ここは。しかし、それだけの話で銀貨一枚もとるのかよ」

「それだけでも、その価値はあるぜ。何せここでは蜥蜴の名は……」

「ここでは蜥蜴の名は禁句」

いきなり二人とは別の声が聞こえてきた。

その声に男の顔が、恐怖でかたまる。

「知っててなお口にするなら、それは我々への挑戦、挑発でしかありません」

「あんだ、いつのまに……」

小汚い男の視界に突然、不気味な男が現れる。

前身を黒のローブで覆い、頭頂の高い帽子に白い顔化粧。まるで、道化の奇術師の様をするその男が笑う。

「待ってくれ！！　これはちよつとした手違いというか、悪かったもう二度とあんならの事は……」

「二度目があるのは、その価値を有する人間だけ、残念ですが貴方は死ぬ方に価値がある」

道化の男の腕が動いた瞬間に、怯える男の首は胴体から飛んでいった。

啞然とするしかない小汚い男の前に、その首が落ち、転がる。

「少しばかり長生きしたいのならよく覚えておいてください、ここでの禁句というものを。貴方もこの世界にいるなら理解できるでしょう。居場所をあまり明るみにしたくない者達がいるという事を」

「あ、ああ。わかった、わかったよ。俺は何も見てないし、何も喋らない」

「そうです。弱い人間はせめて、そうやって賢く生きるべきです。では、さようなら」

道化が一礼して去っていく。

大男と情報を売った男、わずかの時間に二人の人間が死んだ。

だが、この掃き溜めの街で明日までその事を気に止める者など、そう多くはない。

「た、助かった……」

その場にへたり込む小汚い男。

男は知った。

ゴミが集い、消えていくこの場所に蜥蜴がいたのだと。そして、それを知る者はこの街に大勢いるが、その名を口にする者は滅多にいない事も。

強欲な犯罪者達がまったく逆らう事の出来ない集団『蜥蜴』。彼らを駒にしようとジエイドは考えていた。

呑むか、呑まぬか

人捨て場の中心街にある一画、崩れかけた教会に彼らはいた。

一人の男が、彼らの前に立ち口を開く。

「全員揃ってるな」

鋭い目をしてはいたが、その顔は能面のように顔だち端麗でどこか無表情でもある。

彼がこの集まりのボス、そして人としての名前を捨てた男。

「おいボス。こいつはどういう事だい。この街での仕事は終えたはずだ。何か俺達に不手際があったのか？ このくせえ街にこんなに早くまた来る事になるなんてよ、最悪だぜ」

組織の頭に、不機嫌そうに真っ先に食って掛かる人物。

褐色の肌に弁髪の間、筋肉質でありながらもスマートさを感じさせる長身のその男に、美しき紫の瞳を持つ少女が続く。彼女はこの人捨て場に来て早々、絡んできた大男を一発の魔法で葬ったあの少女である。

「ヒューゴの言う通りね。ここは本当に最悪。集まるにしても他じや駄目なわけ？」

「お二人さん。彼が必要も無しに、一度拠点として使った街を短期間で再び使用する事などありえないでしょう。ねえ、パディエダ」

悪態をつく二人を見かねてか、少女と同じく街で一人の男を殺したばかりの道化の奇術師が言った。

道化に話を振られたのは気味の悪い青年だった。前髪が目をはほとんど覆っており、顔面は焼け爛れた後のようにひどい肌で、身に着けている衣服も臭いこそあまりしないもののボロボロだった。

「どうして僕に振るのさ。どうでもいいけど、僕はシユウが嫌なら反対するよ、レスリー。だって、だって、へへッ、へへへ」

パディエダが美しい少女シユウをニヤつき見た。

「キモッ」

見られた方は隠す気を微塵も感じさせぬ嫌悪の視線を返す。

「静かに……。あなた方がどう思おうと、何を考えようと、頭の命令は絶対。それを忘れてもらっては困りますな」

どこからともなく老人がぬつと現れて、不平不満を言う者達に警告した。

「アーロン、何もボスに逆らおうって話じゃない。説明してくれてことさ」

「ヒューゴ、いつ俺が説明しないと書いた。お前達が勝手に騒ぎ、時間を無駄にしているのだろう？」

蜥蜴の頭が、尻尾の目を見て言った。

「へっ、悪かったよ。どうぞ話を続けてくれ」

ヒューゴ以外の者達も、彼らのボスの言葉を聞く気になったらしい。

蜥蜴の頭は彼らをいちべつした後、ゆっくりと語りだす。

「この掃き溜めに再び集まってもらったのは、新たな顧客、その可能性を持つ男が指定してきたからだ。ここが会うのに一番都合がいいと」

「新しい顧客との接触の為？ でも、それってアーロンの役目でしょ？ どうして私達まで」

シユウはシンプルな疑問をぶつけた。

蜥蜴という組織の玄関口は、長年アーロンという老人が担当していた。それこそ、今の蜥蜴の頭が生まれる前より、その役をこなしてきた。

顧客達、つまり組織に様々な汚れ仕事を依頼する亡者達を選別し、組織が、蜥蜴の頭が許容する仕事だけを受け、伝える。

判断の基準はいくつかあるが主だったものとして、組織の隠密性を大切にしている蜥蜴のメンバーの素性を探らず、秘密を守り、仕事の過程においては信頼し、任せる器量のある人物かどうか。それを経験と勘から適切に判断し、不合格の依頼者は時にその場で抹殺される。

当然、危険な役割であるし、また組織からの人を見る目に対する信頼が無ければ務まりはしない。

多くの場合、アーロンはたった一人でそれをこなしてきた。今回のように、急に全員を集めるのは大変珍しい。

「それも男からの指示だ。全員の顔を確認しておきたい、それが仕事を依頼する条件だと」

「依頼の条件だって？　ちょっと待ってくれボス、受けるかどうかはこっちが判断する事だろ？」

苛立ちを隠さぬ口調のヒューゴ。

「ああ、そうだ」

「だったら、おかしいじゃねえか。そんな話にならない。会うも何も断るしかないだろ、そんな話」

「会うだけ会ってから考えた方がいいと判断した」

「ボス、シユウはともかく俺らは顔を気安く売ったりできない商売だって事、よくわかってるはずだろ？」

「ああ」

「だったら……」

ヒューゴは、そこで言葉を止めた。

彼を見る目が、それ以上喋るなと語っていたからである。

「私は貴方の判断を疑いはいしません。ただ一つ、興味があるので教えて頂きたい。これから会う顧客の正体と、誰がその話を持ってきたのか、つまりその顧客と我らを繋ぐルートを持った人物が誰なのか……」

道化レズリーは、尻込むヒューゴを無視して頭に尋ねた。

「無論、それも話す。……今回の顧客はかなりの大物だ。上手く関係を築ければ、組織に大きな利益をもたらす」

「して、その人物とは？」

「オートリア帝国帝国軍第二十師団師団長ジェイド」

その名に、ヒューゴとシユウはわずかであっても驚きの色が顔にでていたが、レズリーはまったくといって良いほどに無反応で、不

自然で不気味な笑みを浮かべたままだった。

「なるほど、合点がいました。その名がでてきたという事は、当然繋ぎ役となった人物は彼ですね」

「ああああ!!」

ヒューゴが突然大声をあげた。

「トンボ……」

ヒューゴが巨漢の化け物の名を口にしながら鬼の顔となる。

「そうだ。恐らく奴だろう」

「恐らくってどういう事だい、ボス」

「実際にアーロンが接触したのは、下っ端の帝国兵だった。恐らくジェイドかトンボの指示を受けてだろう。彼は内容も知らぬであろう紙切れを運んできただけだった」

蜥蜴の頭の話聞いていたアーロンが静かに頷き肯定する。

「中身は単純。日時と場所、お前達全員を集めておく事。了承するなら、運んできた兵士を始末しろという事。もし、兵士が帰還すれば、要求を断ったと判断して、蜥蜴を掃討するという事も書いていた」

「なめやがって、上等じゃないか。帝国軍の師団長だろうがなんだろうが、ぶっ殺してやる」

「ヒューゴ、俺の話を聞いてなかったのか？俺は会って判断すると言ったはずだ。それに、判断するのはお前じゃない」

「だけどよボス!!」

「ちよつと待つてよ」

シユウが二人の会話に横入りする。

「さっきから何か盛りあがってるけど、いったい何事。ジェイドって奴の話なら聞いた事あるけど、トンボって誰だっけ。えらくヒューゴは気にしてるみたいだけど」

「僕は二人とも知らないなあ。だって興味ないし、クッククック」
シユウには彼らがこれほどまでに反応する理由がわからなかった。たしかに顧客達の中でもジェイドがかなりの大物となる事は間違い

ない。

それでも、蜥蜴の歴史は長く、修羅場も一度や二度の話ではないのだ。彼女よりもずっと長く、この世界にいるヒューゴがそこまでの怒りを露にし、蜥蜴の頭がふざけた内容の手紙をだした人物に従い、メンバーを集めたのも不自然に思える。

パディエダにいたっては、その理由すら別に知りたくないといった様子だった。

「トンボは今、ジェイドと同じく帝国軍の師団長となっている人物だ。だが、部隊の運用に関してはほとんどジェイドが行っており、戦場だけの形だけの司令官となっている」

「ああ、何か思い出したかも。素手で兵士を薙ぎ倒すとかいう男だっけ」

少女は脳内からかすかな記憶の欠片を探り当てる。

「そしてこの男、元蜥蜴の人間だ」

「何よそれ……」

頭の言葉はシユウには衝撃だった。

「元ってどういう事？ 蜥蜴に一度属したなら、死ぬまでその尻尾でしょ。なのに、何で今そのトンボとかいう奴がいないのよ」

「抜けたのさ」

ヒューゴが言った。

「抜けたって……、そんな事出来ないのが、この蜥蜴でしょ。いったい何を」

「ふふふ、シユウとパディエダ。お二人が来るより昔に彼はこの組織に属していました。そして、去っていった。大きな事件を起こして」

レズリーが笑う。まるで、良い思いでを語るように。

「事件？」

「この組織の掟。一度属せば、死ぬまでその尻尾。それは昔から変わらぬものです。ただ彼の場合、抜ける為に先にしかけてきた」

「組織の人間を襲った？」

「ええ、その時に当時いたメンバーがたくさん死にました。たくさん、ね。ふふふ」

「たくさんって……」

「六人だ。全部で六人もやりやがったあの腐れデカブツ」

ヒューゴが吐き捨てる。

「六人って……、今の蜥蜴が全員で六名よ」

「ああ、壊滅さ。当時は今より人数がいたが、それでも大失態だ。大半の人間が殺されたあげく逃げられたわけだからな」

「……不様ね」

「ふふふ、当時は先代の影響か、メンバーの選考が少々荒かったですね。一本の尻尾にそれだけの人数が黄泉送りとなってしまうましたよ。そして、先代も……」

「そこまでされて、どうして野放しにしているわけ？ 居場所はわかっていたわけでしょ」

裏切り者は地獄の果てまで追いかけて抹殺する、それがこういった組織の鉄則である。それを破り放置するとは……。

シウウには呆れと怒りの感情が生まれていた。

「奴は強い、それに新しい棲みかがやつかいだった」

ヒューゴが苦虫を噛み潰したような顔で言った。

「早めに始末しておかないから手遅れになったんじゃないの？ 今じゃ形だけでも軍のお偉いさんでしょ、馬鹿らしい」

「追っ手も何人か出したんですがね。まあ、みなさん見事にやられてまして。ふふふ」

「俺の判断で中止させた」

蜥蜴の頭に注目が再び集まる。

「中止させたってボス……。先代って事はアンタの父親も殺されてるんですよ。それでいいわけ？」

「優先すべきは組織の存続だ。それに支障がでると判断して中止させた」

「裏切り者を生かす方が支障がでてるんじゃないかって？」

「そう考えるなら、今回はけりを付けるチャンスでもある」

「そうだ、ボス。こいつはなめた挑戦状だ。今なら殺れる。俺だつてあれから強くなった」

興奮するヒューゴに頭は首を振る。

「いや、それを判断するのも会ってからだ。これは決定だ」

「なっ……」

ヒューゴ、シユウの表情には不満がありありと見て取れる。しかし、逆らう事は許されない。

レズリーは二人の様子を見てひとり笑い。アーロンは無表情に、パディエダは退屈そうに眺めているだけだった。

ジェイドはやって来た、蜥蜴と接触する為に掃き溜めの街へと。

ここに来るのは、初めてではない。

久しく訪れなかった街の風景は、見た目に多少変化はあれど、昔と等しく荒れ果てていた。

嫌いではない。だが、好みでもない。

しかし恐らく、この風景は人が辿り着く終着点のうちの一つなのだと思つた、昼間なのに薄暗い、そんな廃墟に囲まれた空き地に一人立って。

「お待たせしてしまいましたか、ジェイドさん」

前方から男が歩いてくる。

ゆつくりと、ゆつくりと歩いてくる。

表情はリラックスして自然体のように見せてはいるが、ジェイドにはわかる、男がひどく警戒している事など。

「丁度だ。……しかし、どういう事だ。全員で来て欲しいと伝えているはずだが」

男が立ち止まる。

「安心して下さい。今に揃いますよ」

その言葉が嘘だと、ジェイドは知っていた。

何故なら、自身を見つめる目が、男のそれ一つではなく、周囲から五つ、そのうち一つは非常に近い場所にある事を察知していたからだ。

「ああ、そうしてくれると助かる。六人全員揃うまで、話は無しだ」
「驚いたな。組織の構成人数まですでに把握されてるとは」

ジェイドはそこまで知ってはいない。ここにいる目の数を数えただけであり、かまをかけたわけだ。

そしてこの男の反応が真のものならば、蜥蜴は警戒しながらも、ジェイドの話にのる可能性がある事を示している。

「勘違いしないで貰おうか、蜥蜴の諸君。俺はいつでもお前らを消せる。お前達の選沢肢は二つ、ここで死ぬか、駒として生きるかだ」

『諸君』、つまりは男意外の存在にジェイドが気付いている事を知らせていた。

「なるほど、さすがは帝国の師団長。あなたを囲む目に気付きましたか」

「御託はいい。さっさと全員出てこさせろ。お前が蜥蜴の頭だろ？」
雰囲気でわかる。持っているものでわかる。目で、息遣いで、口調で。

わかる。

ジェイドほどの者には、一目でそれが暗黒街でも恐れられる存在『蜥蜴』の頭だという事が。

「狂乱の貴公子様はもう少し品のある話し方をすると聞いていたんだが……」

「必要のない相手に、飾った言葉はいらんだろっ」

「ごもつとも、では飾りはなしでいきますか。……駒を操るプレイヤーの実力は駒の生き死にを左右する。だから俺達は知りたいんだ。……試させてもらうよ、ジェイドさん」

空気を切りながらそれは駆け抜けた。

一体どこから、正確にはジェイドにすら判断しきれない。

それは、神速の足捌きで距離を詰めると、ジェイドの背に刃先を

向けた。

ブシュウ。

赤い液体を噴き出しながら首は舞い、地に落ちるところごと転がった。胴はボトリと倒れ身動き一つしない。それは、老人の亡骸となったのだ。

「殺意があつた……。次に斬るのは、手足か胴か、それとも頭を斬ってしまった方がいいか？」

もう一度小さな異変があれば、ジェイドは迷わず目の前の男に斬りかかっていた。

だが、仲間の一人を失った蜥蜴の頭は敵意を見せるどころか、ジェイドにひどく感心するような表情を、その能面づから見せた。

「素直に驚かされたよ、ジェイドさん。アーロンは長年、蜥蜴としていくつもの修羅場をくぐり抜けてきた。老いたとしても、そこらの雑魚とは違う」

「思い上がるな。所詮は蜥蜴の尻尾。俺は鬼すら殺れる」

「狂鬼士ガエルか。老いても鬼は、鬼でしたか」

「ああ、そしてお前達は所詮蜥蜴だ。どんなに夢見ても竜にはなれない」

「俺達は別にそんなものになりたいわけじゃない。それに、その所詮は蜥蜴の俺達の力が欲しくて、貴方はここに来たわけだ」

「ゲームを進めるのに駒の種類は多い方がいい」

「貴方が良いプレイヤーだってのはよくわかりました。俺としても、その下で働くのは大歓迎。ただ……、一つ条件がある」

「思い上がるなど言っただが？」

「たいした条件じゃない。男を一人殺らせて欲しい」
それが誰を指すのかジェイドにはわかる。

「トンボか」

「ええ」

しばらく考えを巡らすしたジェイドだったが、その結果出てきた答えは蜥蜴にとって最良と言えるものではなかった。

「殺す事自体には反対しない。ただし……」

「ただし？」

「今すぐというのは無理だ」

「ほう、無理ですか。では、いつなら問題ありませんかね」

「無用の駒はいらない。つまり必要がなくなつた時がきたらだ」

「期限を指定できるものではないと……」

「そういう事になる」

ニヤリと蜥蜴の頭が笑う。

「そんな条件を俺達が、蜥蜴が呑むとお考えですかジエイドさん」

「さあな、どうするかはお前が決める事だ。……蜥蜴が生きるか、

死ぬか。好きな方を選ぶといい」

「傲慢な人だ……、だが」

頭の目付きは鋭いままであるが、ジエイドを殺そうとする目ではない。

「偽りは言っていない。トンボを殺すなというのもくだらぬ理由からではなく、本当に今は必要なでしょう、貴方の望むモノには……」

……

ジエイドは無言のまま男の言葉を待った。

「いいでしょう、蜥蜴は駒として生きる事を選びましょう。俺も興味がある、狂乱の貴公子が欲すモノに」

そう言つて蜥蜴の頭が片腕をあげると、そろそろ尻尾達がジエイド前に姿を現す。

この日、狂人は蜥蜴を飼う事に成功した。

しかしそれは、力と言う檻の中で、大きな餌を与える事によって留めているだけにすぎない。

もし檻が弱るか、餌がその魅力を失うかしてしまえば、逃げ出してしまつたろう。それどころか、飼い主だったはずの者に牙を向ける可能性すらある。

凡人には扱えぬ駒を狂人は手にしたのだ。

愛するも虚しく

皇帝の間にて、グリードはジェイドの話を聞いていた。

「陛下、次の戦に関してですが……」

ジェイドは軍事に関する細かい報告を行っていたのだが、最後に、本題となる話を切り出し始める。

「ああ、そろそろか」

「ええ」

玉座に皇帝が座っている時には大抵、將軍であるオイゲンも傍らに立っているのだが、この時ばかりは珍しくもオイゲン、マルセルがいないどころか、その他師団長さえもおらず、衛兵達や何人かの使用人を除けばグリードとジェイドの二人つきりとなっていた。

それは皇帝と師団長のやりとりで口を挟める者が存在しない、つまりそこで交わされる話がどれだけおぞましく残酷だろうと、ブレーキをかける人間がいない事になる。

「予定通り、東南部平定を進めます」

帝国の次なる目標は十二指同盟各国領地の完全併合だった。

「大丈夫なんだろうな、オイゲンはまだ早すぎると言っていたが」

「遅いぐらいですよ陛下、何も心配はいりません」

「最近、反帝の輩の活動が活発になってきていると聞いたが」

グリードの言う反帝とは、帝国領内に存在する反帝国、皇帝打倒を掲げる者達を指した言葉だった。

彼らはここ最近になって、どこから仕入れたのか質の良い武器、防具を得た上で、金銭をばらまき、不満の高い地方の貧民や、流れの傭兵を集めて、暴れだしていた。

あくまで広い帝国の辺境地帯の反乱が、多少活発になっている程度ではあるが、これが全領土へと拡大する可能性は否定できない。

放置できる問題ではなかった。

「だからこそです陛下。ここにきて奴等が派手に暴れはじめたのは、

その背後に支援する者が現れたからでしょう。それも、一貴族や商人のものではない。おそらく国家レベルの支援かと」

「ロマリアか？」

「それはないでしょう。どちらかと言えば、我らの急速な拡大に脅威を感じている者達」

「次の目標となる十二指同盟か」

「その可能性は十分に。……ですが、どこが反乱を支援しているかというのはいした問題ではないのです」

「ほう」

「どこが支援しようとして、あからさまな動きはできません。問答無用で周辺各国の併合を進めれば、反乱の拡大の前に資金源は断たれ、自然と弱体化しましょう。今は反乱分子に関しては最低限の戦力だけを割き、鎮圧ではなく拡大防止に努め、その代わりその支援者となり得る各国の併合を急ぐのです」

「これだけ広い国の反乱を、発生する度にいちいち潰すだけでは限が無い。それは確かである。」

「まあ、お前の実力は評価している。先のロマリア、公国戦もお前の働きが大きい」

「陛下の期待に応えるは臣下の者として当然の事。私は己の力を發揮しただけにすぎず、陛下の、私の実力への事前の評価があつてこそその賜物でございます」

「謙遜しているのか、尊大なのかわからん奴だ」

「思う事をありのままに申したまでです」

「まあ、よい。今回の戦も前回のお前の働きを評価して、將軍の反対よりお前の意見を優先したのだ。失望させるなよジェイド」

「もちろんでございます陛下。……しかし、少しばかりお頼み申したい事が」

「なんだ」

「この度の戦、私に全て任せて頂けませんか。つまり、全軍の指揮権を將軍ではなく、私にお預け頂きたい」

ジェイドの大胆な提案は、グリードにとって少しばかりの驚きであると同時に、愉快でもあった。

「クッククク」

「そして戦の後には、オイゲン將軍の指揮系統とは完全に別の軍を持つ事をお許し頂きたい」

「二人目の將軍になりたいというわけか」

「肩書きに興味はありません。ただ將軍の干渉を受けずに部隊を動かせるようにしたいのです。もちろん陛下の忠実なる僕である事には違いありません」

「オイゲンも優秀な男なんだがな」

「しかし、少しばかり甘いところがあります」

「慎重なところ、だろう？」

「陛下がどのようにお考えであろうと、私にとって彼は素晴らしき同志ではなく、手足を縛り不自由にするだけの存在となりかけています」

「お前の監視も兼ねてるからな」

平然と信頼していぬと言い放つ皇帝に、ジェイドは表情一つ変えない。

「それで手間取る事になるのでは、非常にもつたいなくはありませんか」

「お前の才能がか」

「ええ、そしてそれが陛下の夢の実現の為でもあります」

ロマリアという大きな障害は既に取り除いた。

これからしばらくは中小国の一群が相手となり、指揮系統を無理に一本化する必要も薄くなった事もある。それほど悪い話でもないようにグリードには思える。

「それで、どれだけの規模のものにする気だ。その新たな軍は」

「まずは三個師団規模のものをと」

「まずは、か」

「成果を出すにつれ徐々にその規模の拡大に許可を頂ければ」

「大きくなりすぎた剣で、最後に狙うは俺の首か」

「まさか。陛下、信用できぬと申されるならそれでも構いません。

私はただ、陛下の為に大陸平定の軍を進ませ続けるだけです」

深い闇に包まれた瞳でまっすぐと見つめるジェイド。その姿を見てグリードは笑い、言った。

「クツクツ、いいだろう。オイゲンは狂人の飼い方を知らぬようだ。……今回の戦、お前に指揮の優先権を与える。そして問題なく勝利すれば、望み通り三師団規模の完全なる指揮権も与えてやる」
「はっ」

「ただし、条件がある」

邪悪な愉悅がグリードの内から湧き出てくる。

「絵描きを同行させ、お前達の活躍を一景描かせよ」

「絵ですか」

「そうだ。その絵が俺を納得させるだけの物である事が条件だ。絵が駄目なら、戦に勝とうが、指揮権はやれん。いいな？」

「御意のままに」

そしてそのまま下がろうとしたジェイドだったが、グリードに呼び止められる。

「ジェイド。……お前は良く思ってないんだろ？俺がイリスを愛でる事など」

ジェイドは無言で応じる。

「だったら証明してみせろ。この世にあやつと等しく、……何ならそれ以上に手放し難きモノが存在する事を」

「美しき姫君にも劣らぬ美女を描かせ、お持ちしてみせましょう」

「期待しているぞ」

このグリードがどのような絵を望んでいたのか、ジェイドは瞬時に理解していた。

そして、それは間違いなく手に入るであろうと、彼は確信していたのである。

帝国東南部に点在する十二ヶ国の連合組織、十二指同盟。

同盟は帝国各地で活動する大小様々な反体制グループの支援を先の会議にて決定しており、その手始めとして比較的治安維持用員が少ない、帝都からはるか遠く離れた田舎街や村での反帝活動を物資、金銭のみならず、少数ながらも口の固い信頼出来る傭兵さえも雇い、人材面でも支援を開始していた。

その効果はまずまず順調で、辺境といっても広範囲に点在するように発生したのでは、帝国軍も全て鎮圧する事は容易にはいかなかった。

大規模な軍を中央から派遣すればすぐにでも鎮圧できるだろうが、その分金がかかる。反乱の鎮圧は、対外戦争と違い、無事勝利したところで金銭的な面で得る物は何もない。費用がかかるばかりなのである。

同盟の狙いはそこにあつた。

彼らは端から反乱活動がそのまま帝国の体制崩壊へと繋がるなどと期待はしておらず、支援対象が鎮圧されれば、また別の地域の組織を支援するだけの事。それによつて帝国の円滑な統治を妨害し、軍事、経済の両面で損傷を与え、対外行動への時間稼ぎを図る、それこそが目的だったのだ。

同時に彼らが対帝国の切り札として模索していた帝国周辺諸国との大規模な連携の方という点、順調とは言えなかった。

巨大化する帝国の脅威を感じながらも多くの国々は、十二指同盟自身が帝国とロマリヤ、公国の大戦争時に動けなかったように、今この状況を理解し、動き出すなど出来ずにいた。

誰もが、帝国を刺激する事を恐れ、無条件での併合要求すら呑みかねない国もある始末。十二指同盟内部の国にも、そう考えていた者も少なくはなかったのだから、他の小国の王達を責めるのは酷と言えよう。

秘密裏の外交は、緻密で繊細な交渉が要求される。時間を費やし、わずかずつ前進させるしかないのだが、悠長にやっている暇はない。

そんな中で、同盟の話に比較的良い反応を示したのは帝国南西部、三王国だった。バテノア王国、ルドー王国の二王国間で勃発した戦争がドラクレア王国の仲介によって終息に向かっており、彼らは戦争の終結後、対帝国について、そして十二指同盟との連携について話合つ事になっていたのだ。

だが、小さな希望が見え始めたまさにその時、それを容赦なく粉碎する一報が大陸西部各国に入る。

オートリア帝国、東南部諸国平定に挙兵。

自分の娘の結婚式にすら参加が許されなかったロマリア王国国王ローラント。

彼に帝国皇帝グリードの名で、『帝都オートリアへ精鋭五千の兵を率いて参上せよ』との命がだされたのは、ロマリアとの講和成立から三ヶ月近く過ぎての事だった。

表向きの目的は、ローラントとイリスの面会を許し、両国トップの友好を深めるだけでなく、合同訓練や兵士達の交流により、先の戦での軍同士のわだかまりを少しでも解消しようという事だった。

これをそのまま信じるほど、ローラントやロマリアの重臣達も馬鹿ではなかったが断れるはずもなく、早急に帝都までの行軍の準備を整え、出発。

二週間ばかり過ぎた頃には、早くもロマリア軍五千を引き連れたローラントの姿が帝都にあった。

「遠路遥々ご苦労だったな」

グリードは片膝をつき、頭を下げた国王を、尊大な態度で迎えた。「陛下の命とあれば、この老体に鞭を打つてでも、参上せねばなりませんまい」

「おいおい、歩けぬほど老いるにはまだ早いだろう。それとも、最愛の娘が傍におらぬのがそれほど堪えたのかな、義父上？」

義父としての敬いなどグリードにありはしない。

十九の青年が、四十を超える一国の国王を見下す姿。玉座の隣で一人の少女は複雑そうな表情でそれを見つめていた。ローラントの娘にしてグリードの妻、帝国皇妃イリスである。

この日、ローラントを迎える特別処置として、玉座の隣に席が設けられ、そこに彼女は座らされていたのだ。

ただし、勝手に口を開く事は事前に禁じられており、父親との再会だというのに、声一つ掛けられずにいる。

「私の失態で多くの兵や民を苦しめる事になった事、為政者としての苦しみ比べれば、娘が無事生きている姿を見られただけで、どうしてそれ以上を望めましょうか」

「クツクツ、悪くない心掛けだ。……安心しろローラント。お前が妙なマネさえしなければ、この通りイリスは無事に過ごせるのだ。俺も、彼女が臍物撒き散らせて苦しみ死ぬ様など見たくはない、なあ？」

グリードはそう言ってイリスの方を見る。

イリスは何か言いたげにしていたが、結局はそれを耐え、父と夫に目で訴えるだけに止めた。

「まあ、俺も鬼ではない。こうして寛大な処置として、親子の再会の場を作ってやったのだ。お前が分をわきまえる事さえできれば、上手くやっていけるさ」

「陛下の慈悲の心に感謝の言葉もありません」
言葉とは裏腹にローラントの表情は硬い。

「ああ。これからは手紙のやりとりぐらい許してやるぞ、当然検閲が入るがな。それに……おい、イリス。三十分だけ時間をやる、一室用意させるからそこで親子二人で好きに話せ」

「よろしいのですか」

イリスは驚いた。

「嫌か？」

「あ、いえ、ありがとうございます陛下」
思いもよらぬ話をイリスは素直に喜ぶ。

「という事だ、衛兵。空いてる部屋を用意して案内してやれ」

グリードに命じられ、衛兵の何人かと一人の使用人が、親子二人を皇帝の間から連れ出す。

「話はあとで？」

今まで黙ってやりとりを見ていたジェイドが口を開いた。

皇帝の間には、衛兵や使用人のみならず、オイゲンを始めとして師団長達もいたのである。

師団長の中でこの場に姿を見せていないのは、反乱鎮圧の命を受け部隊を動かしている第十師団長フィリップと、こういつた会見を嫌う第三十師団長トンボの二名だけであった。

「ああ、三十分ほどならかまわんだろう」

グリードが面倒臭さそうに言う。

「私としては一分一秒が惜しいのですが」

「俺のやり方にケチをつける気か？」

「いいえまさか。私の考えをお伝えしたまでです。そのうえで陛下がどのように致そうと私はそれに従うのみ」

「フンッ、心にも無い事を」

不愉快そうにジェイドの事を見るグリードだったが、だからと言って特別罰しようとはしない。

「ローラント王は了承するでしょうか」

第十六師団長メストが誰に言うわけでもなく言葉を零す。

「当然だ。その選択しか奴には残っていない、この帝都にやって来たからには、従わざるを得まい」

グリードが余裕の笑みで答える。

「そういう事です」

ジェイドも続き、メストを見て言った。

それから彼らは、ほとんど会話する事もなく、ただ親子二人の会話が終わるのを、三十分の時間が過ぎるのを待った。

待つ者達の心境はいろいろであったが、場を覆う空気には緊張感が漂っている。

「どうだったかな、お二方」

再び皇帝の間にやってきたローラントとイリスに声を掛けるグリード。

「はい、ありがとうございます陛下。とても有意義な時間でした」
久しぶりに会った愛する父親の前で、耐えきれぬものもあったのだろう。微笑むイリスの目は赤く、泣き腫らした後のようにも見える。

「陛下のお心遣いに感謝致します」

ローラントの方は硬い表情のままである。

「それはよかった。イリス、こっちに座れ」

義父親と並び立つ妻を隣の席へとグリードは呼び寄せる。

呼ばれた方は父親に、では、と一礼して席へと向かうのだが、それを見たオイゲンがグリードに言った。

「よろしいのですか、陛下？」

「でしゃばるなオイゲン」

「しかし、イリス様には少々お辛い事かと」

最近では城の者達は、皇妃様ではなく、イリス様と呼ぶようになっていた。

イリスは最初から身分で呼ばれる事を嫌がっていたのだが、最初のうちは皇帝の妻としての自覚を促がす意味もあり、皇妃様と呼ぶよう命が出されていた。

しかし、グリードとの関係が改善してからは、そんなイリスに配慮して、グリードは名で呼んでやるように通達したのである。

強制といったほどでないにしても、少なくとも彼女の前で皇妃様と呼ばわりする人間は減っていた。

「だからどうした。これで取り乱すようでは話にならんだろうが」
イリスは不安げに二人を見てはいるが、席を立とうとはしなかった。

彼女には良くない予感があった。

話しづらいだけの、他愛のない話ならば気をきかせて、自分から

席を外すが、もし予感が当たってしまうのなら、何もせずに去るのは逃げになってしまう。

一度だけちらりとイリスを見たあと、ローラントの方へと向きなおし、グリードが言う。

「ロマリアの国王ローラントよ。この度の集まりは帝国と王国の友好を深める為のものだ。それに違いはない」

いよいよ本題。ローラントが帝都へと呼ばれた理由が明らかにされる。

「だが、それには親子の再会や宴会、合同訓練などよりもっと手っ取り早い手段がある」

ローラントはグリードの話を黙って聞いている。

「……戦争だ。ともに血を流し、勝利を分かち合えばこそ、真の友好というものが生まれるわけだ」

「そんな……」

イリスには知らされていなかった。

そして、漠然とした不安、その可能性は感じながらも、最初に会った時とは違う、自分が愛する事によって生まれたグリードの変化に、彼女は淡い期待を抱いていた。

もう二度と大きな戦争を起こさずに済むのではないかと。それが、呆気なくも裏切られる形となる。

「陛下、どうして、何故……。また大勢の人が、罪のない人達が血を流す事になるのですよ。そのような事はもう……」

堪らず立ち上がり、口を挟んだイリスに、グリードは強い口調で制止する。

「誰が喋っていいと言った？ 事前の約束、まさか忘れたわけじゃないだろうな、イリス」

「ですが……」

「止さないか、イリス」

泣きそうな顔の娘をローラントも制止した。

「お前ではまだ力不足なのだ、我が娘よ。受け入れ、強くなれ。い

つの日にか必ずお前の正しき思いは報われる」

「ですが父上、黙って見てよいはずがありません」

「わめいたところで、何も救えぬ」

親子のやりとりを愉快そうに眺めるグリード。

「そう言うことだ、イリス。黙って話を聞いている」

「私は……」

それでも抵抗するイリスにグリードは容赦のない言葉をかけた。

「あまり思い上がるな。お前はロマリアからの戦利品なのだ。ぐだぐだ言ったところで、この決定は覆せぬ」

今度は明らかに怒りを込めた言葉遣いである。

「それでも私は……」

「イリス。正しき思いが伝わるには時間がかかる、そう言ったのはお前であろう。今は耐えよ、我が娘よ」

これ以上イリスには何も言えなかった。

泣きそうになるのを必死に堪え、この場から逃げだしそうになる足を止め、自分の席につく。

「理解のある義父親でよかったよ。……では話を戻そう」

「その相手は」

「十二指同盟」

「何故、十二指同盟を目標に」

理由など一つ、己が覇道の為に過ぎない。しかし、一応表向きの理由をグリードは語る。

「反体制の輩に、組織立った支援をしている疑いがね」

「証拠は」

「疑いがあるんだよ、ローラント王」

「なるほど、わかり申した」

つまり証拠などありはしないのだ。

「そこでだ。察しのよいお前ならもう気付いているだろうが、東南部平定の協力を命じる。講和要項の中にも、戦時には人的な支援を含む、あらゆる協力の義務が明記されている。文句はあるまいな？」

「まだ戦時ではありませんが」

「細かい事は気にするな、もう間もなく戦時だ。国に引き返す暇などない」

「戦えと命じられるなら、私達はそれに従うまで。しかし、数日ほどの滞在の予定と聞いておりましたから兵糧が、戦を執行できるほど用意できておりません」

「それは気にするな。こっちで準備させている。ローラント王に命じるのは今帝都に滞在している五千のロマリア兵を率いて参戦する事、そしてここにいるジェイドの指揮下に入り従う事だ」

「私が直接ですか」

「そうだ。異論はあるまいな」

「何の問題もなく……」

とくに躊躇する様子も見せず、ローラントはグリードの要求に従った。

それをイリスは悲痛な面持ちで見ている事しか出来ない。

ローラントが皇帝の間から退室すると、グリードは後の事をオイゲンやジェイド達に任せて、イリスを連れて寝室へと戻った。

そこでイリスは夫の行動を改めて咎めた。

「グリード様、どうしてです。本当に、本当にたくさんの方が死んでしまうのですよ。この戦にどれほどの意味があるのですか」

最愛の夫であるからこそ、戦争の愚かさをわかってもらえぬのがイリスには辛い。

「良い暮らしには経費がかかる。いろいろと必要になるわけだ」

「今の暮らしで十分過ぎるほどではないですか」

「足りぬさ。素晴らしい妻と美味しい食、貴重な本に、絵画。この部屋に今あるモノだけでは足りんだ」

「何故です。たくさんが無辜の民を犠牲にしてまで、どうして望むのです。……グリード様。もしも、もしも、戦争で私が死ぬような事があっても、貴方は平気なのですか？」

「まさか、馬鹿らしい」

そう言つて、グリードはイリスを抱きよせる。

「お前を失うぐらいなら、十二指同盟ごとくと戦などせんわ」

「そういう思いを、家族を失い辛い思いする人が大勢でてしまうのです」

「だが、それは所詮、他人だ。お前じゃないなら、どうでもよい」

「……では私が、戦争を止めて頂けないなら、自ら命を絶つとしたら、グリード様はどうなされますか」

イリスの目は真剣だった。

その目を見ながら、ジェイドは彼女の頭を撫で答える。

「俺が愛してるのは、馬鹿げた事の無意味さを知る女だ。自らの命を利用して脅せば、何でも叶うなどと本気で考える馬鹿な女がいたら、俺が先に殺してやろう。……イリス、お前は賢い女だろ？」
彼女もわかつていた。そのような振る舞いをグリードが一番嫌う事など。

それでも、何とか戦争を止めたいと、恥を忍んで尋ねたのだ。

「私は……」

もう何を言えばよいのか、イリスにはわからない。

泣くだけでは何にも解決せぬと必死に耐え、グリードにしがみ付くだけである。

「もうお前にはこの戦争は止められないんだ理解しろ。……それより、時間はたっぷりある。お前を抱きたい」
「えっ」

グリードは突然、有無を言わず彼女をベッドまで移動させると、強引に押し倒す。

そして覆い被さりながらイリスの耳元にささやいた。

「失望したか？」

イリスは静かに答える。

「シヨックがないと言えは嘘になります」

何の話か。無論、このような状況で行為に及ぼうとするグリードの浅ましさについてではない。

戦争を強行しようとする事が、である。

「もう嫌いになったか」

「どうして……。愛していればこそ、お止めしたいのではありませんか」

「それはよかった」

イリスにとっては何も良くはないのだが、グリードはひどく安心したような表情を浮かべる。

「グリード様、もしかして私の事を試しておられるのですか？」

「半分そうかもしれんな」

「ならば、信じてください。私はどのような事があっても貴方の事をお慕いしているという事を。だから……」

「だが、もう止められんさ。イリス、お前は良い女だ。だが、今はまだ、お前の嫌う戦争の持つ魅力には勝ちきれぬ」

「戦争の魅力……」

「そうだ。人間というのは、基本的にお前ほど無欲にはなれんものだ」

「そんな事は」

グリードが首を振る。

「得れば得るほどに次を欲す。戦はそれを叶える手段だ。……お前と過ごす時間は代え難いほどに愛しい。しかし、戦争というものから生まれるそれもまた代え難き美味であるのだ。こうしてお前といれるのも、戦に勝てたからだ」

「戦など無くても、私はきつとグリード様のお傍に」

「有り得ぬ話はよせ」

現実的な話、もし帝国とロマリアとの戦争が無ければ、あるいは帝国が敗れていたなら、この二人は決して結び付く事はなかっただろう。

グリードはともかく、イリスには相応しい相手が用意され、その者と今よりもずっと幸福な暮らしをしていてもおかしくないのだ。

その事をグリード自身理解しているからこそ、その確実に現れた

であろう架空の存在に嫉妬し、イリスに対して異常な執着から生まれる言動を時折みせるのであった。

イリスの方も、あれだけ多くの死人を出した戦が無ければグリードと結ばれる事はなかったのかもしれないと、あの戦争に対しては複雑な気持ちと、今の暮らしに対する負い目を常を感じさせられていた。だからと言って、グリード意外の人間と結婚したかったなどという考えは毛頭ない。

イリスのグリードに対する愛情は、互いに尊重し合う夫へのモノとしてよりかは、無償の愛を与える母子の関係とした方が近いと言える。

わがまま好き放題に振舞うグリードに愛想を尽かすのではなく、本人の為にとまるでしつけをするかのように、粘り強く接するそれは、母親そのものである。

しかしながら当然に、人を殺すまでの息子を愛するのが、理想であるかどうかまでは、意見の分かれるところである。イリスのグリードに対する愛情が、甘やかすだけの最低の部類のモノだと感じる者がいても何ら不思議ではない。

だがそうは言っても、今のグリードの求めに応えられるのはそういったイリスの愛情でしかないのも事実だった。

「……グリード様、私はどうすればよいのでしょうか。私はただ貴方のお傍にいたいのです。貴方が誤った事をなさろうとするならそれを止めたいだけなのです。私は……」

「今のままでいい。お前は俺を愛してさえいれば、それでいい」
それで本当にいいのか、イリスにはまだ答えはだせない。

耐える意味

ローラントはオイゲンやジェイド達から説明を受けた後、宿泊の為に用意された一室へと案内された。

部屋は豪華な装飾が施されており、一人で泊まるには広すぎるくらいである。

そこで夕食を取った後、再びジェイドからさらに細かい説明を受ける事になっていたのだが、その前に、彼が引き連れてきたロマリアの兵士達へ、今回帝都まで呼ばれた真の目的を伝えなければならなかった。

ローラントはまず、重臣達の中でも一番信頼を置いてるカル口を呼び出し、話す事にした。

「どう思う」

「従うしかないでしょう」

カル口は難しい顔をしながら答えた。

「チャンスとは考えられぬか」

「まったくないとは言えませんが、リスクが高く、リターンが悪すぎると思います」

「やはりそうなるか」

「たしかにこの一戦、我々が裏切れば、東南部平定には失敗し、帝国にとって痛手となるでしょう。それが帝国の崩壊へと繋がる可能性すらあります」

「しかし、それは我々の死にも繋がる」

「ええ。この五千の命でロマリアが救われるのならばやるだけの価値はあるかもしれません。しかし、現実的に考えれば、王を失い、優秀な重臣達をも失ったロマリアが残っても、帝国の崩壊が生む荒波から、耐え切れるとは思えません」

ローラントが今回引き連れた五千の中身は、先の戦争での大打撃を受けて再編成中の各師団から、優秀な指揮官、部隊を選抜し作っ

た精鋭中の精鋭の混成部隊だった。

カルロをはじめとして、失うわけにはいかない重臣達も数多く参加している。もちろんローラント王もその中に入る。

その五千人を犠牲にしてまで裏切り、帝国を崩壊させるべきだとはカルロには考えられなかった。

「それに、逃げられる可能性も大きいか」

ローラントが溜め息をつきながら言った。

「帝国も我々が裏切る可能性が零だとは思ってないでしょうし、その為に五千という数を指定し、陛下自ら指揮せよと命じてきたのでしょう」

この五千にローラントがいる事が、帝国側の大きな保険である。イリスという人質だけでは不安だったからこそ、もし戦場で裏切れば、王とその一人娘を抹殺されるという状況を作り出したのだ。この状況で反乱を決行するのは並の精神力の兵士達では出来ない。

「うむ。それにどうやら今回はできるだけ少ない戦力で済まそうとしているようだ。金の面もあるうが、万が一に備えてもいるのだろう」

「ここは耐えるしかありません、陛下」

「わかった」

「では、今からでも私が他の者達にこの話を」

「ああ、そうしてくれ。本来は私がすべきなのだが、この後も話があるそうなのだ」

「はい、失礼します」

席を立ち、退室しようとカルロだったが、ふと足を止めて振り返った。

「そういえば陛下、イリス様はお元気でしたか？」

「ああ、何とかやっていけてるみたいだ。それほど疲弊してるというわけでもなさそうだったよ」

ローラントは軽く笑いながら答えた。

「そうですね、それはよかったです」

「ただ……」

何か言い淀むローラント。

「どうかなされましたか」

「うむ、あやつが少し気になる事を言つてな」

「気になる事？」

「グリードという男は、それほど悪い人間ではないと」

「悪い人間ではない、ですか……。イリス様はお優しい方ですから。どんなに欠点が多い者であっても、良いところを見つけなさろうとされる」

「私も最初はそれだけの事かと思つたんだが、詳しく話を聞くとそう単純な事でもないらしい」

「と、申されますと」

「子供みたいな奴なのだと」

「子供ですか……」

「式を挙げてから、一月ほどはあやつに対する扱いもぞんざいなものだったらしい。それが、いろいろあつて今では、非常に気に入られてるみたいでな」

「お若いですが、美しい方ですし、特別不思議な事とは思えません
が」

「まあ、グリードが娘を気に入った理由は重要ではないのだ。それからの態度というのが、子供のように甘えるのだと。政務はほとんど將軍達にまかせて、ほぼ一日中、離れようとせんらしい」

「悪人も気に入った者には違う顔を見せるものです。たしかグリード帝の母親は早くに亡くなっていますし、その影響でしょうか」

「うむ。そうやって見せる一面がひどく幼稚で、脆いと感じている
ようだ」

「つまり、これまでの行いは、生まれながらの悪人が起こしている
ようなものではないんだと」

「そうらしい」

「しかし、仮にそうであっても、やっかいな問題には変わらないか

と。過程がどうであろうと、あの男がひき起こした結果は許されるものです」

「わかつている。だが、会ってみた印象と、イリスの話を併せると、真に注意すべきは別の人間ではないかと思えてな」

「別のですか」

「ジェイドだ」

ローラントがその名を口にすると、カルロも頷いた。

「確かにあの隻腕の男は噂以上に危険な存在かもしれません」

「ああ、あの男の目には深すぎる狂気が潜んでおった」

「講和の時の話も少し異常すぎました」

「そうだ。……奴は近頃皇帝の信頼を得てか、帝国軍内で急速に力をつけているみたいだな」

「そのようで」

「今回の戦も、全軍の指揮を將軍のオイゲンではなく、あの男が執る事になっているようだ」

「世代交代でしょうか」

「いや、そういった感じには見えなかった」

「となると、將軍派とジェイド派の確執、主導権争い」

「確かに言える事は、ジェイドが將軍をよくは思っていないという事だろう」

「グリード帝はどうなのでしょう。將軍よりもジェイドの事を？」

「わからない。グリードという男が、突然力だけで成り上がってきた者を完全に信用するとは思えん」

「対抗として將軍の影響力は維持させると」

「ああ、二つに割れるのやもしれんな。帝国軍は」

「では上手く、確執を利用できれば……」

「理想ではあるが、我々ができる事などほとんどないだろう。ただ与するなら、私はオイゲンという男につく方がよいと考えている」

「將軍オイゲンなら帝国を変えられるでしょうか」

「彼ではブレーキになる事が精一杯だろうな。帝国を変える事が出

来るのは皇帝、グリード自身以外にはおらん」

「滅すしかない」と

「そうなるだろうが……」

「何か」

「イリスなら、娘なら万が一にでも、グリードを変え、帝国を変えられるかもしれない」

「イリス様ですか」

「少し親馬鹿がすぎるかね」

ローラントが自嘲気味に笑った。

カルロは国王との話し合いを終えると、帝都郊外に滞在させた口マリア兵五千人のうちから、主だった重臣達、旅団、大隊、中隊、小隊指揮官といった者達を集め、緊急の発表を行った。

その伝えられた内容に、彼らはみな驚き、激怒した。

「まるで、部隊全員が人質ではないか」

「やはり汚い奴等だ。最初からおかしいと思ってたんだ」

帝国に協力する事も不快ではあるが、何より彼らが許せなかったのは、指揮系統についてである。

「今回の戦、我々が正式にジェイドの指揮下に入るとはどういう事ですか！！　こちらは国王陛下が直々にご出陣なされる、つまりそれは、陛下に下につけと命じてる事になるのですよ！！」

帝国の一師団長に過ぎぬ男の下に一国の王がつく形となった、それは己の無力を痛感しているローラントはともかく、彼が率いる兵達にとっては想像を絶する屈辱だった。

「その通りです。帝国は我々を試し、宣言している。それでも今は我々はそれに従うしかない。陛下も、耐えておられるのです。貴方もここは堪えて頂きたい」

カルロは険しい顔で言い放った。

彼の話と比較的年を食った者達は、自分達の置かれた立場をよく理解しているらしく、渋い顔ながらも黙って聞いているのだが、若

い者達の中にはそれでも不満を口にする者がいた。

「この決定に従えぬというのなら、それはつまり、陛下の身に危険が及んでもかまわないという事ですか」

カルロが問い詰めるような鋭い目をして言った。

「そんな意味で言ってるのでは……」

若い者達も王の身の事をだされると強くは反抗できない。

「それだけではない、ここには大勢のロマリアの財産が、未来の導き手となる者達が集まっています。その者達をみな危険にさらす事になる。陛下はそれを危惧しておられました」

「我々の事を考えて……」

「そうです。そしてそれがロマリアの為でもあるからこそ、陛下を耐えておられる。我々がすべきは無闇に剣を振り回し、その刃を帝国に向ける事ではないはずだ。ロマリアの未来の為に、陛下の為に耐え、己を磨き、機会を待つことです。それが百年、二百年先の話となろうと、我々は耐えなければならぬ。違いますか？」

カルロの迫力に押され、もう異論を言う人間はいなかった。誰もが、ロマリアの現状は痛いほどに知っていたのだ。

「では各自、下の者達を集め、至急この事を知らせて下さい。明日の早朝には、動きだす事になるでしょう。今夜はもう遊んでる時間などありません」

「はっ」

慌ただしく、指揮官達が自分達の陣に戻っていく。

今回の帝都への行軍、ロマリア兵達の中で、噂になっている帝国辺境の反乱鎮圧ではなく、十二指同盟との戦争に巻き込まれるなどと予想出来た者は一人もいない。

初めてそれを知らせた時に彼らの内に浮かんだったのは、一体どんな思いだったのだろうか。

怒りか、憎しみか。それとも、もう二度と帰れぬ事になるやもしれぬ故郷についてであろうか。

翌日早朝、帝都から軍旗をはためかせ出陣する集団があった、その数総勢二万五千。

全軍の指揮権はジェイドに与えられ、その指揮下に彼の第二十師団、トンボの第三十師団、ハンスの第三師団、ミロスラフの第四師団、そしてローラントのロマリア軍五千が入る形となっていた。

ジェイド、トンボの師団はともかく、ハンスとミロスラフの師団が選ばれたのには、彼らが単純に精鋭であるという事だけでなく、ロマリア戦後の他師団の戦力低下という問題が関わっている。

ロマリア、公国との戦争には、緊急的に徴兵した兵士も数多くいた為、講和成立後、臣民の不満を少しでも減らす為、彼らの残り期間を免除する必要があったのだ。免除された者達の中には、あつさりとそのまま故郷に帰る者達もいれば、もう大きな戦争はないだろうと給金目当てにそのまま残る者もいた。

しかしここで問題となるのは、地方などから集められた剣や槍要員の若者達ではなく、ギルドから脅してでも無理に集めた魔術師達の方である。彼らに関してはそのほとんどが帝国の莫大な資金の見返りや説得工作も虚しく、軍を去り、それどころか家族や弟子達を連れて帝国領外へと去ってしまう者も少なくはなかったのだ。

こういった事情もあり、帝国軍全体としてはロマリア戦時より、戦力低下してしまっていた。

その為、帝国上層部は最精鋭とも言うべき四師団とロマリアの精鋭五千を対十二指同盟戦に投入する事にしたのである。

投入兵数を五師団規模としたのにもいろいろと事情があった。

まず第一は、当然この規模で小国連合に過ぎない十二指同盟には勝てると考えていたからだ。同盟側最大規模の兵を誇るであろう、第一指、若き国王レアンドロが統治するダルタール王国や第二指、ラウルのガザクレア王国でも四千ずつが限度であり、その他の国々では二千用意できれば上出来。どれだけ多く見積もっても、総勢三万以下になる。

攻める帝国とは違い、守備側の同盟は点在する各国領土を守らね

ばならない。全ての兵を集散的に投入できるわけはなく、守備要員はどうしても必要となる。そう考えると、数でも五分、もしかすれば二万五千でも帝国側が多いぐらいになる事もありえる。帝国の勝利は確実のものだ。

第二は、この戦いで得られる領地や金銭の量。勝ち続けても、兵士達には見返りとしての報奨をださねばならないし、装備、兵糧の負担も馬鹿にならない。赤字続きでは、強い軍を維持できず、戦争に勝ったはいいが、軍が崩壊したなど笑い話にもならない。

第三は領内の反体制勢力の存在や、帝国の軍事行動に刺激されて他の周辺国が同盟側に付く可能性から、睨みを利かせる部隊も残さねばならない事だ。

これら全ての事情を考慮し、総合的な判断によってこの二万五千という規模が決定されたわけである。

しかしながら、帝国の全軍投入を防げた事は十二指同盟側にとってはやはり大きい。

数字上で同数近くなれば、一部の戦意の低い国の直前離脱を防止できる。

四万、五万という数でこられれば勝ち目がないどころか、戦う前から内部崩壊しかねない。

レアンドロの案だった反乱工作が効いた形となったのだ。

人形は見えていた

十二指同盟が自力だけで、帝国の脅威を完全に排除する事は不可能に近く、この戦、できるだけ早い段階で帝国軍に損傷を与え、大陸西部各国に参戦を促がす必要があった。

同盟の次に、その他大勢の中小国が帝国の標的になる事はわかりきっている。彼らの帝国に対する恐れを取り除き奮い立たせるには、わずかの間だけでもよいから同盟優勢の報を届けねばならない。

その報は、特に南西部三王国を動かす事になるだろう、そして、そこから連鎖的に各国の決断を促がし、対帝国包囲網を完成させる。これしか、帝国に踏み潰されようとしている同盟が生きる残る道はない。

同盟側は籠城ではなく、野戦にて帝国を迎え撃つ為、各国の軍を集結させる事に同意。

さらにダルトール王国のレアンドロ、ガザクレア王国のラウルは十二国の中でも領土が離れ、孤立気味であったパルメント王国に全領民を二人の国のどちらかに避難させ、必要ならばパルメント領土の守備義務を放棄しようとした。

守るべき領地の点在箇所を少しでも減らし、敵侵攻ルートを絞る為なのだが、さすがにパルメントの国王であるボルドーはこれを拒否、同盟の各国にはパルメント王国の領土を共に守る義務があると主張した。

すでに動いてる帝国軍の事を考えると、これ以上の説得は時間の無駄であると、結局レアンドロとラウル側が折れたのだが、そのかわりとして、各国の駐留人員は限界まで減らす事を提案、これを了承させた。

同盟は十二ヶ国の領土を四つのグループに分け、中心としてダルトール王国とその近隣四カ国、計五カ国を第一エリア、そこから南の位置、ガザクレア王国を中心とした五カ国を第二エリア、そこか

らさらに南東に孤立する第十一指マルダーマヤ王国を第三エリア、第一エリアから北西に孤立するパルメント王国を第四エリアとした。帝国の侵攻は西からの為、注意を払うべきは、後方に隠れる形となる第三エリアを除いた、十一カ国、三エリアとなる。

同盟軍は主力の展開地域について、この注意すべき三エリアに向かいやすい第一エリア西の領域、クルスク大草原に決定。

クルスク大草原には十二ヶ国の連合軍、計二万三千が終結するはずだった。

「おい、ありゃなんだ」

第三エリア、マルダーマヤ王国の軍は、連合主力部隊に合流すべくクルスク大草原に向かっていた。

王都から出陣してしばらく、経由地点として第二エリアを目指している道中、行軍する部隊の先頭小隊が道脇の森からこちらを見つめる奇妙な影に気付いた。

「こんなところに帝国の斥候か？」

「逃げられるとまずい。かまわん、弓兵、撃て！！」

小隊指揮官らしき男が指示をだすと、素早く何人かの兵士達が弓を構え、影目掛けて矢を射る。

バキリ。

命中したのか何か碎ける音が響いた。

「やったか？」

射った弓兵ではなく、槍と剣を持った別の兵士達が確認の為、森へ入り影へと近付く。

「お見事、大的中ですよ」

影の正体を確認した兵士達が呑気な声をあげた。

「動物か？」

声の呑気さに、小隊指揮官は敵兵ではなさそうだと判断する。そして実際、兵士達が見た物は生き物ですらなかった。

「こいつですよ」

兵士達が矢の衝撃で片足の膝から先が吹き飛んだそれを森から引き摺りだす。

「人形？」

「ですね」

それは木でできた人形だった。

背丈は大人ほどあるが、横幅はそれほどなく、人型ながらも、精工に人に似せたようなものではない。

「なんでこんなところに人形が」

「さあ、どこかの商隊が置き忘れたものでしょうか」

「人騒がせな人形だ。そのへんに捨てておけ」

「はっ。ところでいちおう本隊に報告しておきましょうか」

「馬鹿か、いちいちゴミを発見する度に人を遣るつもりかお前は」
「いえ、すいません」

この時発見した人形をもっと念入りに調べさせておけば、この先の結果は少しでも違ったものになっただろうか。それとも流れというものはそう簡単に変える事の出来ぬものなのか。

王国の軍勢は、地獄の淵への入り口が目の前で大きく開かれてる事に、この時はまだ気付けないでいた。

同時刻、奇妙な人形が発見された場所からいくらか離れた位置、マルダーマヤの行軍ルート、その一本道を見渡せる丘の上に三人の人影があった。

彼らは獲物が現れるのを待っていた。

「木偶が一体しくじったようですね」

道化の奇術師レズリーは傍にいる仲間に、彼の操る人形の異常を知らせる。

「しくじったのは人形じゃなくて、あんたでしょ」

魔術師シユウが紫の瞳で道化を見下す。

「それで、ばれちゃったわけ？ レズリー」

醜顔のパディエダが肝心の部分を訪ねると、レズリーはいつもの

調子で答えた。

「ふふ、木偶は片足をやらただけで、お馬鹿さん達、そのまま魔術師に調べさせもせずに放置してしまいましたよ」

「じゃあ、問題ないわけだ」

「ええ、パディエダ。問題なしです。マルダーマヤの兵士達は気にする事なく、行軍を続けています。しかし、この木偶はもう動かすわけにもいかないので、切り捨てますが」

「時間も予定通りになりそう？」

今度はシユウが尋ねた。

「なりそうですよ」

「そう。ならいいわ」

「それより、奴はいるの？ 目的の人」

再びパディエダが尋ねる。

「どうですかね。そこまではわかりませんでした。あまり近付きすぎると、近衛の魔術師に私の木偶の正体を見破られる危険性が」

「どっちにしても、終わってみればわかる事よ」

シユウがパディエダを見て言う。

「でも、いないってわかってる方がやりやすいじゃないか」

拗ねた子供のような口調でパディエダは呟いた。

人形の片足を射抜いた出来事から一時間近く経った後、マルダーマヤ軍の先頭グループは、行軍ルートのど真ん中で、仁王立ちする男を発見する。

「おい、お前そんなところで何をしている。邪魔だ」

兵士達が男との距離を縮めながら大声で警告するが、男は聞こえていないのか微動だにしない。

「聞いているのかキサマ、そこをどけと言ってるんだ」

「ここをもうすぐ後続の本隊が通過する、何をしてるのかしらんが脇に避ける」

そして、二人の兵士が拳の間合いに入り込むのを確認すると、褐

色の肌を持つその男は深く腰を落とした。

「待ってたんだよ」

そう言つて男が、片方の兵士の腹に己の拳を叩き込む。

「ぐあつ」

男の一撃で身に付けた鎖帷子は砕け、兵士は前のめりに倒れた。

「えつ」

男は打ちぬいた拳を素早く引き戻し、呆氣に取られたもう片方の兵士の顎と首にも回し蹴りを叩き込む。

「がはあ」

訓練を受けているはずの兵士二人が、あつさりとやられる。その光景を見た、小隊指揮官は他の兵士達に命令した。

「こんな時に、ややこしい……。弓兵、殺れ。殺してしまつてもかまわん！！」

慌てて、三人の弓兵が小隊指揮官の前に出て、弓を構える。

「遅せえよ」

弓兵達が矢を放つ瞬間、男は前にでる、自分に向かって飛んでくる矢を恐れる事なく。

そして器用に身を半身だけずらし、矢を回避すると瞬く間に弓兵の目の前へと近付いていった。

「速い！！」

慌てた弓兵が次の矢を放つ前に、流れようにして、拳を二発、蹴りを一発、全て一撃で仕留めてしまう。

その一撃を打ち込む間、男の弁髪は鞭のように風を切っていた。

「アンタがこの中の偉いさん？」

啞然と動けぬ周囲の兵士達を気にする事無く、小隊指揮官の前に立つと、悪魔は笑った。

それからしばらくして。

「隊長大変です！！」

先頭の小隊が襲われている、そんな知らせが本隊へと届く。

「何だと、帝国軍か！？」

まさかの奇襲かと焦る指揮官だったが、どうも違うらしい。

「いえ、男が一人、正面から向かってきたらしく、武芸自慢の輩かと」

「変なのがこんな時にでやがって。しかも、よりによってウチかよ。雇えるような雰囲気ではないんだな？」

「ええ、恐らく」

「とにかく、もたついてる暇はない。速く動ける者を集めて先に救援に行かせる。馬鹿から仕掛けてきたんだ、容赦はしなくていい」
「はっ」

まず騎兵二百ほどが集められて、急ぎ先頭の小隊の救援に向かわされた。もちろん、残る本隊もそれに続くのだが、指揮官は五十人ほどの小隊への救援を急ぐ判断を下したのだ。

所詮は一小国の軍、帝国やロマリアと比較すれば動員出来る数は大きく劣る。対帝国に王都から出発したマルダーマヤの軍勢は全部で千五百ほどでしかなく、小隊でも失い難い戦力に違いなかった。

千五百の軍勢のうち、騎兵は三百、そこから三分の二である二百も送った事から、救援に対する本気具合がよくわかる。相手は何十、何百もの軍隊ではない、たった一人の暴漢に二百もの騎兵なのだ。

騎兵は馬上突撃のみならず、下馬しても高い白兵能力を持つ優秀な戦士だった。地上よりもはるかに難度の高い馬上で武器を振るっているわけだから当たり前の事である。

つまりマルダーマヤ軍は小隊救援の為、エリート兵士二百人を送った事に等しく、誰もが暴漢などすぐに片付くだろうと思いつ込んでいた。

檻

「また、たくさん連れてきたもんだなこりゃ」

ヒューゴは小隊の救援に現れた騎兵隊の数を見て呆れたように笑う。

「素直に投降する気はなさそうだな」

騎兵の一人が馬上からヒューゴに向けて最後の確認を取るが、もちろん彼にその気などない。

「当たり前だ。雑魚が群れただけで、逃げ出す獅子がいるかつての」

「残念だ。腕が立つても、これほどの馬鹿ではどうせ良い兵士にはなれないな」

交渉が決裂すると騎兵達の殺気が一気に高まる。

「おいおい、倒れてる味方は御構いなしかい。中には運良く生きてるのがいるかもしれないぜ」

ヒューゴの周りには、小隊の者達が倒れていた。その多くは、既に息をしていないが、気を失っているだけの者がいないとは限らない。

「ちっ」

騎兵の一人が片腕を上げ合図を出すと、二百のうち五十ばかりの者達が馬から降りた。

「あらら、それだけいいのか。まっ、雑魚が何十、何百いようと結果は同じだな」

「覚悟しろよ賊。奴等の仇だ」

挑発に乗せられて、若い兵士が斬りかかりに行く。

「覚悟するのは俺じゃねえよ、雑魚共」

それに合わせるようヒューゴも前に出た。

「速い！！」

ヒューゴの動きの速さに驚かされ、後に続こうとした他の兵士達の足が止まる。

「死ね!!」

最初に斬りかかった若い兵士の剣術も悪いものではないはずだった。

ヒュン。

だが、彼の攻撃はいとも簡単にかわされる。

「なっ」

攻撃をかわされた兵士はヒューゴの反撃を警戒した、しかし。

「ケチケチするなよ、まとめて相手してやるぜ」

ヒューゴはその兵士を無視するかのように通り過ぎる。

さらに、慌てて次ぎ次ぎと斬りかかってくる兵士達をも無視して、
いまだ馬上で見物を決め込もうとしていた集団へと突っ込むヒュー
ゴ。

「なっ、まずい!!」

兵士達は焦った。

「散れ!!」

指示が出されると、距離の取れる騎兵達は外側へと逃げ、ヒュー
ゴの周囲の者達は馬から飛び降り、対峙した。

「いいのか？ お馬さん逃がしちゃってさ」

ただでさえ密集陣形の中へと入られると動きがとり辛いのに、馬
上ではどうにもならない。選択肢は、降りて戦う、しかなかった。

「貴様なぞ、馬無しで十分」

「そのわりに緊張してるみたいだな」

小隊五十人を既に壊滅させている事、ヒューゴが突っ込んでくる
時に見せた動きの凄さ。それを知り、緊張するなという方が無理が
ある。エリート兵士であるはずの二百人、マルダーマヤの騎兵達の
中でこの強敵よりも実力のある者など間違いなく存在しない。

それでも、一人では無理だとしてもこの数ならば、という思いは
あった。

「さて、誰から死にたい」

ヒューゴの周りには馬上から降りたばかりの二十人が、その外を

騎兵百三十と最初に馬を降りていた五十が見守る形となっていた。

勝てたとして、この内の何人が生き残っていられるだろうか。

「うおおおおお!!」

一人の兵士が槍で向かっていく。

シュツ。

「遅い」

ブオン。

「そんな大振り当たるわけねえだろ」

余裕で槍を避け、ヒューゴは拳をその兵士の顔面に打ち込む。

バキバキ。

鼻からめり込むようにして、兵士の頭蓋骨は砕けた。

「次は誰だ？」

「くそっ!!」

今度は二人の兵士が共に槍を使ってヒューゴを前後から攻撃。

「当たらんな」

槍はこの密集状態では味方に当たるのを恐れ、遠慮がちの攻撃になっってしまう。ヒューゴに当てられるわけがなかった。

「ぎゃあああ」

「がつ……」

逆に己の身だけ心配すればいいヒューゴは無遠慮に暴れ放題。次から次へと襲いかかり、マルダーマヤの兵士達を打ち倒していく。

「ボーっと見てないでさっさと来いよ、お前ら」

「槍じゃ駄目だ。剣でいくぞ」

味方の事を考えれば、長すぎる槍より、剣の方が今の状況には適している。強敵との距離を詰めるには覚悟がいるが、そこはエリート兵、勇気を持って踏み込んでいく。

「であああ」

ヒュン。

空を斬る。

バキ。

「うつ……」

カウンターの一撃で兵士が沈む。

「死ね!!」

ヒュン。

また空を斬る。

ボキ。

「ぐっ……」

またカウンターの一撃で兵士が沈む。

「うおお!!」

それから何人が攻撃を仕掛けるが結果は同じ。ヒューゴに傷一つ負わず事も出来ない。

「どうした雑魚共、もっとまとめてかかってこいよ」

実力差は明白。困んだ状態であっても、一人ずつ斬りかかるようでは勝ち目はない、だったら……。

「ええい、同士討ち覚悟でいくぞ。味方ごとでもかまわん斬り殺せ!!」

これしかない。

「やっと少しはやる気がでてきたようだな」

ヒューゴが楽しそうに笑う。

「今度こそ、死ね!!」

同士討ちを恐れず、押し潰すように雪崩れ込むマルダーマヤの兵士達。

ヒュン。

「くそう」

ヒュン。

「当たらない……」

ブシュ。

「ぎゃあああ」

「す、すまん」

避けられるか、当てたと思って味方の体である。

ドカ。

「ううっ……」

ボコ。

「ぐふっ」

同士討ち覚悟で攻撃しても、状況は好転しなかった。

「攻撃を続けるんだ！！ 奴に休ませるな、疲れが見えれば勝ち目はある！！」

「疲れねえ……」

さすがにヒューゴも小隊五十人を倒した後、追加で三十人近くと殺し合うと多少は疲れていた。それでも、動きにはキレがあり、あからさまに鈍る気配はまだない。

バキリ、ドコ、ボキリ。

「まあ、でもそろそろいいか」

何を思ったか、ヒューゴは手近の三人をさらに倒すと、突然指笛を鳴らす。

「な、何だ」

「伏兵か？」

何の合図かと兵士達が動揺する、そんな彼らを見てヒューゴは言う。

「さて、本番はこれからだぜ」

それから間もなくして、大地から雷が空へと昇った。

マルダーマヤ王国軍の行軍ルートを見渡す丘の上。レズリー、シユウ、パディエダの三人はついに現れ、横切っていく獲物達の姿を眺めていた。

「そろそろいいんじゃない、レズリー。ヒューゴからの合図は？」

シユウは待ちきれぬといった面持ちでレズリーに尋ねた。

「今、丁度でしたよ」

「じゃあ、早いとこ始めましょ」

彼らが待っていたのはヒューゴからの合図、それは彼が鳴らす指

笛だった。それをレズリーの操る人形を通して確認すると、シユウは丘の上から魔法を詠唱し始めた。

「我の内に眠る偉大な主の力よ。主に刃向かい、牙を見せる獣を閉じる檻となれ。我は信じ命じる。我は神に代わり罰す。裁きの場を奴等に与えんが為に、神よその偉大なる力を我と獣達の前に示せ……」

「シユウの詠唱してる姿を見るなんていつ以来だろ。へへ」

パディエダは感動しているかのような表情で詠唱する美しき少女を眺めていた。

魔術師にとって詠唱、つまり声を、言葉を利用して体内の魔力を魔法へと変化させる事はもっとも初歩的で、基礎的な方法だった。

魔力を練り上げ、魔法へと変えるその作業に、詠唱という手段は確実性が高まり、繊細に魔法を作り上げる事が出来るのである。

しかし詠唱には、知識ある者がそれを聞けば、魔術師が何の魔法を唱えているか丸分かりである事、詠唱なしでの魔法に比べ、発動までに時間がかかりすぎる事など、致命的な弱点があった。

戦闘中、攻撃を受ける度に詠唱を中断して、最初からやり直しては話にならない。

その為、詠唱なしでの魔法が安定して発動させられるようになって、ようやく一人前の魔術師として認められるわけである。

だが一流の魔術師でも詠唱をまったくしなくなるわけではない。かなり高度な魔法は、わずかなミスが魔力の暴走をひき起こし大きな災いとなる。それを防ぐ意味でも、確実性のある詠唱という手段を用いる事は自然な事だった。

つまり、シユウほどの魔術師が詠唱を行う時点で、その魔法の難度の高さと威力がわかるのである。

「でも、おかしいものです。シユウの口から神なんて言葉が出てくるなんて」

「言えてる」

レズリーとパディエダがそんな会話をしていると、ようやく詠唱

を終えたシウウが不満気に二人を見て言った。

「うるさいわね。形式よ、形式。ほらっ、早くアンタ達も仕事始めてよ」

シウウの役割。それは、あらかじめ準備していた巨大な魔方阵の中にマルダーマヤの軍勢を閉じ込める事だった。

「さすがシウウ。これはすごいよ。へへへ」

パディエダは見た、円陣に沿って大地から空へと放たれた雷達が、巨大な魔力の檻を作り出す様子を。

「まあね。私にかかればこんなの楽勝。それにもらったこの指輪もいい感じよ」

シウウの指にはジェイドから渡されたマジックリングが詰められていた。その効果は装着者の魔力を三割近くも増強する事で、これだけ強力な品はそう見つかるものではない。

「では、私たちも行きますか」

シウウの魔法の檻が完成したのを見て、レズリーに殺気が宿った。

「何だ!!」

「畏か!!」

マルダーマヤの本隊は突如出現した巨大な檻に混乱していた。

「おい、これはどういう事だ」

指揮官らしき男が、傍の魔術師に問い詰める。

「かなり強力な魔法の檻のようです」

「閉じ込められたという事か。どうにかならんのか?」

「考えられる打開策は二つほど、一つは巨大な魔方阵へ魔力を供給している者、この魔法の術者を直接襲い、討ち取る事。討ち取れずとも、魔力の供給さえ弱まればどうにか出来るでしょう。恐らく、檻の外側にいるでしょうから、多くが閉じ込められている今の状況では賭けになるかもしれません」

魔方阵内から漏れた兵士がまったくいないわけではない。数にして百人ほどが魔法の檻の外側に逃れる事に成功していた。

「もう一つは？」

「内側から魔方阵の魔力が不安定な、弱点ともいえるべき箇所を探して、直接破壊する事」

「どれぐらいで出来そうだ？」

「かなり強い魔力です。破壊可能な場所を見つけれられても、楽な仕事にはならないでしょう」

「くそっ!!」

指揮官らしき男は思考する。

「術者の居場所をもっと正確にはわからんのか？」

「時間さえ頂ければ、魔力の流れを追って何とか……」

「まずはそいつを探ってくれ。外に残った者に先に動いてもらおう」
「はっ」

マルダーマヤの魔術師達が集中して魔法の檻の発動者、シユウの居場所を探る。

彼らの必死さが神に伝わったか、時間にして十分ほどもせずに探り当てる事に成功する。

「おそらく、あの丘の上かと」

魔術師は近くに見える丘を指差す。

「よし、急いで向かわせる!!」

指揮官は最後方、魔方阵外で分断された兵士達に丘の制圧を指示する。そして一段落つく間もなく……。

「大変です!!」

前方から兵士が駆け寄ってくる。

「今度は何だ」

「前方に謎の霧が発生!!」

「霧？」

「はい、黒い霧です。かなりの速度で範囲を拡大しており、霧に呑まれた兵達が倒れていってます!! この状況では逃げ場が……」
「これも罠か」

困惑する指揮官に魔術師がその力の正体を推測する。

「何らかの魔法でしょう。害のある霧を発生させる魔法は存在しますし、恐らく毒か、最悪の場合は……」

「最悪の場合は？」

「もっと暗い、暗黒の力」

「魔界の者か？」

「あるいはその血が混ざった者。禁忌の術に手を染めた者の可能性もありましょう」

「闇魔術に、ブラッドマジックか」

「どっちにしる凶悪な力には違いありません」

「対抗策は？」

「我が軍には聖魔術の使い手がおりませんのでもっとも有効な魔法を使えません」

聖なる魔法の使い手は、神に愛された者達の証。そう呼ばれるほど、魔術師達の中でも特別に貴重であった。

聖魔術は傷を病を毒を呪いを癒し、あらゆる害的存在に対抗する力。暗き深淵の力と対となる、もっとも偉大な魔術として崇められていた。

魔力は肉体のみならず、精神にも影響を及ぼし、逆に肉体や精神も体内の魔力に影響する。

聖魔術師の平均的な性格の傾向は慈悲深く、博愛精神が強いなど、いわゆる善人と呼ばれるものであり、その為、聖魔術師であるというだけで信用される事も多い。

貴重な力と、その才能が形成する人格。聖魔術師達は、生まれながらにして人生の成功を約束された者達だった。

無論、例外はどんなものにも存在するのだが……。

「魔法の範囲外に逃れるのが一番ですが」

「今の状況では無理だ」

魔法の檻の中、動ける範囲など知れている。

「はい。ですから、かなり効果範囲が限られますが我々の魔力を限界まで放出する事で、霧の進入を防ぐエリアを作りだします。その

中へと兵をいれるしか」

「どれだけ入れる」

「魔術師全員にやらせても、二百名ほどのスペースしか無理でしょう。当然馬など論外です」

「たったそれだけか」

「それだけです。闇の力も、禁忌術もそれほど恐ろしい力なのです」

「この檻からの脱出はどうする」

「内側からの破壊については、外の部隊が失敗すればという事で…

…」

「くつ、仕方あるまい。しかし、二百か……」

千以上の人間に対して確実に救えるのは二百名、指揮官はどうすべきか考えに考える。

「ここは鬼になるしかないか……」

覚悟を決めると、彼は早急に新たな指示を出した。

「まだ動ける者達の中で腕の立つ者達を集めさせろ、百七十ほどでいい。この集まりは決死隊だと伝えておけ」

しばらくして、指揮官の周囲が指示を受け集まった者達で埋まる。

「現状の打開策が何か見つかったのでしょうか」

「このままでは我々はみな霧の餌食に……」

魔法の霧は既にかなり拡大していた。もっとも霧に近い者達ももう後退する場がないほどである。

「わかつている。今は待つしかない。外の者達を術者のもとへと送っている。彼らが成功する事を祈るんだ」

指揮官はまだ魔術師の案をみなに知らせはしなかった。もし、知らせば己が助かりたいが為の混乱が必ず起きてしまう。霧が選んだ二百名のもとに来るまで、安全なエリアを構築するわけにはいかなかった。

「うあああああ」

「ぎゃああああ」

「助けてえ」

前方から悲鳴が上がり始める。ついに霧が本隊を呑み込み始めたのだ。

「間違いありません。闇の魔法です」

魔術師達は霧を形成する魔力の質、属性を感じ取っていた。

聖魔法、聖魔術が神に愛された者の力ならば、闇魔法、闇魔術は魔王に認められた者の力である。禁忌の魔術ブラッドマジックとはまた違った才能、残酷で暗い資質、資格、それを持つ者に許された圧倒的な暗黒の力。

今まさに、その恐ろしさをマルダーマヤの軍勢は身を持って体験していた。

「おい！！ もつと詰めるよ！！」

「押すな！！ 押すな！！」

無理に下がろうとすれば当然押し合いになる。大の大人が惨めにも押し合うその姿は、俗悪な者にとって好き演戯に映る事だろう。

「くっ、ごほごほ」

「いやだあ、ぐあああつ……」

霧に呑まれた者が、苦しみながら倒れていく。

「おい、みんな！！」

「だ、大丈夫か！！」

しかし、霧に呑まれても変化のない者もいた。彼らは倒れた人間に声を掛けようと駆け寄っていく。

「どういう事だ。何故平気な者もいる」

指揮官は傍らの魔術師に問う。

「凶悪な術ではありませんが、これだけの広範囲となると、さすがに威力が落ちているようです。運良く、暗黒の魔法への高い耐性を持つ者達にはまだ影響が小さいようです。しかし、長時間この霧を吸い続けても無事でいられるとは限りません」

種族が違えば、魔法への耐性は変わる。同種族であっても個体が変わえば、同じく差はでる。

今回の魔法の霧に限って言えば、四人に一人は立っていられるよ

うだった。残る者達の多くは気を失っていたり、意識があってもまともに身動きが取れず苦しそうに倒れ唸るだけであつたりと惨憺たる有り様で、すでに事切れている者も中にはいた。

「まだ魔法陣に変化はなしか……。そろそろ限界だな」

指揮官は迫り来る霧を見て、ついに魔術師達に合図を送り、それを見た魔術師達は一斉に魔力を解放し、霧の進入を防ぐ空間を作り上げた。

「おお、これは……」

「何だ、何だ」

魔術師達が作り出した空間には彼らの持つ魔力の属性に沿った色が付いていた。

赤みがかつたものや、青みがかつたもの。

暗い霧に覆われそうな中でその場所は一段と目立つ。

「助かるのか？」

「見ろ、霧が弾かれてるぞ」

事態をまだ完全に理解してない者達が騒ぐ。

「俺も入れてくれ!!」

「俺も俺も!!」

耐性を持つており、霧に包まれながらも平気にしていた兵士達も不安感から霧が侵入できないエリアへ入り込もうとしてくる。

「お前達は大丈夫なんだつてよ!!」

「そんな事わかるか!!」

「押すなよ、お前達が入れる空きなんてねえんだよ!!」

「俺達を見捨てる気か!!」

まさに押し問答。己の命を惜しみ醜く暴れる様は、統率を重んじる軍に所属する人間のそれとは思えない。

「くそつ、まだか、まだか……」

指揮官は魔方陣外の部隊の無事を、そして彼らが与えられた任務を早急に達成する事を祈るしかなかった。

「急げ！！」

魔方阵内に閉じ込められた本隊を助け出す為に、檻から漏れたマルダーマヤの兵士達百名ほどが丘へと向かう森の中を駆けていた。あと少しで丘へとでる、といった所で彼らの前にレズリーとパデイエダが立ちちはだかる。

「何だ貴様ら！！」

「貴様らがあの魔方阵を利用している魔術師か！？」

殺気立つマルダーマヤの兵士達。

「まあ似たようなものです。私達にとって、貴方方がこれ以上先へと進むのは好ましい事ではありません」

道化の言葉は先に何があるかを暗に示している。

「なるほど、やはり魔方阵の発動者はこの先か！！」

「どけ！！ とかねば斬るぞ！！」

虚勢ではない。

「ふふふ、この先に行かれては困ると申したところでしょう。お通しするわけにはいきません」

「ならば斬る！！」

三人の兵士達がレズリーとパデイエダへ攻撃を仕掛ける。

その決着は一瞬だった。

「ぎゃっ」

「ぐっ」

「なっ、がはあ」

二人は左右の木々の影から不意に飛んできた矢に急所を貫かれて絶命。

残る一人もいつの間にか、そしてどこから取り出したのか道化の持つ仕込み杖の刃が心臓に突き刺さっていた。

「伏兵か！！」

兵士達は矢を放ってきた者の、いや物の正体を知り驚愕した。木々の影に潜んでいたのは人ではなく、木彫りの人形だった。人の背ほどある人形が連弩を兵士達へ向けていたのだ。

「何だ」

「人形だと」

「ま、魔法の力なのか!？」

「魔法で人形を操るなんて聞いた事がないぞ」

混乱する兵士達を見て、満足そうにレズリーは言う。

「魔法というのは広く深い世界です。貴方方の知らぬものなどごまんと存在します。紹介しましょう、彼らは私の忠実なる僕、そしてかわいい兵隊達」

ヒュン。

「ぎゃああああ」

見えていた二体とは別の場所から再び矢が飛んできた。

「まだ他にもいるのか」

「いったいどれだけ森に潜んでやがる」

敵の規模が不明という恐怖が兵士達を襲う。

「うああああ」

「ぎゃあああ」

後方からも叫び声が始める。

「囲まれているのか!!」

兵士達の動揺は、レズリーの嗜虐心を刺激した。

「一つ皆様にお伝えするのを忘れていました。私達にとって貴方方にこの先へと進まれるのも困るのですが、来た道をお戻りになられても困るのですよ。つまり、皆様方にはここで死んで頂くという事です」

「勝手な事を!!」

「かまわん、奴を殺せば人形も動かなくなるはずだ!!」

「さがるな!! 前だ、正面突破だ!!」

兵士達がレズリーへ突撃してくる。それを見てもなお道化は笑った。

「そうでなくては面白くありません。では始めましょう、皆様方の最後の宴を!! パディエダ!!」

「はいはい、わかってますよ。へへ」

パディエダは兵士達が動きだす前に、最初に殺された三人の兵士の死体へと魔法をかけていた。

「なっ」

むくりと死体が起き上がり、突撃してくる兵士達を妨害。一人の兵が突然の死体の攻撃に対応できず死亡する。

「もう一体できあがり」

パディエダがまた新たに出来上がった死体へと魔法をかけ、彼の兵隊へと変化させる。

「こいつ死体を……、死霊術なのか。貴様、魔界の者か」

「僕が何者でも君達には関係ない事さ。ここでみんな死んじゃうんだから」

「黙れ！！ 人形だろうが、死体だろうが貴様ら二人を殺せば俺達の勝ちだ！！」

術者が死ねば操られる側も魔法が切れ動かなくなる、彼らはそれに賭け。実際その狙いは当たっていた。

動く死体の兵隊達にも、マルダーマヤの兵士は怯まず突っ込んでいく。

「仲間の死体を斬るのは気分が悪いが、仕方がない！！」

若い兵士が死体の首を跳ね飛ばし、レザーリーへと斬りかかろうとするが。

グサッ。

「がっ、何故だ。何故……、まだ動いている……」

首のない死体は平然と手に持った剣で兵士の体を斬り裂いていた。

「へへへ、馬鹿な奴ら。死体が動いてる時点で、頭跳ばしたところで意味ない事に気付こうよ」

「ふ、不死身なのか」

ざわつく兵士達。

「馬鹿を言っな。頭で駄目なら、腕を斬れ、腕でも駄目なら足もだ！！ 例え胴だけで動いたとしても脅威にはならん」

興奮気味に話す兵士を馬鹿にするような口調でパディエダが褒める。

「良いよ、悪くない考えた。でも、単純な事だけど君達にそれが出来るかなあ」

「なめやがって!!」

ヒュン。

死霊術の欠点だろうか。よくよく見れば死体の剣技が生きていた頃より劣っている事に兵士達は気付いた。注意さえすれば各部位を切断していく事も不可能ではなさそうである。

「そこだ!!」

首なし死体の右腕が跳び。

「こっちも!!」

左腕も地に転げ落ちた。

残ったのは胴と足だけの物体、それが体当たりを仕掛けてくる。

「うっ」

両腕を切断した事で油断があった。足だけ生やした死体の体当たりをもろに食らってしまう。

「ちくしょう。人様の死体を玩具のように!!」

仲間を殺した上で、このような扱いをするパディエダを兵士達は嫌悪せずにはいられない。

「ちくしょう!!」

右足をぶった斬り。

「ちくしょう!!」

バランスを崩し転んだ死体の左足も止めとばかりに切断する。

「上手い、上手い」

それを愉快そうに醜顔の男は見ていた。

「今度こそ貴様の番だ!!」

パディエダに斬ろうと接近を試みる兵士達だが。

「ぎゃあっ」

「うっ」

人形達の連弩から発射される矢がそれを妨害した。
動く死体と人形が二人の盾となり容易には近づけない。

そして死体が増えれば増えるほどパディエダの兵隊は数を増し、
戦況はマルダーマヤの兵士達にとって絶望的なものへと変化してい
く。

「くそう!!」

「死ね!!」

そんな状況の中、二人の兵士が隙についてレズリーとパディエダ
へそれぞれ攻撃を仕掛ける事に成功する。

ヒュン。

だが、その攻撃は両方とも簡単に避けられてしまう。

「ぐあ!!」

レズリーの仕込み杖が首を掻き切り。

「や、やめろ!! うわああ!!」

パディエダの右手から放たれた暗黒の矢が兵士に命中にすると、
その者は黒炎に包まれ、肉体が腐敗しながら焼け溶けた。

「あの男、攻撃魔法も使えるのか!!」

「っ、強すぎる」

パディエダの増え続ける動く死体の兵隊達、レズリーの容易には
接近を許さない連弩で攻撃してくる人形達。その相手だけでも苦戦
しているというのに、操っている術者本人の戦闘能力も尋常ではな
かった。

最初からマルダーマヤの兵士百人程度では話にならないレベル差
だった。

「た、助けてくれえ」

悪化する戦況に完全に心が折れ、命乞いをする者も出始める。

「もう遅いよ」

パディエダが残酷に告げると、レズリーもそれに続く。

「生きたいと望むなら、貴方方はもっと早い段階で戦闘を放棄し、
逃げ出すべきだった。私達にとって貴方方をここから先に通さぬ事

など至極簡単な事。問題はどうかやって一人も逃がす事無く始末するかでした。それももう安心ですね。ここまで数が減ってしまつてはこの段階で半分ほどの兵士達がやられ、そのほとんどがパディエダの操る手下になつてしまつていた。

勝ち目はなく、逃げ場もない。

闘争本能は萎えきり、迫り来る死に震える子犬状態の兵士達、レズリーとパディエダの虐殺ショーはクライマックスを迎えていた。

「まだか、まだか」

魔法の檻の中の本隊の我慢も限界に達する寸前である。

最初のうちは、黒い魔法の霧に包まれても平気だつた者も続々と倒れ始め、現時点でともに動けるのは全部で三百五十名ほど。これでは檻から脱出しても、十二指同盟連合軍との合流など不可能だつた。

「やはり時間が掛かつても内から破壊するしかないのか」

指揮官が魔法陣内からの破壊に作戦を変更しようと考えたその時。

「おい見ろよ！！」

「やった。檻が消えた。奴ら成功したんだ！！」

魔方阵から空に向けて放たれていた雷の壁がすつと消え、兵士達は歓喜した。

「とにかく一時退却だ」

「城へ戻るぞ」

希望は得てして絶望へと変化するものだ。退却開始しようとした直後、その方角から百名近い集団がやってくるのを彼らは発見する。

「敵か！？」

「いや、よく見るありやどうもうちの軍みたいだ」

「城からの救援？」

「違う！！　ありやあ丘に向かつてた奴らだ！！」

「おお、奴らのおかげで助かったんだ。派手に出迎えてやろうぜ！！」

笑顔で歓迎しようとする兵士達を魔術師達が止める。

「どうした」

指揮官は魔術師達の緊張した顔に、ただならぬものを感じた。

「檻が消滅してからここへと戻ってくるのには早過ぎます」

丘からの距離がそれほど遠いものではないにしても、時間的に不可能な事だった。

「恐らく、いや確実に魔法の檻が消えたのは相手側の意図」

「何だと……！」

相手の魔術師がもう檻を不要だと判断して消したのなら、それが意味する事は……。

「彼らを見て理解しました。彼らは暗黒の力に覆われている、もはやアレは生者達ではありません」

「失敗して、全滅していたというのか……」

「そして、死霊術によって敵の兵士と成り果ててしまっている」
つまり退路を断たれてしまったのだ。

「そんな」

「しかし退路はここしかない」

「強行突破するしかないでしょう……！」

兵士達が戦闘態勢に入る。

「あ、あれは何だ……！」

「き、霧の方からも何か来てるぞ……！」

逆方向、さっきまで進行方向だった霧に覆われていた場所。そこから何かうごめく存在が姿を見せていた。

「て、敵？」

「味方の兵士みたいだが、様子がおかしいぞ」

褐色の肌を持つ弁髪を男を先頭に二百名以上の集団が向かって来ている。

「何て事だ……」

魔術師は言葉を失った。

「彼らもまた暗黒の力に覆われている……」

希望が消え、絶望が顔を出す。
蜥蜴の獲物達に逃げ道はない。

小心、小王

マルダーマヤの王都に築かれたその城は、帝都オートリアの巨城に比べればまるで巨人と小人である。そしてその差が、そっくりそのまま国力の差をも示していた。

王国の君主、国王キニチの姿は同盟主力へと合流する部隊の中にはなく、小城の玉座にあった。

全て己の保身の為。同盟の想定する帝国の進軍ルートからは最後方となるこの王国の主には、主力決戦の結果を聞いてからでも動く余裕があると考え城に残っていたのだ。

「まあ、そんなに怖い顔をして、お似合いになりませんわ」

美しい女が王の機嫌を取ろうと色香をふりまきながら話し掛ける。キニチは日頃から暇があれば周囲に美女達をはべらし遊んで暮らしていたのだが、今の彼にとってそれは何の安らぎにもなりやしない。

己の命運が決まろうというこの大事な時に、女如きは何の救いにもならない。

「うるさい女だ。お喋りも時と場合を考えろ」

癖だろつか、髭を指でいじりながら女を侮蔑するキニチ。

「なっ、……ひどい人」

怒りを露にする女にもキニチの関心は向かなかった。普段ならば注意するか、逆になだめるかするものなのだが。

周囲の美女達のひどく退屈そうならけた様は、苛立ち落ち着きのないキニチの姿とは対照的である。

「大変です！！ キニチ様！！ 帝国からの使者を名乗る男が！！」
急ぎ現れた兵士の報告に、キニチは動揺した。

「何だと、帝国からだ。もう戦は始まっておるのだぞ」
キニチはどうすべきか悩んだ。

帝国との戦い、必ず勝てるわけではない。それどころか、どう轟

眞目に見ても同盟が負ける確率の方が高い。今後の事を考えれば、戦の最中だからと言って強気に追い返すのはまずいように思えたのだ。

しかし、だからと言って使者が無条件降伏など厳しい要求を突きつけてくれば、決戦の結果を受ける前に判断を迫られる事になってしまう。

帝国の要求を撥ねれば、間違いなく敗戦後には己の首を狙ってくる事になるだろうし、まさか保留にさせてくれと通じるわけもない分の悪い賭けで勝負し今の地位を欲するのか、己が命の為に地位を捨てる覚悟を持てるのか。……それが出来ぬ、出来ないからこそ同盟として対帝国戦に参加しているのだ。

しかし……。

「いかが致しましょう」

兵士は王に判断を仰いだ。

「使者は何人だ」

「お一人のようです」

「護衛もなしか」

「はい」

「私の命を狙って送り込んできたわけでもないか……」

マルダーマヤ軍の人員のほとんどを同盟連合軍との合流地点へと向かわせていたのだが、それでも城には百名以上の兵士が残っている。

たった一人でどうにかなるものではないだろうとキニチは考えた。

「とにかく会ってみるとしよう」

キニチは誘惑と恐怖に負けた。

帝国が良い条件を示してくれるのではないか、怪物をこれ以上怒らせたなら……。そんな考えが脳裏に焼きつき離れなかったのだ。

同盟は所詮小国の集まり。小国の小心者の王の存在こそが、同盟が、レアンドロら対帝国に積極的な者達がもっとも危惧した弱点だった。

「謁見の許し、まずは感謝致しましょう、キニチ王」

帝国の使者を名乗り現れた男は、形だけの一礼こそするものの、不遜で薄気味悪い雰囲気を全身から醸し出していた。

「まずは、ですか」

「ええ。こちらでも会って頂くだけで感謝して帰るというわけにもいきませんので」

気に食わない、それがキニチの男に対する第一印象だった。

男の顔は端麗ではある、しかしそれは能面的な美しさ、どこか不気味で感情の起伏が見えづらい。

今のキニチが置かれた状況では、そこから恐怖すら感じてしまう。
「なるほど。それで、戦が始まったばかりだというのに、一体何の御用でわざわざこんな小さな城まで御越しになられたのですかな」
理由など限られている、そんな事はキニチもわかっていた。

「単刀直入にいきましょう。キニチ王、十二指同盟から離脱し帝国に降伏してもらえませんか」

予想通りすぎる要求、問題はそこに至る条件。

「これは貴方にとって唯一のチャンスでもあります」

「チャンスですと」

「ええ、帝国も良き判断が下せる者の全てを奪うような事まではしません。相応の見返りを約束しましょう。貴族として帝国を支える名誉を与え、この地の領主としての地位を保証しましょう」

「これまで通りに暮らせるという事ですかな」

「何の変化もなしにとはいきませんが、悪い暮らしにはならないでしょう」

「変化？」

「ご存知の通り、戦には金がかかる。この同盟戦、そして帝国とこの地方の素晴らしき未来に対して、相応の負担をして頂かないと」

「なるほど。貴国の考えはよくわかりました。ですが、こちらにもいろいろと事情がありましてね、少々お時間を頂ければと」

「では、この話は無かったという事で」

キニチがその場での返答を渋るやいなや、男はまったく躊躇う事無く会談を打ち切ろうとした。

「なっ、お待ちを。何も我々は断ろうなどとは言っておりません。時間をと……」

慌てるキニチに帝国からの使者は厳しい現実を突きつける。

「寝惚けた事を言われても困ります。今ここで、その決断にこそ帝国は価値を見出している。キニチ王、それがわからぬほど愚鈍な男というわけでもないでしょう？」

「ぐっ……」

キニチには返す言葉がない。

待てと言つて、待ってくれるほど政治の世界は、外交の世界は甘くないのだ。

「返答を」

使者の言う通り、これは帝国から与えられた最後の機会。その内容も悪くない、追放されず領主として君臨できるのだ。これまでと同じといかずともある程度の贅沢は出来るはずである。

問題は信用。

本当に約束は守られるのか、そこが問題だった。

これまでの帝国の行動を考えれば、同盟との戦い後、知らぬ存ぜぬと言い出す事も十分にある。それでは困るのだ。

しかし逆に、マルダーマヤ王国が同盟として帝国と戦う事に、勝利に対する信用がどれほどあるというのだろうか。

数では同数近く、それが勝利を保証しているわけではなく、負けでも不思議ではない。

一戦勝てたとしてその次は、本当に各国は対帝国に動いてくれるのか。動いたとして結局は帝国に負けやしないのか。

疑いだせば限が無い。だったらここの度、各国を喰らう怪物の言葉に賭ける方が良くはないかと思えだす。

そもそも、この話を自分達だけに持つてきてるといふ保証もない。同盟の他の国から裏切り者が出ればそれで投了。同盟は崩壊する。

だったらここは……、キニチの答えが出掛かる。だがそれが声となるにはまだ何か足りなかった。

「なかなかご決断していただけないようですが、選択の余地など無いように思えますがね。一つお伝えしときましょう」

返答を洪る王を見ながら使者はその皮算用を打ち砕く、愕然とする事実を告げる。

「貴方がクルスク大草原に向かわせた本隊ですが、もう全滅していますよ」

キニチは驚きのあまり言葉を失う。そして次によやく捻り出した言葉も冷静さを欠いたものだった。

「な、何を馬鹿な事を。どうしてそんな事が、起こるわけが……」

「帝国にはそれだけの力があるという事です」

「貴国の仕業ですと！！ 何という事を……。いや、帝国の軍がこの一帯に現れた報告など入ってきていなかった。やはりそんな事があるわけ……」

「信じるも信じないも勝手ですが、貴方の本隊を撃ち破った戦力をこちらに向かわす事ができるというのは揺ぎ無い事実」

「ふ、ふざけるな！！ 交渉の結果がでる前に我が軍に手をだすとは帝国が信用ならぬという何よりの証。貴様とて無事では済まぬわ。この場で斬り捨ててくれる！！」

「では死を選ぶと？」

「黙れ！！ 死ぬのは貴様だ！！」

「死を選ぶと？」

興奮するキニチとは対照的な男の言葉は、男が全てを見透かしている事を表していた。

使者を斬ればそれはすなわち帝国に対する後のない宣戦布告である。

そんなものを突きつけるほどの君主としての器がキニチにない事をこの使者は、帝国は知っていたのだ。

「あ、い、いや……」

臆病者の興奮は使者の目と言葉にあつと言つ間に冷めて、その先には恐怖しかない。

「で、ですがいったいどうやって。急にそんな事を言われても我々としても……」

「もう一度言っておきますが、信じるも信じないも勝手です。その上で返答を聞かせて頂きたい。今すぐに、ここで」

「そ、それは……」

まごつくばかりのキニチだったが、突如として彼は圧倒的な恐怖、不安に、その存在に気付いてしまう。

何故、この男は我が軍がクルスク大草原に向かっていた事を知っているんだ。

何故帝国は知っているのか。偶然、予想、軍事上の常識、そんなもので済ませられるものなのか。

もつと絶望的な答えがあるのではないか。

全滅させたという本隊から直接聞き出したのか、それとも既に内通者が同盟側に存在するのか。それは何匹かの鼠、それとももつと大きな、一国という単位……。

「何故知っているのだ……。我が本隊がクルスクに向かっていた事を」

「敵になるかも知れぬお方にそれをお伝えするのは、私には出来かねます」

まるで踊らされる人形。

全ては帝国の手の平の上の出来事なのだろうか。キニチは混乱するしかない。

「て、敵だなんて」

「だってそうではないですか。貴方が我々の要求を拒むのなら、マルダーマヤは帝国の完全なる敵。排除すべき存在。その王は殺さなければならぬ」

「待ってください!!」

キニチは絶叫にも近い声を上げた。

もうこの王には、選択肢など無かった。怪物のきまぐれが、その牙が己に降り掛からぬ事を願う、それにすぎるしかなかった。

「わ、わかりました。話をお受けしましょう。我々も何も帝国と戦いたくて武器を取ったわけではありません。一領主となろうと我々の生活と安全を守って頂けるなら喜んで皇帝陛下に従いましょう」

冷や汗を掻きながら、愛想笑いを浮かべて答えるキニチ。

「そうですか。ではしっかりとお伝えしておきましょう。マルダーマヤの王は賢明な方だったと」

男は最後に再び形だけの一礼を小国の王に向かってした。

この会談の後、しばらくしてキニチは男の言葉が偽りでない事を現場に送った兵士達を通して知る。

城へと戻ってきた兵士達が口々に語るその光景の凄惨さに、キニチは帝国の恐ろしさをあらためて実感するのだった。

馬鹿は踊る

クルスク大草原に集結する同盟軍の中に、マルダーマヤ王国軍の姿は無かった。

迫り来る帝国の脅威を感じながら、まだかまだかと苛立ち、同志の合流を待つ各国の指導者達。

そんな彼らの前に、マルダーマヤ降伏の報を伝える使者が現れたのは、日も沈みきり辺りが暗くなった頃の事である。

「キニチの奴め、臆したか！！」

「なんと愚かな事を！！」

各国の指導者達がざわつき、臆病な小王を罵倒した。

それは、何故キニチがこんなにも早く帝国側に降伏する事になったのか、その細かい事情を知る事の出来ぬ彼らの当然の反応でもあった。

マルダーマヤからの使者は簡潔に帝国に屈する事を伝えるのみで、帝国の急襲によってマルダーマヤの主力が壊滅した事など一切話さなかったのだ。

理由は明快。

マルダーマヤは帝国側に付くと表明した、この時から、後方の安全地帯ではなく、対同盟の最前線に変貌する。王国防衛の主力となるべき部隊が壊滅している事を覚られるわけにはいかなかったのだ。「こんなふざけた話があるか！！ ええい、貴様覚悟はできているんだろうな！！」

当然の如く、マルダーマヤの使者は怒れる指導者達に刃を向けられる。そして、使者の男も覚悟の上か、言い逃れするような真似をしなかったのだ、そのままその場で斬り捨てられてしまうのであった。

「どうするんだ、レアンドロさんにラウルさんよ」

トリニ首長国頭領マルダラが二人の男になじるような口調で問い

かけた。

レアンドロとラウルは先の会議で渋る各国指導者を対帝国でまとめるように積極的に発言していた者達である。

対帝国戦が十二ヶ国合意の上の決定とはいえ、心情的には引つ掛かるものもあるだろう。この二人を責める者がでてきても何ら不思議ではなかった。

「正直に言えば、こんなにも早くに脱落者がでようとは予想外です」
レアンドロは隠すような事もせずこの事態の認識を語る。

強大な敵との戦を前にしての裏切りは当然兵士達の士気にも影響を与える。それだけに止まらず、安全であるはずの後方が敵側に付いたとなれば、地図上では各国の街が東西挟み撃ちの形になってしまう。

これは防衛側にとって圧倒的に不利な状況、その打開策を二人の男に他の指導者達は問うていたのだ。

「だが作戦に変わりはありません」

「変わりはないって、おいおい。やけになってるわけじゃねえだろうな」

「まさか」

レアンドロはマルダラの言葉を笑って否定した。

「俺達が生き残るのにはただ一つ。野戦にて勝利する以外にない。それは首長さんも理解してるはずだろ？」

ラウルがレアンドロとマルダラのやり取りに加わる。

「マルダーマヤの抜けた穴は小さいとは言えない。だが、まったく勝ち目が消えてしまったわけでもない。考えてみる、キニチは臆病にも帝国に屈した。その臆病者に俺達を積極的に攻撃する度胸があると思うか？ 確かに戦力だけ見れば帝国に分があるだろう。それでもこつちには二万の兵力だ。二千前後の兵士しか持たぬキニチでは話にならない。あの男は動かない。いや、動けない。帝国も戦力としては計算してないだろうよ。俺らに対する揺さぶりである同時に、少しでも戦力を削ろうという計算だ。……だとすればだ。や

「はり注意すべきは帝国軍のみで、裏切り者の雑魚にかまう暇はない」
「そいつはちと都合良く考えすぎだろうが。臆病者だからこそ、帝国が強硬に脅せば、キニチも死にもの狂いで動く可能性があるぜ」
「その可能性は否定できないでしょう」

レアンドロもラウルよりもマルダラに分がある事を認める。……
が、だからと言って主張を変えるような事もなかった。

「ですが、やはり作戦に変わりはありません。我々が生き残る為の手はこれしかないのです」

「だったらその手とやらを詳しく聞かせてもらおうじゃないか。まさか正面からぶつかり野戦で破るだけなんて馬鹿な話じゃないだろうな。野戦で勝つための秘策とやらがあるんだろ？」

「秘策というほどのものではありませんが……。この戦の戦術的な話をしましょう。まず、この二万の軍勢のうちいくらかを別働隊としてクルスク大草原の先、ウルクサの森へと回り込ませます。ウルクサの森は帝国軍も通る事になるでしょうが、もし発見しても攻撃せずうまくやり過ごしてください。理想としては帝国が草原へと出てくる頃に入れ替わる形で潜めればいいのですが」

「まさかそれで挟み撃ちにして勝つだ、なんていう話じゃないよな？」

「そういう話です」

「そういう話だ！？ ふざけるのも大概にしとけよ。そんなに簡単に挟み撃ちできるものかよ」

「そうでしょうか、私は上手くいくと思うのですが。それにこれしか方法はないでしょう」

「本気でいつてるのかよ。こいつはお笑いだ。ダルタール王国の王様は戦略は描けても戦術の方はでんで駄目らしい。こんな奴の口車に乗せられて俺達は帝国と戦争しようとしたのか！？ 嫌になるぜ、まったくよ！！」

マルダラが吐き捨てるようにそう言う。他の指導者達もそれに続いた。彼らは国家の指導者としての立場でありながら、己によい考

えがあるわけでも無しに、ひたすら詐欺師に騙されたかのように騒いでいたのである。

その姿は無様で、滑稽で、何とも情けない。

結局ほとんど喧嘩別れでもするように、何の妙案が出されるといふ事も無く、この日の作戦会議は終わりとなってしまふ。

もうそこまで帝国は来ている。

同盟の指導者達の多くは焦り、恐怖し、ただ不安に一夜を過ごす事になってしまったわけだが、その中において不思議とレアンドロには落ち着きが、いや覚悟というべきものを持っていた。

闇夜の静寂が集結した同盟軍を覆った時、彼は静かに立ち上がり、と己の陣を離れ、マルダラのもとへと向かう。

それは、この戦、真の戦術を伝える為であった。

馬鹿は踊る2

レアンドロがその男のもとを訪れた時、男は瞳の奥を鈍く光らせながら彼を迎えた。

まるで、レアンドロが現れる事を知っていたかのようなのである。

「これはこれは、天才戦略家のレアンドロ様。こんな夜分遅くにどうかしましたかな」

マルダラが颯るようにして言う。その他人を小馬鹿にした態度は、彼の下卑た性根から生まれるものなのだろう。その様はよく似合っているとすら、レアンドロには思えた。

「此度の戦、マルダラ殿には至急聞いて頂きたい話がありました」
レアンドロの切り出した言葉の意味をマルダラは理解していた。

「ほう、それはまた……、何か良い案でも思いついたのですかな？」

「……帝国との戦いは厳しいものには違いありません。そしてマルダラ殿に指摘された通り、私が先に話した作戦だけでは決して勝てぬでしょう」

「『だけ』、ねえ」

次の言葉を促がすように、マルダラが胡座をかけた膝の上を世話しなく指で叩く。

「帝国を破るには、我々がバラバラでは話になりません。互いに覚悟を持って臨まねば、なせるはずの大事も失敗に終わるでしょう」

「泣き落としにきただけでもなかるうよ。なあ、大将さんよ」

マルダラの口調が次第にいつもの荒いものへと戻り始める。それは苛立ちの証だった。

その様子を見たレアンドロは一度静かに目を閉じて一呼吸間を取ると、本題を切り出した。

「……パルメントを、パルメント王国を捨てましょう」

男が歪んだ笑みを浮かべる、その言葉を待っていたのだと言わんばかりに。

「ボルドーが何と言うかな」

意味のない問い掛けだった。

「何も言えぬ状況にするしか、口を出そうにも手遅れの状況に」

「斥候はあんたの意図を理解してる者達って事か」

「そういう事になります」

パルメントの君主ボルドーに入る報告をコントロールできればそれでよかった。もしパルメント領に近付く帝国軍がいてもそれを知らせる者がいなければよいのだ。ボルドーにさえ知らさなければ、第四エリアで孤立状態のパルメント王国を他の同盟国が必死に守る理由などありはしない。友情など存在せず、己が利益の為なら、昨日の友どころか今日の友でも切り捨てられる、それが国家、外交の世界なのだ。

「で、それはよいとしてもそれからがどうなるわけだ？ 何を考えている？」

「帝国は兵を必ず分けてきます」

「パルメント方面とこちら側にというわけか」

「運が良ければ、三つに分かれる事も」

「裏切り者への増援を兼ねてか」

「表面上はそうなるでしょう」

「表面上？」

「ええ、帝国には裏の狙いがある。だからこそ、必ず兵を分けてきます」

ひどく興味をそそられたか、話を聞くマルダラからは隠しきれない、興奮ともとれる何かが滲みでていた。

「えらい自信じゃねえか」

「そうであらねば、こっちとしては打つ手がありません」

「その裏とは？」

「隙を見せたい。そして我々に喰らい付いて欲しい」

真顔で答えたレアンドロに、マルダラは大声で笑う。

「ガッハッハッハ。何の為に？ 何故帝国がそんな事をする」

「時間と余裕がないからです」

「ほう」

「帝国があまりに多くの無理をしている事は、マルダラ殿も十分にご承知の事でしよう。だからこそ野戦で早急に我々の主力を葬りたいと考えている。兵を分散させ隙を作り、攻撃にでた我々を包囲殲滅する。それを狙ってくるはずです」

「逆にそこを突くわけだな」

もし同盟軍に下手に籠城され長期戦となった場合、その分戦費はかさみ、獲得するはず領土は荒れる。問題はそれだけに止まらず、周辺の国々が粘る同盟軍に勇気付けられて動き出す可能性すらできてしまう、帝国としてはそれは避けたいはずだった。

同盟側も待つだけの、不安定な帝国周辺国の決起にかけて籠城するより、野戦にて帝国軍を打ち破るのが得策だと判断していた、そしてそれは、互いに野戦で決着という点では一致している事になるのだ。

「狙うは指揮を執っているであろうジェイドの首」

「そうすれば、帝国は軍を退かざるを得ないわけだ。そして、そのまま崩壊へと繋がる」

「ええ」

「しかし軍を分けても、ジェイドの率いる師団は強力、いや他の者達も同じだ。隙を突いてこちらの軍をぶつける、それだけで勝てると考えているのか？」

「その為に兵をウルクサの森へと回り込ませるわけですよ」

「そこは変わらずか」

「当然です。敵が分散するならばより少ない兵で大きな効力を得られます。回り込む部隊が見つかる可能性も無論下がる」

「そう上手くいくかな？」

「上手くいかせるしかないですよ」

「フンッ、しかし何だ。ともすればパルメントの罪無き国民達が大勢死ぬ事になるわけだ。あんたの作戦だと」

「それも仕方ないでしょう」

冷静に躊躇い無くレアンドロが言った。

「悪魔だな」

「お好きなように呼んでください。ですが私にはこの策しかありません」

「そうか。だったら言わせてもらうがあんたは大馬鹿野郎だ」

「納得して頂けませんか」

「いや、俺は馬鹿は好きだぜ。その策、のろうじゃないか。……ただし、条件がある」

マルダラがレアンドロの目を見て笑った。

馬鹿は踊る3

日が昇り始めたばかりの朝早くから、同盟軍の面々が集まり会議を行っていた。

その中で、レアンドロが改めて昨日の話を繰り返し主張する。それを相変わらずの渋い顔で聞く者もいたのだが、場を覆う空気は明らかに違っていた。

「みな、ここはもう腹をくくるしかねえんだ。……仕方がない。俺はその策、のってやろうじゃないか」

マルダラが場ににいる者達にそう言うと、まるで打ち合わせていたかのように何人かの者達が続く。

「そうですね。これと言って他に策があるわけでもなし」

「私達が争っていても帝国が利するだけだ。ここはレアンドロ殿を信じましょう」

たった一夜、そのわずかな時間での変わりように戸惑う者もいたが、一度変化した空気の流れは戻りようもなかった。

マルダラと何人かの指導者達にレアンドロが話を通しておく、それだけで上手くいったのだ。

見捨てられているパルメントの王ボルドーや、その他の者に真の狙いを話す必要は無い。この者達を誘導するだけの流れを必要最低限の人数で作ridせばよかったのである。

「うつむ」

「止む無しか」

全員が乗り気とはいかずとも、最終的にはレアンドロが提案した策が採用される事になる。そして今度は当然、帝国の後方を突く為に誰が行くかという問題がでてくる。

「俺がいこう」

太く低い声が場に響くと、それに対する反応は様々であった。

「おお、マルダラ殿ですか」

「まあ妥当でしょうな」

マルダラの軍事的能力を評価する者達、そしてすでに昨夜の内からレアンドロに話を聞かされていた者達はそれに賛成するが、そういった者達ばかりというわけにはいかない。

「おいしいところを独り占めにする気ですか」

「反対というわけではないんですけどねえ」

後方より襲いかかる役は重要でいて、戦果も期待できる。戦の後、その働きは間違いなく同盟内での地位を高める事になる。

捨て難い役目だった、それをすんなりと『どうぞ』とは言えない者がいても何ら不思議ではないのだ。

「ではこの重要な役目、あんた等に任せてもいいんだな」

まるで脅迫するかのような強い口調でマルダラが迫ると、しぶる者達も尻込みしてしまう。

「いやあ、まあ……」

この役目は重要で美味しさはある。しかし、全く危険がないわけではない。

主力から離れ、帝国軍の裏を狙うわけで、気付かれ攻撃されてしまつと、反抗らしい反抗も出来ぬままに全滅というのもあり得る事だった。

「失敗は許されんぞ」

マルダラからそのように圧力をかけられると、軍事に自信があるわけでもない小国の王達には、我こそはと名乗り出る度胸など持てはしなかった。

「では、こうしましょう」

レアンドロが間に入るようにして口を開く。

「マルダラ殿の部隊だけでは数にいささか不安が残ります。私の部隊もいくらかつけましょう。どうでしょうか」

「仕方がない。まあ、俺はかまわないぜ」

成功した時の戦果が減る事になるのだが、マルダラは案外あっさり了承する。

「うっん、レアンドロ殿ですか。……いいでしょう、それで」

「私達には分けるほど兵がいるわけでもないですしな」

既にレアンドロのダルタール王国は、同盟内で確固たる地位を確立している。彼の軍が戦果をあげる事によって、同盟内部で大きな変化がおきる事はない。

マルダラの戦果独占を避けたい指導者達にとっては、この混合部隊案は悪いものではなかった。

無論、他の者達の多くも出来れば自分達もそこに加わりたいと考えてはいた。しかし、余りに細かく兵を分けても、指揮系統に支障がでてしまう、この混合部隊は同盟内屈指の兵数であるレアンドロのダルタール王国軍だからこそ出来る事でもあるのだった。

ラウルのガザクレア王国もそれをするだけの兵を持っていたが、彼は帝国という強大な敵を前にして目先の戦果を気にするような者ではない。レアンドロの部隊がいれば、マルダラの戦果独占は避けられ他の者達も納得させられると考え、自分も裏取り部隊に兵を出すようなせこい真似はしなかった。

「では、これで決まりという事で早速、兵を動かしましょう」

「そうだ。もう時間はないぞ」

会議で合意が得られると、レアンドロとマルダラはすぐに部隊をクルスク大草原の後方ウルクサの森へと回りこませ始める。

混合部隊は、敵の斥候に発見されぬように、いくつかに分けられてから出発。帝国との決戦ぎりぎりには、森に計四千近くもの兵が潜む事になる手筈だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0323m/>

戦狼記-幼帝-

2011年11月30日08時55分発行